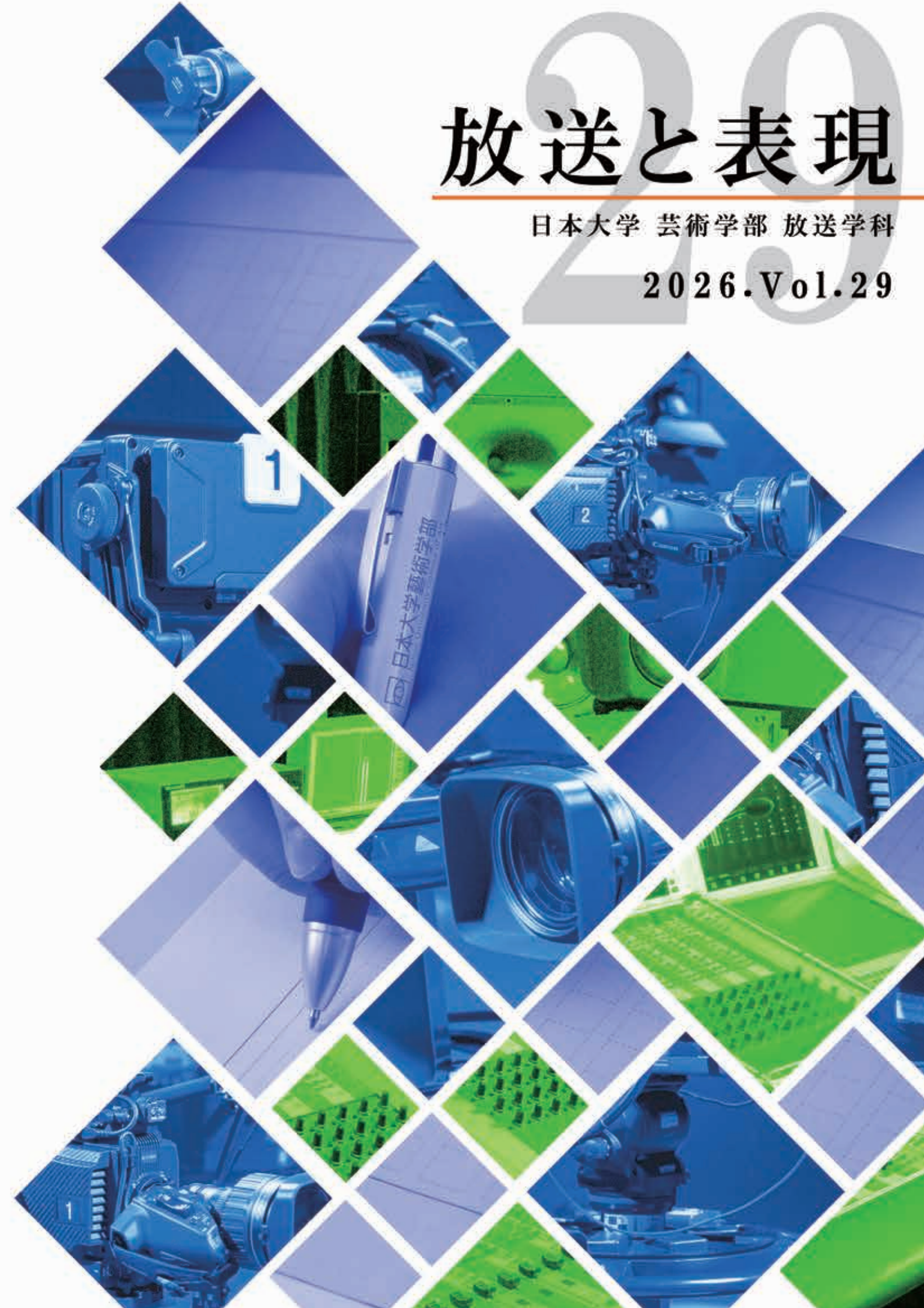


放送と表現

日本大学 芸術学部 放送学科

2026.Vol.29



放送と表現

日本大学 芸術学部 放送学科

2026.Vol.29

●寄稿

- 戦後 80 年 テレビは戦争をどう伝えたか
～戦争の記憶を伝えるためにできること～ ————— 森中 慎也… 3
- 「コンプラ」をハックせよ～制約を創造性に変えていく未来～ ————— 金 龍郎… 15

●ノート

- 誰かの声を聞く、誰かのことを思ってみる ————— 石毛 みさこ… 25

●令和7年度 卒業論文・卒業制作 題目一覧 … 29

●卒業研究

- 芸術学部長賞受賞
映像作品 戦場の舞台裏 —新沼 希慧・黒田 蓮・成田 昂平・中川 春喜・野崎 義光… 32
- 芸術学部長賞受賞
映像作品 私の見ている世界 ————— 塩屋 麻菜・粕谷 基・久和野 早紀… 47
- 芸術学部長賞受賞
音響作品 ニンゲン ————— 田中 咲希・名倉 小遥… 57
- 芸術学部長賞受賞
論文 移住 PR 動画の表象から考える自治体広報の課題と限界 ————— 仁科 ゆう… 65
- 呉正恭賞受賞
映像作品 三瀬稜史 - 音がない世界で夢を追う - ————— 橋本 光騎… 93
- 芸術学部奨励賞受賞
映像作品 ミックスルーツ～はざままで生きる～ ————— 瀬瀬 栄美子… 111
- 放送学科特別賞受賞
論文 二次的継承の時代のテレビの戦争表象
—NHK 国内放送と NHK WORLD-JAPAN との比較から— ————— 大野 充輝… 124

●卒業研究 (タテ書き)

- 芸術学部長賞受賞
脚本 in the 盆地 town ————— 安孫子 知世… 160
(タテ書きのため右開き)

○寄稿

戦後80年

テレビは戦争をどう伝えたか

～戦争の記憶を伝えるために

できること～

森中 慎也

はじめに

2025年は「戦後80年」の節目の年だった。戦時体験者の最年少を開戦当時の14歳から15歳とすると存命者は90歳代半ばから後半となる。テレビは戦後50年、60年、70年の区切りでアジア・太平洋戦争について、戦争の被害者・加害者の立場にかかわらず、残存する僅かな軍部の資料や戦争体験当事者の証言を基に番組を構成・制作してきた。10年単位で考えると、おそらく戦後90年には戦時体験者の声を直接聞くことはほぼ不可能となるだろう。戦争体験者が減る中で「戦時体験の継承」というメディアとしての役割を担うテレビは何を伝えたのか。本稿は、戦後80年に放送されたテレビ番組から戦争体験者の証言に依存しない記憶の伝承への手掛かりを見つけることを目的とする。昭和・平成世代からの平和を望むメッセージだと特に若い世代に受け止めてもらえれば幸いだ。

本稿では、日中戦争以降の一連の戦争を指す呼称として「アジア・太平洋戦争」を用い、必要に応じて一般的な呼称である「太平洋戦争」も併用する。

激減する戦争体験者

総務省の人口推計によると、戦前・戦中生まれは人口の11.2%（総務省統計局・人口推計「2024年10月1日現在」）。近年は1年で約1ポイントずつ割合が減少している（朝日新聞、2025年8月15日「急減する戦争を知る世代、いまだ戻らない戦没者遺骨 終戦80年の現状」）。また、総務省の調査によると、太平洋戦争に出征するなどし、軍人恩給を受けている元兵士は昨年3月時点で792人となり1000人を下回っている。私たちは戦争を体験として語れる人がいなくなる時代の入り口に立っているのだ。過酷な戦場を知る元兵士が次々に世を去る中で、その証言はますます貴重になっている。

2025年8月6日の広島平和記念式典でのことも代表「平和への誓い」で広島市立皆実小学校6年（当時）関口千恵璃さんと広島市立祇園小学校6年（当時）の佐々木駿さんは「前略～被爆から80年が経つ今、本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっています。どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。～後略」と誓いの言葉を述べた。戦時体験者を第一世代とすると当時小学生の2人は曾孫世代・第四世代と言えよう。筆者は昭和35年生まれで戦時体験第二世代に属する。本稿では、第一世代から直接話を聞いた世代として第三、第四世代に伝承する責務を自らに課して論じる。なお、筆者が記す「世代」は戦時体験者を第一、その子の世代を第二、孫の世代を第三、曾孫世代を第四とし、厳密に生年月日で区分するものではない。

筆者の父は第一世代に属する。昭和 4 年 1 月三重県四日市で生まれた。戦時体験を鮮明に記憶にとどめているいわゆる「昭和ひと桁」世代である。父正巳は 2022 年に病死（享年 93）したが、生前余命短きことを知り日記を基に自叙伝を書き残している。痛み止めを処方された病床での執筆ゆえ不明瞭な記載もあることを容赦いただき、ほんの一部を抜粋し代筆する。

前略～昭和 20 年 4 月 7 日、舞鶴に向けて出発した。家の前には出征兵士を送ると同様、旗を立てて盛大に送ってくれた。山本栄君と一緒に舞鶴へ発った筈だけど途中のことはよく覚えていない。舞鶴でははじめ 364 分隊から 35 分隊になる。編成替えである。僅か 4 か半月の日数であったが忘れ難い、また得難い多くのことを学び体験した。海兵 77 期の一員であったのは誇りでもあったし、77 期と云うだけで世の中で通ることいろいろあった。しかし、もう 77 期も少なくなっているだろうな。～中略～中舞鶴駅を出て降りてすぐ目の前の坂を上がって行ったと思う。そこに海兵舞鶴分校があった。大きいという感じは全くしないが、どこことなく威厳のある広場の前に大講堂があった。大きな体育館のような所に案内され入校時の身体検査が行われた。小生はもともと身体が細く虚弱な感じがすると思うので、入校時の身体検査ではねられ故郷へ帰ることが起きるのではないかと自分自身が一番心配していた。果たせるかな次々と名前が呼ばれ試着に行けと言われるのに小生には全く呼び声がかからぬ。外は黄昏れてくるのに部屋に最後迄残った。一人だったと思う。心細かったが我慢するより仕方なし。しかし、結局最後は OK になって試着（制服の）になった。～後略

上記は、父が海軍兵学校に合格し、77 期生として入校する際の思い出を綴った文章である。何故、私の祖父は森中家の長男であり戦争が長引けば戦死の可能性もある父の海軍士官養成学校の受験を許したのか。生前父は「森中家の近親者から出征兵士を送り出していないこと

図表－1 兵学校入校時の「日の丸 寄せ書き」



父の遺品。「永久保存」と記された木箱に収められていた。

におやじはどこか引け目を感じていたのでは」と語っていた。このエピソードは、戦時下の「出征を当然とする社会的空気」が、個々の家庭の意思決定まで浸透していたことを示す具体例である。

戦後 80 年。テレビは何を伝えたか

2025 年 8 月 15 日前後に放送されたアジア・太平洋戦争関連番組を取り上げる。選考基準は、第二世代の筆者の視点から、第三世代以降の戦争の記憶の伝承に資する具体例を含むものとする。

① BS フジ 2025 年 8 月 31 日放送

『戦後 80 年企画 財前直見 知られざる“特攻の町” わが故郷 戦争の記憶』

この番組は、大分出身の女優・財前直見が戦争の記憶を残す故郷を訪ね歩くという内容である。

大分県には戦前、宇佐、大分、佐伯の 3 か所に海軍航空隊の基地が存在した。特攻の基地というと鹿児島県の鹿屋、知覧という地名が思い浮かぶが、戦局の悪化に伴い、大分県の宇佐航空隊基地も特攻の基地となった。

宇佐には当時の記憶を伝える戦争遺跡が存在する。市内には 10 基の掩体壕（えんたいごう）、（＝敵の空襲から軍用機を隠して守るための「格納庫」や「シェルター」）が残されている。また、B-29 の爆撃でつくられた穴に水が溜まってできた丸い池＝爆弾池が 100 個ほど現存する。戦争遺跡、痕跡が宇佐の「知られざる特攻の町」であることを伝えている。

宇佐には町に残る戦争の記憶を伝える市民団体「豊の国宇佐市塾」があり、大分県宇佐市における郷土史及び偉人の発掘と保存・伝承を目的に活動している。開塾は 1987 年で、会の代表を務める平田崇栄（ひらたそうえい）氏は活動拠点でもある室町時代から 550 年続くお寺の 20 代目の住職でもある。「豊の国宇佐市塾」では 2011 年から米国立文書館に所蔵されている第 2 次世界大戦中に米軍が撮影した日本本土をはじめとする太平洋戦域各地への空襲時に関する映像ファイルを取り寄せ、撮影日時や場所、撮影した部隊等の解析を行ったうえで公開している。今回、新たに番組内で紹介されたのは、去年 5 月に公表された戦艦大和の 16 秒のカラーフィルム。初めて公開された貴重な航空映像である。

特攻隊についても多くの映像を発掘しており、一昨年 3 月に公表したフィルムには昭和 20 年 4 月 14 日午前 9 時 30 分頃の沖繩本島東方海域で特攻機が対空砲火で撃墜される一部始終が記録されている。落下傘で脱出する日本人パイロットも映されていた。後に、米軍に救助され捕虜になった飛行兵は、かつて宇佐航空隊で訓練をしていた園部勇上等飛行兵曹であると特定された。

さらに日本海軍が特攻兵器として開発し、人間爆弾と呼ばれた「桜花」が米軍に接收され、その構造明らかにするために分解される映像、また、昭和 20 年 3 月 18 日

桜花が宇佐航空隊基地に実戦配備された日に計ったかのように米軍の爆撃を受けほとんどが破壊された映像も放送された。その結果、宇佐に配備された第 721 海軍航空隊「神雷部隊」は離陸すらできなかった事実も判明した。さらに、昭和 20 年 3 月 21 日に別の基地から飛び立った桜花初の出撃では、米軍艦船に接近するも母機である一式陸上攻撃機に吊るされたまま発射される前に米軍機よる攻撃で撃墜される映像も放送された。この番組は未だ公開されていない米軍撮影のカラーフィルムが米国立文書館に大量に存在することを示唆する内容であった。「豊の国宇佐市塾」のホームページには以下の記載がある。

弊団体は 2011 年から映像資料の収集と解析をしておりますが、このために 10 年以上の歳月と 1,500 万円以上の私費を投じております。そのため、映像資料の取得を希望される場合は、有償での提供としております。

<https://toyonokuni-usashijuku.jimdosite.com/> (2026 年 1 月 20 日閲覧)

戦前に撮影された戦争関連の映像は NHK 放送博物館(横浜)や国立映画アーカイブ(東京・京橋)や国立国会図書館、さらに YouTube や Internet Archive 等のオンライン動画サイトで視聴可能だ。日本側の戦時ニュース映画は主に日映制作の日本ニュースである。白黒映像で本数も限られている。一方、米国立文書館には未公開の戦闘機に搭載されたガンカメラによるカラーフィルムが多数保管されている。その貴重な映像資料が今後の「豊の国宇佐市塾」の活動で日の目を見て放送番組となり、戦争の実相が多くの人々に伝えられることが重要だ。

筆者の手元にある「豊の国宇佐市塾」資料協力で制作されたドキュメンタリー番組の一例を併記する。

NHK スペシャル「本土空襲 全記録」(2017 年 8 月放送)

NHK BS1 スペシャル「空の証言者～ガンカメラが見た太平洋戦争の真実～」(2021 年 12 月放送)

NHK BS スペシャル「特攻 4000 人 生と死 そして記憶」(2023 年 12 月放送)

NHK スペシャル「“一億特攻”への道～隊員 4000 人生と死の記録」(2024 年 8 月放送)

【ポイント】米軍側資料の発掘が、証言に依存しない戦争記憶の伝承につながる。

② BS-TBS 2025 年 8 月 31 日放送

『報道 1930 スペシャル 日本人と“軍隊”～いま見つめる戦後 80 年の自画像』

メインキャスターは TBS の松原耕二氏。ゲストは中西寛氏(京都大学大学院教授 1962 年生まれ 国際政治学者)、折木良一氏(元統合幕僚長、1950 年生まれ 防大卒業後 陸自に入隊)、マライ・メントライン氏(ドイツ公共テレビ ZDF 東京支局プロデューサー、1983 年生まれ)、小泉 悠氏(東京大学先端科学研究センター准教授、1982 年生まれ、ロシアの軍事政策が専門)の

4 氏。番組は、戦後 80 年守ってきた平和を日本はこのまま守り続けることはできるのか、同じ敗戦国ドイツの取材も交えて、今を生きる私たちが何を見つめ直すべきかを主たるテーマに据えている。

番組冒頭松原氏から、我が国の国防を担う自衛官の確保が困難な状況についての懸念が述べられた。自衛官採用者数(24 年度)採用計画 1 万 4852 人に対し採用数は 9724 人で計画の 65%にしか達していない。また、中途退職者数(23 年度)は 6258 人と過去 30 年間で最多となり自衛隊内での「静かなる有事」と呼ばれている。退職理由として挙げられたのが、自衛隊員の多くが 56 歳で定年を迎える「将来への不安」だ。また、その後の再就職に伴う困難についても「自衛隊員では命令系統に基づく行動が重視されるため、民間企業との文化の違いが再就職時の壁になる」という指摘もあった。待遇面では、警察官(3 類高卒程度)、消防士(東京都)の初任給が 22 万 600 円に対し、自衛官(候補生)は 17 万 9000 円とおおよそ 5 万円低い。その一方で自衛官の任務は災害(離島からの急患輸送、鳥インフル殺処分、豪雨・地震)、海外(海賊対処、国際平和協力)、国防(領空・領海侵犯、宇宙・サイバー、反撃能力、無人機撃墜、同盟国などとの共同訓練)と増える一方である。

次に、「軍隊と社会の関係性」を視座にドイツと日本の比較が行われた。ドイツでは第二次世界大戦前、軍隊は「国家の中の国家」であり、社会から乖離した存在であった。軍隊では「上官の命令には絶対に服従」が義務付けられており、ナチスの台頭を招くことになった。しかし戦後、軍人は「制服を着た市民」という考えの下、社会に開かれた軍隊となり、軍人は盲目的に服従せず、自ら考えるという存在であるべきとの考えに至った。命令は絶対ではなく、人間の尊厳に背くものである場合従ってはならないとされている。日本の場合はどうか。旧軍将校の親睦会として 1877 年に設立された偕行社から 2024 年に陸上自衛隊幹部 OB 組織陸修社と統合して陸修偕行社となる経緯を含めて自衛隊の現在の立ち位置を解説した。偕行社は戦後いったん解散するものの 1957 年に復活。機関紙には旧陸軍 OB らが戦争への反省や自己批判などを寄稿していた。しかし、世代交代が進むにつれ旧陸軍の肯定派が増えていく。ちなみに陸修偕行社は元陸上幕僚長の火箱芳文氏が理事長に就任し、会員の内訳は元陸上自衛隊関係者が 2260 人、旧陸軍関係者が 60 人となっている。番組終盤 TBS の松原氏は戦後 80 年の今、自衛隊に対する理解は深まっているのかを問う。学習院大学の井上寿一教授は自衛隊には「旧軍を美化する気持ちもわかるが、なぜ軍部が国を誤らせたのかを継承することが大事だ」、そして国民には「実際に戦うのは自衛隊員だと自覚し、理解すべき」と述べた。作家・軍事史研究家の大木毅氏は民主主義化とは、という問いに対し「自衛隊は何を守る“軍隊”なのか。日本はドイツのように徹底して議論してこなかった。そこを考えるとところから始めなければならない」と根本的な自

衛隊の存在意義の議論を深めることを求めた。番組コメントーターたちは自衛隊と社会の関係性について「日本の宿題、長い混乱の時代が続く、国民の決意、民主主義を守る軍隊、力の論理を見つめなければならない、軍事力は自分の国の鏡」と総括した。

高市首相は就任後の所信表明で、安倍・岸田政権下で進められた「2027年度までにGDP比2%」という防衛費の目標を「今年度中」に前倒しして達成する方針を表明した。増額分は単に装備品（ミサイルや艦艇）だけでなく自衛隊員の給与・手当を含めた待遇改善にも充てられる。自衛隊の隊員の充足率を高めると、防衛相・自衛隊関係者には朗報である。一方でこの方針には、大きな枠組みの平和主義的立場からは待遇改善がもたらす志願者増は軍備拡大につながるという懸念がある。2026年1月、米国防省が発表した「国家防衛戦略（NDS）」の中でトランプ政権は同盟国に対し、防衛費を対GDP比5%まで引き上げるよう求める姿勢を示している。日本だけ2%で米国はじめ同盟国の理解を得ることができるのか。『BS-TBS 報道1930スペシャル 日本人と“軍隊”～いま見つめる戦後80年の自画像』は防衛費の財源も含め今、日本人と軍隊（自衛隊）の関係性を「他人事」ではなく「自分事」として再考すべき時期に差し掛かっていることを伝えた。

【ポイント】自衛隊の現状認識と旧軍やナチスドイツとの比較が戦争記憶の伝承につながる。

③ NHK 総合 2025年6月23日放送

『ニュース解説 時論公論 沖縄戦80年 転機にさしかかる平和教育』

出演：NHK 西銘むつみ解説委員（沖縄担当）

戦争体験を語れる人が少なくなる中、持続可能な記憶の継承には何が必要なのか、太平洋戦争で20万人といわれる犠牲者を出した沖縄県の平和教育という視点から考察する番組である。

沖縄戦の平和教育が本格化したのは、本土復帰後の1970年代からで、それから半世紀戦争体験者の講話が主軸であった。しかし、今転機に差し掛かっている。戦争体験者の高齢化・減少で小・中学校への訪問が難しくなっている。防空壕などの戦争遺跡も落盤の恐れがあり危険で、立ち入りが禁止とされる箇所が増えている。また、各地の資料館へ生徒を乗せて運ぶバスが沖縄観光者の増加で確保が困難となっている。

今年に入って取材を受けることをためらっていた90代の人々が相次いでインタビューに応じている。15歳で学徒隊に動員された95歳の方は「亡くなった学友のためにも平和を訴え続けたい」、父親を日本軍に殺害された95歳の女性は「戦争のことを知らない人が多いから、勇気を出して語らないといけないと思った」、また、家族や親族13人を亡くした93歳の女性は「沖縄戦をなかったことにしたくない」と語っている。

教育現場では新たな取り組みが始まっている。教員た

ちが共通で使うことができる教材の作成である。これまでも教職員組合が作った教材や教材になりうる証言集や動画など多様なアーカイブは存在した。しかし広く共有されてはいなかった。また、3か月以上にわたって県内全域が戦場となった沖縄では、戦闘に巻き込まれた時期や被害の状況がそれぞれ異なるため、地域に合った教材の必要性が指摘されている。沖縄本島南部の教育委員会は平和教育をサポートしようと、戦争体験者の聞き取りと専門家の監修に基づいたVR（＝バーチャルリアリティ）で当時のことを知ってもらうコンテンツを制作し、提供を受けた中学校ではクラスごとに授業が行われた。教員たちは有志で月に一度各地から集まり、教材や情報の共有を始めている。

『ニュース解説 時論公論 沖縄戦80年 転機にさしかかる平和教育』は激戦地沖縄でも本土でも平和教育の現場での戦時教育の課題は共通だ。教材としてのVRなどのコンテンツ制作の強化・拡充が求められている現状を伝えた。

【ポイント】沖縄の教育現場でも講話主軸の戦争体験の伝承は厳しくなり新たな取り組みを模索中。

④ NHK 総合 2025年8月16日（前編）・8月17日（後編）放送

NHKスペシャル 『シミュレーション昭和16年夏の敗戦 前編 ドラマ×ドキュメント』

NHKスペシャル 『シミュレーション昭和16年夏の敗戦 後編 ドラマ×ドキュメント』

「実は、日本が必ず負けることは戦争をする前から分かっていた。軍や政府は、日米開戦の前、アメリカとの戦争の行方を秘密裏に研究していたのだ」というナレーションで始まる猪瀬直樹のロングセラー「昭和16年夏の敗戦」を原案に創作を加えたドラマと、総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリー。日米開戦前夜の1941年夏、首相直属の総力戦研究所で日本とアメリカが戦った場合のあらゆる可能性がシミュレートされた。官僚・軍人・民間から選抜された若きエリートたちが導き出した結論は日本の“圧倒的な敗北”であった。ドラマパートはフィクションではあるが、総力戦研究所のメンバーが分析しまとめ上げた報告書の内容はその後のアジア・太平洋戦争の展開と見事に一致している。

8月28日閣僚報告会で総力戦研究所の疑似内閣のメンバーが近衛文磨首相、東条陸軍大臣、他閣僚の面前で行われた発表の内容を紹介する。

・海軍省の見解

物資を運ぶ船が足りなくなる 日本の上陸輸送は3年以内に必ず崩壊する

・陸軍省の見解

現在は欧州戦線で優位を保っているドイツは工業力と油とインフレによりまもなく劣勢に回りやがて敗北する。その後ソ連が参戦し必ず日本へ矛先を向ける。

・内務省の見解

制海権と制空権を失った日本は徹底的に空襲にさらされる。木造家屋ひしめく我が国はこれに耐えられない。本土攻撃の際の治安維持や食糧配給の面でも危機的状況に落ち得る。

と述べたが、陸軍大臣東条英機は日露戦争を例に挙げ「戦は精神力がものをいう。やってみなければわからない」と却下する。近衛文麿首相は何も聞かぬふりをして報告会場を立ち去る。

庶民とはかけ離れた若きエリート同士であったといえ、総力戦研究所では、軍人、官僚、民間人の間で自由闊達な議論が可能であったことに大きな驚きを感じると同時に、なぜ、精緻なデータ・根拠に基づいた正論、言論の自由が国家全体の空気に抗えずに抹殺されていったのかを明らかにしている。

番組冒頭には

これは「昭和 16 年夏の敗戦」[猪瀬直樹 著]を原案に創作を加えたドラマです 総力戦研究所の所長及び関係者はフィクションとして描かれています ドラマに続き 番組後半に総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーがあります

とクレジットされている。

ドラマと史実に基づいたドキュメンタリーとは別物と考えるべきではあるが、開戦前に総力戦研究所は実在して、対英米戦争のシミュレーションの結果は「長期的に見て勝算がない」であったことは事実である。分析のポイントは彼我には「圧倒的な生産力の差」があるということだった。授業で太平洋戦争の話をする必ずと言っていいほど学生は「なぜ、圧倒的な国力の差があったことを知っていて開戦へと向かったのか」と問うてくる。軍部の“根拠なき楽観論”を象徴的に表した番組だった。

【ポイント】ドラマはフィクションであるが登場人物の演技を通して時代の空気感の伝承につながる。

⑤ NHK 総合 2025 年 8 月 15 日放送

『時論公論 戦後 80 年「戦争体験者なき時代」を前に』

この番組は「私たちはこれから教訓をどう受け継いでいけばよいのか。世論調査の結果や各地の自治体の取り組みを基にその糸口を探る」という論が展開された。解説のポイントは①急激に減少する戦争体験者、②手記などの記録の再活用、③広く学ぶことの大切さの 3 点である。

旧日本軍の軍人として太平洋戦争などに出征して現在恩給を受けている人は 2025 年 3 月現在で 792 人だが、2015 年度には 3 万 8000 人以上いて、わずか 10 年ほどでその数は 50 分の 1 近くに激減している。受給者の平均年齢は 100 歳を超えた。このほか恩給を受けられない人もいるためこの数が全てではないと考えられる。ただ、戦地で戦闘を体験し今も存命の元兵士はもはやごくわずかとなったことがうかがえる。全国各地の平和記念館などの職員は「元兵士から直接話を聞くことはす

非常に難しくなっている」と話す。

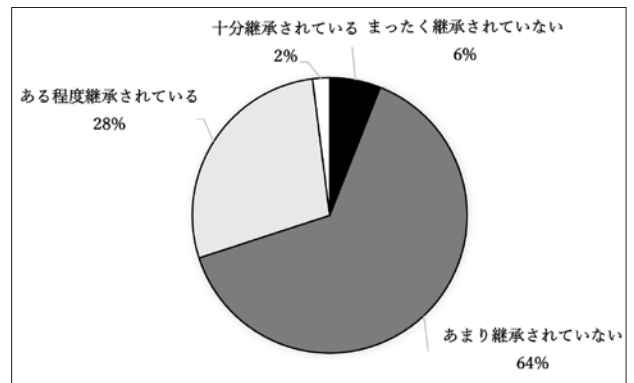
空襲や引き揚げなど、戦争にかかわる記憶のある人は元兵士より少し下の世代も含まれるが、それでも 80 代以上で、あと 10 年もすれば大幅に減ってしまうと予想される。

広島と長崎の被爆者も今年初めて 10 万人を下回った。平均年齢は 86 歳を超えている。日本被団協は「10 年後には直接の体験者として被爆証言できるのは数人かもしれない」と危機感を募らせている。

NHK は戦後 80 年に合わせて 2025 年 5 月から 7 月にかけて、全国の 18 歳以上の 3600 人と中学生と高校生の年齢にあたる 1200 人を対象に世論調査を行った。

Q 1：戦争を体験していない世代に戦争の歴史がどの程度継承されていると思うか

図表一 戦争と歴史がどの程度継承されていると思うか



NHK 世論調査 2025

期間：2025 年 5 月 22 日～7 月 4 日

方法：郵送法

対象：全国の 18 歳以上 3,600 人・中学生・高校生 1,200 人

有効率：1989 人 (55.3%) 746 人 (62.2%)

Q 2：先の戦争体験者から直接戦争の体験を聞いたことがありますか（中学生・高校生対象）

聞いたことがない 69%

本稿冒頭部分で述べた急激な戦争体験者の減少と戦時体験第三世代と第四世代への伝承が課題であることが改めて浮き彫りとなった。

【ポイント】記憶の伝承は時間との戦いでもある。

⑥ NHK 総合 2025 年 8 月 14 日

『時論公論 戦後 80 年 戦争の記憶 地域でどう継承するか』

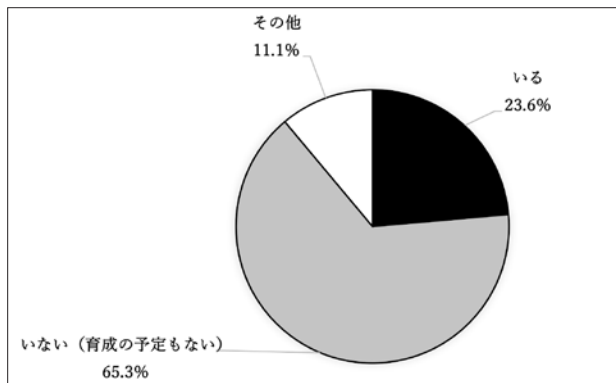
「地域ならではの戦争の記憶」どの継承していくのかを考察する番組内容だ。地域の博物館などでは実物資料を収集・展示するとともに体験者の手記や証言を集めているところが少なくない。そうした地域にとっての戦争をどのように若い世代に知ってもらえるか、様々な取り組みがなされている。番組で実践例として取り上げたのは京都府舞鶴市にある「舞鶴引揚記念館」。戦後の引き

揚げやシベリア抑留に関する資料を展示している。舞鶴市は終戦後 13 年にわたり海外にいた日本人が到着した引き揚げの街であり、戦前、海軍の舞鶴鎮守府や海軍士官を養成する海軍機関学校が置かれていた軍都である。その記憶を継承する「学生語り部」は 2017 年にスタート。地元の中学生・高校生・大学生を募集し、養成講座を開いている。その目的は「次世代への継承」ならぬ「次世代による継承」で、体験者がいなくなることを見据えた取り組みである。

しかしこうした取り組みを実践できる場は限られている。博物館の関係者や研究者でつくられている市民団体「平和のための博物館市民ネットワーク」は戦後 80 年に合わせて、昨年全国の戦争や平和に関する展示を行っている博物館を対象にアンケート調査を行い、72 の施設から回答が寄せられた。

Q 1：戦後世代の「語り部」はいますか

図表-3



2025 年 5～6 月 72 施設から回答

各地の博物館はその地域の記憶を継承し、平和の尊さを訴えるうえで大きな役割を果たしている。若い人たちを含めて広く関心を持ってもらうことが今後の課題となる。

戦争の記憶を継承するために何ができるのか、各地で様々な模索が進む中、従来とは異なるアプローチもみられる。

茨城県笠間市の筑波海軍航空隊記念館は旧司令部庁舎を保存の上、2018 年にオープンし、民間の指定管理者が運営にあたっている。当時の建物を一般に公開するだけでなく映画やドラマのロケ地としても活用している。これまでにおよそ 240 件の実績があり、映画『永遠の 0』でも使用された。来館者の平均年齢は 30 代、ロケ地だから、作品の舞台となったからという理由で訪れる人も多い。このような状況に指定管理者は「どのような手段であれ、まず知ってもらう必要があった」と述べている。行政が当時の建物の取り壊しを検討する中で、人が集まる場所をアピールすることで保存につなげた経緯があるからだ。

戦争の時代にその地域で何が起き、人々はどんな思い

で過ごしていたのか、その記憶や体験を受け継ぐことは地域の歴史を大切に平和について考えることに他ならない。

語り部の育成や戦争遺構の保存にもマンパワーが必要だ。人口減少、過疎化という地域の抱える根本的な課題を抱えながら、担い手をどのように増やして継続的な活動とするのか。解決の糸口を探る解説番組であった。

【ポイント】「次世代への継承」から「次世代による継承」への転換点を迎えている。

⑦ NHK 総合 2025 年 8 月 10 日放送

『戦争をどう伝えていくか』

出演者：林田理沙アナウンサー、ノンフィクション作家 保坂正康氏、日本大学芸術学部特任教授 片淵須直氏、俳優 尾野真千子氏

この番組の制作意図は、1953 年のテレビ放送開始から現代にいたるまでの戦争を取り扱った放送番組の変遷を追体験することで戦争の記憶を伝承することだ。1970 年代を代表して番組内で紹介されたのは被爆者が描いた原爆の惨状を伝える絵を基にしたドキュメンタリー、1975 年 8 月 6 日原爆の日放送の「市民の手で原爆の絵を」だ。広島で被爆した人々が投下直後の惨状を絵にして後世に伝えようとする運動の広がりを記録した作品である。運動のきっかけとなった原爆投下の当日の悲惨な広島市の街地の絵を描いて NHK に送った小林岩吉さん（当時 78 歳）は既に亡くなっている。絵を受け取った NHK の当時若手ディレクターも現在 78 歳である。

次にこの番組で紹介されたのは「第 2 の敗戦」とも呼ばれた「バブルの崩壊」の 1990 年代に放送された『ドキュメント太平洋戦争』だ。1992 年 12 月から 1993 年 8 月にかけて『NHK スペシャル』枠で全 6 回放送された。50 年前（当時）の太平洋戦争で日本が敗れた原因を敗戦 50 年後の新たな視点で分析するということに主眼を置いた構成となっている。ここでは 1990 年代にアジア各地で経済発展や民主化が進む中、太平洋戦争を日米の戦いという視点から転じ、日本に対してのアジアの戦後補償の問題が取り上げられた。韓国の従軍慰安婦問題やインドネシアの兵補が描かれた。

2000 年代に入り戦争体験者が一層減る中で新たな試みが紹介された。沖縄の読谷村で行われた、戦時体験を資料や当時を知る人の証言をまとめた『村史戦時記録』の発刊だ。2500 人の証言を集め、当時の村民の足取りを追った。村の 86 歳の老女が 26 歳の時に経験した集団自決について重い口を開いた。2005 年に放送された「沖縄 よみがえる戦場～読谷村民 2500 人が語る地上戦～」である。しかし放送から 21 年を経た今、証言をした老女は存命だろうか。

番組の終盤では現在 NHK が始めている新たな試みが紹介された（本稿③の沖縄での学校教育でも触れた）戦争体験者の証言、体験を基に造られたバーチャルリアリティ＝VR で戦争を体験する試みだ。他者の体験を自

分の体験のように感じ取られる。放送では、広島の実爆による被爆をあたかも“あの日の出来事”のように再現していた。東京にある私立の男子高校で生徒にVRを見せるシーンが撮影されていた。あまりにリアルで悲惨な原爆投下の瞬間を疑似体験した37人の高校生は皆ショックで言葉を失っていた。生徒の中から10人が自主的に「やはり実物が見たいと」広島に足を運んだ。戦争の実相を伝える手段としてのVRに新たな被爆体験の伝え方の可能性を提示した番組だった。

【ポイント】VR＝バーチャルリアリティーに記憶の伝承を託す試みは有効だ。

⑧日本テレビ 2025年8月6日放送

NNN 戦後80年プロジェクト いまを、戦前に させない

『news every「被爆の記憶を継ぐ 家族伝承者 語れなかった父にかわり」』

8月6日原爆の日に日本テレビの夕方のニュース番組『news every』はメインキャスターの森圭介氏と桐谷美玲氏が広島の実爆ドームそばから特集「被爆の記憶を継ぐ 家族伝承者 語れなかった父にかわり」を伝えた。被爆体験者の平均年齢が86.13歳（昨年3月時点・厚生労働省調べ）と高齢化が進む中、3年前から広島市が始めたのが“家族伝承者”という制度である。被爆者本人に代わり、子や孫などが被爆体験を引き継ぎ講話などを通して次の世代へ伝える取り組みだ。

桐谷氏が取材をしたのは父親の被爆体験を語り継いでいる広島市在住の細川洋さん（66歳）。父浩さんは17歳の時に被爆、語り部として20年以上活動し一昨年95歳で亡くなった。その後を継いで息子の洋さんが“家族伝承者”となった。当日午後、広島市内の公立小学校で教員を相手に講和する細川さんの姿をカメラは捉えていた。

もう一人は桐谷氏と同世代の“家族伝承者”尾崎健斗さん（34歳）。16歳で被爆した祖父（96歳）松原昭三さんからバトンを受け取った。今も2週間に1回祖父と話し、体験を聞いている。尾崎さんは桐谷氏の「私たちの世代にできることは？」という問いに

核弾頭が長崎以降人類の上に落されていないのは本当に奇跡だと思う。ただ、その奇跡は偶然ではなく、広島・長崎の被爆者が訴え続けてきたからこそだと思う。そのたすきを決して絶やしてはいけないと思って活動しています。

と答えている。

“被爆伝承者”にはだれもがなれるわけではない。広島市のホームページには以下のような記載がある。一部抜粋する。

被爆者の高齢化に伴って、被爆体験をお話しされる方

が少なくなってきています。広島市では、自らの被爆体験等を伝える「被爆体験証言者」と、被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を平成24年度から養成しています。

また、令和4年度から、家族の被爆体験等を受け継ぎ、それを伝える「家族伝承者」の養成研修受講者を募集し、養成に取り組んでいます。

応募資格

- 被爆体験証言者
意欲がある方であれば、どなたでも応募可能です。
- 被爆体験伝承者
研修に概ね参加可能で、かつ、概ね5年以上活動できる方
- 家族伝承者
被爆体験伝承者の応募資格に加え、被爆者の家族である方（家族である被爆者が、伝承することについて同意し、かつ、講話内容の確認に協力できる場合に限ります。）

養成研修スケジュール

研修期間は、被爆体験証言者は概ね1年間、被爆体験伝承者及び家族伝承者は概ね2年間です（講話原稿の作成時期によっては、それより早く修了することも可能です。）

研修後

公益財団法人広島平和文化センターから委嘱を受けて、平和記念資料館等で修学旅行生や海外からの訪問者等を対象に講話を実施していただく予定です。

令和7年4月1日現在、被爆体験伝承者239人と家族伝承者39人が活動中です。

広島市ホームページ <https://www.city.hiroshima.lg.jp/>（2026年1月15日閲覧）

戦争体験者を第一世代とするなら、桐谷氏がインタビューした細川洋さんは子である第二世代、尾崎健斗さんは孫である第三世代となる。原子爆弾が投下された広島ではその年だけでおよそ14万人・長崎ではおよそ7万人が亡くなる壊滅的被害を受けた。

太平洋戦争の終戦直前の広島・長崎への原爆投下につながる米軍による本土空襲について歴史的な事実を確認する。1944年7月のサイパン陥落は広島・長崎原爆投下のみならず日本本土空襲にとって米軍の戦略上大きな意味を持った。米軍の開発した日本本土空襲の主力で“超空の要塞”と呼ばれた長距離爆撃機B-29の航続距離は最大で約6000kmに達し、サイパンから日本本土への往復が可能となった。

1944年11月に始まった米軍による日本本土の攻撃計画ではB-29による攻撃は精密爆撃で、当初目標は1000か所を超える兵器工場や飛行場、航空機産業、軍事関係の施設であった。しかし米軍はカーチス・ルメイ少将が司令官として着任以後は都市無差別爆撃に方針を転換。

1945年3月10日の東京大空襲では一晩で10万人以上の死者が出た。その後4月から6月にかけて、所沢、立川、木更津、厚木、四日市、各務原、呉、宇佐、松山、宮崎、松山、鹿屋と地方の軍事都市への空襲は続いた。米軍による本土空襲は40の都市に加え、最終的には北海道も含む地方の中小都市180か所にも及び犠牲者は18万人余りとなった。

話を戻すが、広島市の“被爆体験伝承者”の活動を模して、全国の焼夷弾による空襲にさらされた自治体でも“空襲体験伝承者”という活動も可能ではないかと考える。本稿冒頭部分で触れた筆者の父の郷里の四日市では1945年6月18日未明、米軍のB-29爆撃機89機が1万1千発の焼夷弾を投下。9回にわたる空襲で死者・行方不明者は約800人にのぼった。終戦から2か月以上経って四日市に復員した16歳の父は、国鉄の四日市駅のホームから2キロ程東にある実家のあたりまで見通すことができたことに大変驚いたと生前語っていた。街が焼き尽くされて視界を遮るものが何もなくなかったからである。

news every「被爆の記憶を継ぐ 家族伝承者 語れなかった父にかわり」は、降り注ぐB-29の焼夷弾による空襲で焦土と化した日本全国の都市の復興とともに生き延びた空襲体験者の次の世代“空襲体験伝承者”の可能性を示唆した特集であった。

【ポイント】広島市の“被爆体験伝承者”は全国的に展開し“空襲体験伝承者”として養成が可能。

⑨日本テレビ 2025年8月8日

NNN 戦後80年プロジェクト いまを、戦前に させない

『news every 特集「長崎元看護学生語る被爆後の風景 今の世代にできること」』

2025年夏に公開された原爆の悲劇を描いた映画『長崎—閃光の影で—』に出演した若手俳優、菊池日菜子さん(23)、川床明日香さん(22)、小野花梨さん(27)が長崎をめぐる戦争の記憶を追う。映画は原爆投下直後の長崎を舞台にして、3人は被爆者を救おうと奔走した若き看護学生を演じている。映画の元となったのは、原爆投下直後から被爆者の救護にあたった日本赤十字社看護士など約50人が当時の悲惨な様子を克明に記す『閃光の影で 原爆被爆者救護赤十字看護婦の手記』という手記である。

菊池日菜子さんはこの手記に体験を寄せただけ1人の生存者山下フジエさん(95)から原爆投下から3日目に召集され、救護所でおおよそ3か月間被害者の救護にあたった当時の体験を直接聞いて涙し、戦争を演じるために「知ること、学ぶこと」の大切さを実感する。山下フジエさんは戦後も日赤の看護士として被爆者に一生を捧げる人生を送ってきた。そして「80年前の光景は今でもはっきりと覚えている」と語るが、語れる最後の一人になってしまった現実の壁がそこに横たわる、そのこと

を実感させる作品だった。

【ポイント】戦争記憶の伝承には受け取る側の前向きな学習・学ぶ心が必要だ。

追記

NHKは今年1月、ウクライナにおけるロシアの軍事侵攻で何が起きているのかをつぶさにとらえたドキュメンタリーを放送した。若い世代にいま起きていることを知ってもらうことと「歴史は繰り返す」の格言通り、戦前の日本の国家政策を想起させ、他国の出来事と傍観できる内容ではなかったので追記することとした。

⑩NHK総合 2026年1月25日放送

『NHKスペシャル 戦慄の“占領地”ロシア化の実態』衝撃的内容であった。周知のように2022年2月24日、ロシアのプーチン大統領はウクライナに対し軍事侵攻を開始し、次のように声明を出した。

特別軍事作戦を開始することを決めました。その目的は8年間にわたりキーウ政権(ウクライナ政府)による虐待や虐殺にさらされた人々を保護することです。そのためわれわれは非軍事化、非ナチ化を目指します。4州の住民は永遠にロシア国民になる。

つまり、ウクライナへの軍事侵攻は、ロシアのウクライナ支配からの解放であると位置づけたのだ。

ロシア政府はロシア軍が占領したヘルソン州・ザポリージャ州・ドネツク州・ルハンシク州を新たな領土「ニューテリトリー＝ロシア占領地」と呼んでいる。ロシア政府はウクライナの領土面積の2割を占め、今も600万人のウクライナ人が暮らしている(ウクライナ政府発表、クリミア半島を含む)ニューテリトリーにロシア本土から積極的に入植者を送り込んでいる。その目的は占領地をあたかもロシア領土の一部であるかのような既成事実化だ。言語、通貨、国籍もロシアに置き換える“ロシア化”が進んでいる。入植者には住居が無料、または格安で与えられている。住宅ローンの優遇措置もとられているが、その多くはロシア軍の攻撃で没収された元はウクライナ人の住居で、マリウポリの市街地ほぼ全域にわたる約8300戸が供給されている。

一方でロシア治安当局は、ロシア占領地に住むウクライナ人に対し、ロシアの統治に反抗するものは徹底的に取り締まると警告、捕まると国家反逆罪に問われ、懲役15年もの罪で収監される。占領地のウクライナ人は息をひそめ、密告におびえながらの暮らしを余儀なくされている。

メディアの現状はどうか。NHKは占領地ヘルソン州ダブリアTV(この放送局の創設者はプロパガンダ放送をしているとしてアメリカやEUの制裁対象となっている)のグロトフという局長にインタビューしている。彼は次のように述べている。

あなたたちはこの地域の真実を知りたいと取材を申し込んできた初めての海外メディアです。フェイクではなく真実を知りたいと願っているのですね。取材に応じた理由は1つ。真実を伝えなかったからです。

NHK側からの「あなたたちはプロパガンダ放送をしているのか」という質問には反論して、

西側諸国がどう報じているか知りませんが、ロシアには言論の自由があります。私たちが制裁を受けている理由は明らかです。私たちは真実を伝え、彼らのフェイクを暴いているからです。プーチン大統領は真の民主主義を非常に繊細に感じ取り、理解し実践している。だから何かに反抗しているからといって発言を禁じられるようなことはありません。ロシアの領土になり、普通の市民にとって生活はより豊かになりました。ウクライナでは夢にも見なかったほどにです。

と、ロシア占領地のテレビはプロパガンダ放送を伝えるだけの機関となっている。(エリア外からの衛星放送の受信用パラボラアンテナは当局によって見つかり次第撤去されている)

また、ウクライナの女性ジャーナリストがロシア占領地に潜入取材をしてロシア当局に拘留され、1年もの間独房で監禁され拷問を受けた挙句、殺害され2025年5月に無惨な姿で帰国した様子も報じられていた。彼女の眼球はくり抜かれ、脳の一部が取り除かれていたという。

先に述べたように、筆者が現在進行形のウクライナの出来事を取り上げた理由は、戦前の大日本帝国下で日本政府や軍部が推進した二つの愚かな政策が80年の時を経てウクライナの地で再現されているかのような印象を受けたからだ。

一点目は「皇民化運動」である。皇民化運動とは、日本が植民地支配地域で住民に日本語使用や神社参拝などを強制した同化政策である。ロシアがウクライナのロシア占領地にロシア全土から入植者を送り込み、言語、通貨、国籍、さらに教育の現場でロシア化を推進する様は、戦前大日本帝国が統治していた朝鮮、台湾、フィリピン、マレーシア(旧イギリス領マラヤ・ボルネオ)、ビルマ(ミャンマー)、インドネシア(旧蘭印)などにおいて、現地の人々を「天皇に忠誠を誓う日本臣民(皇民)」として精神的・文化的に統合しようとした一連の同化政策に酷似している。皇民化運動の具体的政策は、一、言語・教育の日本化。二、宗教・精神生活の統合。三、氏名の日本式変更。四、軍事動員が挙げられるが、一と四はまさにウクライナで今起きていることだ。番組内で取り上げられた事例は凄惨を極めていた。平穏に暮らしていた夫、妻、娘のウクライナ一家がロシア兵によって突然襲われ、拷問を受けた挙句妻と娘は殺害、夫はロシア国籍取得を強制された。その後ロシア軍に徴兵されウクライナ軍との戦いの最前線に送り込まれた。昨日まで同胞

だった者へ銃口を向けさせるが、後方で見張るロシア軍の際をつきウクライナ軍へ投降しロシアの捕虜として祖国ウクライナの収容施設で廃人同様の精神状態で過ごしている。

二点目は「満蒙開拓団」だ。満蒙開拓団とは、戦前日本が国策として旧満州(中国東北部)へ送り出した大規模な農業移民団で、農村救済と食料増産、満州国(日本の傀儡国家)の支配強化が目的だったが、終戦で置き去りにされ、多くの犠牲者を出した。若者中心の「青少年義勇軍」なども含め約27万人が渡り、敗戦後の混乱で約8万人が命を落とした。1970年代後半以降その存在がクローズアップされたいわゆる中国残留孤児・婦人も多数生み出した。今、ロシア政府が推し進めるロシア化のためにロシア全土からウクライナ南東部4州に入植した人々は本当にそれを望んでいたのだろうか。新天地での新たな生活という夢を与え、仕事の斡旋、住宅の供給というアメの後には徴兵というムチが待っているのではないか、いつの日かロシアとウクライナの争いが終結した後、入植者たちにどのような運命が待ち受けているのだろうかと思わずにはいられない。

【ポイント】太平洋戦争は3年8か月。ロシアによるウクライナ侵攻は4年を越えても終わらない。

戦後80年、テレビとネットの協働による戦時体験の継承

ここまで、昨夏に放送された主に戦時体験をいかに後世に継承するべきかテーマとした番組を取り上げ紹介した。あらためて戦後80年の1年間、テレビはどのような“取り組み”をしたのかを振り返る。TBSは「つなぐ、つながる」SNS連動キャンペーン「#きおくをつなごう」を展開。Yahoo!ニュース等と協力し、視聴者が持つ80年前の記録(写真や日記)をデジタル空間で共有した。日本テレビの「いまを、戦前にさせない」は世界情勢が不安定な「いま」を見つめ、過去を教訓にする報道プロジェクト。NNN系列各局と連携し、戦地の証言や資料の情報を広く募集した。テレビ朝日は「シリーズ戦後80年」ドキュメンタリー枠『テレメンタリー』で全国の系列局が制作した番組を長期にわたって放送。地域ごとの戦争の記憶を掘り起こした。フジテレビは「映像遺産プロジェクト」局内に残る膨大な戦争関連の映像アーカイブをデジタル技術で活用。池上彰氏を起用した特番などで「運命の転換点」を浮き彫りにした。

戦争をテーマにしたドキュメンタリー番組が、テレビをオールメディアと見なす特に戦時体験第三・第四世代にどれほどの訴求力を持つのか。そもそもテレビを見ない世代に対しテレビ局はマスメディアとしての負託にこたえられるのか。苦戦を強いられるテレビ各局が活路を見出したのが「プラットフォームとの連動」と「系列の力とアーカイブス」、そして「デジタル」だ。

筆者が着目したのはTBS/JNNが「つなぐ、つながる」の一環としてSNSと連動したキャンペーン「#き

おくをつなごう]だ。2021年に始まったこの取り組みは、昨年新たに JNN のニュースサイト TBS NEWS DIG が Yahoo! ニュース、note と提携してバージョンアップした「戦後 80 年 # きおくをつなごう」を展開した。ホームページから趣旨を抜粋する。

「#きおくをつなごう」をつけて SNS に投稿しませんか

戦後 80 年、この機会におじいちゃんやおばあちゃん、親しい人に戦争中や戦後の話を聞いてみてください。もしかしたら、託したい思いがあるかもしれません。あなたが聞いたこと、見せてもらった写真やものを「#きおくをつなごう」をつけて SNS に投稿してみませんか？投稿は TBS/JNN の番組やサイトで紹介する可能性があります。

(<https://wararchive.yahoo.co.jp/no-war-project/list/index.html> (2026年2月11日閲覧))

「#きおくをつなごう」を立ち上げた際の統括編集長・TBS 報道局社会部の山岡陽輔氏に取材を申し込み話を聞いた。山岡氏は「若い人たちと戦時体験の距離をなんとか縮めるために SNS への投稿を思いついた。祖父母から直接を聞くことで戦争が他人事から自己体験になる作用が働くのではないか。そこから戦争に対する興味が高まり自ら学ぶ意欲につながっていることに意義を感じる。さらに、投稿は同時に祖父母が持っている貴重な資料、日記や写真などをデジタル空間で保存して散逸から守ることもつながっている」と語る。

また山岡氏は戦時中の同調圧力が生んだとも言われぬ“空気感”を若い人たちに伝えたいと力説し、TBS NEWS DIG と Yahoo! と連携した記事や VTR を集めた「体験者のきおく 記事一覧」のサイトにある戦時体験者の記憶の中から具体例を挙げてくれた。1本目は8月13日に配信された俳優・奈緒が札幌在住の99歳の元特攻隊員・神馬文男さんを訪ね苛烈な体験を聞く記事と映像だ。神馬さんは憧れの予科練合格したものの、入隊後1週間で開戦。訓練で叩き込まれたのは“連帯責任”と“国のために命を懸ける”ことだったという。卒業後の1944年、山東半島旅順の基地で隊長から「特攻隊に志願するものは一歩前へ出る」と言われ、神馬さんは「私は出た」と話す。神馬さんを含めその場にいた隊員20人全員が前に出た。「それまで犠牲的精神とか共同責任だとか言って育てられたのに、逃げるわけにはいかない」と。奈緒の「戦争を繰り返さないために何が必要か」の問いに神馬さんは「個人個人がよく勉強して友達と話し合っ、これと信じるものをつかんで実行して、日本だけじゃなくて他の国々とも手を携えてやっていかなければならない」と語った。残念ながら神馬さんは去年の取材の2か月後に亡くなった。次は『「いとこの戦死が嬉しかった」…軍国少女だった91歳の後悔 市民の間に蔓延した“同調圧力”』10月20日配信の記事と映像だ。

戦時中国威発揚のために銃後の主婦たちによってつくられた「国防婦人会」。「国防は台所から」をスローガンに、割烹着姿で兵士を見送るなどして、市民を戦争に駆り立てた。国防婦人会の幹部の娘として育った三重間大台町に住む梅本多鶴子さん(91)は太平洋戦争時に国民学校へ通っていた。当時、子どもたちは天皇に仕える小さな皇国民＝少国民として軍国教育を受けた。家族は両親と3人姉妹。戦争の長期化で女性には男子を生み育てて、兵士として国に捧げることが強く求められていた。梅本さんの母親は「男の子がいないので、あんたは一人前ではない」と周囲から蔑まれていた。梅本さんも子どもながらに、どこか劣等感を感じていたという。そうした中、当時24歳のいとこが戦死したとの知らせが届く。梅本さんは、いとこの遺骨が納められた白い包みが届いたときに「私のいとこが死んだんや」と喜びながら周囲の友人に言って回ったという。当時の“空気感”を振り返り梅本さんは「ようあんな気持ちになったなど、今から思うとね。いとこに本当に申し訳ない」「せやから、その時は全体がそういう雰囲気やったんやろなと思います」と吐露している。記事は「市民の間に蔓延した“同調圧力”が、戦争遂行の推進力となったという現実、現代を生きるわたしたちにも、鋭く突きつけられている」という言葉で結ばれている。

取材の最後に山岡氏は「“人”はやがて途絶えてしまいますが、我々は“モノ”で伝承する取り組みもやっています」と TBS SDGs サイトに掲載されている戦後 80 年プロジェクト つなぐ、つながる「80年海に眠っていた 零式水上偵察機」に触れた。以下は2025年8月14日「海に眠る“特攻機”を発見、3Dモデルを公開」のサイトの紹介文である。

■海に眠る歴史の証人

TBS/JNN では、鹿児島湾の海底70メートルに眠る旧日本軍の飛行機を発見。3Dモデルを公開します。戦後80年、戦争を知る証言者が減る中で、この“歴史の証人”は、かつてこの日本で、悲惨な戦争があったことを雄弁に語り、私たちに実感させてくれます。是非、3Dモデルを体感してみてください。さまざまな角度から自由に見ることも、拡大・縮小することも可能です。～後略

https://www.tbs.co.jp/SDGs_portal/chikyū_egao_action/index.html (2026年2月17日閲覧)

山岡氏らの取材班は地元の住民の証言を基に、最先端の音波探知機で鹿児島市の南部、喜入前之浜町の沖合の海を探索、海底70メートルで人工物らしき反応が出たので水中ドローンでその場所に向かい沈んでいる飛行機を発見した。取材班はさらに、鹿児島水産高校の協力で実習船を出してもらい現場海域へ向かう。水中カメラで機体の残骸を発見しくまなく撮影した。7868枚にも及ぶ写真をフォトグラメトリという手法を用い組み合わせ

て 3D モデルを作成した。URL を付記するので、山岡氏らの「モノ」でも戦争を伝承する」という思いを体感してほしい。

<https://zero.archiving.jp/> (2026 年 2 月 15 日閲覧)

記憶の編集装置としてのテレビの変質

戦争をテーマにした番組を制作するに際し、これまでテレビは戦時体験者の“記憶に基づく証言”を前面に押し出して悲惨さを伝えてきた。戦後 60 年、70 年までは通用してきた“証言依存型”から 80 年は脱却の兆しが垣間見えてきた。筆者が最も印象的だったのは前段で取り上げた“テレビとインターネットの協働だ。TBS NEWS DIG と Yahoo! Japan・note が提携しておよそ 150 本の戦争記事と映像を編集してオンライン上で公開した。TBS 報道局の山岡陽輔氏は「記事を編集した JNN 系列の若手記者 130 人がこの作業に携わったこと自体が戦争の記憶の伝承につながっている。彼らがまた次の世代の記者を育ててくれるはず」と語っている。Yahoo! Japan の「未来に残す戦争の記憶」というサイトには TBS のみならず、全国の報道機関からコンテンツが提供されている。テレビ局は戦後 90 年に向かって、戦争報道については“証言依存型”から開局以来蓄えてきた膨大な音声・映像のアーカイブを提供する“コンテンツ抛出型”へと変貌を遂げるであろう。そのためにはコンテンツの収集システムの構築が不可欠だ。そのコンテンツの 1 次資料となる映像を①で紹介した「豊の国宇佐市塾」のように民間の一市民が主催する団体に依存する状況は心許ない。日本側はもとより米国立文書館など、国外の公的機関に保存されている

映像資料の発掘にテレビは本腰を入れるべきだ。地方自治体での伝承の取り組みは 54 局もの地方局を擁する NHK が公共放送として、また各民放も系列のネットワークを最大限に活用して記憶の伝承につながる映像資料の収集に努めるべきだ。テレビの立ち位置は“戦時体験者”の証言を伝えることから、“戦時体験の伝承”を伝えることへシフトすべきと考える。

また、番組③と⑦で取り上げた VR (=バーチャルリアリティー) は教育現場での活用の推進。⑥の「次世代への継承」ではなく「次世代の継承」のための「学生語り部」の募集。⑧広島“家族伝承者”の養成。以上 3 点は財源の確保さえできれば全国の地方自治体で展開は可能だと考える。

再び「一強」時代の到来

2026 年 2 月 8 日衆院選挙が行われた。結果は自由民主党の歴史的な大勝だった。そもそも高市早苗首相は「国論を二分するような大胆な政策、改革にも、批判を恐れることなく果敢に挑戦していくためには、どうしても国民の皆様の信任も必要だ」。このように述べ衆議院解散に踏み切った。国論を二分するような大胆な政策とは何か。選挙前に総理が前面に打ち出したのは「責任ある積

極財政」、「安保政策の抜本強化、インテリジェンス（情報収集・分析）機能強化」の二つだ。

2 月 9 日、高市首相は衆議院選挙の大勝を受けて党本部で記者会見した。会見の骨子は以下のとおりである。「公約に掲げた政策を力強く推進」「速やかに特別国会を召集し、新年度予算案や関連法案を早期に成立」「食料品の消費税ゼロは 2 年に限り特別公債に頼らない前提で検討」「国家情報局、対日外国投資委員会の設置のための法案を特別国会に提出」。そして記者からの質問で憲法改正に向けたスケジュールを問われると首相は「改正案を発議し、少しでも早く憲法改正の賛否を問う国民投票が行われる環境を作っていくよう、私も粘り強く取り組む覚悟だ」と答弁した。安全保障に関する自民と維新の主な公約を確認する。自民は年内に安保 3 文書を改定。5 類型を撤廃。国家情報会議設置法を早期成立、対外情報機関を設置。そのアクセル役を担うのが日本維新の会だ。公約は「専守防衛」を「積極防衛」に転換。国家情報局に加え、対外情報庁や情報要員養成機関を創設である。この 4 半世紀自由民主党の保守層が掲げるタカ派的政策のブレーキ役となっていた公明党の離脱と相まって戦後日本の安保政策の大転換が起きそうである。2 月 10 日の読売新聞の社説は『日本政治は、これまでに経験したことのない「1 強多弱」の時代を迎えたと言える』「野党が力不足の状態では、政権が仮に判断を誤った場合、取り返しのつかない事態にもなりかねない。責任は重大だ」と論じている。高市首相自身が後継と自認する安倍首相は、自公連立政権による圧倒的な議席数を背景に重要法案を次々に成立させた強気な国会運営が、強権的手法と野党から批判を受けた。与党は今回の参院選で、参院で否決された法案を衆院で再可決できる 3 分の 2 以上の議決を得た。この状況で高市首相に求められるのは、野党との議論を尽くし理解を求める丁寧で慎重な国会・政権運営だ。

朝日新聞と東京大学・谷口将紀研究室の共同調査によると今回の衆院選の当選者のうち、憲法改正の賛成派が全体の 93% にのぼり、4 年前の衆院選時の 67% から大きく上昇した。自民党が公約に掲げた「自衛隊の保持の明記」を挙げる当選者は 80% に達した。

高市首相の改憲意欲は理解する。しかし、“高市一強”だからこそ首相には為すべきことがあるのではないだろうか。日本人としての先の大戦の総括である。歴史認識のいわゆる“村山談話”や“安倍談話”の話をしているわけではない。戦後 80 年、結局“あの戦争とは何だったのか、なぜ日本人だけで 310 万もの無辜の命が奪われなければならなかったのか。歴史を学ぶということの意味を若い世代に理解してもらうことが肝要だ。第二次世界大戦で敗戦国となったドイツでは、ホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を引き起こしたナチス政権（1933～45 年）の歴史を多くの場合、義務教育最後の学年にあたる 9 年生（14～15 歳）で学ぶ。歴史の授業が週 1 時間の場合、長くて約半年間学ぶことになる（毎日新聞、

2025 年 8 月 21 日「ナチズム教える難しさ」より)。高市首相には日本人の総括にリーダーシップを発揮してほしい。その取り組みあつての改憲を含めた安保政策の議論ではないのか。本稿で取り上げた真摯に先の大戦を後世に伝承することに取り組んでいる人々が存在する一方で、8 月 15 日が何の日か理解していない中・高生も少なくない。未来のために日本人の歴史的洞察力の格差をどう埋めるのか。戦後 80 年、まさに待ったなしの課題であろう。

おわりに

大学を卒業して 40 年余り、昭和は遥かになりとの思いに駆られる。戦後 80 年の昨年、終戦までに生まれた現職国会議員は全体の 1% になった(朝日新聞、2025 年 8 月 13 日 1 面「戦争と政治家」)。ふと、筆者が大学生だったころの政治家の顔ぶれを思い出してみると、風刺漫画家・イラストレーターの山藤章二氏が週刊朝日「ブラックアンゲル」で政界の権力者として描いた御仁らとほぼ一致する。田中角栄 (27)、福田武夫 (41)、大平正芳 (36)、中曽根康弘 (28)、竹下昇 (22)、宮澤喜一 (26)、野中広務 (20)、後藤田正晴 (30) …。() 内の数字は彼らの終戦時の年齢だ。派閥の違い、政治手法、主義主張に差こそあれ皆戦争体験者である。通底する思いは一つ。「戦争だけはやってはいかん」である。昭和はいわばその「安心感」に包まれた時代であった。時は流れて令和の世だ。

日本国憲法第 12 条

この憲法が国民に保証する自由及び権利は国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない

この国の国民性、民度が問われている。いまを、戦前にさせぬよう「不断の努力」を続けるべきと強く訴える。

参考資料

- ・ 毎日新聞 2025 年 8 月 28 日 朝刊 8 面 オピニオン [戦争の伝え方] 重ねたい「辛抱強い努力」小堀聡
- ・ 朝日新聞 2025 年 11 月 17 日 朝刊 16 面 記者サロン 戦争の「記憶」何をどう伝えるのか
- ・ 読売新聞 2025 年 7 月 3 日 朝刊 24 面 軍人恩給 1000 人下回る
- ・ NHK 総合 『映像の世紀バタフライエフェクト 満州帝国 実験国家の夢と幻』2023 年 4 月 10 日
- ・ NHKE テレ東京 『最後の講義 ノンフィクション作家 保坂正康』2023 年 6 月 14 日
- ・ NHKE テレ東京 『半藤一利「戦争」を解く』2023 年 6 月 14 日
- ・ NHK 総合 『NHK スペシャル 村人は満州へ送られた～“国策”71 年目の真実』2016 年 8 月 14 日
- ・ 読売新聞 戦争責任検証委員会 2006 『検証 戦争責任 I』中央公論新社
- ・ 西浦進 2014 『昭和陸軍秘録』日本経済新聞出版社
- ・ 保坂正康 2005 『あの戦争はなんだったのか』新潮新書
- ・ 半藤一利 2009 『昭和史 1926-1945』平凡社

○寄稿

「コンプラ」をハックせよ ～制約を創造性に変えていく未来～

金 龍郎

はじめに

コンプライアンス、略して「コンプラ」は、テレビ番組制作者をがんじがらめに縛りつけ、テレビをつまらなくする元凶のように語られる。

例えば、泉放送制作の元スタッフで脚本家・小説家の和田竜はこう述べる。

「コンプライアンス（法令や社会規範の順守）だ何だと問われる時代にバラエティーの制作は大変だと思いません。いまの空気に敏感にならないと笑わせられない一方で、空気に従いすぎるとおとなしくなってしまう」¹

そして、放送作家の高須光聖もこう述べる。

「ボクらは自由にやれた世代ですけど、ここからは制約が多いので大変でしょう。偉そうなこと言ってますけど、ボクは何回もコンプライアンス無視のムチャなテレビを作って失敗してるんですよ。でも制作者としては、そういう外れたものを一回は作りたいんですよね。新しい作家はそれすら与えられず、“初試合から完投せい！”と言われてるようなもの。経験値もないから、こじんまりした投球になっちゃう。どうせなら百六十キロ投げたいじゃん」²

かつてのテレビは無節操で、逸脱そのものを楽しむ自由があった。その時代を懐かしむぶんには大いに共感できる。だが、第一線のプロたちが口々に「昔は良かった、今は大変だ」と嘆く姿には溜息が出る。若者から背中を追いかけられる立場の方々がそんなことを口々に漏らしていたら、一体誰がテレビの未来にワクワクできるというのだろう。

確かに制約は増えた。しかし、それは創造性を殺すものでは断じてない。むしろ、表現者としての「思いの強さ」が試されるフィルターである。

本稿では、「コンプライアンス」「コンプラ」を一つの構造として解剖していく。なぜそれは生まれたのか。どうテレビに入り込み、なぜ重視されるようになったのか。そして炎上を繰り返しながらも成立しているあの人気番組は何が他と違うのか。

そして最後に、こう問うつもりだ。あなたは、制約に

1 川本裕司、テレビが映し出した平成という時代、2019年、ディスカヴァー・トゥエンティワン

2 日本放送作家協会「テレビ作家たちの50年」、2009年、NHK出版

縛られてこじんまりした投球をする投手で終わりたいか。それとも、ルールを完璧にハック（攻略）し、この制約だらけの業界で番組制作を意味あるライフワークとしていきたいか。

これは、論文や研究ノートではない。私が担当する「企画演習」「番組企画構成演習Ⅱ」「放送作品研究Ⅰ」「放送表現と人権Ⅰ・Ⅱ」のいずれかでいつかやりたいと考えていた授業内容の骨子だ。そのつもりでお付き合いいただければ幸いである。

1. 「コンプライアンス」は国民の怒りから広がった

「コンプライアンス」という言葉が日本で認知され、一種の流行語になったのは、2000年代初頭のこと。背景にあったのは、企業による不祥事の頻発である。

- ・2000年：三菱自動車がリコール隠し問題／雪印乳業集団食中毒事件
- ・2002年：東京電力による原発点検データ改竄問題／雪印食品および日本ハムによる牛肉偽装事件
- ・2004年：三菱自動車が2度目のリコール隠し問題
- ・2005年：カネボウが金融商品取引法違反（粉飾決算）
- ・2006年：ライブドアが証券取引法違反（偽計・風説の流布）・金融商品取引法違反（粉飾決算）／村上ファンドが証券取引法違反（インサイダー取引）／パロマが重大事故隠し問題

当時の報道で、「法令遵守意識の欠如」「コンプライアンス体制の不備」といった言葉が繰り返し使われた。またワイドショーを中心に「コンプラ違反」「コンプラ軽視」といった略語も使われるようになった。

報道の論調に共通していたのは、不祥事そのものより、それを誤魔化そうと嘘をつき、組織ぐるみで隠蔽していたことが世間の怒りを買っているという点であった。

そうした時代の空気が、社会の制度を変えていく。企業経営における統治機能の再構築が社会的要請となったのである。

2004年に公益通報者保護法が成立し、2006年に施行された。これは、一定の要件を満たす通報者を解雇その他の不利益な取扱いから保護するものであり、内部告発が不祥事発覚の契機となった事例を背景として制度化された。

ちなみに「内部告発」は、2002年の新語・流行語大賞のトップテンに選ばれた。企業の不祥事にいかに世間の

関心が集まっていたかを裏付ける一例だ。

さらに、2006年の金融商品取引法改正により、いわゆるJ-SOX制度（内部統制報告制度）が導入され、2009年3月期決算から適用された。わかりやすく言えば、企業の経営者には「当社の決算書にはただの一つも嘘がありません。すべてチェック済みです」とする報告書を作成させ、その報告に間違いがないかを外部の監査法人（公認会計士）に報告させるという仕組み、プロセスが用意された訳である。

内部統制報告書に虚偽記載があったり未提出の場合は、個人（代表者等）には「5年以下の懲役もしくは500万円以下の罰金」、法人には「5億円以下の罰金」が科される刑事罰となる。非常に厳しいが、これは単なる罰則強化ではなく、不正が起きにくい組織作りをせよと強く促すための制度設計であった。

これにより企業は、結果ではなくプロセスが問われるようになった。完璧な内部統制報告書を提出できるようにするための社内体制作り、社内規定の整備、倫理規範の策定、教育研修の実施、相談・通報窓口の設置といった具体的な取り組みとその実行プロセスを含めて、誠実かつ公平な企業活動を行うことが「コンプライアンス」として求められるようになったのである。

そして世の中は変わった。それまでは、阿吽の呼吸や密室での決定で組織が動いていた。その組織を守るための嘘が「忠誠心」と履き違えられていた。しかし、J-SOXなどの導入によって、嘘をつけない仕組みが導入された。そして、「わざとじゃない（ケアレスミス）」「良かれと思ってやった」という言い訳にしても、単なる内部統制の不備としてバツサリ切り捨てられるようになった。

ところで、「コンプライアンス」には「（法令遵守）」という括弧付きの言葉がよく付随するが、コンプライアンスは単なる法令遵守義務にとどまらない。たとえ法令に違反しない行為であっても、社会規範や消費者の期待に反すると評価されれば企業の評判や市場評価に重大な影響を及ぼしかねないからだ。そのため、そうした不測の脅威を常に監視・管理するリスクマネージメント（リスク管理）やコーポレートガバナンス（企業統治）とも密接に関わっている。

わかりやすく整理すると、企業外部（社会）の法律や社会規範を遵守するのがコンプライアンスであり、それを実現・実行するために企業内部で自らを統制・管理し、経営の透明性や健全性を保とうとするのがコーポレートガバナンスである。

こうした文脈で捉えるとき、コンプライアンスは「企業存続の条件」という側面を持っていることがわかる。

2. 「コンプライアンス」がテレビにやってきた

まず、テレビ番組とCM、そしてスポンサー企業の間係を概観しておこう。

視聴者は、番組とCMを切り離された別物としてではなく、ひとつの文脈として受け取る傾向がある。例えば、健康をテーマにした番組に製薬会社や食品会社が提供に入った場合、「皆様の健康を支えている企業です」というメッセージが間接的に刷り込まれる。

また、報道番組のスポンサーが堅実な企業ブランドイメージに転移したり、教養番組のスポンサーが知的・文化的なイメージ、また人気ドラマのスポンサーが流行に敏感といったイメージに転移したりする。これは、番組の雰囲気・番組の感情トーン・番組への没入度等々が、広告の記憶・好感度・ブランド評価等々に影響を与えるものだからである。無論、これは常にそうとは限らず、番組内容とCMがどう見ても無関係だったり、そもそも番組内容が不快だったりすると効果・影響が弱まる。

いずれにせよ、番組とCMは、企業のブランドイメージを構築するための「表裏一体の装置」として機能する。そして、表裏一体の装置である以上、視聴者にとっての番組のイメージはそのまま企業の品格として映し出される。よって、番組内で不適切な表現やトラブルが発生した場合、それは単なる「番組の落ち度」には留まらない。番組を支えているスポンサー企業が「その落ち度を許容している」「その落ち度を生んだ価値観を容認している」等と見なされる恐れがある。そのため、提供する番組が企業の存立基盤に関わる極めて重要な「リスク管理」の対象となるのだ。

なお、ここでいう「落ち度」は、番組制作側が悪意を持ってなしたものとは限らない。むしろ、「かつての成功体験」を忠実に守ろうとした結果、社会のアップデートに取り残されてしまったという悲劇的な側面が否めない。世の中ではコンプライアンスがスポンサー企業にとっての「存続の条件」となっているのに、テレビはむしろそこから逸脱の中に面白さを見出そうとする昔ながらの手法に囚われていた。そして、多少逸脱があっても視聴率を取りさえすればスポンサーは喜んでくれるものと信じていた。

かつて「攻めている」と称賛された表現が、今や「無神経」「時代遅れ」とされる。その変化の激しさに適応できない価値観こそが、番組にとっての最大のリスク因

子なのである。

ここで、スポンサー企業がCMの出稿停止、提供降板、ACジャパンへの広告差し替えといった対応を取るに至った代表的な事例を3つ挙げてみよう。

① 2007年1月7日放送『発掘！あるある大事典Ⅱ』（関西テレビ放送）

納豆を食べるとダイエットに効果があるという内容であったが、その裏付けとなる実験データを疑問視する『週刊朝日』の報道³があり、関西テレビが社内調査を行ったところ、疑問視されたデータは検査に基づかない架空のデータであった。さらに、アメリカの大学教授のコメントに付された日本語訳スーパーの内容が捏造であったのを含め、計6箇所の捏造が判明した⁴。

同番組は、2004年10月31日放送『顔やセの科学』についても『アサヒ芸能』にデタラメぶりが報じられていた。また、2006年には『また「あるある」にダメされた。』（鷲一雄、三オブックス）という書籍が発売されていた。書籍の内容説明文は「うそ、おおげさ、まぎらわしい！国立健康・栄養研究所も警告した人気テレビ番組のインチキを暴く！史上空前の問題番組『発掘！あるある大事典』を斬る。」というものであった⁵。

つまり、前々から問題が指摘されていた番組だったのである。関西テレビは、2007年1月21日に謝罪放送を行ったが、翌22日に同番組の単独スポンサーであった花王に降板を通告され、23日に番組打ち切りを発表することとなった。

この事例の本質は、科学的根拠の捏造である。そして、スポンサーが直面したのは、詐欺の片棒を担がされるというリスクであった。加えて、番組で嘘にまみれた内容が放送され、そのすぐ横でスポンサーが商品を宣伝している以上、その商品の特長となるエビデンス（根拠）までもが「どうせ嘘だらけ」と見做されかねなかった。さらに言えば、視聴者（消費者）から「企業が裏で糸を引いて健康ブームを捏造していたのではないか」という不当な利益誘導を疑われるリスクまであったのである。

この不祥事が契機となって、BPOが組織再編したことも付け加えておかなければならない。2003年に設立されたBPOは、「放送番組委員会」と「放送と青少年に関する委員会」と「放送と人権に関する委員会」の3つで構成されていたが、『発掘！あるある大事典Ⅱ』の

3 週刊朝日 2007年1月26日号「納豆ダイエットは本当に効くの？」
4 「あるある大事典」の納豆ダイエットで捏造 関西テレビ（朝日新聞）
<https://news.a902.net/a1/2007/0120-34.html>
5 紀伊國屋書店 <https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784861990427>

捏造問題が社会的批判を浴びたのを受け、虚偽の放送や放送倫理上の問題を審理・審議する「放送倫理検証委員会」を新たに設置し、「放送番組委員会」を発展的解消とした。これにより、虚偽の放送があった場合には「再発防止計画」の提出を求めることができるようになった。これは、当時国会で審議中であった放送法改正案を強く意識した性格の委員会であった。

なお、2007年は、J-SOX 施行直前であり、企業側がコンプライアンスとコーポレートガバナンスを強化していた時期であった。そして同年、初代iPhoneが登場した。当時はまだガラケーが主流で、SNSの利用も限定的だったため、現在のような爆発的なスピードで拡散される炎上はまだ稀なことであった。

② 2011年8月4日放送『ピーカンテレビ』（東海テレビ）

番組内の「しあわせ通販」のコーナーで秋田県産稲庭うどんを紹介している最中、岩手県産こしひかりのプレゼント当選者の名前として「怪しいお米セシウムさん」「汚染されたお米セシウムさん」が唐突に表示された。これは、外部スタッフが「ふざけた気持ち」で仮作成したダミーテロップがそのまま誤って放送されたものであった。

東日本大震災の被災地には傷跡がまだ生々しく残り、放射能汚染の風評被害も深刻であった中で、同番組は被災地の農家と米を愚弄したのであった。これを受けて、ミキハウスは放送当日にCM提供の中止を即断し、フジバン、愛知県護国神社、川上屋も次々と中止を決定した。

また、同番組のスポンサーではなかったものの、全国農業共同組合中央会がフジテレビ系列情報番組『にじいろジーン』について、東海テレビの放送エリアのみ8月6日のCM提供を中止した。さらに、農業中央金庫が8月7日放送『サザエさん』と8日放送『めざましテレビ』の提供を中止した。これは、『ピーカンテレビ』を放送した東海テレビに対する「抗議の意味を込めた」⁶ものであった。

東海テレビは、こうした猛烈な社会的制裁を受ける中で、8月11日に同番組の打ち切りを発表した。

ところで、問題のダミーテロップが表示されたのは23秒間だった。『発掘！あるある大事典Ⅱ』では長期間、常習的に繰り返されていた捏造の問題が指摘されたが、『ピーカンテレビ』の場合はわずか23秒間の、しかも1

回のミスだ。だがこれに即応して当日のうちに、また数日のうちに、多くの企業が同番組と同局に制裁を下した。

実は、8月4日当日の14時23分に配信されたネット記事には、「ネットでは放送時の映像が出回り、同社への批判が相次いでいる」⁷とある。この一文から明らかのように、放送されたのがたとえわずか23秒間でも、その映像はSNSで瞬く間に拡散されていたのである。

これは、SNSにおけるいわゆる「バイトテロ動画」や「暴力（いじめ）動画」が一瞬で拡散し、関係者の愚行がデジタル空間で永遠に記憶され、責めを受ける構図に通じる。スポンサーからすれば、度を過ぎた信じ難い悪ふざけが自社の預かり知らぬところでなされ、自社の倫理観までが世間から裁かれかねないという極めて理不尽かつ巨大なリスクに晒されたのであった。

③ 2014年『明日、ママがいない』（日本テレビ放送網）

赤ちゃんポストに託された主人公が「ポストちゃん」、コインロッカーに置き去りにされた子供が「ロッカー」と呼ばれる。食事のシーンでは「お前たちはペットショップの犬と同じだ。庇護欲をそそるように泣け。泣いた奴から食っていい」と職員に暴言を浴びせられる。そうした児童養護施設の描かれ方に人権侵害の問題があるとして、赤ちゃんポスト「こうのとりのゆりかご」を設置する慈恵病院や全国児童養護施設協会が日本テレビに抗議し、BPOに審議を申し立てた。

このドラマは、1月29日放送の第3話時点で提供スポンサー全8社がCM放送を見合わせ、放送枠のCMすべてがACジャパンの公共広告に差し替えられるという異例の事態となった。まず1月22日放送の第2話開始時点でエバラ食品、JX日鉱日石エネルギー（現・ENEOS）、キューピーの3社が早々にCMを見合わせた。そして第2話放送後に日清食品と富士重工が加わり、第3話開始時点では残りの花王、小林製薬、三菱地所も加わったのである。

注目すべきは、1月22日にCM放送した5社のうち2社が放送終了後にそれ以降のCMを見合わせたことだ。実は、慈恵病院がBPOの人権委員会に審議を求める申立書を送付したと報道されたのが、まさにこの日であった⁸。

BPOは、この申し立てに対し「審議対象としない」

7 ITmedia NEWS 岩手産米プレゼントで「怪しいお米 セシウムさん」東海テレビ番組中に不謹慎な表示 <https://www.itmedia.co.jp/news/articles/1108/04/news053.html>

8 日本経済新聞「BPOに審議要請 日テレドラマ巡り熊本の病院」https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2204X_S4A120C100000/

6 GIGAZINE「セシウムさん問題でCM打ち切り多数、東海テレビへの抗議は1万件を突破」https://gigazine.net/news/20110809_tokai-tv_p-can_cm_stop

との判断を3月16日（放送と青少年に関する委員会）と5月21日（放送人権委員会）に下すのだが、無論1月22日の時点ではそのような判断など知る由もない。しかしこの報道は、『明日、ママがいない』がBPOを巻き込む社会的な問題となったことを世間に知らしめた。視聴者からのクレームの域を超え、公的な人権侵害の問題として認知されたことになる。そうなると、養護施設児童を傷つけ、施設職員や医師を憤慨させる内容のドラマを資金面で支えているという構図は、重大な経営リスクでしかない。様子見していたと見られる残り3社がCM放送を見合わせたのも、BPO案件となったことが決定的なトリガーであったと思われる。

なお、このドラマは、全9話の平均視聴率が12.8%（関東地区、ビデオリサーチ調べ）であった。また、ドラマ終了後に視聴者から日本テレビに寄せられた意見の78%が肯定的なものであった⁹。こうした数字だけを見れば、成功の部類に入るだろう。だが、視聴者とスポンサーは評価するポイントが違う。視聴者の78%が「物語の結末（感動）」を評価しているが、スポンサーは残り22%の中に含まれた大きな「社会的な波紋（ノイズ）」を評価していたのである。現代の企業、特にインフラや育児関連、生命保険などのスポンサーにとって、「子供の人権」や「多様性の尊重」はブランドの中核にある。それは、人々の生活の根幹や未来を支えるビジネスであるからにはほかならない。

視聴率は、「瞬間的な反応の量」であるが、コンプライアンスは「継続的な関係の質」を問う。この質の欠如は、どれほど高い視聴率も一瞬で無に帰すリスクを孕んでいるのである。

3. 「コンプライアンス」と「コンプラ」

スポンサー企業の側、つまり一般企業の文脈でいう「コンプライアンス」について述べてきたが、テレビ番組の制作現場でいう「コンプラ」とは何か微妙にニュアンスが違うと感じられないだろうか。

一般企業の「コンプライアンス」は、法令遵守、不正防止、ガバナンスといった概念を含んでおり、見据えているのは、法律であり社内規定だ。そして違反した場合の代償は、罰金、行政処分、刑事責任など、法的・制度的制裁が中心である。

これに対して、テレビ番組の制作現場で用いられる「コ

ンプラ」は、放送法や各種法令の遵守はもちろん含みつつも、実務上は、批判の回避、SNSでの炎上回避、スポンサーへの配慮といった側面を強く意識する言葉として使用されている。そして違反の代償にしても、法的制裁というよりは、インターネット上の炎上、スポンサーの撤退、番組打ち切りといった市場的・評判的リスクとして具体化する。

こうしてみると、両者の間にある本質的な相違に気付くであろう。一般企業におけるコンプライアンスは「法令に適合しているか」という規範的判断を中心とするが、テレビ番組の制作現場における「コンプラ」は「社会的反発を招きはしないか」という予防的判断に重心を置いている。喩えて言うなら、「コンプライアンス」は目的地へと安全に辿り着くための「航海術」であり、「コンプラ」は荒波を恐れて港から出ようとしない「言い訳」なのだ。

実際問題として、制作現場では、「BPOの審議対象になり得る」「特定の団体から抗議を受ける可能性がある」「ファンから苦情が来るかもしれない」といった想定のもとで「コンプラ的に難しい」という表現がなされる。この場合の「コンプラ」は、「主観的な判断でなされる場当たりの自主規制」の代名詞として機能しているのである。必ずしも明確な法令違反ではなく、将来的な社会的反応の予測を主観で判断している。

しかし、それも当然ではある。法令遵守の場合の基準は比較的明文化されていて確定しているが、視聴者の感情や社会の反応となると事前には確定できない。だからこそ、特に放送してみないことにはわからないという不確実性があればあるほど、制作側はリスク回避的な意思決定を取りやすい。結果として、「高い娯楽価値を持つ可能性があるが炎上リスクを伴う企画」よりも、「反発の可能性が低い無難な企画」が選ばれやすくなる訳である。

スポンサー企業の側からしても、「番組が面白いことによるリターン」と「番組の炎上によるリスク」とを天秤にかけ、実質的には無難さを強制せざるを得ない構造となっている。SNSの普及によって、視聴者は、番組に抗議したければスポンサーに電凸（電話突撃）するのが効果的だと学習しているため、番組が炎上したときには、この電凸による問い合わせ窓口のパンクや不買運動や株価への影響など計り知れない実害を被る。また、上場企業の場合、株主に対して宣伝費の使い途についての説明責任があり、「なぜあんな番組の提供をするのか」と追求されて回答に窮する種類の番組であっては非常に不味い。

9 デイリースポーツ「明日ママ」終了後の意見78%が肯定 <https://www.daily.co.jp/newsflash/gossip/2014/03/31/0006825278.shtml>

現在のテレビ番組がしばしば「無難」「刺激が弱い」と評される背景には、番組制作サイドとスポンサーサイドにこのようなりスク回避構造が共通して存在しているからなのである。

そして深刻なのは、「主観的な判断でなされる場当たりの自主規制」としての「コンプラ」が自己増殖していく懸念である。

制作現場の担当者は、視聴者の誰かが不快に思う可能性という極めて曖昧模糊としたものの有無を日々主観的に判断している。そして、「BPOにとやかく言われたくない」「スポンサーに謝りたくない」といった思いが強い担当者ならば、本来セーフなはずの表現に対して「念のため削っておこう」と判断したとしても全く不思議はない。特に、スポンサー企業がクレームに過敏で、「SNSでクレームが1件でも来たら困る」といった厳しいスタンスであった場合、「念のため削っておこう」も無理からぬ判断と言える。しかし、この「念のため」の判断を下すたびに表現の幅が1ミリずつ削られていく。

そして、一度「これはNG」と決めた前例を、後の担当者が「OK」に戻すのは極めて困難だ。なぜなら、OKに戻して万が一炎上した場合、その担当者は「なぜ前例があるのに緩めたのか」と、プロセス上の責任を問われてしまう。かくして、規制は積み上がる一方で、緩和されることはほとんどない状況に陥る。これが、懸念される「コンプラ」の自己増殖だ。

無論、こんなものは一刻も早く食い止めた方が良い。しかし、それを妨げているのも「コンプラ」なのである。なにしろ、「コンプラ的にNGです」の一言は、なぜダメなのか、どうすれば表現可能なのかという建設的な議論を封殺してしまう。過去にスポンサーが撤退した『発掘！あるある大事典Ⅱ』や『明日、ママがいない』等の亡霊を引き合いに出されれば、現場は沈黙せざるを得ない。コンプライアンス（法令遵守）は本来、堂々と活動するための「指針」だったはずだが、番組の制作現場では挑戦させない（しない）ための「言い訳」に変質させてしまっている。

「コンプラのせいでテレビがつまらなくなった」「やりたいことができなくなった」といった声が業界人や芸人から数多く聞こえてくるのは、現場の担当者から「コンプラ的にNGです」を連発されてきたことの証左なのである。

本稿では、一般企業の「コンプライアンス」とテレビ番組の制作現場でいう「コンプラ」を明確に区別する。「コンプラ」は、遵守しなくても良いものを多分に含んでいる可能性があると思われてならないからだ。

また、コンプラがテレビをつまらなくする元凶だとする言説は、その他にもあるはずの原因や背景を結果的に覆い隠す。「テレビがつまらなくなった（SNSやネット動画の方が面白い）」は、YouTube等の台頭、企画力低下、人材流出、番組制作予算削減といった比較的わかりやすい原因だけでなく、実験的・挑発的な番組は切り取られた瞬間に炎上しやすいこと、ショート動画慣れした視聴者を繋ぎ止めるのが難しくなっていること等々の背景も含めて様々にあるはずだ。

それなのに、何故「コンプラ」だけがスケープゴートにされやすいのか。おそらくそれは、クリエイターにとって一番言い訳にしやすい「時代のせい」にできる言葉だからである。

4. 「コンプラ」のジェネレーションギャップ

「コンプラのせいでテレビがつまらなくなった」というとき、比較対象として「コンプラがなかった頃の面白かったテレビ番組」の存在が必ず念頭にあるはずだ。

『オレたちひょうきん族』（1981～1989年/フジテレビ）、『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』（1985～1996年/日本テレビ）、『ダウンタウンのごっつええ感じ』（1991～1997年/フジテレビ）、『進め！電波少年』（1992～1998年/日本テレビ）、『ウッチャンナンチャンのウリナリ!!』（1996～2002年/日本テレビ）といったところがそれに該当するだろう。いずれも放送期間が「コンプラ」以前であり、バラエティの黄金時代を牽引した人気番組である。

それらの放送期間を見れば明らかのように、「コンプラのせいでテレビがつまらなくなった」は中高年層限定の嘆きである。Z世代（概ね1997年から2012年頃に生まれた世代を指すことが多い）の若者にとっては、生まれる前に放送がほぼ終了している番組ばかりなのだ。

では、これらの番組をZ世代が見たとき、どんな反応を示すのだろうか。

『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』の場合で予想してみよう。例えば、「失恋バスツアー」（＝失恋直後で傷心している人たちがバスに乗り込み、一緒に移動しながら励まし合い、再起を促し合う企画）は、素人いじりの笑いを不快に感じる可能性はあるものの、「共感」「癒し」「再出発」といったほっこりする泣き笑いのリアリティには感じ入るところが少なからずあるだろう。また、「幸福の黄色いハンカチ」（＝お店の再建に手を貸したり、寂れた村を活気づけたりする応援企画）は、現在日本テレビで放送されている『ザ！鉄腕！DASH!!』の原型と

言えるものであり、これも受け入れやすいはずだ。むしろ、『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』の方が、ターゲットを応援する気持ちの「熱さ」「純粋さ」が勝っているように感じられるかも知れない。

このように、Z世代が見ても「面白い」「良い」と感じるであろう企画は一定数あると考えられる。しかしその一方、「早朝バズーカ」(＝就寝中のターゲットの枕元で本物の火薬を爆発させて叩き起こす)や「ヘビメタ軍団」シリーズ(＝定食屋での客の食事中やターゲットの就寝中に突如ヘビメタバンドが押しかけて大音量の演奏を始める)といった企画については、「迷惑系 YouTuber みたい」という印象を持つのではないかな。周囲の迷惑や不快感など一切考慮せず、他人にちょっかいを出し、店内でトラブルを起こすなどして注目を集め、再生回数を稼ごうとする構図に通じるものがあるからだ。そのため、迷惑系 YouTuber に対する不快感や嫌悪感に近い反応を示すと思われる。

無論、迷惑系 YouTuber の動画を面白いと感じ、自ら「バイトテロ」「回転寿司テロ」の迷惑動画を投稿する Z 世代もいるのではないかという指摘もあろう。しかし、「早朝バズーカ」は爆発物取締罰則と傷害罪に問われかねず、「ヘビメタ軍団」のシリーズ企画は威力業務妨害に問われかねない。そしていずれも公序良俗に反する。「コンプラ的に NG」という自主規制のレベルを超えて完全にアウトなのだ。そして、「これをテレビでやっちゃダメでしょ？」とする感覚が放送当時の我々にはなかったことを強調しておかなければならない。なにしろ皆が笑って見ていたのである。その点で全く違う。

そして、特に『電波少年』シリーズを代表する企画、猿岩石の「ユーラシア大陸横断ヒッチハイク」となすびの「電波少年的懸賞生活」についても、当時の視聴者と現代の Z 世代で受け止め方の違いが顕著に表れるであろう。

「面白い」という反応を見せはするだろうが、同時に「これ笑っているの?」「テレビでここまでやる?」という戸惑いも見せるに違いないのだ。

前者は、当時無名の若手芸人であった猿岩石が、ほぼ無一文の状態で行った香港からロンドンまでヒッチハイクでユーラシア大陸を横断するというロケ企画であった。後者は、やはり当時無名の若手芸人であったなすびが全裸で密室に置かれ、雑誌の懸賞に当選して獲得した賞品だけで生活するという企画であった。

いずれも、番組プロデューサーの土屋敏男が仕込みも脚本もない「ガチの笑い」を狙ったもので、「ドキュメントバラエティ」とされた。

「無一文で旅する」「懸賞だけで生きる」という無謀な挑戦を指示され、極限状態に追い込まれていく若者の、この先何が起きるか本当にわからない不確実性やスリルを、笑いと感動の物語りにして放送していたのである。

それはつまり、猿岩石やなすびが困窮していく状況や身体的・精神的に危機的状態にあることさえ娯楽化してしまったということだ。

なすびの場合は、食事や衣類をはじめ、身の回りの生活用品すべてを懸賞で入手しなければならず、外界との連絡は断たれたままの状態が約 15 ヶ月、番組として毎週放送されていた。

これを Z 世代の若者が視聴したらどう反応するのだろうか。番組演出上はあくまでもバラエティ番組としての味付けがなされているし、「当選の舞」(＝懸賞に当選した嬉しさが自然に歌や踊りになっていた)などはその滑稽さに声をあげて笑うかも知れない。しかし、懸賞生活そのものに対する「ひどい」「かわいそう」の意識が強ければ「なにこれ笑えない」となるだろうし、「どうかしてる」と狂気を感じ取る可能性すらある。

しかし、放送当時は、私自身を含め全国の視聴者が「面白い」と思って見ていたのだ。それは一体どういうことなのだろう。おそらく Z 世代の若者が真っ先に感じるであろう疑問 — 「安全管理・健康管理はどうなっているのか?」「なすびは望んでこんな企画に参加しているのか?強制されているのではないか?」「長期間狭い一室に拘束されてメンタルは大丈夫なのか?」「途中で抜け出すことはできないのか?」等々 — にどうして思いが至らなかったのだろうか。

我々は、少なくとも私は、なすび本人が望んで出演しているものと思ひ込み、きっと安全に管理されているものと信じ込み、なすびが芸人として大成するために頑張っているのだろうと勝手に意味づけしていたのだ。

なすびは、米を食べ尽くしてしまった時にドッグフードが懸賞に当たり、1日3食ドッグフードで過ごした。しかし、一番つらかったのは空腹感よりも孤独感だったという。

ならば何故、彼は「懸賞生活」から逃げ出さなかったのか。その理由を知って私は愕然とした。

「土屋さんからは後々になって『お前よく逃げ出さなかったな。逃げたら逃げたで面白かったのにな。アハハハ』と言われました(笑)

僕の場合、逃げる・逃げないの選択肢で、まず一番に頭をよぎったのは『全裸』ってということなんですよ。

裸のまま外に出たら、公然わいせつになってしまうかもしれない。『監禁されています』と訴えるにしても、外に出た瞬間に通報されたり、逮捕されたりする可能性があった。

これは僕の個人的な問題でしかないんですけども、実は父親がもともと警察官だったんです。当時はまだ現役で、それなりの役職に就いていたので。

子どものころから、ずっと母親に言われていたのが『何か悪いことしたら、ウチはもう食べていけなくなる。警察のお世話になるようなことは絶対しちゃ駄目だからね』ということ。

僕がもし警察のご厄介になってしまったら、家族にも相当な迷惑がかかる。父親も仕事を辞めなきゃなくなるんじゃないか、という考えが頭をよぎりました。¹⁰

これが、番組ではけっして描かれることも語られることもなかった正真正銘のリアルだった。この種の、テレビ画面の枠の外、あるいはテレビの裏側にまで思いを至らせることができるかできないかの差は大きい。圧倒的大多数が思いを致すことができずに笑い、ごく一部の思いを至す者は笑えなかったはずなのだ。

ここで明確にしておくべきは、一口に「コンプラ」と言っても、アウトとセーフの判断基準は時代によって、そして世代によって、そして人によって大きなズレがあるということなのである。そして、「コンプラのせいでテレビがつまらなくなった」という業界人の嘆きは、そうしたズレの存在を前提にはしていない。

私は、「テレビっ子世代【作り手の熱狂】」と「Z世代【受け手の客観性】」が番組制作の現場でハイブリッド化していく未来を夢想している。

かつてのテレビは、作り手の圧倒的な「主観」（番組に込める「思いの強さ」）が世界を牽引した。対して、SNSと共に育ったZ世代は、常に「俯瞰」の視点から世界を眺めている。どちらか一方だけでは、今の時代に風穴を開けることはできない。テレビっ子世代が持つ「これをやりたい」という内側からの突き上げるような熱さと、Z世代が持つ「世間にはこう映る」という外側からの繊細な感性。この「主観と俯瞰の幸福な一致」が起きたとき、テレビは再び、全世代を巻き込む巨大な物語を紡ぎ始めるのではないか。

5. バラエティの黄金時代と「狂気」の継承

「バラエティの黄金時代は、所謂「テレビっ子」世代が作り上げたものだった。1960年代、テレビ放送の普及期に幼少期を過ごし、テレビを娯楽の太陽として成長した世代である。

そのテレビ愛が一種の「狂気」として結晶化したのが『進め！電波少年』だった。倫理的にはグレーで批判されることも多かったが、そこには「テレビで何をどこまでできるか」を追求する異常なまでの本気度があった。「見たいものを見る、したい事をする、会いたい人に会う」というスローガンのもと、「村山富市の長い眉毛を切ってあげたい！」「アラファト議長とデュエットしたい！」といった、非常識を通り越して無謀な「アポなしロケ」を彼らは命懸けで敢行した。

村山富市は、当時社会党委員長でその後首相となった政治家だ。また、アラファト議長は、パレスチナのゲリラ指導者である。「アポなし」で押しかけて良い相手では絶対ない。

この無謀と熱量は、先に述べた猿岩石のヒッチハイクやなすびの懸賞生活といった、人間の極限状態を晒す「ドキュメントバラエティ」へと繋がっていく。

これに対し、現在のテレビはお行儀良く、倫理的に安全なものになった。だが、それと引き換えに熱量が大幅に失われ、番組に込められる「思いの強さ」も希薄になった。実は、その落差にテレビっ子世代が漏らす溜息こそが、「コンプラのせいでテレビがつまらなくなった」という言葉の正体なのである。

だが、この閉塞感の中で、かつて『電波少年』シリーズが持っていた一種の「狂気」と、現代的な知性とを融合させている孤高の番組がある。TBS『水曜日のダウンタウン』だ。

TVerのお気に入り登録者数は、691.1万人（2026年2月28日現在）で断トツの1位を誇り、昨年末には見逃し配信の累計再生数3億回を突破した。TVerで配信されたバラエティ番組のうち、もっとも再生数が多かった番組に贈られる「TVerアワード」の「バラエティ大賞」を2021年、2022年、2023年、2024年と4年連続で授賞している¹¹。おそらく、間もなく発表されるであろう2025年アワードでもその記録を更新するはずだ。もはや国民的人気番組と言っても過言ではない。

10 BuzzFeed「ドッグフードで食いつなぎ、死さえも覚悟した。それでも僕があ部の部屋から逃げ出さなかった理」<https://www.buzzfeed.com/jp/ryosukekamba/nasubi2>

11 2025年12月2日配信 オリコンニュース『水ダウ』TVer 史上初の快挙 見逃し配信の累計再生数3億回突破 <https://www.oricon.co.jp/news/2422168/full/>

同番組が画期的なのは、「コンプラ」を無視するのではなく、その仕組みを完全に理解して「ハック（攻略）」している点にある。例えば、ターゲットとする芸人を拉致同然に連れ去り監禁する。その手法は『電波少年』を彷彿とさせるが、決定的な違いは、すべての過激さが「〇〇説」という仮説の「検証実験」として定義されていることだ。

通常のパラエティ番組は、出演者に何か面白いことをさせたり面白い掛け合いをさせたりして視聴者を笑わせようと企画（企画・構成）するものだ。が、この番組は「検証実験の観測」という体裁を貫く。「キグルミの中から『お前やっちゃうぞ』などの脅迫めいた言葉が聞こえてきたら超おっかない説」、「高いどん屋のレンゲ、視力検査のアレに変えても気付かない説」、「お洒落小物を初めて身に着けた時、『それ買ったの』と聞かれたら『前から持ってた』と言っちゃう説」といったユニークな仮説を立て、その検証実験を冷徹に観測する。視聴者は「笑い」を求めているのではなく、「実際のところはどうなのか」という検証結果への好奇心で番組に引き込まれていくのだ。

この「検証」というエクスキューズこそが、BPO やスポンサーが求める「社会的信頼」という高いハードルを知的な納得感と共にクリアするための画期的なコーティングとなっている。視聴者は、検証の結末を共有する「共犯者」となり、番組の過激さを許容する立ち位置へと回る。

さらに、同番組はテレビ制作の裏側すらもさらけ出す「メタ的な装置」となっている。「ドッキリの仕掛け人、どんなにバレそうになってもそう易々とは白状できない説」のように、テレビの「お約束」を逆手に取り、ターゲットの失敗、恥、困惑といったものをそのまま映し出す。

そして、どんな場面でも、同情を誘ったり感動的に描いたりすることはなく、むしろ冷静で少々悪意の感じられるナレーションで出来事を淡々と処理していく。この語りによって、視聴者は「かわいそう」と感情移入するよりも、「これは番組として組み立てられた特殊な状況なのだ」と一歩引いて見る。すると、ターゲットを冷笑している自分とそれを自覚した自分が同時に存在する状態になる。こうした二重の感覚も、同番組のメタ的な特徴である。

現実の出来事をそのまま見せているようでいて、実際には編集やナレーションによって整理され、ひとつの「作られた状況」として提示されていく。その枠組みを視聴者が暗黙のうちに共有するからこそ、少し残酷に見える場面も「バラエティとして成立している」と受け止めら

れるのである。

ただし、この了解は常に安定しているわけではない。距離の取り方がうまく機能しないと、単なる底意地の悪さとなってしまいかねない。だからこそ、『水曜日のダウンタウン』の笑いは、絶妙なバランスの上に成り立っているのである。

かつて、『電波少年』シリーズにおけるなすびの「懸賞生活」は、多くの視聴者にとって、単純に面白い企画として受け止められた。番組が演出として用意した状況の過酷さ・過激さが、そのまま笑いや感動の源となった時代であった。

しかし現在の視聴者は、テレビの演出に対してより自覚的になっている。

「ここで笑わせようとしている」「ここで感動させようとしている」といった制作側の意図を、リアルタイムで読み取るようになった。さらに、「なぜこの状況が続いているのか」「番組はどこまで計算しているのか」と、画面の外側や制作の裏側にまで思いを巡らせる視点も一般化している。

そうした環境の中で、『水曜日のダウンタウン』は、制作側の意図そのものを隠そうとしない。むしろ、「仕掛けている側」の存在や狙いをあえて露出させ、その構造ごと笑いに変えてしまおうとしている。

視聴者が意図を読み取ってしまうのであれば、それを隠すのではなく、前提として共有する。そのうえで成立する笑いを設計している点に、この番組の特徴がある。

そして、特筆すべきは、水曜日のダウンタウン が炎上を繰り返しながらも、現在のバラエティ番組の中で高い話題性と影響力を維持し続けている事実である。

2018年10月3日放送の「中継先に現れたヤバめ素人のさばき方で芸人の力量丸わかり説」では、一般人を装った出演者の振る舞いが問題視され、BPOの放送倫理検証委員会が同録DVDと経緯報告書の提出を求め、委員会内で討議が行われた（ただし審議入りには至っていない）。

通常であれば、こうした事態は番組の信頼低下につながりかねない。しかし、同番組の場合、批判や炎上が外部からの偶発的トラブルとしてではなく、番組の性格と連動した現象として受け止められる傾向がある。

その理由の一つは、番組がもともと「仮説の検証」という形式を取り、仕掛けや演出の存在を隠さない構造を持っている点にある。視聴者は、あらかじめ「設計された状況」であることを理解した上で視聴しているため、問題が生じて「番組の枠組みの内部で起きた出来事」

として処理されやすい。

また、SNS上では「これも水ダウらしさの一部だ」といった擁護的な意見が見られることもある。これは、炎上が制作側の統制不能な暴走ではなく、「ギリギリを攻める番組」というブランドの延長線上にある出来事だと認識されているためと考えられる。

つまり、炎上が番組の外部で顕在化した失敗ではなく、番組の設計思想と連続していると理解されていることが、支持の持続に寄与しているのである。

この『水曜日のダウンタウン』が我々に示しているのは、「コンプラ」という制約がけっして「表現の終わり」や「番組の限界」につながるものではないということだ。むしろ、その厳しいルールという名のキャンパスの上で、いかに緻密でいかに狂った絵を描けるか。その知的な格闘にこそ、現代のパラエティの本当の面白さが宿ると示しているのである。

おわりに

コンプライアンスは「炎上回避の技術」なのか。それとも「信頼を築く倫理」なのか。前者に偏ればテレビはこれからも萎縮し続け、いつか消えていくしかない。しかし、もし後者として機能させることができれば、テレビは社会の成熟を支える質の高いメディアへと転換していける。

私は楽天的に見ている。テレビの未来はきっと明るい。Z世代という援軍がこれから大挙して番組の制作現場にやってくるからだ。

「自己表現と多様性の尊重を価値観の中心に据えているのがZ世代です。生まれたときからデジタル環境が当たり前であり、オンライン上でのつながりや情報発信を自然に行っているため、自分らしさの表現や他者との違いを前向きに捉え、型にはまらない柔軟な価値観を持っています。」

「Z世代は共感を大切にする姿勢や自然体のつながりを重視する層です。多様性や個性を尊重しながら、相手の考え方を理解しようとする対話を好みます。自己表現と共感によって関係性を深めていくスタイルはX世代やY世代とは異なり、Z世代ならではの特徴といえるでしょう。」¹²

Z世代は、コンプラをハックして「信頼を築く論理」としていける資質を備えた、実に頼もしい援軍だと私は見ている。

これからのテレビは、きっと「テレビっ子世代【作り手の熱狂】」と「Z世代【受け手の客観性】」のハイブリッド化が進んでいく。私がイメージしているのは、単なる妥協案ではなく、「熱狂」を「社会的な信頼」という器に盛り付けるための、極めて高度なアップデートである。

それは、過去への回帰でも、現在への屈服でもない。互いの世代が持っていないピースを補い合うことで、テレビというメディアをより強固でよりしなやかな表現の場へと成熟させていくプロセスなのだ。

定年退職する前に、学科誌『放送と表現』に載せる原稿を何か書けと言われた。昨年末のことだ。聞けば、同期の森中慎也教授も何か書くのだという。きっと来年は、同期の星野裕教授も何か書くのだろう。

私と森中は二浪。星野は一浪。それで三人がたまたま同じ年に放送学科に入学し、意気投合し切磋琢磨して、長いこと家族ぐるみで友達付き合いをしている。二浪して足踏みした痛手は大きかったが、紆余曲折あったおかげで志望校をここしかないと定められたし、結果として二人のかけがえのない友人を得た。だから、両親には申し訳なかったのだけれども、大学入試に二回失敗して本当に良かったと今しみじみ思っている。

同様に、結果オーライということが世の中には沢山ある。だから例えば、「コンプラ」に過敏になってテレビが萎縮し続けた時代、そしてテレビはオワコンと言われ続けた時代があったからこそ、今のテレビのこの輝きがあるのだと言える時がいつかやって来たりもする。

鍵を握っているのは、あなたたちZ世代だ。どうか、「コンプラ」をもの見事にハックしてみせて欲しい。

最後に聞こう。あなたは、制約に縛られてこじんまりした投球をする投手で終わりたいか。それとも、ルールを完璧にハックし、この制約だらけの業界で番組制作を意味あるライフワークとしていきたいか。

12 SERVICE FOR BUSINESS 「X世代・Y世代・Z世代の違いは？価値観や消費行動などからマーケティング戦略を考えよう」<https://biz.loyalty.co.jp/column/103/>

○ノート

誰かの声を聞く、 誰かのことを思ってみる

石毛 みさこ

現代では SNS が生活の中に広く浸透したこともあり、誰もが声を上げることが容易になった。可視化されたそれらの声が、この世には溢れている。一方で、私たちは人の声に耳を傾け、人を思うことができているのか。疑問に思うことも多い。そんな中放送されている 2025 年度後期の連続テレビ小説『ばけばけ』の主人公・松野トキ（高石あかり）は、著述家ラフカディオ・ハーン＝小泉八雲の妻・小泉セツをモデルとしている。ラフカディオ・ハーンは明治時代に来日し、セツと出会い結婚、日本に帰化し小泉八雲と名乗った。『ばけばけ』ではハーンをモデルとしたレフカダ・ヘブン（トミー・バストウ）として描かれる。

八雲の代表作とされる『怪談』は昔話や民話、伝承・伝説を語り直す「再話」という手法が用いられた「再話文学」である。小泉八雲研究の第一人者である池田雅之は、当時の再話文学は昔話をやさしく書き直すことを指したが、八雲の再話は全く違ったとし、「彼は原典ではなく語り手の声から、つまり「耳」から物語を受け取り、自らの人生や感性を重ねて独自の世界を作り出した」と評している。この時、語り手を担っていたのがセツである。セツは怪談を収集し八雲に語って聞かせていた。2人は公私ともに欠かせないパートナーとして、2人で物語を生み出していた。

「怪談」は『ばけばけ』においても重要なモチーフとなっている。「怪談」の一般的なイメージといえば、「怖くて不気味なもの」ではないだろうか。朝に放送される朝ドラのイメージとはかけ離れているようにも思える。しかし、『ばけばけ』における「怪談」はただの怖い話、不気味な話とはなっていない。届かなかった誰かの声を聞く行為として位置付けられている。

トキが初めてヘブンに怪談を語るのは第 12 週「カイダン、ネガイマス。」である。この週はヘブンが寺で『水飴を買う女』の怪談を聞き、初めて日本の怪談に触れる。『水飴を買う女』は、毎晩、店に水飴を買いにくる女の顔色が悪くなっていくので、気になって後をつけてみたところ、女はある墓のところで姿を消した。墓の下から赤ん坊の泣き声が聞こえたので慌てて掘り起こして見ると、そこには水飴を買いに来た女の亡骸と生まれたばかりの赤ん坊の姿があった、という話だ。このときヘブンはこの怪談を、涙を流しながら聞いている。

この出来事を機にヘブンが怪談に興味を持ったことから、トキはヘブンに怪談を語り始める。最初にトキが語ったのは『鳥取の布団』という怪談だ。鳥取のとある旅館の布団から「兄さん寒かろう、おまえも寒かろう」という声が聞こえる。実はその布団は困窮していた幼い兄弟から大家が取り上げたもので、兄弟は凍え死んでしまった、という話だ。トキが日本語で語ったその怪談を、ヘブンはわかるのは半分ほどとしながら、次のように語る。

ヘブン「悲しい、とても、悲しい。でも、兄、弟、ずっ

と一緒。良かった」
トキ「そうですね」
(第12週「カイダン、ネガイマス。」第58回より)

また、トキは翌日『子捨ての話』を語る。経済的に余裕がなかったため、子供が生まれる度に川へ捨てていた夫婦が、少し余裕ができ、初めて子供を育てたところ、父親に背負われたまだ喋るはずのない子が、自分を最後に捨てた時も、今日のように月の綺麗な晩だったと語りかけてくる、という話だ。ここでもヘブンは半分もわからないとしながら次のように語る。

ヘブン「でも、わかる、気持ち、ある。父、私、捨てた。母、のこと、捨てた。許す、ない」
トキ「……すみません。そげなこととは知らず。すみません、他の話に」
ヘブン「ノーノーノー、子捨て、怪談スバラシイ。ありがたい」
トキ「いえ……でも、子捨ての話、私、こうも思いません。何遍捨てられても、この子、同じ親の元生まれました。この子の、親、思う気持ち、強い。それを知った、この親、この子、大切に育てる、思います」
(第12週「カイダン、ネガイマス。」第59回)

『水飴を買う女』『鳥取の布団』『子捨ての話』、どれもただ聞いただけでは「怖い話」に聞こえる。それは、死んでいったものたちの「怨念」のようなものが感じられるからではないだろうか。しかし、トキもヘブンも、幽霊や死者の側に立つことで、それらを恨みのこもった「怨念」ではなく、「どうしても手放せなかった強い気持ち」として受け取る。そして、そこに思いを馳せ、心を寄せているのだ。

また、ヘブンは日本語を全て理解できるわけではないが、それでも「ただ、あなたの話、あなたの考え、あなたの言葉でなければいけません。しじみさん(注・トキのこと)の話、考える言葉、聞きたい」と、トキに日本語で、トキ自身の言葉で語ることを求める。これは、実際に八雲がセツへ求めたことでもある。ヘブンはトキの「声」から怪談を理解していくのだが、それは同時にトキの気持ちに心を寄せる行為でもある。そして、トキもまた「子捨ての話」を語った後、話の中の子どもだけでなく、父親に捨てられた過去を持つヘブンの気持ちにも心を寄せているのだ。

ヘブンを演じるトミー・バストウは、『ばけばけ』の放送に合わせて制作された番組『小泉八雲のおもかげ』の中で八雲の足跡を追ってアイルランドやニューオーリンズを訪れ、八雲のことを「アウトサイダー」と評している。八雲は幼い頃に両親に捨てられ、世界各地を転々と流浪しながら記者、著述家として生きた人だった。また、一神教であるキリスト教へ反発し、多神教であるケルト文化、ブドゥー教や神道へ共感していく。その後

ニューオーリンズで開かれた万博で日本文化に出会い、『古事記』に憧れ、日本の中でも中心都市ではなかった松江へ英語教師としてやってくる。その生き方はメインストリームではなく、まさにアウトサイダー、周縁の人だったといえる。また八雲は16歳の頃に事故によって左目を失明している。このことにより、障害がある人や、黒人など社会の周縁に追いやられた社会的弱者にも共感していく。

セツもまた士族の家に生まれながら、明治維新により世の中の価値観が大きく転換、士族の身分も意味を持たなくなり、生家と養子に出された家が共に没落し、困窮した生活を送る。最初の夫にも逃げられるなど、波乱万丈の人生を送っており、近代化の中で周縁へと追いやられた人と言える。その結果、当時、色眼鏡で見られた外国人の女中となり、八雲と出会うことになる。

二人はやがて、国際結婚、八雲に至っては帰化という当時珍しかった、それこそザ・アウトサイダーな道を選択する。また「怪談」自体も、近代化する当時の価値観の中では周縁のものだった。時代遅れとされ幽霊の存在が信じられなくなっていく中で、八雲とセツは共に怪談へと目を向け続けたのである。

トキとヘブンも同じく周縁の人として描かれている。生活が困窮しているトキは、松江の中心から離れた橋の南側にある遊郭街の中という、文字通り周縁の人々が集まる中で生活している。ヘブンもまた「西洋人」として期待され、盛大な歓迎を受ける一方で、「異人」であるため日本人を中心とした社会の中では周縁に位置付けられる。また、「怪談」で描かれる幽霊や死者は、それこそ人間の世界の外、周縁も周縁に置かれたものたちでもある。

周縁の人々の「声」は、往往にして無視されたり、なかったことにされがちである。そう考えると、トキがヘブンに怪談を語るのには、社会に声を聞いてもらえなかった二人が、物語の中にある声なき人々の声に耳を澄まし、心を寄せる行為とも言える。

この声なき声に耳を澄ますというのは、『ばけばけ』の描き方そのものにも共通する部分である。

『ばけばけ』のセリフは極めてシンプルだ。登場人物の心情や背景をあまり言葉にしない。そのため、言葉だけを追っていても肝心なことはわかりづらい。その代わりに、表情や音、情景や、そこに至るまでの日常的で他愛のない会話の積み重ねといった「気配」で描かれている。

トキの家族である松野家は明治維新後も武士であることにこだわり、父・司之介(岡部たかし)も祖父・勘右衛門(小日向文世)も鬘を結ったまま。商いは武士のすることではないとして働かず、母・フミ(池脇千鶴)の内職と貯金で何とか持ちこたえている。そんな中、父について、トキ(子役・福地美晴)は学校で「怠けている」と言われてしまう。そのことをトキが家で話すと、司之

介は勘右衛門から刀を渡され家を飛び出していく。司之介を追いかけるトキとフミは、橋の上からかつて武士として勤めていた城を見つめる司之介を見つける。

お城を見つめ立ち尽くす父・司之介。

司之介の元へ駆け寄ろうとするトキ。

フミ「待って！……父上はね立ち尽くしてるの」

トキ「そげなこと見ればわかるよ」

フミ「そげじゃないの。あなたが生まれたすぐ後に、時代が変わって、明治の世になって、戸惑って、それからずっと立ち尽くしちよるの」

立ち尽くす司之介の背中。

トキ「怠けちよるわけじゃないんだよね。怠けて働かないわけじゃないんだよね」

フミ「違うよ。全然、違う」

トキ「父上はダメじゃないよね、何も悪くないんだよね」

フミ「うん」

トキ「父上は悪くない、父上はダメじゃない、怠けちよるわけじゃない」

フミ「うん、悪くないよ、ひとつも」

トキを優しく抱きしめ、司之介を見つめるフミ。

城を見つめる司之介。

(第1週「ブシムスメ、ウラメシ。」第1回より)

フミが言う「立ち尽くしている」は、それこそトキが言うように司之介の姿を表しただけだ。『ばけばけ』ではその意味を詳しく説明はしない。「立ち尽くしている」の意味をどう捉えるかは視聴者に委ねられている。立ち尽くしながらかつて自らが勤めていた城を見つめる司之介の背中や視線、こみ上げる思いをこらえながら父の生き方を確認するトキ、トキを抱き寄せるときに一瞬グッとトキの腕を握るフミの手や司之介を見つめる姿、そしてそれまで松野家で繰り返された日常の他愛無い会話や、そのときのちょっとした表情、音……そうやって積み重ねられた「気配」を読み解いて「立ち尽くしている」の意味を視聴者は自分なりに解釈していくのだ。

第3週の第15話では、トキは自らの出自についての秘密を知る場面が描かれる。

トキ「もう知っちゃるけん。(中略)誰に聞いたわけではございません。ですが、自然と、そうなのではないかと」

(第3週「ヨーコソ、マツノケへ。」第15回より)

ここまで、なんとなくトキが何かを気にしている素振りはあるものの、明確に秘密に気づく場面は描かれていない。そのため、トキが本当にすべてわかっていたのか、実際のところはわからない。もしかすると、この時初めて知ったものの、とっさに以前から知っていたことになったのかもしれない。私自身は、何となく何か秘密がある、

それこそ「気配」は感じ取っていて、その「気配」に初めて名前がついた、「気配」の意味をこのときようやく知ったのではないかと解釈した。

言葉によって明確にされていないため、人によって受け取り方は違う。色んな見方、解釈ができる。そして、どれが正解というものでもない。こうしてそれぞれにとっての『ばけばけ』が生まれていくのだ。これはトキとヘブンが怪談を受け取っていった「声なき人々の声に耳をすます」営みとも通ずる。

また、この「気配」を描くと言うのは見えざるものたちを描く怪談らしくもあり、同時に人間らしくもある。良い人、悪い人とはっきりわかれているわけではなく、一人の人間の中に良い面もあれば悪い面など様々な面を持ち合わせている。また、生きていけば良いこともある。また、悪いことだらけのようでも良いことを見つけ出すこともできる。すべてがない交ぜになっているのが、私たちの暮らす世の中ではないだろうか。

先述した池田によると、八雲の文体は「simple and deep (簡素にして深い)」と評されるという。言葉は非常にシンプルながら、言葉そのものだけでは表せない「気配」を描き、人間の、そして世の中の複雑さを浮かび上がらせている『ばけばけ』もまた「simple and deep」なのではないだろうか。

『ばけばけ』の特徴としてもう一つあげられるのが現代語調な会話である。明治時代を舞台としているものの、極めて現代的な感覚の会話が繰り返されている。例えば主人公・トキと幼馴染・サワ(円井わん)のある日の会話を見てみよう。

トキもサワも士族の家の生まれだったが、どちらの家も明治維新の波に乗れず没落し苦しい生活を強いられている。そこから抜け出すため、トキは働き手となる婿を探しており、サワは女性でもそれなりの給金がもらえる教員を目指している。2人が住む島根・松江にかかる松江大橋には「源助柱」と呼ばれる橋を架ける際に人柱(=生贄)となった男の名を取った名の柱がある。怪談好きなトキは、その源助柱に毎日手を合わせるのだが、サワはそんなトキを見ながら、自分たちもある種の人柱だと語る。それを聞いた後のトキとサワの会話は以下の通りだ。

トキ「(黙ってサワを見ていて)」

サワ「……何？」

トキ「いやあ、おサワは頭ええなあと思って」

サワ「どこがよ。ただ時々、何のために生きちよるんだらうって悲しくなるだけだが。それに、頭良かったら、とっくに先生になっちゃる」

トキ「ああ、まあ、そっか、そげだよー」

サワ「そっか、そげだよーって。働きながら勉強するのって大変なんだけんね」

トキ「ああ、そっか、そげだよー」
サワ「だから！なら、見合い決まったの？ そっちは」
トキ「いや、まだ全然。うちが貧しいせいで中々まと
まらんみたい」
サワ「ああ、そっか、そげだよー」
トキ「ああ！仕返しー！」
トキとサワ、じゃれあいながら笑う。
(第2週「ムコ、モラウ、ムズカシ。」第7回)

装いこそ明治の娘であるが、やり取りはまるで現代の女子高生の会話のようである。もちろん、どの朝ドラも舞台となっている時代の言葉遣いを忠実に採用しているわけではない。しかし、明治時代を舞台としながらここまで現代的な表現を取るのには、少々異質ともいえる。そこでキーになるのが先ほど八雲とセツが行っていたと述べた「再話」である。

この「再話」、精選版日本語大辞典によれば「伝承的な昔話や伝説を、歴史的な資料として忠実に記録するのではなく、現代的な感覚や用語で文学的に表現したもの、また、その作業」とされている。つまり、八雲とセツの物語を現代的な感覚・言葉で描く『ばけばけ』は「再話」をしていた八雲とセツの物語を「再話」しているともいえる。

この手法は、何気ない日常を描くことに定評のある脚本のふじきみつ彦の作風と絶妙にマッチし、舞台は明治であるものの、明治の人という遠い昔の存在としてではなく、生活者の物語として親しみを持ったものになっている。生活者の声もまた、正史とされる歴史の中では埋もれがちな存在である。『ばけばけ』は、そうした存在したかもしれない明治の生活者の声を拾い上げるように、いつの時代であっても、どこに生きる人であっても、人の営みの本質は変わらないことを浮かび上がらせている。

私たちは本来、人の声に耳を傾け、その気持ちに寄り添うことができる。そうやってここまで歴史を紡いで来たのではないだろうか。だからこそ生まれたのが「怪談」であり、その心を失わなかったからこそ「怪談」は現代にも息づいているのではないか。

日に日に世界が悪くなる
気のせいかな
そうじゃない

2025年9月29日。『ばけばけ』第1話、「ハンバートハンバート」が歌う主題歌『笑ったり転んだり』はこんな歌詞から始まった。それから約半年、この歌詞への実感は、それこそ日に日に増している。

だけれども、そうじゃない。トキは『子捨ての話』は子が親を思う強い気持ちの話だと語った後、次のようにも語っている。

トキ「相手の、気持ち、知ること、なんていうか、んー……ええことに、んー……ええことに、なったら、ええなあ、思います」
(第12週「カイダン、ネガイマス。」第59回)

これは『ばけばけ』の根底にある「願い」だと、私は思う。私たちは『ばけばけ』を通して、「怪談」の世界のものたちに、人として失ってはならないことを突きつけられている気がする。

【参考・引用作品】

『ばけばけ』

2025年9月29日～現在放送中

作：ふじきみつ彦

制作統括：橋爪國臣

演出：村橋直樹、泉並敬真 他

出演：高石あかり、トミー・バストウ 他

『小泉八雲の面影 ばけばけトミー・バストウが巡るアイルランドとニューオーリンズ』(BS版)

2025年11月22日放送

出演：トミー・バストウ、高石あかり 他

語り：一柳亜矢子

制作統括：橋爪國臣

『笑ったり転んだり』

ハンバートハンバート

作詞・作曲・編曲：佐藤良成

【参考・引用文献】

『NHK ドラマガイド 連続テレビ小説 ばけばけ Part1』
(2025) NHK 出版

『NHK ドラマガイド 連続テレビ小説 ばけばけ Part2』
(2026) NHK 出版

『小泉八雲、開かれた精神（オープンマインド）の航跡。』
(2016) 小泉八雲記念館

『小泉セツ ラフカディオ・ハーンの花嫁として生きて』
(2024) 小泉八雲記念館

『精選版 日本国語大辞典 第二巻』(2006) 小学館

令和7年度 卒業研究 題目一覧

◎令和8年3月卒業

卒業論文

清水 環希	拡大する Vtuber ビジネスについての一考察
菊池 伶我	キャラクターへの愛着はいかにして人の不安を支えるのか —現代日本のなりきり文化における人間の心理的成長と弊害の実証研究—
岡本 莉咲	バカリとの境界線—ネットミームと二次創作文化が産む新たな広告表現—
嵯峨 紬希	テレビショッピングとネットショッピングから見る家電量販店の競争
小川 華純	瞬間が連鎖する～テレビドラマの脚本における「選択」と「スイッチ」の普遍性
工藤 奏海	お笑い番組における聴覚障害者向け字幕の現状と課題
三浦 莞二	プロ野球の地上波中継が減少したのはなぜか
土屋 七海	YouTuber とテレビの関係について～ YouTuber がメディアにもたらす影響とは～
鍋木 佐織	「耳からはじまるまちづくり」視覚に頼らない地域プロモーションの可能性
松下 奈央	面白いテレビ番組とは —ギャラクシー賞・マイベスト TV 賞・SNS からみる批評家と視聴者の評価の相違—
石原 凜々名	機械が歌う禁忌：ボーカロイドとホラーの親和性について
宇田川 愛美	嵐はいかにして国民的アイドルになったのか～テレビメディアとの共犯関係の考察～
鉢嶺 羽功	なぜお笑い賞レースはその後の売れ方に差が生じてしまうのか
森 有希	STARTO ENTERTAINMENT (旧ジャニーズ) がテレビに与える影響 ～本当に旧ジャニーズはテレビに必要なのか～
宮本 日向	ミッキーマウスが 100 年たった今でも愛され続ける理由～キャラクターとアニメーション分析を中心に～
又村 恵実	映像を活用した地域文化記録と地域住民による地元再発見の可能性 —お祭り映像制作と地域住民インタビューを通じて—
近藤 健人	「鎌倉殿の 13 人」と「どうする家康」の史実と演出の表現方法と視聴者からの評価
押尾 光穂	『水曜どうでしょう』の独自性に関する一考察～没入感をもたらす視聴体験の解明～
竹生 栞	推しは家庭で育つ—親子関係にみるジャニーズ・ファン文化の継承—
塩田 優貴	経済はレッズに学べ！～浦和レッズのストーリーマーケティングは勝敗を超える～
大野 充輝	二次的継承の時代のテレビの戦争表象—NHK 国内放送と NHK WORLD-JAPAN との比較から—
武田 紗楽	現代のゴルフ番組に求められるもの
小美野 夏門	オーディオブックは「読む」意識を変えうるか
松島 汰智	『オードリーのオールナイトニッポン』東京ドームライブにみるラジオ番組の変化と展望
石田 彩萌	『Doctor-X 外科医・大門未知子』はなぜ愛されているのか～医療ドラマに求められるものとは～
永井 知里	ドラマ『花より男子』の魅力とは
松戸 心	雑誌『LARME』からみる令和的「かわいい」の誕生
大槻 飛雄馬	なぜラジオの投稿文化は廃れないのか
新井 こはく	顔出しをしないアーティストは SNS があってから流行したのか
宮崎 乃維	連続テレビ小説『花子とアン』に描かれる女性の社会進出と自立
田邊 周子	『忍たま乱太郎』～再会による魅力の発見～
山下 眞奈	青年期におけるアニメ嗜好と性格特性の関係について
中村 夏瑠	ドキュメンタリー番組『ザ・ノンフィクション』の魅力
下澤 侑未	韓国ドラマの世界展開とその作品の魅力
関口 卯美	『名探偵コナン』からみる長寿アニメの特性
河原 萌恵	オーディション番組の人気要因と SNS 時代における視聴者心理の関連性
佐藤 春奈	ゲーム開発の民主化～国内インディーゲームにおける開発者とプレイヤーの距離～
仁科 ゆう	移住 PR 動画の表象から考える自治体広報の課題と限界
門内 晴加	テレビドラマにおける撮影技術の変遷に関する考察

打田 知永	都市部の銭湯を、現代にフィットする新しい視点で再定義し、銭湯文化を絶やさないための試論 ～椎名町・妙法湯と共に～
谷口 豪	昭和を味わうこと～西武園ゆうえんちのリニューアルから考えるレトロの持つ魅力～
矢島 萌愛	実写映像作品における喋る動物表現の意味と機能
酒井 愛珠	乃木坂 46 から見るグループアイドルの変化と継承
西村 亮佑	テレビ業界は本当に衰退しているのか
水上 瞳	現代における女性ファンによる女性アイドル支持の背景
目黒 桃	災害時におけるテレビの報道がもたらす世間への影響
江口 拓光	その「配慮」は誰のためなのかーエスカレーター問題における利他性と行動変容ー
延興 真央	動画プラットフォームと SNS がタレントマーケティングに与える影響
越渡 萌真	K-POP アイドルと SNS が生み出す共創性マーケティング ～ファンと企業を繋ぐ新たなプロモーションの力～

卒業制作 (映像)

瀨瀬 栄美子	ミックスルーツ～はざままで生きる～
新沼 希慧	戦場の舞台裏
小高 みなみ	せきらのき
塩屋 麻菜	私の見ている世界
山井 奏人	この一瞬に、全てをかけて～笑顔の裏側の物語～
小野田 湊人	この一瞬に、全てをかけて～笑顔の裏側の物語～
道又 美優	私は障害者専門風俗嬢です
鈴木 太陽	厭な視線
中野 虹美	犬猫と生きる社会
城戸口 湊太	ウルトラ寿司ふぁいやー～ネタと本気の間で～
粕谷 基	私の見ている世界
中村 夕渚	この一瞬に、全てをかけて～笑顔の裏側の物語～
平田 悠乃	私は障害者専門風俗嬢です
平野 陸斗	厭な視線
菱田 咲恵	犬猫と生きる社会
迫 彩夏	この一瞬に、全てをかけて～笑顔の裏側の物語～
薦田 正樹	記録
王 思怡	異国の街で、それぞれの私たち
澤柳 壮一郎	よりどころ
井上 真緒	おんおふ！—THE SWITCH—
石橋 和里	おんおふ！—THE SWITCH—
黒田 蓮	戦場の舞台裏
成田 昂平	戦場の舞台裏
大下 実来	せきらのき
島田 唯杏	私は障害者専門風俗嬢です
松宮 倫	一生に一度、嘘みたいになろう
平山 裕大	ウルトラ寿司ふぁいやー～ネタと本気の間で～
別府 朋実	この一瞬に、全てをかけて～笑顔の裏側の物語～
蔣 琬霖	「猫と暮らす」～香川県・男木島より～
中川 春喜	戦場の舞台裏
近藤 麻綾	よりどころ
田中 美有	一生に一度、嘘みたいになろう
BANIECKI TSUKI ELINA	よりどころ
久和野 早紀	私の見ている世界
松崎 翔子	おんおふ！—THE SWITCH—
渡辺 尚風	私は障害者専門風俗嬢です
酒迎 野々華	おんおふ！—THE SWITCH—

橋本 光騎 三瀬稜史—音がない世界で夢を追う—
原 真弥 おんおふ！—THE SWITCH—
野崎 義光 戦場の舞台裏

卒業制作 (音響)

田畑 遥香 現代の録音技術によるジャズ録音表現の再現的検証
中山 歩笑 さよならキューブアース。
片岡 優七 Forest Vivace ～いのちの響き～
木村 みさと Amped Sound Dive
田中 咲希 ニンゲン
堤 悠里 Amped Sound Dive
石井 愛莉 Amped Sound Dive
田中 智也 羽ばたきの先へ
名倉 小遥 ニンゲン
十川 蒼来 羽ばたきの先へ
山内 美咲妃 Forest Vivace ～いのちの響き～
齋藤 智宏 ア・クォーター・ゴーン
宍戸 美桜 羽ばたきの先へ
鎗田 柊佳 Aira
海老沼 圭佑 ア・クォーター・ゴーン
伊藤 愛菜 床下のスーパーノヴァ
中川 舞 Start Over

卒業制作 (脚本)

横川 桃歌 テレパシー
東 優希 スタートオーバー
寺岡 信行 error
安孫子 知世 in the 盆地 town
天野 紗耶菜 花の輪郭

卒業制作 (朗読)

久米 俊輔 見えない障害と生きる。
阿部 智春 ズバリ！トップバッター！！
渡辺 桃子 さいごの贈り物
三浦 椿 夢

卒業制作 (アナウンス)

齋藤 里佳 バラスポーツを活用した障がい者教育の有効性～小学校でのバラスポーツ教育の検証をもとに～
染谷 芽依 優れた非言語コミュニケーション研究～明石家さんま、黒柳徹子、森田一義から読み解く～
奈良井 日南 女ことばの変遷と、衰退をめぐる一考察
梶葉 康介 スポーツ実況におけるアナウンサーの言葉による演出
丸山 温乃子 日本の生理用品無償配布の現状と「生理の貧困」の解決への動き

芸術学部長賞受賞

■卒業制作（映像作品）

戦場の舞台裏

27A004-3	新沼	希慧
27A068-7	黒田	蓮
27A070-5	成田	昂平
27A096-1	中川	春喜
27A127-8	野崎	義光

映 像	音 声
<p>[アバン] 公式 YouTube channel Fuji Rock Festival より 『FUJI ROCK FESTIVAL '25: Aftermovie』から一部抜粋</p> <p>グリーンステージ全体 ドローン 映像【公式】 ライブ風景 客【公式】 山と霧 ドローン映像【公式】 ライブ風景 演奏者【公式】 ライブ風景 客【公式】 ライブ風景 演奏者【公式】 入場口前 列【公式】 入場口前 客カメラ目線【公式】 入場ゲート【公式】</p> <p>鉄板 調理風景寄り 宮澤顔寄り</p> <p>グリーンステージ全体 ドローン 映像【公式】 〈新潟県 苗場スキー場〉</p> <p>[ライブ風景【公式】] 客越しステージ、客 2S、客 1S、 踊る客、跳ぶ客 〈新潟県 苗場スキー場〉 〈3日間で合計 12万人〉</p>	<p>BG1 Vulfpeck「Matter of Time」</p> <p>N：年に1度、世界中の音と香りが集まる、 五感の戦場、フジロック</p> <p>その戦場にスリランカの台所を持ち込んだ者たちがいる。</p> <p>新潟県・苗場スキー場</p> <p>来場者数は3日間で合計 12万人にのぼり、</p>

<p>〔ライブ風景【公式】〕 前列客引き、出演者 DJ1S、客 2S 後ろ姿、ステージ演奏者 2S LS 〈新潟県 苗場スキー場〉 〈3日間で合計 12 万人〉 〈経済効果は約 20 億円〉</p> <p>ステージ全体 照明【公式】 ライブ風景 後ろ姿【公式】 鹿威し【公式】 他店舗 接客風景【公式】 他店舗 客商品受け取り【公式】 他店舗 商品提供手元【公式】 客 食事様子 2S【公式】 他店舗 調理風景 焼き網【公式】 他店舗 提供店員 1S【公式】</p> <p>オアシスエリア 引き 1 オアシスエリア 引き 2 営業風景 客列ドリー 〈人気エリア オアシス〉 店舗内から店員後ろ姿と雨 営業風景 店内引き 列整備 店員と店名札 東野 営業中 笑顔 東野 調理風景</p> <p>宮澤 インタビュー 1S</p> <p>宮澤と東野会議様子 領収書を持つ宮澤 1S 指を抑える宮澤 1S 走る後ろ姿</p> <p>グリーンステージ全体 ドローン 映像 昼、夜【公式】 〈番組ロゴ 戦場の舞台裏 FUJI ROCK FESTIVAL '25〉 映像 FO からロゴ FO</p> <p>〔準備日と前夜祭〕 FI 木と青空 〈7月 24 日 新潟県 苗場スキー場〉 ステージ準備風景 〈7月 24 日</p>	<p>N：経済効果は約 20 億円</p> <p>屋台の出店倍率は数十倍とも言われる。</p> <p>人気エリア オアシス、 朝 9 時から翌朝 5 時まで、20 時間客足の絶えない果てなき戦場。</p> <p>今回は出店 3 年目にして、 初めてオアシスエリアに挑戦するナラダカレーに密着する。</p> <p>東野「これ頑張ってカチャカチャすればするほど美味いんで」</p> <p>宮澤「売るのがやめるか」</p> <p>N：これは新店舗開店をかけた、 勝負の大舞台だ。</p> <p>N：早朝の苗場。まだ音も匂いも静まり返っている。</p>
---	---

<p>新潟県 苗場スキー場)</p> <p>ハイエースとお店</p> <p>〔宮澤紹介〕 宮澤 電話中 (宮澤 康平 NAWOD CURRY 店主)</p> <p>宮澤 店舗前 インタビュー</p> <p>店舗設営風景 スタッフの肩に乗る宮澤 ティルトアップ</p> <p>〔東野紹介〕 東野 荷下ろし (東野 貴也NAWOD CURRY 社員)</p> <p>東野 荷下ろし インタビュー</p> <p>東野 店舗前 インタビュー</p> <p>宮澤と東野 高校時代写真 ZI 〈宮澤 康平 (当時 18 歳)〉 〈東野 貴也 (当時 18 歳)〉</p> <p>布看板 パンライト 〈ナヲダカレー NAWOD CURRY〉</p> <p>〔店舗設営風景〕 発注卵受け取り 鉄板上 アルミホイル設置 店舗引き 〈売上目標 600 万円〉</p> <p>設営中会話 コットゥロティ吊るし看板について</p> <p>〔交通事故〕</p>	<p>宮澤「苗場着いた？ 苗場」 N：店主の宮澤康平（みやざわこうへい）。 スリランカの友人から教わったレシピで、フジロックの屋台飯に挑戦する。</p> <p>宮澤「たぶん準備してる途中に始まります。多分、きっと、いつも、今日もそんな感じがします」</p> <p>宮澤「右からいこう、けいた君ごめん」</p> <p>N：店の裏でトラックから食材を下ろすのは、東野貴也（ひがしのたかや）。 今年からお店の社員となり、お店のリズムを裏から支える。</p> <p>東野「カレーは 4,000 食以上は作ってます」</p> <p>東野「まあ数字的なことを俺は言うのと、やっぱその持ってきた分売り切りたいですよね」</p> <p>N：東野と宮澤は高校の同級生。 去年宮澤に誘われて参加を決意したという。</p> <p>そんな 2 人のお店は NAWOD CURRY（ナヲダカレー） カレーではなく、スリランカ料理のコットゥロティをメインに提供する。</p> <p>今回の売り上げ次第で、今年の秋頃に待望の新店舗が開店できるか決まる。目標は準備してきた 4,000 食を売り切り、600 万円を売り上げることだ。</p> <p>スタッフ「コットゥロティ。あ、こっちから？」 市川「逆だよ、逆、お前」 宮澤「いや違う違う、こっちからやって、バカなん？ だから俺が言ったやんそれ」 N：まだスタッフも慣れない様子。</p>
---	---

<p>宮澤と運営スタッフ会話</p>	<p>N：そんな中トラブルは、戦いの火蓋を切るように起こる。 運営スタッフ「警察はもう呼びました……？」 宮澤「そうですね」 運営スタッフ「あー承知いたしました」 宮澤「事故処理しないと保険も降りないので」 運営スタッフ「じゃあ事故はあったで間違いはないですか？」 宮澤「そうですね」 運営スタッフ「またここへ来るので、少々お待ちください」 D「事故ですか？」 宮澤「事故」</p>
<p>市川 宮澤へ謝罪</p>	<p>市川「宮澤まじでごめん、まじでごめん」 N：車を駐車場に移動させる際に事故を起こしたようだ。</p>
<p>市川 店舗裏 インタビュー 〈宮澤と大学時代の同期 市川スタッフ〉</p>	<p>市川「事故ってきました、そこで今事故ってきて。なんか滅茶苦茶狭い山道なんすよ。そこで、すれ違う時にお尻がガスってこすって。ただ相手の方が滅茶苦茶知り合いの方で、ご好意で許していただいて」</p>
<p>市川 車両事故報告書記入様子 車両事故報告書 寄り インサート コットウロティ吊るし看板</p>	<p>N：宮澤と大学の同期で10年以上付き合いのある市川まさか自分が事故を起こすとは。</p>
<p>かれん 荷下ろし 〈宮澤の友人 かれん スタッフ〉</p>	<p>N：宮澤の友人のかれん。 かれん「来たばっかでこんな手伝わされるなんて、来てもう2分、ワンツーですよ。隙も与えられない」</p>
<p>〔宮澤 調理指導〕 カレー スライス ココナッツオイル</p>	<p>宮澤「満遍なく、1コットウ1カレーで」 N：フジロック会場では包丁が使えないため、加熱調理だけで臨む。 宮澤「最後、ココナッツオイル、これをビャーっと馬鹿みたいにかけていいから」 スタッフ「香り付けてこと？」 宮澤「そうそう」</p>
<p>日が傾き始めた空と山 〈18：00〉</p>	<p>N：準備時間も東の間。日が傾き始め、前夜祭に向けてフジロックが動き出す。</p>
<p>〔入場様子〕 入場口前 待機列 入場口前 メガホンで客にアナウンスする運営スタッフ後ろ姿 歩く観客の足 入場後 オアシスエリアに向かう</p>	<p>運営スタッフ「お待たせ致しました。それでは、これよりFUJI ROCK FESTIVAL '25 前夜祭開場します。列が動きます。前のお客様に続きお進みください」</p>

<p>様子 オアシスエリアに入っていく人々</p> <p>〔接客風景〕 1人目の注文をする客 引き 宮澤 商品受け渡し</p> <p>〔1人目の客 食事レポート〕 客 手元から口に運ぶ様子 インサート コットゥロティ パンレフト 〈コットゥロティ 1,200円〉 インサート スプーン持ち上げ 寄り 客 食べている様子</p> <p>〔前夜祭風景〕 客全体 櫓と客 引き 櫓 太鼓と進行役 スロー再生 櫓回り跳ぶ客 ドリー スロー再生</p> <p>〔営業風景〕 店舗前 列</p> <p>宮澤 鉄板前 コットゥロティ 作り置き 目玉焼きを仕上げに乗せ、割れた目玉焼きをコットゥロティに投げ込む</p> <p>インサート 日の落ちた空と山と客</p> <p>〔営業風景〕 営業中 店内引き</p> <p>客にコットゥロティについて説明する様子</p>	<p>N：今年1人目のお客さん。コットゥロティを注文したようだ。 宮澤「ありがとうございます」 客「どうも、ありがとうございます」 スタッフ「ありがとうございます」</p> <p>客「いただきます」 客「もんじゃ焼きっぽいってお兄さん言っていたんですけど、ぽいっすけど、スリランカ料理っぽい、スパイシーなカレーっぽい」</p> <p>客「めっちゃ美味しいっす」</p> <p>進行MC「ラストセッション参りましょう。苗場音頭ー！」</p> <p>BG2 苗場音頭 N：前夜祭が盛り上がりを見せると、屋台も賑わい始める。</p> <p>夜のピークに向けてストックの用意を始める。</p> <p>N：コットゥロティを知らないお客さんには スタッフ「あの一チャパティっていうナンみたいな生地があるんですけど、それと野菜を鉄板の上で、ヘラで細かくして、カレーみたいなスパイスと鶏肉で炒めた、焼きそばみたいな」</p>
---	--

<p>鉄板 鶏肉 寄り</p>	<p>客「なるほど、分かりました」</p>
<p>東野 笑顔</p>	<p>N：東野の表情にも笑顔が見える。</p>
<p>〔宮澤インタビュー〕 宮澤 店舗裏</p>	<p>D「大人気ですね」 宮澤「もうカオスですね。はい、こちらがNAWOD CURRYです。 カオスカレーです」</p>
<p>注文列 ドリー</p>	<p>D「割と毎年こういう感じですか？」 宮澤「ああもう本当に、バタバタでどうやってやるんだっけってみんなで」 D「今年はどうですか準備万端で出来ましたか？」 宮澤「つもりだったすけどやっぱ、仕込みはね、良かったんすよ。仕込みは4日間いや5日間こもってキッチンにやってたんで、何とかなっただすけど、その他の部分がちょっと詰め甘かったかなっていう」</p>
<p>宮澤 店舗裏</p>	<p>宮澤「めっちゃ並んでるらしいんすよ、回ってないかもしれないっす。それは、多分フジロックにおいて」</p>
<p>〔営業風景〕 2人組の客 ナラダサンドカメラ に向ける 寄り</p>	<p>宮澤「スタートダッシュがね、ちょっとコケましたね、冷えちゃってたんで全部、鉄板が全部冷えちゃってどんどん悪いサイクルになっちゃって、だから全部食材を温めつつ、鉄板も温めつつやれば、倍、3倍なるかな。最終日はエライことになってると思うんで見てください」</p>
<p>〔東野インタビュー〕 東野 店舗裏 (東野 貴也 NAWOD CURRY 社員)</p>	<p>N：NAWOD CURRY では他にも、チキンをパン生地で挟んだNAWOD サンドがよく売れる。 東野「明日は一応、2日分は全然大丈夫な量でやっているんですけど、ちょっと、2日目、前夜祭と1日目はいいんですけど、2日目以降がちょっと分からないんで、一応抑えてはあるんですけど、どちらにしろ、発注はするんですけど、その数どうしようかなっていう」</p>
<p>〔前夜祭風景〕 前夜祭 花火 花火を見上げる客 1S スロー再生 客と花火 引き スロー再生</p>	<p>N：こうして前夜祭は深夜0時まで続き、彼らの戦いは初日を前に始まっていた。</p>
<p>FO</p>	

<p>[フジロック 1 日目] FI 木々越しに太陽 OPEN 前オアシスエリア 〈1 日目 08:00〉</p>	<p>N: フジロック初日。</p>
<p>[一人で準備する宮澤] 宮澤 店舗のテントを開ける 引 き 宮澤 店舗のテントを開ける 寄 り</p>	<p>お店にはひとり準備する宮澤の姿があった。 D 「おはようございます」 宮澤 「あ、おはようございます。誰もいねえ。くそ寝坊したと思ったのにさ」</p>
<p>宮澤 鉄板に火をつける ZI 宮澤 調理器具を運ぶ 宮澤 鍋に食材を入れる 〈営業開 始まで 30 分 08:30〉</p>	<p>宮澤 「まじで 1 人じゃない。携帯もないし俺、終わった」 N: 営業開始まで 30 分 多くの準備が残っているが、1 人で間に合うのだろうか。</p>
<p>宮澤 調理器具などをまとめ、時 計を確認する 宮澤 運営スタッフと会話 〈08: 40〉 シフトスタッフ出勤</p>	<p>宮澤 「え、無理じゃん。ちょまって、本当に無理だよ」 N: 運営スタッフのチェックも終わり営業開始の 20 分前 ようやくシフトのスタッフたちが姿をみせる。</p>
<p>東野 食材解凍 宮澤 NAWOD サンドを食べて 変顔する ZI</p>	<p>N: シフトのスタッフが揃い、宮澤の表情も綻ぶ。</p>
<p>[営業開始] 空から店内 パンレフト 〈営業開 始 09:00〉</p>	<p>N: なんとか準備が整い、ついにフジロック初日の営業を迎える。</p>
<p>スタッフ 調理場</p>	<p>市川 「10 時ぐらいからなんか焦り出す、こっちが。こんな来るの人!? ってる、急に」</p>
<p>[食事レポートと感想] 客 NAWOD サンドの箱を開き、 口に運ぶまで インサート NAWOD サンド 全体 〈NAWOD サンド 800 円〉 インサート NAWOD サンド 手で軽く押し込む 客 手に持った NAWOD サンド</p>	<p>N: こちらのお客さんは NAWOD サンドを注文。 客 「美味しそう～、いただきます」 客 「鶏肉もぷりぷりで、ジューシーで、このドレッシングがめっちゃ美味いっすね」 N: 「来年も来ます！」</p>

<p>客 ラムチャイの感想をスタッフに伝える</p>	<p>N：ラムチャイは人気のドリンク。 客「ラムチャイ美味しいっす」 スタッフ「良かったです」</p>
<p>オアシスエリア様子</p>	<p>N：今年で3回目の出店になるナラダカレーだが、オアシスエリアは初の挑戦。</p>
<p>〔市川 インタビュー〕 市川 店舗裏</p>	<p>D「去年も参加されていますか？」 市川「去年もしてます」 D「どうですか？今年」 市川「今年でも、やっぱ場所変わったのもあってなんか、ピークの来方が全然違って、去年はもうずっと忙しかったんですけど、今回はなんか、忙しい短いタイミングが何回も来るみたいな、前よりは多分やりやすいんじゃないすかね。って思っています」</p>
<p>〔調理風景〕 東野 コットゥロティ調理 手元 ZI 東野 鉄板前</p>	<p>東野「一発で30人分すね30人分っす」 東野「疲れますよこれ」</p>
<p>〔スリランカ人の来店〕 スリランカ人 待機列</p>	<p>N：こちらはスリランカ人のお客さん。 スリランカ人 A「これはね、スリランカの飲みの後のラーメンと一緒にです」 スリランカ人 B「ラーメンと一緒に、そうラーメンとアメリカのハンバーガーとかと一緒にですね。作るのが早いし、めちゃくちゃ美味しいし、スリランカの若い人たちとか、パーティーとか遅くまで遊んでたりする時、帰る途中にこれを食べる。スリランカの心の食べ物ですよ」</p>
<p>宮澤 スリランカ人 注文会話</p>	<p>スリランカ人 A「コットゥロティの量どのくらいですかね、1人」 宮澤「1人300gあのくらい、少ないかもスリランカよりは少ない」 スリランカ人 C「え、スリランカ行ったことありますか？」 宮澤「あります」 スリランカ人 C「どこらへんですか」 宮澤「マータレーとか」 スリランカ人 A「すご、僕も1回しか行ったことないのに」 宮澤「友達が住んでてナラダっていうのが僕の友達なんです。名前が」 スリランカ人 C「僕よりスリランカ語話せると思うよ」 宮澤「僕？話せない、話せない」</p>
<p>スリランカ人 インタビュー</p>	<p>スリランカ人 B「作り方めっちゃ面白い、彼上手にやってる」</p>
<p>スリランカ人 コットゥロティ開ける</p>	<p>スリランカ人 A「はい、開けますね。いいですか。これはやばすぎね」</p>

<p>スリランカ人 食事レポート</p> <p>インサート 空と雲</p> <p>[卵の在庫について] 目玉焼きと手元 宮澤 1S</p> <p>市川 店舗裏〈宮澤と大学時代の同期 市川 スタッフ〉 割れた目玉焼きをコットゥロティに入れる 寄り コットゥロティに目玉焼きを乗せる 市川 店舗裏 厨房に声かけ</p> <p>宮澤 1S WS 注文列 ドリー</p> <p>スタッフ 客呼び込み</p> <p>スタッフ 列整備相談</p> <p>[ライブ風景] 肩車されている子供とステージ〈19:30〉 1S 後ろ姿 スロー再生〈19:30〉 肩を組んで手を振る2人 スロー再生〈19:30〉</p> <p>[在庫確認] 宮澤 寄り ZO 宮澤と東野 会議</p> <p>宮澤 仮眠</p> <p>～宮澤と東野 会話 諸事情により割愛～ 〈21:00〉</p>	<p>スリランカ人 A「本当の味に近い、いいですね」</p> <p>N：順調に進んでいるように見えたが、卵が足りなくなる可能性があるという。</p> <p>D「あと卵どれくらいあるんですか？」 宮澤「足りなくなるかも」</p> <p>市川「発注してるギリギリ分できれば客に出したくて」 市川「結構失敗しちゃって割れちゃったやつとかは、コットゥに入れたりしているんですけど、もう今それがあんまり許されない」 市川「失敗が許されない。最後の方、卵なしで提供になっちゃう」</p> <p>市川「多少割れても入れていいよ」</p> <p>N：ここから客足はさらに増え続け、捌ききれないほどの大行列に。</p> <p>スタッフ「コットゥロティです。スリランカの屋台飯。えげつない量、ありがとうございます」</p> <p>N：会場の熱狂はピークに達する中、 足りない材料について話し合う宮澤と東野。</p> <p>東野「実際に集計してってこと？」 宮澤「だからそのグラムとかじゃなくて、何人に対して何箱出たかってのが分かるから、用意した数に対してどれくらいミスっているかがわかるじゃん」 東野「俺集計しようか？」 宮澤「いける？」 N：疲れていても在庫の確認は欠かさない。</p> <p>N：仕込みから1週間近く、まともに寝られていない宮澤も流石に限界の様子</p>
---	---

<p>宮澤 片付け〈営業終了 04:30〉 閉められたテントと宮澤〈営業終了 04:30〉</p>	<p>N:不安のまま営業を終了したのは、翌朝4時半頃だった。</p>
<p>明るくなり始めた空と山 FO</p>	<p>宮澤「東野片づけるぞ」</p>
<p>〔フジロック2日目〕 FI 入場門〈2日目 09:00〉 川で遊ぶ人々〈2日目 09:00〉</p>	<p>N:フジロック2日目、朝から慌ただしくしている東野の姿があった。</p>
<p>〔食材不足〕 東野 冷凍車を閉める 東野 電話</p>	<p>足りない食材の買い出しをスタッフにお願いすることにした。 東野「業務スーパーに行ってきて欲しいです。鶏ももと青唐辛子とタマネギとニンニクと鶏がらスープの素とうま味調味料。ごめん、ありがとう、ほんとうごめんね」</p>
<p>宮澤 コットゥロティを作る 宮澤 店舗裏</p>	<p>宮澤「個人個人の能力が高くて、俺にまとめる能力がないんだけど、無いんだけど、直接俺が指示を出して何とかすることはないんだけど、俺が頼りないからみんな“しょうがないな”つってまとまる。そういうチームワーク。“しょうがないな宮澤、お前ダメだな、もう、しょうがないなやってやるか”みたいな」</p>
<p>宮澤 東野とスタッフ 卵について会話</p>	<p>スタッフ「卵さ交通渋滞で全く動かないんだって」 宮澤「12時の便は多分くるんだよね？」 東野「いや12時の便も遅れているみたい。15時の便もちろん遅れますって」 スタッフ「全く動かないんだって」 N:調味料や鶏肉や調味料の不足に続き、予定した卵が渋滞で大幅に遅れるという。</p>
<p>〈卵不足〉 宮澤 卵を探しに店舗を離れる</p>	<p>宮澤「卵を探しに行きます。播磨屋のトラックが渋滞で止まっちゃってて、卵があと少ししかなくて……。そしたら、やっぱ、売るのがやめるか、ほかの出展者に借りるか。ちょっと探しに行きます」</p>
<p>宮澤 移動中1</p>	<p>N:現時点で卵は残り100個、これからくるピークを考えると絶対に数が足りない。</p>
<p>宮澤 移動中2</p>	<p>宮澤「播磨屋っていうスーパーがあって、六日町っていう、今の苗場スキー場より北側のちょっと下って行ったところ、あっち側の下って行ったところかな。新潟方面に下ってくと、六日町っていう町があるんだけど、その地域のスーパーでフジロックのそういう出店者の食材を提供している」</p>
<p>宮澤 アヴァロン到着</p>	<p>宮澤「うわー、アヴァロンだ。トラウマの地よ」</p>

<p>宮澤 電話 現状の確認</p>	<p>宮澤「今アヴァロン着いたんだけどさ……」 N：アヴァロンはナラダカレーが去年まで出店していたエリア 知り合いの出店者に卵の在庫が余っていないか聞きにきた。 宮澤「だから向こうもチャレンジしているんなところを聞いてくれるってことよね。あーなるほど分かった。じゃあ俺もあれする。今どんぐらいってる？ 結構混んでるっしょ今。だよわかったすぐ行くわ。了解」 宮澤「確定じゃないらしいんで、もしかしたら出店管理の人がゲットできるかも みたいなの。いろんな所に聞いてくれるみたいで」</p>
<p>宮澤 多店舗へ交渉</p>	<p>他店舗「卵うち使ってないんす」 宮澤「そうっすよね、だからダメもとで1回来て」 他店舗「さーせん」</p>
<p>宮澤 帰り道 電話</p>	<p>N：他の店舗にも交渉したが、どこにも卵に余裕のある店舗はなかった。 宮澤「このままいけば赤字は免れるなっていう数は出てて、だけどこれで例えば、 販売がストップとかなっちゃうと赤字ですね。卵ごときで、なんでだよ……。 もしもし、はいはい、2個届いた？じゃあ一旦いける？でも15時の便は 心配だべ。俺今さグリーンステージからオアシスに向かってんだけど、どっ かで拾いに行けばいいかな。ああほんと、頼んだ。ありがとう。2箱は届 いたらしい」</p>
<p>卵補充 宮澤安堵</p>	<p>N：宮澤が店舗に戻ると、運営本部が集めた卵が10箱届いていた。 宮澤もこれには安心する表情をみせる。</p>
<p>鉄板前 目玉焼き</p>	
<p>インサート 太陽を隠す雲</p>	<p>N：卵が到着してほどなく、会場には雨雲がたちこめる。</p>
<p>〔不穏な気配〕</p>	
<p>市川 後ろ姿と雨</p>	<p>N：突然の豪雨もフジロックの名物だ。</p>
<p>コトウロティ看板に降りかかる 雨</p>	
<p>～宮澤 諸事情により割愛～</p>	
<p>宮澤 限界な表情 顔寄り</p>	<p>宮澤「もう限界。ポンチョ持ってきてないもん。忘れたわ」 N：疲弊し切っている宮澤の元に、想定外の量の卵が到着する。</p>
<p>〔卵による赤字〕</p>	
<p>宮澤 追加の卵を受け取る</p>	<p>食材屋「じゃあこれ、合計6ケースね。ありがとうございます」 宮澤「ありがとうございます。もう赤字だよ卵で」</p>
<p>卵箱 寄り</p>	<p>N：卵が届いたのに赤字とは。</p>
<p>宮澤 卵に雨除けを被せる か</p>	<p>宮澤「スタッフに買いに行ってもらって業務スーパーにあったんすよ。なんで、</p>

<p>れんと会話〈宮澤の友人 かれん スタッフ〉</p>	<p>300個お願いって言ったら300パック買って来ちゃって、1パック10個入りだから3000個。よく聞くやつ。ねえ聞いてかれん」 かれん「だめでした。卵3000個買ってしまいました」 宮澤「と思うじゃん。また6箱来た」 かれん「なんで、もう卵嫌いになりそう」 宮澤「卵嫌いになるよな、わかるわかる」 かれん「頑張って売るわ」</p>
<p>インサート ライブ様子</p>	<p>N：さらにアクシデントは降りかかる。</p>
<p>〔ガス不足〕 宮澤 鉄板前</p>	<p>宮澤「ガス切れちゃった。だからヤバい」</p>
<p>市川 ガスの到着時間を聞く</p>	<p>市川「ガス何分かかんの」</p>
<p>スタッフ 注文列の客に状況説明</p>	<p>N：ガスが止まれば調理ができない。 スタッフ「申し訳ないんですけど、ガスがちょっと止まってしまっていて、めちゃくちゃ遅くても30分以内には戻るんですけど、ちょっとお待たせするかもしれない」</p>
<p>宮澤 鉄板前</p>	<p>宮澤「計算ミスだね。俺さ去年3本使って切れなかったから同じでやったんだけど、よくよく考えたら朝5時まで計算だったって今気づいた、凡ミスです」</p>
<p>カセットコンロ調理 寄り</p>	<p>N：カセットコンロで火をつけフライパンでも調理することに。</p>
<p>ガスボンベ到着</p>	<p>20分後、追加のガスボンベが到着する。</p>
<p>厨房様子</p>	<p>宮澤「火ついた、火ついた、あと5分」</p>
<p>宮澤と市川 営業風景</p>	<p>宮澤「いける？」 市川「すぐ、もういける。そんなお前が好き」 宮澤「裏でいい？裏に入れていい市川」 市川「入れて、入れて」 N：スタッフの連携プレーでなんとか営業を切らさずに調理を再開。</p>
<p>宮澤 厨房 ZI ～宮澤怪我 諸事情により割愛～</p>	<p>宮澤「並んでる？結構並んでる？」</p>
<p>スタッフ 喫煙所</p>	<p>市川「これで休めるっちゃ休めるしね、あいつも、多分ずっと気を張ってて、ほぼ寝てないから、そういう部分もあったんだと思う」 BG3 サンボマスター「輝きだして走ってく」</p>
<p>スタッフ 喫煙所からレッドマーキーのサンボマスターのステージ</p>	<p>N：すると隣には客を震わすサンボマスターのステージがあった。</p>

<p>に向かう スタッフ レッドマーキー入場 スタッフ サンボマスターを聴く様子 曲終わり 盛り上がる観客</p>	
<p>スタッフ 店舗に戻る スタッフ 営業風景 会話</p>	<p>スタッフ「サンボマスターやばかったから頑張れる気がする」 スタッフ「テンションが」 市川「君ならできるんだ、どんなことも」</p>
<p>東野 宮澤に電話</p>	<p>東野「ほんとに焦らずに、ちょっと今いい機会だからしっかり体休めて。康平さんいなくても回るぞ、みんな超優秀だから。うちのメンツ超優秀だから、康平さんいなくても回る回る。来年俺ら抜きで行こうぜ。来年俺が抜きで行こう。みんな超優秀だから安心して」</p>
<p>インサート 朝焼けのオアシスエリア〈営業終了 04:30〉</p>	<p>N：翌朝4時半、ナラダカレーは2日目の営業を終えた。</p>
<p>東野 インタビュー</p>	<p>東野「実際オーナーも相当前から働いてたんで、ここで逆にしっかり休めたんで明日、多分オーナーは超頑張ってくれると思うので、そのための休憩っすよね。なのでまあまあ」</p>
<p>東野 帰り道 後ろ姿 FO</p>	<p>東野「お疲れ様です。明日もよろしくお願いします」</p>
<p>〔フジロック3日目〕 FI 空と山〈3日目 08:00〉</p>	<p>N：フジロック最終日、</p>
<p>～宮澤 朝挨拶 諸事情により割愛～</p>	
<p>宮澤 開店前 1S BS</p>	<p>宮澤「みんなのおかげで本当に目標はね、達成できそうです。赤字にはならず済みそうなので、まあこういうね人もいるから、怪我と気をつけて、出来るだけ売りたいですね」</p>
<p>～宮澤とスタッフ 会話 諸事情により割愛～</p>	
<p>〔変わらない宮澤の姿〕 宮澤 厨房 調理風景</p>	<p>N：それでも宮澤は厨房に立ち続ける。</p>
<p>インサート 空になったボウル 宮澤と東野 店舗裏 宮澤寄り</p>	<p>宮澤「いった！馬鹿てめえ。この反動で…（以下割愛）」</p>

<p>インサート 櫓周り</p>	
<p>コットウロティ調理風景 寄り</p>	
<p>〔終わりが見える〕 宮澤 冷凍車 在庫確認</p>	<p>宮澤「すごいなチキンなくなったわ。200キロ、230個」</p>
<p>東野とスタッフ 会話 店舗前</p>	<p>スタッフ「いらっしゃいませ」 スタッフ「ちょっと待って、この4日間で一番余裕のある顔している。そんな顔できるんすね」 N：無事に売り切れて東野もやっと安心できたようだ。 市川「帰り道で、俺みんなと酒飲みたいんだよって」 スタッフの笑い声</p>
<p>〔閉店と総括〕 薄暗い空〈営業終了 05：00〉</p>	<p>END BG4 Oval feat. Original Love「接吻」 N：戦いの幕が静かに閉じたのは、翌朝5時だった。</p>
<p>宮澤 厨房 インタビュー</p>	<p>宮澤「希望が見えたけど、初めてね。飲食をやって、ビジネスとしてやって、希望が見えたのはすごい良かった」</p>
<p>集計用紙 火のついていない鉄板</p>	
<p>宮澤 ライブを見る 後ろ姿</p>	<p>宮澤「フジロックのどんどこがいいっすかみたいなの、言われたときに、人の優しさに触れられるところですよとかって言ってたんだけど、ちょっとじっくりこないなって思ってた、ずっと考えてたんだけど、なんか、あれだったわ、極限すぎて心の底からね、心の底から、人に感謝するっていうか、“ありがとう”って思える」</p>
<p>宮澤 ライブを見る 横顔 ZI</p>	
<p>宮澤 ライブを見て揺れる 横顔 寄り</p>	
<p>宮澤 ライブを見る 後ろ姿</p>	
<p>宮澤と東野 高校時代写真 ZI</p>	<p>宮澤「なんか例えばだよ、東野と俺が普通に店のね開店準備をして、フジロックとかなくて、なんか買ってきてくれたと、飲み物を、“わりー、さんきゅ。”くらいのなんだけど、今は“まじでありがとう、お前ほんつとに……”って思えるみたいな。潜在意識の拡張というか」</p>
<p>宮澤 ライブを見る 横顔寄り</p>	
<p>宮澤 ライブを見る 後ろ姿</p>	<p>東野「結局その感情を知ること、日常の生活でもそれが浮かび上がってくる」</p>
<p>宮澤 ライブを見る 拍手寄り</p>	<p>宮澤「なんか今だからあれだけど、多分家帰って、ポロポロって涙がこぼれ落ちる。また今年も泣くんだよ」</p>
<p>宮澤 コットウロティの看板を外す</p>	<p>東野「行きはバンバンだったから、これ全部売れたって結構なことだなあってふと思いましたね」</p>
<p>東野 冷凍車内</p>	
<p>宮澤 売り上げを確認する 1S</p>	<p>宮澤「すごいぞ、俺すげえぞ、790万。目標が600万だったから。みんなのおかげで達成できました目標」</p>
<p>スタッフ 営業風景 回想 1</p>	
<p>スタッフ 営業風景 回想 2</p>	
<p>レッドマーキー 回想 宮澤 1S</p>	<p>宮澤「うちの口座の残高が本当にフジロックのあれもあって、めちゃくちゃもう</p>

<p>東野 店舗設営準備 回想 宮澤 1S 宮澤 調理風景 回想 宮澤 1S</p>	<p>ギリギリで。マイナス 400 万くらい。で、これマイナスになったら無理だから、ギャンブルに勝ちました」</p> <p>宮澤 「いやこんなに気持ちいいことねえな。いやあ凄いわ。だってあの 2 年前から考えつかない。想像もつかない」</p>
<p>宮澤と東野 2S 宮澤と東野 会議中 回想 宮澤 卵受け取り 回想 宮澤 調理風景 回想 宮澤と東野 2S 宮澤 回想 東野 電話 回想 宮澤と東野 2S</p>	<p>東野 「まだ全然実感湧いていないけどね」</p> <p>東野 「絶対もっとスマートにこれ以上売り上げている店舗がある」</p> <p>宮澤 「売上だけじゃないから俺らの目標は。これで悔しいと思えなかったらもう終わりだから。数字はよかった。けど、今後の NAWOD CURRY としては課題がたくさん見つかりましたよって話」</p> <p>宮澤 「自分の狭い世界から一気に解き放たれて、色々な世界を知れるってのがフジロックのいいところの 1 つではないかと思います」</p>
<p>宮澤と東野 車に乗りエンジンをかける 宮澤と東野 走り出す車</p>	<p>N：熱狂のあとに残るのは静かさと香りだけ。 それでも彼らはまた戦場に戻ってくる。 ここでしか手に入らない最高のスパイスを求めて。</p>
<p>映像 FO</p> <p>〔エンドロール〕</p> <p>FI</p> <p>タイトルロゴ</p> <p>宮澤と東野 店舗看板前 2S 【写真】</p> <p>〈四ヶ月後 令和七年十一月十五日〉</p> <p>新店舗 商品 【写真】</p> <p>東野 新店舗 調理風景 【写真】</p> <p>〈ナヲダカレーは下北沢に初の実店舗を開店〉</p> <p>宮澤 新店舗 接客 【写真】</p> <p>宮澤と東野 新店舗 2S 【写真】</p> <p>クレジット</p> <p>FO</p>	

芸術学部長賞受賞

■卒業制作（映像作品）

私の見ている世界

27A007-9 塩屋 麻菜

27A026-2 粕谷 基

27A109-6 久和野早紀

ナレーション：上白石 萌音

画	TIME	ナレーション
〈アバン〉		西 私の名前はね、木花咲耶姫っていうの
統合失調症の文字	00:06	N あなたは「統合失調症」という病気について、どの程度知っていますか？
幻聴、幻覚の文字	00:14	N 幻聴、妄想…中には日常生活を営めなくなってしまうような状況に 追い込まれてしまう人も…
市村さん		
小川さん		親しい友人が自分の事を考えてこういう行動をとっているに違いないだとか、そ うような妄想がありました。
関さん		どんなに逃げようとしても自分を否定するようなメッセージとか攻撃的な言葉と かが常に追いかけてくるような感じでしたね。
文字の羅列		私は自分自身の指を切り落とすっていう様なことをしたんですけど。
「偏見」	00:57	N 統合失調症を患う方々から出てくる言葉は恐ろしいものばかり
「誤解」		
「障害」		
劇の画	10:05	N この病を抱える方々は、どんな苦しみの中にいるのでしょうか？
	01:12	N 私たちの想像を超えた世界に迫りました。
タイトル		『私の見ている世界』
東京タワー 点灯前	01:37	N 2025年10月10日。
	01:42	N 東京タワーがシルバーの印象的なカラーにライトアップされました。
点灯後		
メンタルヘルスデーのち らし	01:52	N この日行われたのは、メンタルヘルスに関するイベント。
	02:15	N 「世界メンタルヘルスデー」は様々な精神の病への認識を高め、 支援や取り組みを促進するために定められた日です。
カードを書いている女性 たち		

画	TIME	ナレーション
ガチャガチャを回している手元		
世界メンタルヘルスデーのサイト		イ 私たちがやっていることとしては、これを皆さんに渡して今日はメンタルヘルスデーということをお伝えして、みなさんに少しでも心の健康のことについて考えてもらうように普及啓発活動をしています。
看護学生 女性3人説明		
女性1人説明		イ メンタルヘルスは私もあなたも家族も大好きな人もみんなも大事なことなんだよって事を普及啓発するためにこう言ったメッセージだとか資料とかを配布したりしています。
手書きのメッセージアップ	03:08	N 統合失調症などを始めとした精神疾患への理解を深めるために支援している方々が集ったイベントでした。
統合失調症文字	03:21	N では、そもそも統合失調症はどのようなものなのでしょう。
100人に1人の図表	03:30	N 実は、この病気は100人に1人になると言われている病気です。
医学部の門 男性の顔	03:38	N 日本大学医学部の金子宜之（かねこ よしゆき）准教授にお話を伺いました。
金子准教授の顔		医 10代や20代の比較的若い方に発症する原因不明の精神障害です。代表的な症状に人がいないのに声が聞こえる幻聴や周りの人から嫌がらせを受けたり見張られているという不思議な体験があります。
統合失調症発症年齢棒グラフ	04:08	N 統合失調症は幻聴や不思議な体験に遭う病。
金子准教授の顔 症状の図 「幻聴」 「幻覚」 「薬によ…」	04:14	N 次第に日常生活が困難になってしまうことも少なくありません。 医 統合失調症は、幻聴と不思議な体験が中心なんですが、この二つが日常生活を困難にするというところがあります。不気味な声が聞こえたり不思議な体験があると家の中から出ることが困難になっていくということがあります。これに関しては、薬での治療によって改善が期待できます。
症状のイラスト	04:55	N 病によって日常生活が困難になることもありますが、薬によって改善をすることも可能です。その一方で
金子准教授の顔 陰性症状の図		医 自発的に行動することが難しくなってしまう症状があります。これを陰性症状といたりするんですけども、この症状が徐々に強まっていきますので、日常生活が自発的に買い物に行こうや料理を作ろうや仕事をしようなどが思

画	TIME	ナレーション
陰性症状イラスト		えなくなってしまう方が多くいらっやって。サポートがないとだんだん何もできなくなってしまうという方が全体の数割います。
男性2人顔	05:45	N 自発的に行動することが難しくなり、サポートが必要になる方が多くいます。
テロップ 「市村 康」	05:55	N 実際にはどのような症状があるのでしょうか。
「小川 貴之」	06:00	N 統合失調症の症状に苦しめられた経験のある 小川 貴之（おがわ たかゆき）さん、 市村 康（いちむら やすし）さんにお話を伺いました。
小川さん顔		小 具体的な症例で言うと、周りがヒソヒソ話している声とかが全部自分の悪口じゃないかと思ひ込んでしまっ、なんか言われてるなとか。どんなに逃げようとしても自分を否定するようなメッセージとか攻撃的な言葉とかが常に追いかけてくるような感じでしたね。
小川さん顔アップ	06:36	N 小川さんは、ヒソヒソと声が聞こえ、その声から逃れられない体験をしたというのです。
市村さん		市 一番大きかったのが妄想の症状で、その当時付き合っていた彼女が今こうしているに違いないだったりとか、親しい友人が自分の事を考えてこういう行動をとっているに違いないだとか、そういう様な妄想がありました。
市村さん手元アップ	07:23	N 市村さんが悩まされたのは、身近な人が自分に特別な行動をしていると思ひ込む妄想…そして発症したきっかけについてもお話していただきました。
市村さん		市 発症のきっかけが1年生の時だったので就職活動と卒業論文が重なってしまっ、そこでストレスが大きくなっ、かかっ、かなという風に思っ、ております。
男性1人引き	08:01	N ストレスが発症のきっかけになることもあるそうです。
関さん 目元のアップ	08:08	N そして、とりわけ壮絶な体験をされた方がいます。 関 茂樹（せき しげき）さんです。
シルバーリボンのサイト 関さん紹介	08:19	N 関さんは現在、精神疾患の方々の支援を行っているシルバーリボンジャパンの代表を務めています。
新聞 「病気になったから今がある」	08:31	N 19歳の頃不眠など体調に明らかな異変を感じ、その後、統合失調症の診断を受けたそうです。

画	TIME	ナレーション
関さん 指のアップ		関 やっぱり精神疾患って目にみえるものでもなくてどれくらい苦しんでいるのかってということが客観的には分からない。で、説明してもなかなか理解してもらえなかったから、私は自分自身の指を切り落とすっていう様なことをしたんですけど。それであの切り落とした指を今は指がない状態ですけども、包帯ぐるぐる巻きの状態で家族が目にした時に、本当にそれだけ追い詰められてたのかってことをです、悟ってくれて。それであの家族からの関わり方もすごいなんですかね、すごい寄り添う様な理解してくれる様な形で。今までは否定だったりなんだったりっていう関わり方だったのがガラッと変わった。それによって自分も少しずつ、もしかしたら自分も安堵したっていうのもあるかもしれないし。
女性頭抱えている テロップ「幻聴…」	09:35	N 幻聴や妄想、ひどい場合には自らの体を傷つけてしまう…
病院インサート	09:44	N 体の内側で進行していく、現実ではない… 09:50 N もう一つの恐ろしい世界。 09:55 N こうした、統合失調症などの精神疾患は、見た目には分からないため、あらゆる誤解や偏見を受ける事があるそうです。
金子准教授 誤解・偏見の図 「社会生…」		医 統合失調症の患者さんというのは不気味だという誤解あるいは暴力的なのではないかという誤解、ある程度進行していくと日常生活が困難になる方が多いので、それに対してなまけなのではないかというのが誤解を受ける方が多いと思います。誤解・偏見というのは、多くの患者さんにマイナスの影響があると思います。社会生活を送っていくのが自信が無いからできないと思っていく方が多いと思いますし、心無い言葉を言われた方は、これ以上社会生活を送ろうやこれから社会復帰をしようと思えなくなる方が多く、自分の殻に引きこもってしまうという方が多くいらっしゃいます。
誤解・偏見イラスト	11:12	N 誤解や偏見が出発点になって、社会から阻害されてしまう人も少なくないのです。
手元から引き	11:24	N 小川さんにも、実際に偏見や誤解を感じた経験があったそうです。
小川さん		小 もうそんなに元気なのに何で障害者なんかやってるの？ みたいな。もう全然病影の影響とかないように見えるのに、なんでそれを障害者として思って、何かその障害者枠でなんかいるんだ？ みたいな。向こうは褒め言葉のつもりで言ってるって言うんですけど、こっちからしてみれば、いや、それはあなたの無理解だからって思うんですけど。そういったことで結構偏見というか、やっぱちょっと当事者の認識と世間の認識がずれてるなっていうのを感じたりとかはしますね。

画	TIME	ナレーション
	12:01	N 症状が見た目では分からないため、あらぬ誤解を受けたそうです。
シルバーリボンイベント 風景 男性	12:11	N こうした現状を変えるべく立ち上がった団体があります。
シルバーリボンのサイト	12:19	N シルバーリボンジャパンという支援団体です。
	12:23	N シルバーリボンとは、脳や心の不調が原因となる疾患およびメンタルヘルスへの理解を深め促進することを目的とした運動のシンボル。
	12:40	N シルバーリボン運動は、こうした病気に対する誤解や偏見を減らすための活動をしています。
男性が話す姿		関 皆が障害があるがなかろうが、皆が前向きに元気よく楽しく生活できるそんな社会を作っていくのが大事になってくるかなと思いますし
タワーのライトアップ映像	13:09	N 病気を抱える本人やその家族が安心して過ごせるように…その思いは、地域を越えて、日本全国に広がっています。
新聞「くらし」の記事	13:25	N そんな中 2025年1月、朝日新聞で統合失調症についての特集記事が数週間に渡って連載されました。
新聞	13:41	N 「統合失調症、その先へ」
朝日新聞外観	13:47	N 「なぜ、こうした特集が組まれたのか」その意図を探るべく、この記事の編集者である松本 千聖（まつもと ちさと）さんにお話を伺いました。
松本さん		松本 メンタルヘルスの病気について取り上げてほしいっていう声が以前からいただいていたんですね。統合失調症って今まで表に出てきにくかった病気だろうと思いますし、実際に取材の中で家族でも統合失調症の人がいると絶対に言わないとか周囲の人に隠すとかがあるということを教えてくれた。メンタルヘルスの病気の中でも、それぞれの苦しみがあるんだけど特に今まで取り上げられてこなかったり、話を聞いたりすることが特に少ない病気かなと思って、
新聞インサート		
新聞		
	15:01	N この連載記事には、多くの方から反響があったそうです。
新聞インサート 「反響編」		
新聞インサート		松本 いただいた内容は、最初に思っていたようにこの病気を取り上げて欲しかった。取り上げてくれて良かった。という患者さんからのお手紙ですね。知られていない無理解があるということ。もっと知って欲しかったので、新聞で取

画	TIME	ナレーション
新聞インサート 「身近な病」	15:42	N これまで語られることが少なかった病。新聞で取り上げられ、多くの人が知るきっかけとなりました。
松山市駅		
電車	15:54	N そして、私達が向かったのは、愛媛県松山市。
「風のねこ」看板	16:01	N ここに、とある団体があります。
作品インサート	16:06	N 「風のねこ」
作品の紹介	16:11	N ここでは、精神疾患や精神障がい者の方たちが手仕事をしながら自分のペースで過ごしています。
パンフレット	16:24	N これは工場で破棄される予定だったタオルの切れ端で作られた作品
「私の幻聴幻覚プロジェクト」	16:35	N さらに、風のねこはあるプロジェクトにも参加しています。
	16:43	N それが「私の幻聴幻覚プロジェクト」です。
幻聴幻覚カード インサート	16:51	N 文化庁の委託を受け、幻聴幻覚などの症状を表現したカードの発行・展示会・演劇などが行われてきました。
冊子表紙		N この冊子内の漫画に登場している方がいます。
男性のイラストのアップ	17:06	N 西岡 裕介（にしおか ゆうすけ）さんです。
	17:10	N 西岡さんは現在も統合失調症を患っています。
西岡さん	17:16	
漫画 女の子のキャラクターアップ		西 私の名前はね、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）っていうの
漫画インサート	17:30	N 木花咲耶姫（このはなさくやひめ）さんとは… 西岡さんの中にある幻聴幻覚です。
漫画のスクロール	17:39	N その木花（このはな）さんが語った言葉を、西岡さんが代わりに伝えてくれています。
	17:47	N つまり、私たちは西岡さんを通して木花さんの声を聞いているのです。

画	TIME	ナレーション
西岡さん	18:05	西 ゆうちゃんね、トンチンカンなことしか言わないからね、私がほとんど喋るわ
		N さらに木花（このはな）さんが、西岡さんについて思っている事をお話してくれました。
西岡さん		西 ゆうちゃんぶっちゃけ言うと、統合失調症じゃなくて、統合失調症風なのよ。ゆうちゃんね、もう限界なのよ、精神的に。でもね、ゆうちゃんの器が大きいから統合失調症じゃなくて、統合失調症風で止まって、私が幻聴として現れるから、一応症状としては、私が出ることを幻聴がという。でも違うのよねちょっと。神だから。ゆうちゃんから出てきたものじゃなくて、神から出てきたもので。普通の統合失調症って自分から出てくるの。その違いが大きいわ。
漫画 羽が生えたイラスト		N このように取材中は木花さんがお話ししてくださいました。ところが…
		森 他にもたくさんスサノ王さんとかいるけど、西岡さんを攻撃する人はいない？
		西 いないですね。最初の時にお前、俺に勝てんのかとか言われてましたけど
漫画 話している姿	19:37	N 私たちが話しかけると木花（このはな）さんが応じてくれますが、風のねこの方が声をかけると、西岡さんご本人が姿を見せて話してくれます。
漫画静止画	19:53	N 相手によって、木花さんと西岡さんが入れ替わるのです。
漫画「共に生きています」	20:02	N 多くの人が幻聴幻覚に苦しめられる事が多い中、西岡さんは幻聴幻覚と共に生きています。
人形劇	20:15	N そしてこのプロジェクトの一大イベントが11月22日に松山市で行われました。
人形劇 お祭りの場面	20:29	N 統合失調症という病気への理解を促す目的で行われた人形劇です。
森本さん	20:37	N プロジェクトの中心メンバーである森本しげみさんに劇のあらすじを伺いました。
相関図		森 (内容は) モデルがいらっしゃって、実際、RYOさんという方とトラジという、犬がいるんですけど、この2人が中心で、そして世間の門って門番がいるんですけど、やっぱり世間の一般常識になかなか入れないで、入らないといけないと思うほど苦しい。その葛藤が描かれていて、その人形劇の中に朗読が散りばめられていて、この朗読は当事者の方々とヒアリングして、その人たちが語った言葉なんです。それをもうご本人がご自分のことを自分で生で、朗読で語る。その朗読は本当に当事者の方々の生の体験と思いなので、とてもリアルな内容になっています。

画	TIME	ナレーション
口のキャラクターを追い 払う場面	22:02	N この人形劇は、統合失調症と共に生きる一人の方の経験を元に、その日常や 感じている世界を可視化し、表現した舞台です。
男の子の キャラクター	22:17	N 主人公は、統合失調症を患った「りょうさん」という少年。 劇 僕まだやれるんよ、教えてくれたら僕は調子が悪くないけん
犬と戯れる	22:34	N りょうさんは愛犬「トラジ」の声が幻聴として聞こえています。 劇 りょうくんトラジの声が聞こえてるの？幻聴だって薬増やされちゃうよ
犬と話す姿		劇 人間は呑気だね、人間が犬の言葉がわからないからって、犬も人間の言葉が 分からないと思ってる。 劇 当たり前だよ。
頭を叩く場面	23:03	N また、この人形劇には、精神疾患への偏見や差別についても描かれています。
偏見のシーン 「1人暮らし」		劇 Q こんにちは、僕、一人暮らしできますか？ A お客様、申し訳ありませんが、精神障害者の方にはお部屋はお貸しできな いことになっております。
「お葬式に行けない」		劇 ごめんね～りょうはお葬式に行けないのよ。僕、おじさんに最後にお礼言わ ないと…りょうくんはダメだよ。わかっちゃうよ。そうそう精神病院に入院 してたって知れたら、あっちの家がなんて言うか。
「病院で手術できない」		劇 この人は、精神病がありますね。手術はうちの病院ではできません。付き添 いはできます？興奮したらうちの病院では対応できないですから。夜は看護 師も少ないんですよ。精神病の患者さんは精神科のある病院に行ってください。
	24:04	N そして、この人形劇で特に印象的に描かれている場面。それが…
世間の門登場	24:14	N 「世間の門」(せけんのもん)
世間の門	24:18	N 「障害がある人が社会に入る難しさ」を可視化した場面です。
門番や主人公の動き	24:25	N 「世間の門」の前には、社会に適合する人間かどうかを判断する「門番」がいます。
門番セリフ		劇 俺はこの街の門番さ。俺の仕事はあんたを測る事だよ。
門を通ろうとする場面	24:47	N りょうさんは、世間の門を通ろうとします。しかし、どうしても通ることが できません。

画	TIME	ナレーション
門番セリフ		劇 おいらの予想通り。あんたは全く世間に当てはまりやしない。あんたは精神障害者だ。
門が壊される	25:10	N そして劇の終盤、世間の門が壊されます。
男のキャラクターセリフ		劇 僕、やっぱりいいや。このままでいい。
	25:25	N りょうさんは、壁にぶつかりながらも「病気である自分を受け入れる」という選択をしたのです。
会話している場面	25:35	N さらに、この人形劇では当事者の方々による実体験の朗読も行われました。
朗読者達の入場		朗 僕の幻覚や幻聴っていうのは、その場にいる人がちょっと変わる感じ。喋っていない事を喋っていたりして、嘘と現実との区別が付きにくい。
男性		
男性		
女性		朗 統合失調症は社会における損失だといって怒りを覚えたんですけど。
朗読シーン		朗 自傷行為の時にキッチンハイターを飲もうとして、それを心療内科の先生に預けて、カッターで手を切ろうとして、今は、グループホームの方に預けてないようにしています。
男性	26:32	N 思わず息を呑むような体験談が次々と飛び出します。
	26:41	N そして、未来への願いを口にする当事者たちの言葉とともに、劇は静かに終盤へと向かっていきます。
劇団員挨拶		郎 何十年後かには、徐々に自然に人と話せる様になればいいな。
集合写真		
	27:02	N 自らの症状を作品として表す—— その選択自体が、どれほど大きな覚悟か。
	27:15	N その決断に支えられて、私たちは“知らなかった世界”に触れることができました。
4分割映像	27:28	N 取材にご協力いただいた方々に今伝えたいことを伺いました。
森本さん		森 やっぱりその人、その人のパーソナリティにちゃんと合うと、そんな偏見とかがってというのは簡単に取れていくっていうのは、当事者の人たちの声をちゃんと届ける、それが日常になるような、そういう文化がこの地域でできたらいいなと思っています。

画	TIME	ナレーション
市村さん		市村 社会として人の苦しみを理解し合おうとしながら繋がってほしいなっ て思いがあります。
関さん		関 周りからの無理解だったりとか偏見だったりとかそういったことに苦しんで いる人達が本当にあの今の状況から必ず脱する事ができるっていうことを強 く訴えていきたいと思います。
漫画男性キャラクター アップ		
漫画	28:31	N 病気があっても、その人はその人。
西岡さん		西 共に生きてるわ。みんなそうよ。今日はみんな仲間よ。
漫画	28:46	N それは欠けた部分ではなく、その人の個性なのだと感じました。
3人	28:56	N 統合失調症の方々の見ている世界は、十人十色。
人形劇の1シーン	29:04	N その世界を知ることが第一歩。
寄り添い合う2人	29:12	N 二歩目は、寄り添うこと
	29:19	N そして理解すること。
手を振っている姿	29:25	N この作品がそうした手助けになることを願って…
円陣構え		
円陣		人生はエンターテインメント、自分らしく面白がったらええねん
鳩のイラスト		
タイトル 「私が見ている世界」		

芸術学部長賞受賞

○卒業研究(音響作品)副論文より

目次

はじめに

第1章 制作における担当について

第2章 制作過程について

おわりに

「ニンゲン」の制作から 見たもの

27A030-4
田中 咲希

27A058-4
名倉 小遥
(共同制作者)



作品は上記の二次元コードから視聴可能です。

期限：2027年3月末日

はじめに

本稿は卒業制作「ニンゲン」について、その制作意図、コンセプト、技術面、到達目標、および制作を経ての気づき、学びについて述べたものである。

本作のテーマは「人間味」で、「お笑い」をモチーフとしたコメディヒューマンドラマである。昨今、AIの発達は目覚ましく、私たちの生活に浸透しつつある。日常を便利にしてくれている一方で、制度が間に合っておらず問題も多く発生している。生成AIによる複製や権利問題、それによる絵師や作家が疑惑をかけられ引退してしまう例も後を絶たない。そこから着想を得て、今後のAIとの関わり方やAI生成物が増える中での「人間味」とは何かを考えるため、本作を企画した。

第1章 制作における担当について

筆者は本作において「企画・脚本」「音響効果」「音楽」を担当した。

企画・脚本

1. キャラクターについて

筆者は脚本を執筆するにあたって、AIと人間の違いを考察した。そこで気が付いたことは、「する」と「させようとする」の違いである。AIにお題を送り「泣ける話を書いて」と指示すれば「泣かせる話を作る」ことはできる。しかし、AIは「泣く」ことはできないので、自身の経験に基づいた話ではなく、学習範囲から話を作るため、どこかズレた話になってしまうこともままある。しかし、自分では思いつかないアイデアが出てくることもあり、驚く。本作のAIロボットイトーには、そうしたAIの特徴を盛り込んだ。

対する主人公の順平は、イトーと対極の存在になるようにした。確かにAIは無駄なプライドで己を縛り、時間を浪費しない。これとは対照的に順平の性格は、お笑いへの想いや理想が強く、自分自身への期待と諦観、こだわりとプライドで身動きが取れないという設定にし、AIにとっては「無駄」と思える要素を多く入れた。

- ・順平 ……AIが登場する以前の人間（過去）
↓（ここが対極）
- ・イトー ……近未来、AIそのもの（未来）
- ・幸太郎 ……AIに適応した現代人（現在）

この三人の異なる視点や価値観が本作のなかに化学反

応を生み出すことを意識した。そして、その他の登場人物三人にはそれぞれ異なる「人間味」を持たせることで、ヒューマンドラマとしての厚みを持たせた。

- ・マネ ……優しいが流されやすい
- ・所長 ……好奇心と冷酷さ
- ・店主 ……人情

2. 脚本について

本作はコメディということ意識し、全てのシーンでテンポと間を大切に、そして何よりシリアスになりすぎないように注意した。

先行事例として、テレビドラマ「リーガル・ハイ」（フジテレビ、古沢良太脚本）を参考にした。コメディでありながら、シリアスな裁判シーンと両立させており、なおかつ会話やシーンの切り替えが巧みで笑いを誘う構成は、自身の作品のテーマとモチーフを活かすために必要だと考えた。

脚本の中で苦労したのは、本作の根幹にあたる「お笑い」のシーンだった。特に、順平とイトーのどちらをボケとツッコミにするかは悩んだ。

そこで、知り合いのつてを頼り、お笑い芸人の伊藤ひろきさんに話を伺った。その中で、AIであるイトーがツッコミの場合、客の興味関心はイトーに向くため、ボケに集中してもらえずウケない可能性が高い、という意見をいただいた。これを受けて、イトーをボケ、順平をツッコミにすることにした。

そして、本作でかねてより挑戦したいと考えていた「プロロマンス」に挑んだ。「プロロマンス」とは、英語の「brother（兄弟）」と「romance（ロマンス）」が合わさった言葉だ。主に男性同士の恋愛感情ではない、深く強い友情関係を指す。

演出

役者の芝居は通常、表情や視線、体の向きといった複数の要素が組み合わさって成立するが、音声のみの作品ではそれらすべてが声に集約される。そのため、「声だけで成立する身体性」を強く意識してもらう必要があった。本読みやリハーサルでは、役者の呼吸や発話の癖を細かく観察し、相手の台詞に対する反応速度や、感情が自然に伝わる間の長さなど、普段は意識しにくい要素を丁寧に擦り合わせた。複数人が同時に掛け合うシーンでは、スタジオ内を作中の店内に見立て、立ち位置をテープで示すことで距離感を共有し、台詞が重なる部分については入念にリハーサルを行い、息を合わせられるよう

工夫した。

また、声質の違いによってキャラクター同士の関係性を表現することにも挑戦した。イトーは後処理でアンドロイドのような声に加工する予定であったため、言葉が埋もれないよう明瞭な発声を求めた。AIでありながら人間らしさも兼ね備えるという設定から、「感情はあるが、感情表現は人間ほど滑らかではない」というニュアンスを意識して演じてもらった。一方、順平には人間らしい葛藤や迷いといった感情の揺れを丁寧に表現してもらい、両者のコントラストを明確にした。この演技の差が作品全体にメリハリを与え、聴き手の没入感を高める効果につながったと考える。

音響効果

作品のコメディシーンとシリアスシーンの切り替えを軽快にし、わかりやすくするため、効果音選びと選曲に特に時間をかけた。

音作りで新たな発見だったのは、「笑い声」である。ギャ録りした笑い声をただ張り付けるだけではリアリティに欠けた。その理由を分析してみると、通常お笑いライブに来ている人たちの笑い声は、芸人のボケをきっかけに笑いが発生し、その後のツッコミを聞くために一瞬笑い声が弱まった後でまた笑いが起きているのだ。この分析を踏まえて、ギャでは爆発的な笑いがまだらに発生する状況にならないため、ギャ録りした笑い声と効果音CDからも様々な笑い声を集める必要があった。

音楽

順平とイトーが衝突し、和解する場面では、冒頭を悲壮感ある音楽で描いたため、後半では雰囲気異なる「エレクトロ・スウィング」というジャンルの音楽を使用した。エレクトロスウィングとは、1920～30年代のスウィング・ジャズやヴァンテージ・ミュージックの要素、EDM、ハウス、ヒップホップといった現代のエレクトロニック・ダンス・ミュージックを融合させた音楽ジャンルである。懐かしさと新しさが同居する「踊れるジャズ」とも言われる。

第2章 制作過程について

フォーリー収録

録音スタジオCにて数回に分けて収録。使用マイクは SENNHEISER・MKH416。



① 【フォーリー収録の様子】

〈制作した音〉

・各登場人物の足音

本作では台詞の裏にも足音を入れている。その理由は、会話のみ続いてしまうと、単調になり、キャラクターの動きをより表すために入れることにした。

事務所内、街中、砂利道と場所もよく変わるため、それに合わせて踏む素材も変えた。スタジオ内の床は靴底のゴムの摩擦音が室内感を表していたため、主に事務所のシーンで使用した。

・配膳ロボットの稼働音



② 【IKEA 手回し式 LED ライト】

もともとはイトーの四肢の稼働音を作成するために持ってきたものだったが、連続して回すことで少し古びたモーター音に聞こえ、使い古された旧式配膳ロボットのイメージに当てはまると思い、使用した。

・たたく音やつかむ音

手首など骨の近くは音が強くなりやすいので、手首をつかむシーンであっても肉のある腕をつかんだ。シーンによっては手をつかむだけでは叩いた音に聞こえるため、衣擦れの音を重ねることでイメージに近づけた。

漫才のシーンの叩く音（ツッコミ）は、丸めたノート

を叩くことで派手さを表した。背中を叩くシーンは、手をはじく・つかむ音と同様、力加減をはからなければ強い音になりすぎてしまうため、衣類を重ねて自身の太ももなどを叩いて調節した。

・椅子の音

当初はキャスターのついていない普通の椅子を使っていたが、音が軽かったため、キャスター付きの椅子に変更した。結果として、急に立ち上がる瞬間にキャスターの引掛かりと転がる音が加わり、勢いと臨場感のある音を作ることができた。

・紙の音

店主がビラを配る音は、チラシとコピー用紙を比較して、後者のほうが、はっきりとした音だったので、こちらを採用した。

・衣擦れ音

音の立ちやすいナイロン・ポリエステル製の布を主に使用し、シーンによっては綿素材も使用した。布をこすり合わせることで音が細くなり、布団や洋服の音などにも使った。また、布を勢いよく開くことで胸ぐらをつかむ音を表すこともできた。

・食器類の音

大小様々な食器、ジョッキ、お箸を使用し、居酒屋の環境音に混ぜることでシーンの臨場感を表した。

・のどごし音

実際に水を飲み、役者の演技に合わせて音を鳴らした。

・缶を捨てる音



③ 【ゴミ箱の音の反響表現】

ただ缶を投げるだけでは、ゴミ箱に投げ捨てた時のような反響が出なかったため、バケツの中にジョッキを二つ入れて、程よく音が響くように工夫した。また、缶は小さいものではなく大きいものを使うことでバウンドさせ、音を立てて収録をした。

おわりに

まず本作を制作するにあたってご協力いただいたすべての方々へ深く御礼申し上げる。

自身が近年抱き続けてきた生成 AI に対する漠然とした不安感や、この先クリエイターがどうになってしまうのか、またどう受け入れていくべきなのかという思いを、自身の中で紐解き、咀嚼した末に、本作「ニンゲン」は生まれた。最近、ニュースを騒がせている生成 AI を取り上げるにあたり、モチーフを何にするか悩んだが、「お笑い」という素敵なモチーフにしようと思ったのは、AI に対して不安や恐怖ではなく希望を見たいと思ったからである。AI という現代的なテーマとコメディを掛け合わせた作品づくりは、自身にとって非常に挑戦的なものだった。制作を進めていく中で、人間と AI の関係性をどう描くべきか、あるいは“人間味”とは何かという問いが、単なるテーマではなく“自分自身に返ってくる問題”として立ちはだかった。脚本・演出・編集の全ての工程で、その問いと時間をかけて向き合い、自分の創作観を見つめ直した。特に、AI の合理性と人間の不完全さを対比させる中で、「不完全だからこそ人間は面白いのではないか」という視点を新たに得られたことは、本作最大の収穫だっだと感じている。

人の数だけ存在するこの問題の答えを考えるきっかけになれば幸いだ。

放送学科特別賞受賞

○卒業研究(音響作品)副論文より

目次

はじめに

第1章 自身の担当について

第2章 制作過程について

1. 収録

2. 編集

第3章 作品分析

おわりに

声に宿る人間性

—「ニンゲン」の制作を通して—

27A058-4
名倉 小遥

27A030-4
田中 咲希
(共同制作者)



作品は上記の二次元コードから視聴可能です。

期限：2027年3月末日

はじめに

出発点

近年、AI技術の発展により、私たちの生活や労働環境には急速に技術革新がもたらされている。業務効率の向上や人手不足の解消といった社会的課題を解決する有効な手段として期待される一方で、人間の役割を代替するものになりつつある。

そのような変化を目の当たりにする中で、筆者は次第にAIと自分自身を無意識に比較してしまうようになった。どこか拭いきれない劣等感や言い表せない違和感をうまく整理できないまま、「人間にしか持ち得ないものは何か」「AIには担えない人間の役割とは何か」という問いが、自然と生まれていった。

到達点

制作を進める中で、筆者は「人間であること」をあらためて考えるようになった。効率や正確さが重視される現代社会において、私たちはしばしば無駄や遠回りを避けたがる。しかし、言葉にならない感情や他者との関わりの中で生まれる戸惑いや葛藤といった揺らぎは、確かに存在している。その揺らぎの中にこそ人間らしさの本質があるのではないかと考えた。

第1章 自身の担当について

技術

本作は会話劇の形式のため、会話のテンポ感及びリスナーにとって聴取しやすい音声表現を実現することを、制作上の技術的課題とした。

編集段階においては、会話の流れが自然に感じられるか、聴き取りづらい箇所が生じていないかを確認し、細かな調整を重ねていった。

これらは基礎的な技術だが、わずかな差異が作品全体の印象を大きく左右する。音響的な工夫によって場面の印象を支えつつも、最終的には台詞のやり取りや感情の揺れを自然に伝える編集を目指した。大学生活最後の制作になることを踏まえ、基礎にあらためて立ち返り、音響表現の精度を高めることを意識した。

キャスティング

主要な登場人物は声優事務所に所属する役者を起用し、その他については演技経験のある知人に依頼した。

起用にあたり、作品内における各キャラクターの性格や感情の幅などを整理し、声の方向性を明確にする作業

を行った。

明智順平：青葉直樹（青二プロダクション）

イトー：菊田千瑛（賢プロダクション）

西室幸太郎：大川陽之将（青二プロダクション）

市川あやの：八木沙月

松尾貴之・芸人①：田代哲哉（アマチュレート）

店主・芸人②：西岡龍澄

第2章 制作過程について

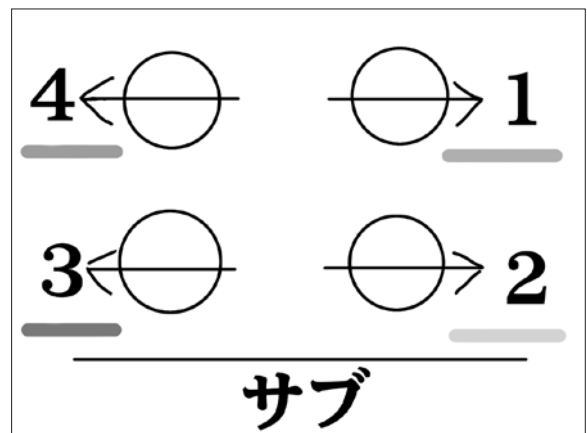
1. 収録

台詞

9月18日、録音スタジオB

使用マイク：NEUMANN・TLM170 × 4本

図1のようにマイクを配置した。登場回数の多い順平については3番マイク、イトーについては2番マイクを使用し、演出の指示を確認しやすくした。ギャについてには主に3番マイクを使い、他のマイクも同時に収録した。



【図1：マイク配置図】

2. 編集

台詞

すべて聴き返し、全体のテンポや感情の流れを意識しながら間の調整を行った。音声の加工を複数施す予定であったため、編集作業はモノラルトラックのみ用いて進めた。

イトーの音声加工は「攻殻機動隊」などを視聴し、イメージ共有をした上で、Adobe社のAuditionのメニュー、「変調」エフェクト内のフランジャーにある「ロボット」プリセットを活用した（図2）。ミックスを完全にウェットにすると人間味のない機械的な音声となり、役者本来の声の魅力が損なわれてしまうため、ミックスの値をイ

トローは30%、配膳ロボットは35%に設定した。これにより、人間らしさを残しつつも、イトーの「高性能人型アンドロイド」というキャラクター性を、音声によって明確に表現することができた。



【図2：イトーの音声加工】

シーン4の幸太郎「機械の方がまだおもしろいわ」は順平の中に強く残る言葉として、シーン7の所長「エンタメ業界も順応していかなきゃ」、シーン9の幸太郎「お前、おもしろくないねん」は、物語の中で想起される言葉としてリフレインする。これらのセリフにはリバーブ処理を施した。ただし、各場面における心理的な距離や印象は異なるため、残響の長さ、リバーブ量をシーンごとに設定した。



【図3：リバーブ処理】

音楽

タイトル及び後クレジットに使用する楽曲については、篠原湊大氏に制作を依頼した。依頼にあたって、「吉本新喜劇のように明るくキャッチーで、1分程度がループ可能な楽曲」という具体的な方向性を提示した。

後クレジット用の楽曲に関しては、作品終盤の漫オシーンから使用している。最後の漫オシーンは、物語の締めくくりであると同時に、エンドロールに近い役割を担っている。そのため、台詞や効果音と重なった際の聴こえ方にも配慮した。

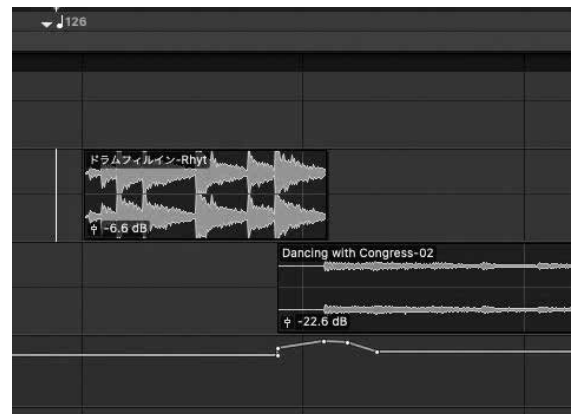
既成の楽曲については、使用範囲の切り取り及び音量調節を行い、作品全体の音響バランスに配慮した。下記楽曲については、場面ごとの感情表現をより明確にするため、追加で編集および加工を施した。

・シーン9 順平の苦しみ

会話の展開や感情の起伏に合わせて、楽曲構成を再編集した。順平の人間味が強く表れる場面ではピアノの高音域を使用し、不安定さを音として表現することを意識した。一方、イトー（機械）の完璧さに対する劣等感や羨望が語られる場面では、旋律に盛り上がりのあるフレーズを使用。さらに、イトーが「自分には人間らしさが足りない」と吐露する場面では、再びピアノの高音部分を流すことで、順平の感情とイトーの言葉を重ね、一つの流れとして綺麗にまとめることができた。

・シーン9 順平の決断

場面転換に対して音楽の入りが急すぎたため、新たにドラムのフィルインを追加した。これにより、順平がイトーとコンビを組む決断をする重要な瞬間をより印象的に際立たせる効果をねらった。また、フィルインのテンポが既存楽曲と異なっていたため、元の楽曲のテンポであるBPM126に変更し、全体の統一感を損なわないようにした。



【図4：フィルイン追加と曲冒頭の音量】

・シーン 17 居酒屋

楽曲終盤の盛り上がりよりも印象的になるよう、台詞が終わるタイミングに合わせて音量を上げ、リバーブ処理を施した。一方で、低音域の残響が強くと不協和音が生じ、シーン全体の雰囲気や損ねてしまう問題があった。そのため、必要以上の余韻を残さず、最終的にはカットアウトによって音を締めた。



【図5：シーン 17 リバーブ処理】

力のもとで作品を形にできたことを心から感謝する。制作の過程で、技術的な課題や予想外のトラブルに直面することも多く、決して順調と言えるものではなかった。しかし、その一つひとつと向き合い、乗り越えていく中で、表現に対する向き合い方や音響制作における基礎の重要性、そして「人と共に作品を作ること」の難しさと面白さを強く実感した。

私も順平のように、AI に対して劣等感や羨望を抱く日が来るのかもしれない。しかし、そのような感情を抱くこと自体が、人間である証ではないかと思っている。完璧ではないからこそ悩み、迷い、感情に揺さぶられる。その不完全さこそが、人間が人間である所以ではないか。

AI と共存する未来において、効率や正確さでは測ることのできないものに目を向け、その存在を認め続ける姿勢こそが、重要になるだろう。本作を聴いてくださった方が、自身を静かに振り返るきっかけとなれば嬉しい。

第3章 作品分析

創意工夫した点

コメディとシリアスという異なるトーンを明確にするため、会話のテンポおよび効果音・楽曲の使い方を意識した。コメディ場面では会話のテンポを意図的に速め、印象的な効果音や楽曲を積極的に用いることで場面の雰囲気を強調し、作品全体の軽快さや滑稽さを演出した。一方、シリアスな場面では間を意識し、雨音などの環境音やピアノ曲といった音楽素材を使用することで登場人物の感情や場面の緊張感がより伝わるよう工夫した。

制作を通しての反省・学び

収録中に柔軟な判断が十分にできなかったことが反省点として挙げられる。編集段階で新たなアイデアが浮かんだものの、台本に記載が無く、類似した音声素材も収録をしていなかったため、断念したことがあった。具体的には、息遣いによる表現である。台詞収録が1日しか設けられなかったからこそ、後悔の残らないよう、その場で機転を利かせた収録を行うべきであった。

一方で、現場で得られた学びもあった。特に、収録環境の雰囲気が作品のクオリティに大きく影響を与えることを、今回の経験を通して実感した。収録中、役者の表現に対する熱量が非常に高く、キャラクターの感情変化に応じて台詞の言い回しを工夫し、より表現が伝わるよう発展させる場面を多く見た。

さらに、休憩時間を含めたコミュニケーションを通して相互関係が深まり、信頼関係が構築されたことは、制作する際に、良い作用をもたらした。

おわりに

大学での学びの集大成として、田中咲希と制作できたこと、素晴らしい役者の皆様と出会い、多くの方々の協

芸術学部長賞受賞

○卒業論文

移住PR動画の表象から考える 自治体広報の課題と限界

27A094-8
仁科 ゆう

目次

序章 問題意識と研究目的

- 1 背景
- 2 問題意識
- 3 研究目的
- 4 本研究の構成

第1章 移住 PR 動画の内容分析

- 1 分析の目的と方法
 - (1) 分析対象
 - (2) 選考基準
 - (3) 分析手法
 - (4) 分析項目
- 2 全体的傾向：全国的に共通する映像表現
 - (1) 自然・環境の描写
 - (2) 生活・家族・子育ての描写
 - (3) 人間関係・地域コミュニティの描写
 - (4) 都市との対比描写
 - (5) 撮影・演出の傾向
 - (6) 総括：理想化とテンプレート化の構造
- 3 差別化の欠如とその要因
 - (1) 都市との対比構造が生む「田舎らしさ」の画一化
 - (2) 「わかりやすい映像」をつくることの目的化
 - (3) 小結：同質化を生む二重構造

第2章 地方創生と移住促進政策の構造

- 1 地方創生政策の成立と「まち・ひと・しごと創生法」
- 2 移住促進が「地方創生の象徴」となる過程
- 3 補助金と KPI が生む「やらざるを得ない」構造
- 4 「成果を示す制度」としての移住政策
- 5 小結：制度が形づくる「表現の構造」

第3章 移住 PR 動画の現状と傾向

- 「伝わらない映像」としての課題 —
- 1 “体験の語り”の演出化：リアルな声がリアルに届かない
 - 2 視聴者にとってのリアリティの欠如
 - (1) リアリティとは何か —感情的リアリティと情報的リアリティー
 - (2) 移住希望者が求める情報の実態
 - (3) 映像が描く内容とのズレ
 - (4) リアリティ欠如がもたらす影響
 - (5) 小結：情報のリアリティと感情のリアリティ

の乖離

- 3 “安心感の物語”としての地方表象
 - (1) 地方が担う「理想郷」としてのイメージ
 - (2) 「理想の物語」としての構成
 - (3) 「安心感」を生む語りの構造
 - (4) 小結：地方が“理想の物語”として消費される構造

第4章 なぜ移住 PR 動画は“届かない”のか

- 1 なぜ移住 PR 動画は移住につながらないのか
- 2 人は移住にメリットを感じていない
- 3 人口減少下における「人口の奪い合い」という構造的課題
- 4 PR 動画は“理解”ではなく“好感”を生む装置になっている
- 5 小結：移住 PR 動画が“届かない”のは構造的必然である

第5章 移住 PR 動画の今後の可能性と課題

- 1 本章の目的
- 2 本研究の総括：移住 PR 動画が抱える根本的な限界
- 3 移住 PR 動画は何を目指すべきか
- 4 制度側の課題と改善方向
- 5 結論：移住 PR 動画の限界と可能性

序章 問題意識と研究目的

1 背景

我が国では、総務省統計局の調査^(注1)によると、2010年代以降総人口が減少しており、これに加えて、内閣府「地域の経済 2020-2021」^(注2)によると若年層を中心とした都市部への人口集中が進行している。このことから地方自治体における人口減少や高齢化、地域経済の停滞^(注3)が深刻な社会問題として認識されるようになった。とりわけ、東京圏への人口流入が続く^(注4)一方で、地方では担い手不足や行政サービスの維持困難といった課題が顕在化^(注3)し、地域社会の持続可能性そのものが問われる状況にある。

こうした背景のもと、国は人口減少と東京一極集中の是正を重要な政策課題として位置づけ、2014年、「まち・ひと・しごと創生法」を制定^(注5)した。国は翌年2015年を「地方創生元年」と位置づけ^(注6)、人口減少と東京一極集中の是正を目的とした一連の施策を開始した。その中でも「地方への移住・定住促進」は重要な柱とされ、全国の自治体が地域の活性化と人口確保に向けたさまざまな取り組みを展開してきた。こうした流れの中で、地方自治体が自らの魅力をデジタル媒体を通じて積極的に発信する動きが広がりを見せている。

地域活性化センターの報告^(注7)によれば、自治体が制作・公開する PR 動画は年間約 700 本にのぼるとされており、映像を中心とした情報発信は行政広報の主要な手段となりつつある。こうした動画が実際の移住促進にどの程度寄与しているのだろうか。高橋^(注8)は、総社市の

(参考文献)

- 注1 総務省統計局 人口推計 (2024年(令和6年)10月1日現在) 結果の要約 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2024np/index.html>
- 注2 内閣府 「地域経済 2020-2021」第1章 第1節 これまでの東京一極集中の社会的・経済的要因 https://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr20-21/chr20-21_01-01.html
- 注3 ジチタイムズ編集部 2024年10月24日「地方人口減少の原因と自治体が対策すべきこと！取り組み事例も紹介」 https://www.publicweek.jp/ja-jp/blog/article_89.html
- 注4 総務省統計局「人口推移 (2023年10月1日現在) 結果の要約」 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2023np/pdf/2023gaiyou.pdf>
- 注5 「まち・ひと・しごと創生法」2014年(平成26年)11月28日公布・施行 <https://hourei.ndl.go.jp/simple/detail?lawId=0000134073¤t=-1>
- 注6 内閣府 「まち・ひと・しごと創生基本方針検討チーム報告書 ローカル・アベノミクスの実現に向けて」 <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouginoba/h27/dail/sankou.pdf>
- 注7 「地域活性化センター (JCRD) 『地方自治体の戦略的広報～動画の効果的な活用～』 (2020)」904a83084e96cbd8b3de0a52ec59eb10545bdb22.pdf
- 注8 「総社市における PR 動画の取り組みと、移住意向に与える影響について」 (2024) 高橋 俊臣 (岡山県立大学デザイン学部ビジュアルデザイン学科) file:///C:/Users/User/Downloads/12_%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%885%E9%AB%98%E6%A9%8B.pdf

事例をもとに「現実的に PR 動画全般において、単体による直接的な移住促進は、その守備範囲からは遠いところにある」と指摘している。このことは、移住 PR 動画の役割が「移住を実現させるツール」ではなく、主に“関心喚起”や“認知の拡大”に留まっていることを示唆している。つまり、これらの動画による効果には疑問が残ると言える。

一方で、国や自治体の多くは、動画による情報発信を「移住促進に資する効果的な手段」と捉え、積極的な制作と発信を続けている。さらに、内閣府『地方版総合戦略の策定・効果検証のための手引き』^(注9)では、KPIを設定し、PDCA サイクルに基づく進行管理を行うことが重要であるとされており、現在ではすべての自治体が数値目標を掲げ、その達成度を毎年度検証・公表する仕組みが標準化されている。このように、動画が重視される背景には、行政評価において求められる「成果の可視化」を容易に実現できるという特性がある。動画は再生回数や SNS での反応数など、数値化しやすい指標を設定できるため、地方創生政策における重要業績評価指標 (KPI) 評価と極めて相性がよい。そのため、移住 PR 動画は単なる広報物というより、行政の成果を示すための“測定可能な施策”として位置づけられ、メディア表現の領域にまで行政評価の論理が浸透していると言える。したがって、移住 PR 動画を単なる広報物として捉えるのではなく、地方創生政策の制度設計の中で、交付金や KPI といった仕組みがどのように動画制作を方向づけているのか、またその中で動画がどのような役割を担われているのかを改めて検討する必要がある。

本研究では、地方創生施策の中でも、特に「移住 PR 動画」を対象として取り上げるのか。移住 PR 動画は現在、多くの自治体において制作・発信されており、その本数は年々増加している。また、動画による情報発信は全国的に広がり、移住促進施策においても一つの標準的な手法となりつつある。しかし、こうした移住 PR 動画の量的な増加にもかかわらず、地方への移住者数が顕著に増加しているとは言い難い。この点に、本研究の問題意識がある。多くの自治体が時間と予算をかけて動画を制作し続けているにもかかわらず、その成果が実際の移住という行動に十分に結びついていないのではないかという疑問である。

本研究は、この「つくり続けられる移住 PR 動画」と「増加しない移住者数」とのあいだに生じているズレに着目する。なぜ移住 PR 動画は繰り返し制作されるのか。なぜ動画による情報発信は続けられているのに、移住という具体的な行動には結びつきにくいのか。こうした問いを出発点として、移住 PR 動画の映像表現や語りの特徴を分析し、その背後にある構造的要因を明らかにすることを目的とする。

2 問題意識

こうした状況のなかで注目すべきは、移住 PR 動画の“量的増加”と“内容の同質化”である。各地で動画制作が盛んになる一方で、その多くは似通った構成や語り、演出を採用している。動画の多くは、「地域の良さ」を伝えることに重点を置き、視聴者の共感を得る一方で、実際の移住促進に結びついているとは言い難い。その結果、「誰に、何を、どのように伝えるのか」という本質的な視点が欠けたまま、“動画をつくること”自体が目的化しているのではないかという疑問が生じる。自治体は、成果を可視化し、行政内部や国に対して「取り組んでいる」と示すために動画を制作している可能性がある。すなわち、移住 PR 動画は、住民や移住希望者の利益よりも、行政機関の成果を可視化する手段として機能していると考えられる。

さらに、移住施策そのものの意義についても、その妥当性が改めて問われている。移住政策は、人口減少を克服しつつ将来にわたって成長力を確保し、「活力ある日本社会」を維持するための施策として位置づけられており、その一環として「地方への新しいひとの流れをつくる」ことが国の基本目標とされてきた^(注10)。ただし、現在の日本は総人口そのものが減少局面にあるため、移住政策によって生まれる人口の動きは、必ずしも「全体の増加」にはつながらず、都市と地方のあいだで人が移動しているに過ぎないという側面も指摘できる。これは、人口問題の本質的な解決策というよりも、「全国で人口を奪い合う構造」を助長している可能性がある。こうした視点から見れば、「移住促進」という政策は、持続的な地域社会の再生というよりも、行政が成果を数値化して提示するための手段になっているのではないかという批判的な問いが浮かび上がる。

本研究では、政策的枠組みのもとで制作された移住

(参考文献)

注9 地方版総合戦略の策定・効果検証のための手引き (令和7年12月版) 内閣官房地域未来戦略本部事務局 内閣府地方創生推進室 <https://www.chisou.go.jp/sousei/about/chihouban/pdf/tebiki-20251223.pdf>

(参考文献)

注10 「まち・ひと・しごと創生『長期ビジョン』『総合戦略』『基本方針』」ウェブページ 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 https://www.chisou.go.jp/sousei/mahishi_index.html

PR 動画が、いかに地域を表象しているかを検証する。分析では、映像表現・語り・構成の特徴を通して、動画がどのような価値観や「理想の地方像」を再生産しているのかを明らかにする。さらに、地方創生の名のもとで展開される広報活動が、誰のための、何を目的としたものなのかを問い直す。

3 研究目的

本研究の目的は、地方自治体が制作する移住 PR 動画に内在する構造的問題を明らかにし、「誰のための、何のための施策なのか」という根本的な問いを投げかけることである。多くの自治体が動画を制作する背景には、国の政策方針や補助金制度などによる制度的・政策的な影響が存在する可能性がある。本研究では、こうした影響が映像表現の同質化や目的の曖昧化をどのように引き起こしているのかを検討する。

具体的には、全国の中から 54 個の自治体を選定し、それぞれが制作した移住 PR 動画を分析対象とする。分析では、①風景・自然表現、②生活描写、③人・地域関係、④都会との対比、⑤表現方法、⑥撮影・演出技法の 6 項目に基づき、定性的な比較を行う。これにより、動画に共通して見られる表現傾向を明らかにし、それがどのような制度的・文化的要因によって形成されているのかを考察する。

本研究の最終的な目的は、移住 PR 動画の構造的問題を通して、地方創生政策の実態を批判的に検討することにある。すなわち、自治体が「やらなければならないから」制作するという状況の背後にある制度的構造を可視化し、行政の成果主義が自治体の主体性や創造性にどのような影響を与えているのかを明らかにする。さらに、移住 PR 動画が本来の目的を失い、「政策評価のための証明書」として機能している現状を指摘し、「なぜ動画なのか」という根本的な問いを通して、政策と広報の関係そのものを再考することを目指す。

4 本研究の構成

本研究は、地方自治体が制作する移住 PR 動画を対象に、その映像表現の特徴と、それを規定する制度的背景を明らかにすることを目的とし、全 5 章で構成されている。

第 1 章では、全国 54 自治体が制作した移住 PR 動画を分析対象とし、分析の目的および方法を示した上で、映像内容と表現手法の定性的分析を行う。風景・自然表現、生活描写、人や地域関係、都会との対比、表現方法、撮影・演出技法の 6 項目に基づき、動画に共通して見られる表現傾向を整理する。

第 2 章では、本研究の背景として、地方創生政策の展開と移住促進施策の位置づけを整理する。あわせて、「まち・ひと・しごと創生法」や地方創生推進交付金制度を整理したうえで、自治体が移住 PR 動画を制作せざるを得ない制度的枠組みを明らかにする。

第 3 章では、移住 PR 動画がどのように地方を「理想化された空間」として描いているのかを検討する。特に、「癒し」や「安心感」といった情緒的価値がどのような語りや映像構成によって生成されているのかを明らかにし、地域固有の生活条件や課題が後景化する構造を論じる。

第 4 章では、移住 PR 動画が視聴者の好意を獲得しながらも、移住という具体的な行動変容に結びつきにくい理由について検討する。移住行動そのものの負担、人口減少下における地域間競争、制度的な評価枠組み、そして映像メディアの特性という複数の要因が重なり合う構造を整理し、「移住 PR 動画が届かない」ことを構造的問題として位置づける。

第 5 章では、これまでの分析を総括し、移住 PR 動画の限界を踏まえた上で、今後の移住広報のあり方について考察する。移住 PR 動画を「移住を決断させる手段」としてではなく、地域理解や関係形成の入口として再定義し、動画に求められてきた役割や成果指標を見直す必要性を提示する。

第 1 章 移住 PR 動画の内容分析

本章では、本研究の分析対象である自治体による移住 PR 動画について、内容および映像表現の特徴を整理する。全国の自治体が制作した動画を対象に、映像の構成や語り、描写される要素に着目し、「何が、どのように」語られているのかを明らかにすることを目的とする。

制度的背景や制作体制について論じる前に、まずは実際にどのような表現が用いられているのかを把握することで、後続章における制度分析の基盤を提示する。

1 分析の目的と方法

本章では、全国の自治体が制作した移住促進を目的とする移住 PR 動画を対象に、その映像表現・構成・メッセージ内容の共通点および差異を明らかにすることを目的とする。本研究では、各地域が本来有する文化的・地理的特性がどのように映像上で再現・表象されているのか、また同時に、同質的な演出や構成の反復によって地域固有性（「地域らしさ」）がいかに希薄化されているのかを検討する。

これにより、地方自治体が制作する移住 PR 動画に共

通する表現の画一化および差別化の欠如という現象を明確化し、次章で扱う「動画制作の現状と傾向」における構造的問題の基礎的理解を得ることを目的とする。

(1) 分析対象

本研究では、YouTube など各種オンライン媒体で公開された全国の移住 PR 動画を分析対象とする。対象期間は特定の年代に限定せず、地方創生政策が本格化した 2010 年代半ばから 2020 年代までの約 10 年間に広くカバーする動画を収集した。対象地域は北海道から沖縄まで全国を網羅し、各都道府県から少なくとも 1 本の移住 PR 動画を選定した。

(2) 選考基準

選定基準は以下の 2 点である。

- ①自治体もしくはその委託先によって公式に制作されたものであること
- ②移住・定住の促進を主目的としていること

(3) 分析手法

各動画を少なくとも 2 回視聴し、6 項目のコーディング表に基づいて場面・語り・演出を整理・比較した。特に、「いかなる生活像・価値観が“理想の地方生活”として提示されているのか」「地域ごとに描かれる要素がどのように収束・同質化しているのか」という観点から、以下の 6 項目を中心に分析を行った。

(4) 分析項目

①風景・自然表現

森・山・海・川・田畑など、自然環境の描写と象徴的扱い

②生活描写

家庭菜園、食卓、子育て、テレワーク、趣味、食文化などの日常生活の演出

③人・地域関係

「人の温かさ」「地域の支え」「面倒見の良さ」などの対人表現

④都会との対比

「東京では〇〇」「都会ではできなかった」など、都市との比較

⑤表現方法

ドラマ風・インタビュー形式・テレビ番組風・レポート風など、構成手法

⑥撮影・演出技法

ドローン映像、BGM、色調、テンポ等の演出上の特徴

これらの観点をもとに、対象動画に共通して見られる構成パターンを抽出し、全国的に生じている映像表現の均質化と地域ごとの差別化の困難さを明らかにすることを目的とする。

本章において「地域らしさ」とは、当該地域の歴史・産業・文化・生活様式に固有で他地域で代替困難な要素の表象を指す。一方「正解らしさ」とは、広報文脈において汎用的に高評価されやすい自然・家族・温かい人柄・スローライフ・自己実現等の定型的な表現として反復されている状態を意味する。

分析の結果、多くの移住 PR 動画においては、地域固有の背景や課題が前景化されるよりも、こうした「正解らしさ」に基づく表象が優先的に用いられている傾向が確認された。これらの表現は、地域ごとの条件や文脈が異なるにもかかわらず、類似した構成や語りとして繰り返し表れており、結果として映像表現の均質化を招いている。

なぜこのような「正解らしさ」が移住 PR 動画において選択されやすいのか、その背景にある要因については、次章以降で制度的・構造的な観点から検討する。

以上の分析に先立ち、本研究で分析対象とした移住 PR 動画の一覧を図表 1 に示す。本表は、本研究における分析対象動画の範囲を明示することを目的としている。以降の分析はすべて本表に示した動画を対象として行う。

2 全体的傾向：全国的に共通する映像表現

本節では、全国の自治体が制作した移住 PR 動画を対象に、映像表現の全体的な傾向を整理する。分析の結果、多くの動画において、自然環境、家族の暮らし、地域住民との交流、食文化といった要素が繰り返し用いられていることが確認された。これらの要素はいずれも、地方での生活を肯定的かつ理想的に描くための中心的な構成要素として配置されている。

こうした表現は、地域ごとの歴史的背景や社会的条件が異なるにもかかわらず、類似した構図や語りとして反復される傾向にある。その結果、個々の地域が有する文化的・生活的な差異は十分に反映されないまま、視聴者にとっては「どの地域の動画も似通っている」という印象が生じやすい構造となっている。

(1) 自然・環境の描写

多くの動画において、山・川・海・田畑・森などの自然風景が冒頭、あるいは中盤に挿入されていた。特にドローンを用いた上空からの俯瞰映像や、朝夕の時間帯を捉えたカットが多く、自然の描写は映像的に「癒し」や「豊

図表1_分析対象とした移住 PR 動画一覧

No.	自治体名	公開年	動画タイトル	No.	自治体名	公開年	動画タイトル
1	北海道 旭川市	2020年	あさひかわ暮らし～魅力的な平日～	29	大阪府 岬町	2018年	私のリライフストーリー岬町
2	北海道 江別市	2022年	移住定住PR動画 Ver.4K	30	兵庫県 北播磨	2024年	北播磨への就職・移住PR動画(移住編)
3	北海道 比布町	2022年	移住PR動画「比布で、生きる」	31	奈良県 橿原市	2024年	移住の神様ラップ「住むが”かしこし”かしはらし」
4	北海道 白糠町	2024年	白糠町移住PR動画	32	和歌山県	2024年	きっと これからも
5	青森県 平内町	2018年	『You:town 紹介編』1～2話	33	鳥取県 米子市	2021年	「住んで楽しいまち よなご」
6	秋田県	2023年	VRで秋田暮らし -冬の暮らし編-	34	島根県	2020年	「拝啓、一ヶ月前の私へ。」
7	岩手県 大船渡市	2021年	ようこそ！移住おおふなと！	35	岡山県 赤磐市	2025年	「ちようどいい」豊かな暮らし リアル編
8	宮城県 栗原市	2024年	栗原暮らしのPR事業「交通アクセス・お買い物編」	36	広島県 三原市	2021年	三原JKの浪漫【高校生と作る三原PR動画制作プロジェクト】
9	宮城県 栗原市	2025年	栗原市移住story 1～6話	37	広島県 佐木島	2022年	【移住者に聞け！】佐木島で農業と一緒にやろう！ 中村 淳（農家）
10	山形県 飯豊町	2019年	「やっぱり、飯豊で幸せになる。」	38	山口県	2025年	マイペース&マイペース山口県【山口県暮らしやすさPR動画】
11	福島県	2024年	「転職なき移住なら、ふくしま」-理想の暮らしを実現する	39	山口県 萩市	2021年	Living in HAGI 8K - 萩に住む
12	茨城県 日立市	2021年	ひたちDIARY ロングバージョン	40	徳島県 徳島市	2023年	「とくしまで住まう」フルバージョン
13	栃木県 日光市	2017年	MOMENT -鼓動する日光-(ダイジェスト版)	41	香川県	2022年	住みたい！かがわ移住予報《香川県》
14	群馬県 前橋市	2023年	前橋市移住者インタビューVol.1 西村 直明さん	42	愛媛県	2025年	えひめ南予移住プロジェクト in 内子町 #フジワランド
15	埼玉県	2024年	『はじまりの物語』 1～4話	43	高知県 高知市	2022年	高知市移住物語「ぼっち、ぼっちに。」 1～4話
16	東京都 奥多摩町	2025年	多摩地域(奥多摩町) Vol.1 -1分版-	44	福岡県	2023年	福岡県移住PR動画
17	千葉県 館山市	2017年	千葉県館山市移住促進PRムービー”館山暮らしのその先に”	45	福岡県 朝倉市	2022年	朝倉市移住定住プロモーション動画(暮らし編)
18	神奈川県 小田原市	2021年	小田原移住PR動画「おだわらでみつけたもの」 1～4話	46	佐賀県	2020年	【大自然】山暮らしも子育ても毎日がアドベンチャー【佐賀移住】
19	山梨県 笛吹市	2025年	移住定住PR動画 ちようど良い良自由(いじゅう)	47	長崎県	2018年	長崎県移住プロモーション動画「故郷は、あなたと繋がっている。」
20	長野県 諏訪市	2020年	『高校生×移住者クロストーク』2020年Ver.	48	長崎県 大村市	2019年	大村市移住・定住推進PR動画(ロングバージョン)
21	長野県 木島平村	2022年	木島平村移住PR動画	49	大分県 津久見市	2021年	津久見市移住定住図鑑
22	新潟県	2022年	にいがた暮らし・子育てPR動画「新潟の魅力に耐える～♪」	50	熊本県 玉名市	2022年	熊本の『玉名暮らし』知ってる？
23	静岡県	2023年	「静岡県への移住で実現！多彩なライフスタイル」子育て×テレワーク編(袋井市 牛丸さん)	51	宮崎県 日向市	2016年	宮崎県日向市PR動画「Net suffer becomes Real surfer」
24	愛知県 豊川市	2025年	豊川市移住PR動画	52	宮崎県 小林市	2015年	宮崎県小林市 移住促進PRムービー”ンダモシタン小林”
25	岐阜県	2023年	【岐阜県移住PR動画家族が安心できる場所で暮らしたかった】	53	鹿児島県 喜界町	2023年	【喜界島】優しさも、おすそ分け [Kikai Island, Japan]
26	三重県	2024年	わたしたち三重で暮らしています ～しごと編～	54	沖縄県 名護市	2022年	観光プロモーション動画#2 移住希望者向け
27	滋賀県	2021年	【移住】滋賀ぐらしコンセプトムービー #動画で届ける滋賀ぐらし				
28	京都府	2024年	「住むなら京都」移住プロモーション動画 vol.1 「京都」で暮らし “京都”から働く				

かさ」「ゆとり」といった情緒的価値を象徴させる傾向が確認できる。これは、自治体が「自然の豊かさ」や「暮らしやすさ」を訴求して移住希望者の関心を引こうとする戦略といえる。

自然映像の心理的効果については、既存研究でもストレス低減や情緒安定との関連が報告されている。川久保^(注11)は、自然環境の映像や音がストレスを軽減する可能性を実験的に示し、自然による回復効果は実際の接触に限らず、モニター越しの映像でも得られると述べている。また、辻裏・豊田^(注12)は、森林映像の視聴によって「快適さ」や「リフレッシュ感」が上昇することを明らかにしている。さらに篠原ほか^(注13)は、4Kや広色域といった高品質な映像条件下で自然映像を視聴した際、副交感神経活動の優位化が見られ、自然映像が心身のリラックスを促進することを示唆している。これらの知見は、自然描写が視聴者に安心感や快適さを喚起する科学的根拠を持つことを裏付けている。しかし、このような「癒しの映像」は、視聴者に一時的な安心感を与える一方で、実際に移住を検討する動機や意思決定の要因とは直結しにくい。

その結果、自然の描写が「心地よさ」や「豊かさ」といった誰にでも当てはまる一般的価値として使われ、地域ごとの自然環境の違いが十分に表現されていない。つまり、自然描写の反復は、映像表現の統一化を招き、各地域の個性を差別化できていないことを示している。

具体例

(山・川・海・田畑・森などの自然風景が冒頭、あるいは中盤に挿入、ドローンを用いた上空からの俯瞰映像や、朝夕の時間帯を捉えたカット)

①岩手県大船渡市

ようこそ！移住おおふなと！

https://youtu.be/P3h_sPk_e0I?si=zQqxO8SFBCsjgsTb



(参考文献)

- 注11 自然環境の映像と音がストレス低減に及ぼす影響 (川久保 惇, 2015) file:///C:/Users/User/Downloads/AA11430459_57_02.pdf
 注12 森林映像視聴による気分からの反応の分析 (辻裏佳子・豊田久美子, 2014) file:///C:/Users/User/Downloads/CV_20260111_BD00012385_001.pdf
 注13 高品質な映像条件が人にもたらす癒やし効果の検討 (篠原未歩・石井英里子・星野祐子・山田光徳.) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpcats/16/2/16_40/_pdf/-char/ja

②和歌山県

【和歌山県公式移住 PR 動画】きっとこれからも

<https://youtu.be/0ZZLPdcatCE?si=UHOd4tEueylVBcJb>



③長崎県 大村市

大村市移住・定住推進 PR 動画 (ロングバージョン)

https://youtu.be/L4BrNVbHjx4?si=YJV4ATU75_sAflzl



④山形県飯豊町

山形県飯豊町 「やっぱり、飯豊で幸せになる。」

<https://youtu.be/DCdTNWihkTg?si=qYWcSgddYnh9eP-p>



⑤静岡県 ふじのくに市

「静岡県への移住で実現！多彩なライフスタイル」子育て×テレワーク編 (袋井市 牛丸さん)

<https://youtu.be/xrxIPxkfl74?si=PKNQ5rwit8cH-2es>



⑥岐阜県

【岐阜県移住 PR 動画】家族が安心できる場所で暮らしたかった

<https://youtu.be/gv1hZZqLJKo?si=abIAQvp8qxeADdkU>



⑦滋賀県

【移住】滋賀ぐらしコンセプトムービー # 動画で届け
る滋賀ぐらし

<https://youtu.be/ghA-pilhbRY?si=ZB6SxIjSjycQ9T4A>



⑧兵庫県

北播磨への就職・移住 PR 動画 (移住編)

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=RtrRmeJgkKcsqqRd>



(2) 生活・家族・子育ての描写

次に顕著なのは、家族や子育て、日常生活を中心とした理想的な暮らしの演出である。多数の動画で、広い庭や公園で遊ぶ子ども、家庭菜園を行う親子、食卓を囲む家族という構図が反復され、これらの場面は「のびのびとした子育て」「家族との時間が増えた」といった語りと結び付けられている。さらに、「やりたかった仕事ができる」「自分の時間が持てる」「夢を叶えられた」といった語りに移住後の生活を“自己実現の場”として描いており、多くの動画で共通している。しかしながら、これらの場面構成は多くの場合、特定の地域固有の生活文化を丁寧に描こうとするものではなく、全国で共通して見られる「理想的な家族像」をなぞった定型的な演出にとどまっている。広い庭で遊ぶ子どもや家族団らんの食卓といったイメージは、視聴者にとって理解しやすく好意的に受け取られやすい一方で、実際の地域ごとの違いや暮らしの実態を曖昧にしてしまう。

また、これらの場面は、地域の社会構造や生活リズム、家族観の歴史的背景といった文脈を省略したまま「幸福な暮らし」の象徴として記号的に用いられている。このような定型化は、広報上の利点（わかりやすさ、共感の得やすさ）と引き換えに、地域の独自性を示す要素が十分に前面化されないという影響をもたらす。結果として、「どの地域でも同じような幸福な家族像」が繰り返し提示され、地域を特徴づける文化・仕事・暮らしの多様性が

十分に可視化されないまま、画一的な“理想の地方生活”が再生産されている。

本来、家族や生活の描写は、地域固有の生活環境・習慣・働き方を反映した多様な表現が可能なカテゴリである。しかし移住 PR 動画では、行政評価の観点や視聴者の好意獲得を優先する構造のなかで「最も理解されやすい物語」が選択されやすく、その結果として地域固有の生活文化が十分に描出されない構造が固定化しつつある。

具体例

(家族や子育て、日常生活を中心とした理想的な暮らしの演出：広い庭や公園で遊ぶ子ども、家庭菜園で収穫する親子、食卓を囲む家族など)

「映像」

①秋田県

VR で秋田暮らし 一冬の暮らし編一

<https://youtu.be/d61DnfB5yeI?si=TzeWtk4Xt2Ep6hYQ>



②山形県飯豊町

山形県飯豊町 「やっぱり、飯豊で幸せになる。」

<https://youtu.be/DCdTNWihkTg?si=qYWcSgddYnh9eP-p>



③静岡県 ふじのくに市

「静岡県への移住で実現!多彩なライフスタイル」子育て×テレワーク編 (袋井市 牛丸さん)

<https://youtu.be/xrxIPxkfl74?si=PKNQ5rwit8cH-2es>



④岐阜県

【岐阜県移住 PR 動画】家族が安心できる場所で暮らしたかった

<https://youtu.be/gv1hZZqLJKo?si=abIAQvp8qxeADdkU>



⑤滋賀県

【移住】滋賀ぐらしコンセプトムービー # 動画で届ける滋賀ぐらし

<https://youtu.be/ghA-pilhbRY?si=ZB6SxIjSjycQ9T4A>



⑥兵庫県

北播磨への就職・移住 PR 動画（移住編）

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=RtrRmeJgkKcsqqRd>



⑦福岡県

福岡県移住 PR 動画

<https://youtu.be/uA1jzkhsuBk?si=OolGngGIGWKZIce6>



⑧福岡県 朝倉市

朝倉市移住定住プロモーション動画（暮らし編）

<https://youtu.be/FblXRI322Qc?si=C52DIKwRejyifiHI>



「語り・テロップ」

①北海道比布町（びっぶ町）

<https://youtu.be/h-5QkHhrESc?si=oCr7vqbwOIUFi8LH>

「子供が自由にのびのび育てられる環境で子育てをしたいなと思って探していた時に比布町に辿り着きました」

②兵庫県

北播磨への就職・移住 PR 動画（移住編）

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=RtrRmeJgkKcsqqRd>

「田舎具合がちょうどいい。適度に自然があって大きな公園もあるのでそこで遊んだりしますし、すごくのびのび過ごせているかなと思います」

③岡山県赤磐市

【赤磐市】「ちょうどいい」豊かな暮らしリアル編

<https://youtu.be/4eaeuwQhDMs?si=R64TuzwD4WYEODLy>

「自然を感じられますから子供のためにはとてもいいです」

④香川県

住みたいかがわ移住予報《香川県》

<https://youtu.be/Zfo-gV7qMgQ?si=LpXy-qe2Ki0Owif>

「子供が思いっきり遊べる広い公園がたくさんあるので助かっています。手軽に安心して遊ばせられる公園はなかなかない」

⑤福岡県

福岡県移住 PR 動画

<https://youtu.be/uA1jzkhsuBk?si=OolGngGIGWKZIce6>

「子供を育てやすい環境かなあとと思います。30分以内に自然の多いところに行けます」

具体例

（「やりたかった仕事ができる」「自分の時間が持てる」「夢を叶えられた」）

「語り・テロップ」

①北海道比布町（びっぶ町）

北海道比布町 移住 PR 動画「比布で、生きる」

<https://youtu.be/h-5QkHhrESc?si=oCr7vqbwOIUFi8LH>

「自分でやりたいと思ってチャレンジしたのがこの農業ですし、それを受け入れてくれて地域の方がサポートしてくれるのが自分にとっては非常にありがたいことです。充実した生活を送らせてもらっているなという気持ちでいます。」

②静岡県 ふじのくに市

「静岡県への移住で実現!多彩なライフスタイル」子育て×テレワーク編（袋井市 牛丸さん）

<https://youtu.be/xrxlPxfkL74?si=PKNQ5rwt8cH-2es>

「理想の暮らしが実現できました」



③兵庫県

北播磨への就職・移住 PR 動画（移住編）

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=RtrRmeJgkKcsqqRd>

「農業を通じて何か一石を投げられるような人生にしたい」と移住した。「最良の土地で農業ができることに喜びを感じています」

（3）人間関係・地域コミュニティの描写

地域の人々との関係性もまた、全国的に肯定的に描かれている。映像上では、「人が優しい」「地域の人が支えてくれる」「面倒見が良い」「距離が近い」といった語りが頻出し、“地域社会の温かさ”が前面に出されている。こうした表現によって、地域全体がひとつの家族のような共同体として描かれている。

こうした“温かいコミュニティ像”は、個別の PR 動画でも繰り返し確認できる。たとえば、江別市では「挑戦を応援してくれる温かい街」と語られ、岐阜県では「優しい人が多く安心感につながる」と述べられている。また、北播磨では「移住したときから子どものように可愛がってもらった」、高知県の動画でもあいさつやおすそ分け、住民との交流が“距離の近さ”を象徴する描写として繰り返されていた。

一方で、これらの語りは概して抽象的であり、誰がどのように支え合っているのかという具体的な関係性や地域社会の実態には踏み込んでいない。結果として、「優しい人が多い」「あたたかい街」といった定型句が地域特徴の代替表現となっており、実際の人間関係の多様性や

リアリティが描かれていないと言える。そのため“地域コミュニティ＝理想的な共同体”というステレオタイプを再生産している側面が強い。

加えて、このような“温かいコミュニティ像”は、必ずしも移住希望者のニーズと一致しているとは限らない。一般的な居留意識調査でも、近所づきあいに負担感を抱く人は少なくない。株式会社 AlbaLink による調査^(注14)では「近所づきあいが苦手」と回答した人が 84.8%に達している。また、同調査では「面倒」「プライバシーへの懸念」「トラブル回避」が理由として挙げられており、人間関係の“濃さ”が必ずしも歓迎されていない状況がうかがえる。さらに、移住者を対象とした調査でも、「人間関係の狭さ」や「コミュニティに馴染めない」など、地域コミュニティとの関係性を戸惑いとして挙げる声は一定数存在する^(注15)。これらの点を踏まえると、移住 PR 動画が提示する“温かな共同体”の表象は、一部の視聴者に安心感を与える一方で、「干渉されそう」「濃い関係を求められそう」という不安を喚起する可能性もあり、必ずしも移住動機に直結する価値とは言い難い。

したがって、地域コミュニティの描写は、視聴者にとって好ましい印象を与える定型的フォーマットである一方で、実際の移住希望者が抱える「地域との距離感」への不安や、関わり方に対する複雑な感情を十分に反映しているとは言い難い。本来の地域の魅力や課題を伝えるというよりも、理解されやすい“理想像”を優先した結果、現実とのズレが生じている可能性がある。

具体例

（「人が優しい」「地域の人が支えてくれる」「面倒見が良い」「距離が近い」といった語り、近隣からのおすそ分け）

①北海道 江別市

<https://youtu.be/qFBzhMk39zs?si=a7LXICek-BFdvZ8L>

「江別の人のイメージなんですけど、すごく温かいなと感じていて、何かに挑戦したりチャレンジしたいとなった時に応援してくれたり協力してくれる方が多くてすごくいろんなことにチャレンジしやすい街だなと感じています」

（参考文献）

- 注 14 株式会社 AlbaLink による一戸建てに住む 499 人を対象にした「近所付き合いに関する意識調査」データランキング
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000068.000055654.html>
 注 15 FNN プライムオンライン 2023 年 2 月 10 日
<https://www.fnn.jp/articles/-/471494>

②岐阜県

<https://youtu.be/gvlhZZqLJKo?si=YA3NchHRntXmU2sZ>

「子供がパッと挨拶しても返してくれる人が多い。優しい人が多いなっていうイメージがあるのでそういうところが安心感に繋がっている」

③兵庫県 北播磨

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=xqHPPaKcOtwBySf>

「(この街の人は) 気にかけてくれる」

「歓迎してもらえ空気があるのですごく入りやすい地域でした」

「移住した時から子供のように可愛がっていただいた素敵な方ばかり。たべものを持ってきてくれたりいつも気にかけてもらっています」

④高知県

<https://www.youtube.com/watch?v=IOsPfKc5910>

すれ違ったら挨拶をされるほど街の人との距離が近い
すれ違った人だけの人からおすそ分けをいただいたりもしていた

セリフ:「高地におったらみんな家族や」→家に招待(人の温かさを感じる)

実際の移住者(地域おこし協力隊)の人と話す機会を設けてもらい、悩みを共有したり街について聞く

「高知の人はあたたかい人が多い」

(4) 都市との対比描写

多くの動画では、都市と地方を対比する構成が用いられている。具体的には、「都市では得られなかったゆとりが地方では実現できる」「都会よりも自然が多く、心が落ち着く」「子どもをのびのび育てられる」といった語りが繰り返され、地方移住を“精神的・身体的・経済的な回復”として位置づける表現が目立つ。

こうした都市との対比は、個別の PR 動画でも一貫して確認できる。たとえば、江別市では「札幌よりも自然が多く、リフレッシュして過ごせる」と語られ、比布町では「土地が広く、都会では難しいのびのびした子育てができる」と強調されている。また、栗原市では「東京ではできなかったことがここではできる」と述べられ、静岡県の動画でも「東京より敷地が広く、ゆとりある生活ができる」「東京では味わえない楽しみがある」と移住後の変化が語られている。さらに北播磨では「都会にいたらできないことができるようになった」とされ、和歌

山県のドラマ風移住 PR 動画では「移住前は時間に追われていたが、移住後はゆったり暮らせて笑顔が戻った」という、都市生活と地方生活を対比することで、地方の暮らしの魅力が強調される構成となっている。

このように、都市生活の“欠損”を地方が補うという物語構造は、複数の動画に共通して観察される。都市で失われたゆとり、自然、挑戦の機会、心の余裕などを地方が取り戻してくれるという描き方は、視聴者にとって理解しやすいだけでなく、地方の価値を直感的に伝える効果も持つ。

しかしこの手法は、地方を常に“癒し”や“再生”の場として描く構図を固定化しており、結果的に都市を引き合いに出した質の悪い比較広告に陥っていると言える。すなわち、地方の価値を独自に提示するのではなく、「都市との相対的関係性」においてのみ成立している点に問題がある。

具体例

「東京よりも広い敷地でのびのび子育てができる」「移住により自分の時間が増え、心が穏やかになった」など

①北海道 江別市

<https://youtu.be/qFBzhMk39zs?si=a7LXlCek-BFdvZ8L>

「札幌(都会)よりも江別の方が自然が多いのでリフレッシュして過ごせるような気がします」

②北海道 比布市

<https://youtu.be/h-5QkHhrESc?si=oCr7vqbwOIUFi8LH>

「子供をのびのびと育てられる環境で子育てがしたくて移住した。土地がひろいので子供が走り回ったり、大声を出しても迷惑がかからない。子供たちがわいわいのびのび成長できる環境がこの街にある」

「都会と比較してすごく便利ではないけど、買い物に困らないし生活にも困らない自然もある。なにより子供たちがわいわいのびのび成長できる環境がこの街の魅力」

③宮城県 栗原市

https://youtu.be/_pvUkAmPy-A?si=A-FbvZzLHSJ45Pf8

「東京ではなかなかできなかったことがここでは新しくいろんなことにこの年になってチャレンジできるので、日々充実していて楽しい」

「都市部にはない魅力がある」

④静岡県 ふじのくに市

<https://youtu.be/xrxlPpkfL74?si=WoDD0mkzVIVlduqw>

「東京と比べてゆとりがある。敷地自体が広いので子供ののびのびと遊んでいる」

「移住してから釣りを始めた。東京にいた時には味わえない楽しみ、味覚を感じている。人生が広がった」

⑤兵庫県 北播磨

<https://youtu.be/hXeCYNABrsk?si=xqHPPaKcOtwBySf>

「都会にいたらできないことができて、できることが増えてきた。一回こっち（地方）に住むと都会に住みたいとは全く思わない」

⑥和歌山県（ドラマ風）

<https://youtu.be/0ZLpDcatCE?si=CT4R3lthLBu5Bkh8>

移居前（都会）：毎日時間に追われていた、悩みが多かった、コンビニ飯

移住後：ゆったりとした暮らし、移居前よりずっと幸せ、一歩踏み出してよかった

セリフ：「いまのわたし（移住後のわたし）はちゃんと笑っています」

（5）撮影・演出の傾向

撮影・演出手法については、ドローンによる空撮がほとんどの動画で確認され、広がる田畑や山々、街並みを俯瞰する構成が一般的であった。また、多くの動画においてBGMやナレーションが使用されており、音響・語りという演出要素も共通項として確認された。構成形式としては、ドラマ風・インタビュー形式・レポート形式などがあり、特にドラマ風構成では「移住前後の生活変化」や「親子・夫婦の会話」を通じて感情移入を促す演出が多用されていた。いずれの形式においても、“理想の地方生活”を前提とした肯定的ストーリー展開が中心となっており、批判的・問題提起的な内容はほとんど確認されなかった。

（6）総括：理想化とテンプレート化の構造

以上の分析から、全国の移住 PR 動画が、自然・家族・人の温かさ・スローライフ・自己実現といった要素を共通して参照し、ほぼ同一の価値観の下に制作されていることが明らかになった。

これらの表現は、視聴者にポジティブな印象を与える一方、地域固有の魅力を描く余地を制限し、内容・構成・

語り口の均質化を招いている。こうした傾向は、自治体による魅力発信において「形式の定型化」に陥っている。ゆえに、各自治体が独自の個性を描こうとしても、映像表現の水準化・フォーマット化により、“正解らしい地方”を反復提示する構造が浮かび上がる。本研究の分析でも、移住 PR 動画は地域を“伝える”手段というより、地域が“どう見られたいか”を演出する広報物として機能している可能性が示唆された。

3 差別化の欠如とその要因

本節では、前節で確認された「全国的に似通った映像表現」がなぜ生まれるのか、その要因を分析する。分析の結果、移住 PR 動画の均質化は主に二つの構造的要因から生じていることが確認された。

第一に、都市との対比を通じて“田舎らしさ”を打ち出そうとする表現構造が、結果的に地域ごとの個性を薄めていること。第二に、視聴者に「わかりやすく伝わる映像」を作ることで自体が目的化し、“その地域らしさ”よりも“正解らしさ”が優先される傾向が強まっていることである。

（1）都市との対比構造が生む「田舎らしさ」の画一化
多くの移住 PR 動画では、「東京では時間に追われていたが、ここではゆとりが生まれた」「都会では味わえない人とのつながりがある」といった語りが登場する。こうした構成は、都市の「忙しさ」や「冷たさ」と、地方の「穏やかさ」「温かさ」を対比させるものであり、視聴者にとって理解しやすい一方で、どの地域でも類似した語りや映像表現が繰り返されてしまう。

この都市と地方の対比構造は、個別の動画でも確認できる。たとえば青森県平内町の動画では、渋谷の人混みや「都会での子育ての大変さ」を強調したあと、雪遊びや自然体験を通じて「東京では得られないゆとり」が提示されている。和歌山県のドラマ風動画でも、移住前の主人公が「毎日時間に追われていた」「悩みが多かった」と語る一方、移住後には「ゆったりとした暮らし」を手に入れ、「いまの私はちゃんと笑っています」と自己肯定の回復が描かれている。同様に島根県のショートムービーでは、夜遅くまで働く東京の生活と対照的に、「心が平和になる」移住後の生活が示され、「私はもう大丈夫」という言葉で地方が“再生の場”として表象されている。

ドラマ形式以外でも、同様の構図が繰り返される。福島県の PR 動画では、都市での金銭的・精神的負担が語られた後、「自然の中でのびのび子育てできる」生活が描かれ、宮城県栗原市の動画でも「東京ではできなかつ

図表 2 __移住 PR 動画における主要表現要素の出現傾向と分析結果の整理

分析項目	該当動画数	割合 (%)	分析結果の整理	
①風景・自然表現 森・山・海・川・田畑など、自然環境の描写と象徴的扱い	49	約90%	ほぼすべての動画で自然環境が描写されており、安心感や癒しといった情緒的価値を喚起する表現として強く機能している。一方で、その多くが汎用的な自然イメージにとどまり、地域ごとの自然環境の差異や生活との結びつきが十分に可視化されていない。	
②生活描写 家庭菜園、食卓、子育て、テレワーク、趣味、食文化などの日常生活の演出	50	約92%	家族・食卓・子育て・趣味などの日常生活が高頻度で描かれ、「幸福な暮らし」を想起させる表現として用いられているが、その多くは全国で共通する理想像をなぞった演出にとどまり、地域固有の生活文化や条件を具体的に示すには至っていない。	
③人・地域関係 「人の温かさ」「地域の支え」「面倒見の良さ」などの対人表現	25	約46%	約半数の動画で「人の温かさ」や「地域の支え」といった対人関係が肯定的に語られているものの、その多くは抽象的な表現にとどまっており、具体的な関係性や距離感、地域社会の多様性は十分に描かれていない。	
④都会との対比 「東京では〇〇」「都会ではできなかった」など、都市との比較	18	約33%	都市と地方を対比する語りは一定数確認され、都市生活と地方生活を対比することで、地方の暮らしの魅力を強調する構成となっている。	
⑤表現方法 ドラマ風・インタビュー形式・テレビ番組風・レポート風など、構成手法	インタビュー形式	26	インタビュー形式やドラマ風、テレビ番組風の構成など既存メディアの構成フォーマットが広く採用されており、語りの流れや結論があらかじめ想定された構成になっている。地域の特性に応じた構成上の工夫は限定的であり、映像構成そのもののテンプレート化を招いている。	
	ドラマ風	14		約25%
	その他	15		約27%
⑥撮影・演出技法 ドローン映像、BGM、色調、テンポ等の演出上の特徴	テロップ使用	44	約81%	テロップやBGMは、映像内容の意味を補足・強調し、視聴者の理解を一定の方向へ導く補助的手法として広く用いられている。これらの演出は、情報の分かりやすさや視聴体験の安定化に寄与する一方で、語り口や表現のトーンを均一化し、映像全体を「正解らしい地方像」へと収束させる役割を果たしている。
	BGM使用	54	100%	

たことに挑戦できる」「都市部にはない魅力がある」と、地方が“可能性の広がる場所”として提示される。また、静岡県の動画では「東京より敷地が広く、子どもがのびのび遊べる」という表現が使われ、兵庫県北播磨のPRでも「都会でできないことができるようになった」と、地方が都市の欠落を補完する場として描かれている。

このように、多くの動画は「都市で失われたものを地方で取り戻す」という構図に基づいており、都市の“欠落”を地方の“豊かさ”で補う物語が共通して見られる。都市が共通の比較対象となることで、語られる内容は「都

市では得られない価値」という同質のメッセージに収束しやすく、結果として地域固有の歴史や文化、生活感が希薄化してしまう。映像表現は「地方＝癒し・ゆとり・人の温かさ」という定型的なイメージに集約され、地域間の差異は十分に示されなくなっている。

本来であれば、それぞれの地域に根差した風習や価値観を掘り下げることで、独自の“地方の語り方”が生まれるはずである。しかし現状では、「都市との違いをわかりやすく説明するための表現」が優先され、地域固有の生活文化や価値観が可視化されにくい。その結果、“地

方全体が一つの理想郷”として単一的に表現される傾向が強まり、その地域固有の特徴・多様性が十分に反映されていない。

具体例

(多くの移住 PR 動画では、「東京では時間に追われていたが、ここではゆとりが生まれた」「都会では味わえない人とのつながりがある」といった語り)

【ドラマ風】

①青森県平内町

<https://youtu.be/d1G66Sxl9f8?si=GwTZRU1EuM7DNhx->

<https://youtu.be/9ot61dw3Uz0?si=faopymvoLl8KAMx2テロップ>「都会での子育てに悩む」

渋谷の街の様子から動画が始まる(人の多さ、忙しさなどをアピール)

「子供1人でも東京で生活するのは大変」

東京の子供に雪を見せる(東京ではできない体験をアピール)

②和歌山県

<https://youtu.be/0ZZLPdcatCE?si=CT4R3lthLBU5Bkh8>
「動画の内容」

移住前(都会):毎日時間に追われていた、悩みが多かった、コンビニ飯

移住後:ゆったりとした暮らし、移住前よりずっと幸せ、一歩踏み出してよかった

「(移住後の)いまのわたしはちゃんと笑っています」

③島根県

<https://youtu.be/cnoH93IgrUs?si=X2aW3CV4z3VwTpAE>

移住前(東京):夜遅くまで忙しく働く

移住後(島根):ところが平和、「やさしいなあここは」、過去の決断(移住をする)を肯定する、「私はもう大丈夫」

④高知県高知市

<https://www.youtube.com/watch?v=IOsPfkKc5910>

(1~4話)

高知でのお試し移住をする男性の物語

「都会と違ってここ(高知)は山も川もあって空気もうまい」

移住体験から数か月後実際に移住(人の温かさに惹かれた)

ラストは高知で出会った人と付き合い

【ドラマ風以外の動画】

①福島県 「転職なき移住なら、ふくしま」理想の暮らしを実現する

<https://youtu.be/XglHV4YYaXo?si=z7uWXoRUxyGbmU4Q>

「東京だとお金がかかる……」

→福島にきてやりたかった仕事ができるようになった、家族と触れ合う時間が増えた

「自然の中でのびのびと子育てできる」、福島はこどもものびのびとした環境で遊べる。

②宮城県 栗原市 移住 Story ダイジェスト版

https://youtu.be/_pvUkAmPy-A?si=ivJdZoVMa1QQkZaW

「東京ではなかなかできなかったことがここではいろんなことに年齢関係なくチャレンジできる」

「都市部にはない魅力がある」

「自然がゆたかだし、空気きれいな水がおいしい」

(2)「わかりやすい映像」をつくることの目的化

分析からは、「伝わりやすさ」や「わかりやすさ」を重視した映像表現が、移住 PR 動画において強く志向されていることが確認された。多くの動画では、複雑な背景説明や制度的条件には踏み込まず、短時間で理解しやすい構成や、肯定的な印象を与える演出が優先されていた。

こうした傾向の背景として、地方創生関連事業において動画の再生数や SNS での反応といった短期的な成果指標(KPI)が用いられている傾向がある。『令和2年度地方創生推進交付金報告書』^(注16)においても、地方創生関連事業の成果指標として、動画再生数や SNS 反応が採用されている事例が確認されている。このような指標が評価の対象となる場合、制作者は「誰にでも理解しやすく、共感されやすい映像」を志向しやすくなる。

特に一般的に動画視聴では、視聴者が開始数秒で離脱するという特性を持つとされており^(注17)、冒頭から強い関心を引く構成や、感情的に肯定的な印象を与える表現が選択されやすい。その結果、地域固有の制度や生活条件、移住に伴う困難といった情報は相対的に省略され、

(参考文献)

注16 「令和2年度 地方創生推進交付金報告書」内閣府(2021) r2_houkokusyo-kyoten.pdf

注17 アドクリ研究所 視線を引き付ける!動画広告冒頭3秒の黄金律 2025年7月 https://note.com/ad_cr_lab/n/n1c79ad30ee0f

自然や人の温かさといった、直感的に理解しやすい要素が前面に出やすくなる。

実際、多くの移住 PR 動画では、ドローンによる空撮、明るい BGM、穏やかなナレーションといった演出が共通して用いられている。これらは短時間で地域の魅力を伝えるうえで有効である一方、結果として、地域ごとの差異よりも「わかりやすい地方のイメージ」が繰り返し提示される構造を生んでいる。

このように、移住 PR 動画における映像表現の均質化は、個々の制作者の意図や表現選択だけで説明できるものではない。なぜ「わかりやすさ」がこれほど重視されるのか、その背景には、移住促進施策を取り巻く制度や評価の枠組みがどのように関与しているのかを検討する必要がある。次章では、地方創生政策および移住促進施策の制度的構造に着目し、この点について整理する。

(3) 小結：同質化を生む二重構造

本章では、全国の自治体が制作した移住 PR 動画を分析し、映像表現の全体的な傾向を整理してきた。その結果、多くの動画において、自然環境や人の温かさ、家族的な暮らしといった要素が繰り返し用いられており、地域固有の歴史や産業、生活条件といった差異が十分に掘り下げられないまま構成されていることが明らかになった。言い換えると、個々の地域が持つ具体的な条件や違いよりも、「地方らしさ」を象徴する要素が優先的に配置される傾向が確認された。多くの移住 PR 動画では、都市生活との対比を通じて、地方を肯定的に描く語りを用いられている。その際に強調されるのは、自然に囲まれた環境、人との距離の近さ、あたたかい地域コミュニティ、穏やかな日常といったイメージである。これらの要素は、「移住＝地方」という一般化されたイメージを視覚的に再生産する役割を果たしており、結果として、どの地域を扱った動画であっても似通った印象を与えることになる。

このように、移住 PR 動画の同質化は、単に映像表現が簡略化されているから生じているわけではない。むしろ、移住を促すうえで望ましいと考えられてきた「地方像」が共有され、それが繰り返し映像化されている点に特徴がある。各自治体は地域の魅力を伝えようとしながらも、「移住先として好ましい地方」のイメージに沿った表現を選択することで、結果として共通化された語りへと集約されていく構造に置かれている。

なぜ自治体は、地域固有の条件や違いを示そうとしながらも、「自然が豊かで、人が優しく、穏やかな暮らしができる地方」という表象に依拠した表現を繰り返してしまうのか。この問いは、個々の動画の演出や制作者の判

断のみでは説明できない。移住 PR 動画の同質化は、表現の選択と、その背後にある制度的・政策的な要請とが重なり合うことで生じる現象として捉える必要がある。

次章では、こうした問いを踏まえ、移住 PR 動画が制作される制度的・政策的な枠組みに着目し、「わかりやすさ」や「正解らしさ」がどのような背景のもとで求められているのかを検討する。

第2章 地方創生と移住促進政策の構造

第1章では、全国の自治体が制作した移住 PR 動画を分析し、映像表現が共通化している現状と、その背景として「わかりやすさ」や「正解らしさ」が重視されている傾向を明らかにした。しかし、これらの傾向は個々の制作者の判断だけで説明できるものではなく、移住 PR 動画が制作される制度的・政策的な枠組みと密接に関係している可能性がある。

本章では、こうした問題意識を踏まえ、地方創生政策の成立過程と、移住促進施策が制度的にどのような位置づけを与えられてきたのかを整理する。まずは、「まち・ひと・しごと創生法」を中心に、国が地方創生をどのような課題として捉え、自治体にどのような対応を求めてきたのかを明らかにする。

1 地方創生政策の成立と「まち・ひと・しごと創生法」

2014年（平成26年）11月28日に公布・施行された「まち・ひと・しごと創生法」（平成26年法律第136号）^(注5)は、いわゆる「地方創生元年」を画する中核法として、地方創生の制度的基盤を整えた法律である。同法第1条は、その目的を「我が国における急速な少子高齢化の進展に的確に対応し、人口の減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくため」と明記している。そのために、地域社会の形成（まち）、人材の確保（ひと）、就業機会の創出（しごと）を一体的に推進することを定義し、まさに“地方創生”の理念を法的に位置づけたものである。

この法律は、国と地方自治体がそれぞれ「総合戦略」を策定することを定めている。国は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」^(注18)を作成し、都道府県および市町村

(参考文献)

注18 「まち・ひと・しごと創生総合戦略」

h261121-1.pdf

<https://laws.e-gov.go.jp/law/426AC0000000136>

はそれを勘案して、地域の実情に応じた「地方版総合戦略」を定めるよう努めなければならないとされている（第9条・第10条）。ここでの「努めなければならない」という文言は、法的拘束力を伴う義務ではなく努力義務を意味する^(注19)が、「国の総合戦略を勘案して」という規定により、国の基本方針を前提として地方計画を整備することが制度的に想定されている。

つまり、国（縦の政策体系）と都道府県・市町村（横の行政単位）との間で、施策の方向性や評価指標の整合性が保たれるよう設計されており、国の戦略に準拠した地域戦略を作成する「縦横の一体化」構造が法制度上あらかじめ組み込まれているのである。形式上は努力義務であっても、実質的には国の総合戦略に沿った政策形成が求められる仕組みとなっている点に特徴がある。

さらに、国の総合戦略の策定にあたっては、実施状況を検証するための客観的指標の設定が第8条第3項において義務づけられている。同条では「まち・ひと・しごと創生本部は、総合戦略の実施状況に関する客観的な指標を設定する」と明記されており、成果の把握と検証を前提としたPDCA型の行政運営が法体系の段階で制度化されている。この「客観的指標」の考え方は、後に地方自治体レベルでもKPI（重要業績評価指標）として具体化されることになる。内閣府『地方版総合戦略の策定・効果検証のための手引き』^(注9)では、KPIを設定し、PDCAサイクルに基づく進行管理を行うことが重要であるとされており、現在では多くの自治体が数値目標を掲げ、その達成度を毎年度検証・公表する仕組みが標準化されている。すなわち、第8条3項は、地方創生政策における「成果を数値で示す」制度的運用、すなわち定量的評価と成果主義的ガバナンスの出発点となった条項といえる。

以上より、「まち・ひと・しごと創生法」は、①人口減少と東京一極集中への対応、②「まち・ひと・しごと」の一体的推進、③国の戦略と地方戦略の整合、④客観的指標に基づく成果検証という4層構造を備えた政策体系を形成した。こうした制度的枠組みのもと、全国の自治体は地域戦略の策定と成果検証を伴う取り組みを展開するに至り、移住・定住促進は其中でもとりわけ重要な施策領域として位置づけられるようになった。

2 移住促進が「地方創生の象徴」となる過程

国は、2014年12月に「まち・ひと・しごと創生長期ビジョ

ン」とともに、第1期（2015～2019年度）の『まち・ひと・しごと創生総合戦略』^(注20)を策定した。この総合戦略では、①地方にしごとをつくり安心して働けるようにする、②地方への新しいひとの流れをつくる、③若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域をつくり安心なくらしを守るとともに地域間の連携を進めるの4つの基本目標が掲げられた。その後、2019年12月に第2期総合戦略が閣議決定された。

第1期総合戦略および第2期総合戦略に共通して、中心的課題として位置づけられたのが人口減少への対応である。特に「地方への新しいひとの流れをつくること」は、国の施策体系において重要な政策目標の一つとして繰り返し明記されてきた。2019年の「まち・ひと・しごと創生基本方針」^(注21)でも、取り組みの強化項目として「地方への新しいひとの流れをつくる」とともに、「関係人口の創出・拡大」が新たな視点として追加され、従来の移住・定住政策を拡張する方向性が示された。

こうした政策の実施を支える財政的手段として導入されたのが、「地方創生推進交付金」である。この交付金は、各自治体が策定する「地方版総合戦略」に基づく事業を支援するものであり、その活用分野の一つに『移住・定住促進』が明記されている^(注22, 23)。交付金の運用上、自治体は事業申請の際に数値目標（KPI）を設定し、実施後に成果を検証することが求められている^(注24)。

内閣府の『地方版総合戦略の策定・効果検証のための手引き』^(注9)では、KPIを設定し、PDCAサイクルに基づく進行管理を行うことが重要であるとされている。各自治体では移住者数、移住相談件数、情報発信件数などの定量指標を用いる例が示されている。実際に、小田原市^(注25)では「移住相談件数の推移」、能代市^(注26)では「移住相談件数」や「情報発信体制の充実」、大牟田市^(注27)では「移住相談件数」や「移住イベント参加者数」をKPIとして設定しており、こうした定量化の傾向は多くの自

(参考文献)

注20 第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」(2020改訂版)
r02-12-21-senryaku2020.pdf

注21 まち・ひと・しごと創生基本方針2019について 令和元年6月
r01-06-21-kihonhousin2019gaiyou.pdf

注22 地方創生推進交付金の概要 181113kentoukai_kouhukingaiyou.pdf

注23 「地方創生推進交付金の活用のポイント」資料4-3
<https://www.chisou.go.jp/sousei/meeting/tihouseisei-setumeikai/h29-01-17-siryou4-3.pdf>

注24 「地方創生整備推進交付金の活用に向けた地域再生計画作成の手引き」内閣府（令和4年）shin_tebiki_r0404syuusei.pdf

【実際の自治体KPI例】

注25 小田原市：移住相談件数の推移をKPIとして公開。
1-20231012144807_b65278897ed4c7.pdf

(参考文献)

注19 神奈川県 地方創生 <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/y2w/cnt/f532311/index.html>

自治体に共通して見られる。

さらに、第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」^(注20) および「まち・ひと・しごと創生基本方針」^(注21) では、「地方の暮らしの情報発信の強化」や「都市圏への移住 PR」などが主要施策として掲げられ、移住促進のための広報活動が政策レベルで明確に位置づけられた。これを受けて、各自治体は「移住・定住促進事業」の一環として PR 動画や特設サイトの制作を進めるようになり、デジタルメディアを活用した情報発信が拡大した。

こうした映像制作や広報活動の財源としては、主に「地方創生推進交付金」や「デジタル田園都市国家構想交付金」といった国の支援制度が活用されている。たとえば、瀬戸内市^(注28) では「地方創生加速化交付金」を活用して移住 PR 動画を制作・映画館で上映した事例があり、坂井市^(注29) では「地方創生推進交付金」事業の中でプロモーション動画や VTuber 動画制作費を計上している。また、玉野市^(注30) では「デジタル田園都市国家構想交付金」により移住 PR 動画の作成を行っている。

これらに加えて、一部自治体では「ふるさと納税」の PR 広告費や「一般財源」を活用してプロモーション動画を制作するケースもみられる。たとえば、栃木市^(注31) ではふるさと納税の広報枠として PR 広告料を計上しており、埼玉県日高市^(注32) や佐倉市^(注33) では「シティプロモーション動画制作事業」などを一般財源で実施して

いる。

このように、「移住促進動画」は地方創生政策の中で最も可視化しやすい成果指標として制度的に位置づけられ、交付金制度と KPI 運用によって全国的に共通の施策となっていた。その結果、国と自治体の双方が移住者数の増加や相談件数の拡大といった数値を政策効果として扱うようになり、制度上では「移住促進が地方創生の成果を示す」という構図が形成されていったと言える。

3 補助金と KPI が生む「やらざるを得ない」構造

地方創生推進交付金は、各自治体に「地域再生計画」の提出と KPI（重要業績評価指標）の設定を求めている^(注34)。この仕組みは一見すると合理的な行政評価制度のように見えるが、実際には「短期的に成果を示せる事業」が優先される傾向を強めている。

移住・定住促進事業においても同様であり、自治体は「移住相談件数」「プロモーション動画再生数」「SNSでの反応数」など、可視化しやすい指標を成果として設定する。これにより、成果を数値で示しにくい「地域コミュニティの形成」や「長期的な定住支援」といった地道な取り組みよりも、即効性のある情報発信施策が優先されやすい構造が生まれている。

実際、地域情報化推進機構（RILG）^(注35) の調査では、PR 動画の制作費が高額になりやすいことから、自治体には費用対効果を説明する責任が生じると指摘されている。その際、多くの自治体が「再生数」や「メディア露出の広告換算値」といった数値を効果指標として用いているものの、これらの数値は本来の成果を十分に示すものではなく、動画が地域への来訪者増や移住促進にどの程度寄与したのかは測定が困難であるとされている。この指摘は、自治体の内部で“成果を数値で説明する必要性”が強く意識されていることを示すと同時に、測定しやすい短期指標（再生数・SNS 反応）に評価が偏りやすい構造を示唆している。

【参考文献】

注 26 能代市：KPI に「移住相談件数」「情報発信と相談体制の充実（件数目標）」を設定

https://www.city.noshiro.lg.jp/up/files/www/city/plan/machi-hito-shigoto/04_%E3%80%90%E8%B3%87%E6%96%992%E3%80%91%E7%AC%AC2%E6%9C%9F%E8%83%BD%E4%BB%A3%E5%B8%82%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%83%BB%E3%81%B2%E3%81%A8%E3%83%BB%E3%81%97%E3%81%94%E3%81%A8%E5%89%B5%E7%94%9F%E7%B7%8F%E5%90%88%E6%88%A6%E7%95%A5%E3%81%AB%E3%81%A8%E3%81%91%E3%82%8B%E9%81%94%E6%88%90%E7%8A%B6%E6%B3%81.pdf

注 27 大牟田市：基本目標「新たな人の流れ」下に KPI を列挙（移住相談件数など）。

[5_7896_61745_up_JAPASL4L.pdf](https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/31537.pdf)

【交付金での広報・PR の採択・活用事例】

注 28 瀬戸内市：地方創生推進交付金を活用し、移住 PR 動画の映画館上映を実施（交付金活用事業内訳で費用まで記載）<https://www.city.setouchi.lg.jp/uploaded/attachment/106122.pdf>

注 29 坂井市：（新）地方創生交付金系スキームの事業で「プロモーション動画等製作費」「VTuber 動画制作費」等を計上

https://www.city.fukui-sakai.lg.jp/kikakuseisaku/shisei/keikaku/sogo-senryaku/documents/dai2sedai_sitei.pdf

注 30 玉野市：デジタル田園都市国家構想交付金事業の検証資料に「移住 PR 動画の作成」等の実施を明記。<https://www.city.tamano.lg.jp/uploaded/attachment/31537.pdf>

【ふるさと納税に関わる広報経費の計上例（動画を含む広報全般の財源として活用）】

注 31 栃木市：ふるさと納税の PR 広告料を明示（ふるさと寄附の広報枠）<https://www.city.tochigi.lg.jp/uploaded/attachment/44362.pdf>

【参考文献】

【一般財源でのプロモーション動画制作の明示例】

注 32 埼玉県日高市：「シティプロモーション動画制作事業」財源：一般財源（市）と明記

<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/154900/30-37-hidaka.pdf>

注 33 佐倉市：広報番組（動画含む）の制作・配信を一般財源で計上 <32325F8D4C95F189DB5F8966919C93998D4C95F190A78DEC8E968BC62E786C7378>

注 34 地方創生推進交付金の概要 平成 30 年 11 月 内閣府 地方創生推進事務局 交付金チーム 181113kentoukai_kouhukingaiyou.pdf

注 35 地域情報化推進機構（RILG）『自治体広報戦略のあり方に関する調査研究』令和 5 年度（2023）https://www.rilg.or.jp/htdocs/uploads/protect/R5_chousa/R5_03.pdf

その結果、多くの自治体では「動画を作ること」自体が目的化し、内容の独自性や地域固有の特徴よりも、視聴回数や話題性を重視した制作が行われる傾向にあると考えられる。すなわち、制度的な仕組みが「やらざるを得ない動画制作」を生み出し、その量的増加と内容の同質化を促しているのである。

加えて、移住 PR 動画の企画に影響しうる要因として、「移住を決めた理由」を問う各種調査の存在が挙げられる。実際に、総務省が実施した「過疎地域への移住者に対するアンケート調査」^(注36)では、現在居住している地域に移住した理由として、「気候や自然環境に恵まれたところで暮らしたいと思ったから」が47.2%と最も多く、次いで「それまでの働き方や暮らし方を変えたかったから」(30.3%)、「都会の喧騒を離れて静かなところで暮らしたかったから」(27.3%)が上位に挙げられている。この結果から、実際の移住者においても、「自然環境」や「落ち着いた暮らし」といった要素が、移住理由として強く意識されていることが確認できる。また、北海道清里町・小清水町を事例とした研究^(注37)では、移住を決定する際の環境的要素として、回答者のほとんどが「自然が豊か」「空気や水がきれい」「海・山・川などの自然資源がある」「風光明媚な景観がある」といった点を挙げており、年齢層を問わず、当該地域の自然環境が移住決定に大きく影響していることが示されている。これらの調査結果は、「自然環境」や「安らぎのある生活」が、移住者自身によって語られる主要な動機として位置づけられていることを示している。

ただし、こうした「移住を決めた理由」に関する調査結果は、移住の意思決定過程そのものを直接的に示しているとは限らない。多くの場合、これらの調査は移住後の人々を対象としており、「なぜ移住を選んだのか」を振り返る形で回答が得られている。そのため、調査結果には、移住後の生活を肯定的に捉え直す“納得の語り”が反映されている可能性がある。

こうした調査結果が自治体の広報実務において参照される場合、「自然」「人の温かさ」「やすらぎ」といった項目が、移住者が求める価値として前提化されやすくなる。その結果、これらの要素は移住 PR 動画の企画段階で重視され、「移住 PR として適切な表現の型」として繰り返し用いられることになる。

(参考文献)

注 36 「過疎地域への移住者に対するアンケート調査」https://www.soumu.go.jp/main_content/000529976.pdf

注 37 「農村地域への移住動機・心理特性に関する考察—北海道清里町・小清水町を事例として—」https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/36/1/36_86/_pdf/char/ja

さらに、このような表現が再生数や SNS 反応といった評価指標 (KPI) と結びつくことで、「多くの人に受け入れられやすい表現」が成果を生みやすいものとして強化される可能性がある。このように、調査結果・評価指標・映像表現がどのように結びついているのかについては、次章であらためて検討する。

4 「成果を示す制度」としての移住施策

地方創生政策における移住促進は、国の政策目標と自治体の成果報告を連動させる仕組みの中で制度化されてきた。国は「地方創生の成功」を移住者数という分かりやすい指標で示すことができ、自治体は国からの交付金を獲得するために移住関連の事業を継続的に展開する。両者にとって利害が一致する一方で、移住者本人の視点や生活実態は十分に考慮されにくい。

この構造のもとでは、移住施策は「地域社会の再生」を目的とするというよりも、「政策成果の可視化」を目的とする傾向が強まる。結果として、移住 PR 動画の多くは、地域の課題や複雑な現実を扱うよりも、「成功した地方」「理想の暮らし」といった肯定的イメージを提示する方向へと収束している。すなわち、国と自治体がともに“見せるための政策”を展開する中で、移住者は制度上の「成果を示す数値」として扱われてしまっている。

こうした制度的特性は、自治体の取り組みが「成果の可視化」を優先する方向へと誘導される背景として理解できる。すなわち、移住促進施策は、制度の仕組みそのものによって、自治体の政策選択や広報活動の内容に一定の方向性や制約を与えているのである。

5 小結：制度が形づくる「表現の構造」

本章では、地方創生政策の制度的枠組みが、移住促進事業を「やらざるを得ない施策」として位置づけている構造を明らかにした。すなわち、国の政策目標・交付金制度・KPI による成果評価が、自治体の事業計画や表現方法に直接的な影響を与えている。

この構造の中では、移住促進は本来の社会的課題解決手段というより、行政の成果を可視化するための象徴的的事业として機能している。結果として、「誰に何を伝えるのか」といった本質的な問いは後景化し、成果の可視化が可能な形式的な表現が優先される傾向が強まっている。ここでいう形式的な表現とは、制度が成果指標を求めるなかで自治体を選択しやすくなる表現の枠組みを指し、これが後述する移住 PR 動画における“正解らしさ”や内容の同質化を生み出す基盤となっている。評価指標 (KPI) や広報実務上の要請が映像表現とどのように結び

についてのかについては、次章であらためて検討する。

第3章 移住 PR 動画の現状と傾向

一 「伝わらない映像」としての問題一

第1章では、移住 PR 動画に共通する表現上の傾向として、「自然」「人の温かさ」「安心感」といった要素が反復され、地域ごとの差異が前景化されにくいことを示した。さらに第2章では、地方創生政策の制度的枠組みのもとで、移住促進が成果の可視化と結びつきやすい施策として位置づけられてきたことを整理した。

本章では、これらを踏まえ、移住 PR 動画が視聴者どのように受け取られ、なぜ「伝わっているようで伝わらない」状態が生じるのかを検討する。具体的には、動画が生み出すのが「共感」や「好意」といった感情的反応にとどまり、移住判断に必要な理解や具体的想像へと接続しにくい点に着目する。以下ではまず、移住者の語りがどのように演出され、リアルな声が必ずしもリアルに届かなくなるのかを検討する。

1 “体験の語り”の演出化：リアルな声がリアルに届かない

移住 PR 動画の中には、実際に移住した人が登場し、自身の体験を語る構成が一定数見られる。「都会では時間に追われていたが、ここでは心に余裕ができた」「地域の人が温かく迎えてくれた」といった語りは、本人の言葉を通して地域の魅力を伝えているように見える。しかし、それらの語りは多くの場合、“リアルな体験談”というよりも“演出された成功ストーリー”として扱われている。多くの映像では、移住者の語りが穏やかな BGM や明るい映像トーンとともに配置され、視聴者が「安心」「幸福」「充実」といった感情を抱くように構成されている。語りの内容は「なぜ移住を決めたのか」といった背景説明にとどまり、その過程で生じた葛藤や困難、迷いといった現実的要素はあまり描かれない。その結果、映像は感情的には共感を誘うが、生活の実態や課題といった現実的側面はほとんど描かれない。

このような構成は、メディア研究における「リプレゼンテーション（再構成）」の問題と重なる。村井明日香(2017)^(注38)は、テレビ・ドキュメンタリーにおいて「メディアが送り出す情報は、現実そのものではなく、送り

手のものの見方の一つに過ぎない」と指摘している。つまり、映像は“現実をそのまま映す”のではなく、“現実をどう見せたいか”という意図に基づいて編集・構成される。移住 PR 動画の語りもまた、移住者の言葉を通じて現実を描いているように見えて、実際には制作者の視点を反映した“望ましい現実像”として再構成されていると考えられる。

このようにして、語りの偶然性や矛盾、葛藤といった「生の部分」は削ぎ落とされ、政策的に好ましい成功談だけが残る。結果として、映像は「リアルに聞こえる体験談」でありながら、実際の現実感は薄い。視聴者が受け取るのは、具体的な情報ではなく、“理想的な雰囲気”である。美しい風景や柔らかな音楽によってつくられたこの雰囲気は、多くの人に感情的な共感をもたらす。「自分もこうした暮らしをしてみたい」といった憧れの感情は確かに生まれるが、それはあくまで感情的共感にとどまり、現実的理解にはつながらない。視聴者は心を動かされても、頭の中では「この地域でどう働けるのか」「どのような生活基盤があるのか」といった具体的なイメージを描けない。つまり、映像は“心には響くが、頭には残らない”構造になっている。感情的にはリアルであっても、社会的・情動的な中身が欠落している点に、移住 PR 動画の大きな問題がある。

本来、移住者の語りは“経験の証言”として、視聴者に現実的な理解や想像を促すものであるべきだ。しかし、現在の多くの動画ではその役割が弱まり、語りは地域を良く見せるための素材へと変質している。映像は「共感」を誘うことには成功しても、「理解」を深めることには失敗している。その結果、視聴者の中に生まれるのは一時的な好感であり、行動の変化や地域への理解には結びつかない。

このように、移住 PR 動画の“体験の語り”は、リアリティを装いながらも、実際には情動的空間を抱えている。言い換えれば、移住 PR 動画は「共感を生むが、理解を生まない映像」としての構造的矛盾を内包しているのである。

2 視聴者にとってのリアリティの欠如

前節では、移住 PR 動画における「体験の語り」が、感情的にはリアルに響く一方で、現実を伝えることはできていない。本節では、なぜ視聴者が“リアルに感じない”のか、その背景を情報の側面から検討する。すなわち、移住を検討する人々が実際に求めている情報と、動画が描いている内容との間にどのようなズレがあるのかを明らかにする。

(参考文献)

注38 村井 明日香「初期ドキュメンタリー番組のリアリティの変容と〈やらせ〉の誕生」2017年3月
file:///C:/Users/User/Downloads/AA12471054_8_68-86.pdf

(1) リアリティとは何か

—感情的リアリティと情動的リアリティ—

ここでいうリアリティとは、単に「本物らしく見える」という意味ではなく、視聴者が映像を通して「自分ごととして理解できる感覚」を得られる状態を指す。移住 PR 動画においてこのリアリティを成立させるには、情緒的な共感だけでなく、生活に関する具体的な情報や文脈が不可欠である。しかし、多くの動画は感情的リアリティ（共感や憧れ）に偏り、情動的リアリティ（理解や納得）が欠けている。その結果、映像は「美しいが現実感のない物語」として受け取られている。

(2) 移住希望者が求める情報の実態

近年の複数の調査から、移住を検討する人々が重視する要素は、主に生活の基盤に関わる実用的な情報であることが明らかになっている。

株式会社パーソル総合研究所^(注39)による「地方移住に関する実態調査」では、移住検討時に影響した項目として「地域での日常的な買い物などで不便がない」(76.4%)、「地域の医療体制が整っている」(75.0%)が上位を占めており、生活利便性や医療環境といった条件が移住決定に強く影響していることが示されている。また、内閣府(2021)^(注40)の分析でも、実際に移住を実施した層は「地域独自の歴史・伝統」に関心を示す一方で、検討段階の層では「交通インフラ」や「生活コストの低さ」をより重視する傾向が確認された。さらに、国土交通省(2021)^(注41)の報告によれば、移住に際して多くの人が懸念する点として「仕事や収入の確保」「買い物や公共交通の利便性」「人間関係や地域コミュニティ」が挙げられており、やはり生活の安定性が中心的関心となっている。包薩日娜・服部(2017)^(注42)の調査でも、移住希望者が情報収集の際に重視するテーマとして「買い物環境」「医療環境」「自然環境」が共通して挙げられている。

また、情報収集手段については、「自治体の HP」「テレビ」「口コミ」が主流であり、「SNS」や「YouTube」

などのオンラインメディアの活用は限定的であったとされる。

これらの結果を総合すると、移住希望者が求めているのは「自然の豊かさ」や「人の温かさ」といった感覚的な魅力よりも、「仕事」「住まい」「医療」「買い物環境」など具体的で実生活に直結する情報であることがわかる。すなわち、移住希望者は“感覚的なイメージ”よりも、“生活の見通しを立てられる現実の情報”を重視しているといえる。

(3) 映像が描く内容とのズレ

前述したような移住希望者のニーズがあるにも関わらず、現実の移住 PR 動画の多くは、こうした情動的要素よりも「自然」「人の温かさ」「スローライフ」などの情緒的価値を中心に描いている。登場人物が移住前の悩みを語るシーンはあるが、移住後は明るく穏やかな日常を送り、映像全体は「理想の生活イメージ」として構成されている。

このような表現は、視聴者に一時的な安心感や憧れを与える一方で、移住後の生活を具体的に想像させる要素を欠いている。実際、移住希望者が収集している情報の中心は、感情的価値ではなく生活に直結する内容である。内閣府「東京圏、地方での暮らしや移住及び地方への関心に関する意識調査」(2020)^(注43)では、「仕事に関する情報」(31.4%)が最も多く、次いで「生活コスト」(25.6%)、「住居・住宅購入」(22.0%)といった実務的情報が上位を占めている。さらに、地方移住の情報収集手段としては「WEB(スマートフォン)」(76.7%)が突出して高く、視聴者が能動的に必要な情報を検索していることがうかがえる。これらの結果から、移住希望者が関心を寄せるのは「その地域でどのように働き、どのように暮らせるのか」といった生活基盤の情報であることが示される。

しかし、現実の移住 PR 動画では、こうした“理解につながる手がかり”がほとんど提示されていない。結果として、動画は「地方への憧れ」を喚起するが、「地方で暮らすことへの理解」には至らない。言い換えれば、映像が描くのは“理想としての地方”であり、“現実としての地方”ではない。

(4) リアリティ欠如がもたらす影響

このような情報の欠落は、視聴者の信頼感にも影響

(参考文献)

注 39 移住に関する実態調査 株式会社パーソル総合研究所
<https://rc.persol-group.co.jp/thinktank/data/migration-to-rural-areas/>

注 40 政策課題分析シリーズ 20 新しい働き方と地方移住に関する分析—コロナ禍における働き方への意識の変化をもとに— 令和 3 年 7 月 内閣府政策統括官(経済財政分析担当)
<https://www5.cao.go.jp/keizai3/2021/07seisakukadai20-0.pdf>

注 41 国土交通省
<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001712109.pdf>

注 42 「首都圏在住の移住希望者の移住情報収集行動 移住希望者への web アンケートに基づいて」(包薩日娜、服部 俊宏、2017) https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/36/Special_Issue/36_209/_pdf/char/ja

(参考文献)

注 43 内閣府「東京圏、地方での暮らしや移住及び地方への関心に関する意識調査」令和 2 年 9 月より https://www.chisou.go.jp/sousei/pdf/r2_09_tokyoken_ijuu_ishikichousa.pdf

を与えている。視聴者は映像に感情的な共感を覚えても、そこに具体的情報による裏づけがないため、行動には結びつかない。「好感はあるが、理解は深まらない」という状態が生まれ、動画は“共感を生む広報物”にとどまってしまう。

さらに、多くの移住 PR 動画は「癒し」や「豊かさ」といったイメージを反復し、地域の多様な姿を単一の理想像へと還元している。そのため、地方の現実や課題が可視化されにくく、結果として“見る人を動かす”よりも“見る人を安心させる”映像となっている。

(5) 小結：情報のリアリティと感情のリアリティの乖離

以上のように、移住 PR 動画におけるリアリティの欠如は、映像の技術的な問題ではなく、伝えようとする情報の偏りから生じている。制作側が「見やすさ」や「好感度」を優先した結果、映像は感情的には豊かでも、情報的には空洞化している。その背後には、成果を“数値化”して評価する行政的な枠組みが存在しており、動画は“わかりやすい”にもかかわらず“わからない”という逆説的な構造を抱えている。

つまり、移住 PR 動画は「共感を生むメディア」であることには成功している一方、「理解を生むメディア」としては十分に機能していないのである。こうした“好意の獲得を優先する構造”の背景には、成果を数値化しやすい広報手段が重視される政策的構造がある。

このように、地域理解よりも「見栄え」や「反応」を優先する仕組みについては、次章で詳しく検討する。

3 “安心感の物語”としての地方表象

第1章および前節までの分析から、移住 PR 動画は多くの場合、地方を「癒し」「豊かさ」「ゆとり」などの感情的価値を象徴する空間として描いていることが明らかになった。

本節では、こうした映像がどのように“理想化された地方像”を構築しているのか、そしてそれが視聴者の理解にどのような影響を与えているのかを検討する。

(1) 地方が担う「理想郷」としてのイメージ

多くの動画において、地方は「都市生活では得られない理想の暮らし」を体現する空間として描かれている。そこに登場するのは、自然に囲まれた家、穏やかな職場環境、地域に受け入れられる移住者の姿など、“理想的な日常”の断片である。映像はしばしば、朝日や緑、笑顔といった象徴的なモチーフを用いながら、視聴者に“こ

こには本来あるべき幸せがある”と感じさせる構成をとる。

この構図において地方は、「自分の理想を実現できる場所」として語られている。つまり、地方は“癒し”の場であると同時に、“自分の理想を投影する場所”として表象されているのである。

(2) 「理想の物語」としての構成

移住 PR 動画には、「移住によって人生が好転する」という一貫した物語構造が見られる。分析対象とした54本の動画のうち、三分の一にあたる18本が、都会での生活と地方での暮らしを明確に対比する構成を採用しており、移住前後の変化を物語的に描いている。これらの動画では、都会の生活が“忙しさ”“閉塞感”“葛藤”といった否定的なイメージとして暗示され、その対比として、地方での暮らしが心の回復や自己再生の契機として描かれる傾向が顕著である。映像の中では、移住者が新しい生活の中で成功や満足を得る姿が繰り返し強調され、視聴者に「自分も変わるかもしれない」という期待や希望を抱かせる構成が採用されている。

こうした構成は、前述の分析対象動画の中にも共通して見られる。たとえば、和歌山県のドラマ風 PR 動画では、移住前の主人公が「毎日時間に追われていた」「悩みが多かった」と語り、移住後には「いまの私はちゃんと笑っています」と述べることで、地方移住が人生の転換点として描かれている。また、島根県のショートムービーでは、東京で夜遅くまで働く日々から、島根で「心が平和になる」暮らしへと変化する過程が示され、「わたしはもう大丈夫」という言葉によって移住が自己再生の手段として提示されている。

さらに、高知市を舞台としたドラマシリーズでは、都会で孤独だった主人公が現地の人々との交流を通じて“心の居場所”を見つけ、最終的には移住を決意するというプロットが描かれる。非ドラマ形式の動画でも同様であり、福島県の PR 動画では「都市では金銭的にも精神的にも余裕がなかった」と語られたのち、移住後の「のびのびとした子育て」や「やりたかった仕事の実現」が強調されている。宮城県栗原市の動画でも、「都市ではできなかった挑戦が地方では可能になる」とされ、地方が“可能性を切り開く場”として表象されている。

これらの例からもわかるように、移住 PR 動画の多くは「移住前＝問題や閉塞」「移住後＝解決・幸福」という構造を共有している。

しかしその一方で、こうした表現は地方を“可能性の象徴”として描くあまり、移住に伴う現実的な困難や葛

藤をほとんど扱わず、移住のハードルを低く見せてしまう側面がある。地方の生活が持つ複雑さを示さないまま、“移住=人生を前向きに変える手段”として一方向的に描くことは、地域の実態を十分に反映しない「理想の物語」として地方を消費する構造につながっていると言える。

具体例

（「移住によって人生が好転する」という物語構造）

【ドラマ風】

①和歌山県

<https://youtu.be/0ZZLPdcatCE?si=CT4R3lthLBu5Bkh8>

「動画内の内容構成」

移住前（都会）：毎日時間に追われていた、悩みが多かった、コンビニ飯

移住後：ゆったりとした暮らし、移住前よりずっと幸せ、一歩踏み出してよかった

「（移住後の）いまのわたしはちゃんと笑っています」

②島根県

<https://youtu.be/cnoH93IgrUs?si=X2aW3CV4z3VwTpAE>

「動画の内容」

移住前（東京）：夜遅くまで忙しく働く

移住後（島根）：こころが平和、「やさしいなあここは」

過去の決断（移住をする）を肯定する、「わたしはもう大丈夫」

③高知県高知市

<https://www.youtube.com/watch?v=IOsPfkKc5910>

「動画の内容」

高知でのお試し移住をする男性の物語

「都会と違ってここ（高知）は山も川もあって空気もうまい」

移住体験から数か月後実際に移住（人の温かさに惹かれた）

【ドラマ風以外の動画】

①福島県 「転職鳴き移住なら、ふくしま」理想の暮らしを実現する

<https://youtu.be/cnoH93IgrUs?si=X2aW3CV4z3VwTpAE>

「東京だとお金がかかる……」

福島に来て（移住して）やりたかった仕事ができるようになった

家族と触れ合う時間が増えた

「自然の中でのびのびと子育てできる」

②宮城県 栗原市 移住 Story ダイジェスト版

https://youtu.be/_pvUkAmPy-A?si=ivJdZoVMa1QQkZaW

「東京ではなかなかできなかったことにチャレンジできる」

「自然がゆたかだし、空気きれい水がおいしい」

（3）「安心感」を生む語りの構造

このように地方を“理想の場所”として描く語り方は、一見ポジティブで希望に満ちたものに見える。しかしながら、こうした映像は地域の社会的課題を覆い隠す働きを持つ。

たとえば、地方部では高齢化の進行により、医療資源の偏在が深刻化している。同じ県内でも医師数に最大で2倍の格差がみられ、都市部への集中が進んでいる（国土交通省，2023）^{（注44）}。また、人口減少に伴って雇用機会が減少し、耕作放棄地の増大や農業支援体制の脆弱化も指摘されている（政策研究大学院大学，2021）^{（注45）}。さらに、公共交通においては、人口減少やモータリゼーションの進展、運転手不足などにより、減便や撤退を余儀なくされる地域も増えている（小菅，2024）^{（注46）}。

しかし、移住 PR 動画の多くはこうした現実をほとんど描かず、むしろ穏やかで安定した暮らしを前面に提示している。現実の課題を示さない語り方は、視聴者に“安心できる地方”という印象を与えると同時に、政策的にも“成功している地方”という物語を補強している。すなわち、映像が生み出す「安心感」は、地方創生政策の正当性を支える象徴的な装置として機能しているのである。

（4）小結：地方が“理想の物語”として消費される構造

以上のように、移住 PR 動画では地方が“癒し”や“安

（参考文献）

注 44 国土交通省「地域生活圏における必要な諸機能ごとの課題と対応の方向性等」

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001462370.pdf>

注 45 政策研究大学院大学（GRIPS）「人口減少・少子高齢化社会における政策課題に関する報告」2021年12月

<4D6963726F736F667420576F7264202D208DC58F4995F18D90814081698175906C8CFB8CB88FAD81458FAD8E718D8297EE89BB8E D089EF82C982A882AF82E990AD8DF489DB91E882C98AD682B782E98CA48B8689EF8176816A2E646F6378>

注 46 「超高齢社会における新しい地域公共交通に 対応した日常生活・交通圏の研究」小菅謙次 2024年5月 file:///C:/Users/User/Downloads/CV_20260111_2024000225.pdf

心”のみならず、“願いの叶う理想郷”として描かれている。

このとき、映像は地域の実態を理解させるための情報提供よりも、好意的に受け取られやすいイメージを中心に構成されている。その結果、視聴者は地方の現実を知るよりも、理想のイメージを消費することに満足してしまう。つまり、移住 PR 動画は“心を動かす”ことに成功しても、“現実を考えさせる”ことには失敗しているのである。地方は現実の生活環境ではなく、安心感や希望を中心とした“理想化された空間”として描かれている。

こうした映像構造は、単なる演出上の問題ではなく、政策的・制度的な仕組みの中で生み出されている可能性がある。すなわち、自治体が「どのように見られるか」を重視するあまり、「何を伝えるか」が二の次になっているのである。

次章では、このような“好感を得るための広報”がどのような背景から生じているのかを、国や自治体の評価制度や政策的枠組みに着目して検討する。

第4章 なぜ移住 PR 動画は“届かない”のか

第3章では、移住 PR 動画が視聴者に「共感」や「安心感」を与える一方で、移住判断に必要な具体的理解を十分に支えられていない点を示した。動画は“心には響く”ものの、“生活を想像し、判断する材料”としては情報が欠けているため、その結果として「伝わっていない」状態が生じている。

では、なぜ移住 PR 動画は視聴者の好意を獲得できても、移住という行動変容には結びつきにくいのか。本章ではこの問いに対し、映像表現の問題に還元せず、移住という行動の負担、人口減少下の地域間競争、制度的評価枠組み、そして映像メディアの特性という複数の要因が重なり合う構造から検討する。これにより、移住 PR 動画が“届かない”ことを、個別作品の出来不出来ではなく、政策と広報の枠組みが生み出す構造的な問題として位置づける。

1 なぜ移住 PR 動画は移住につながらないのか

これまでの分析から、多くの自治体が移住促進を目的として移住 PR 動画を制作しているにもかかわらず、移住者数は全国的に大きく増加していないことが確認された。この乖離は、単に映像表現の問題ではなく、視聴者が「移住」という行動に対して十分なメリットを感じていないという、より根本的な構造に起因していると考えられる。

この点を踏まえると、移住 PR 動画が「魅力的かどうか」

を論じるだけでは不十分である。そもそも動画という手法が移住促進に適しているのか、そして移住という選択そのものが人々にとって現実的なのかという前提そのものを問い直す必要がある。さらに言えば、地方創生を進めるうえで、移住以外の関わり方を提示したり、動画以外の手法を模索したりする必要性も浮かび上がる。本章では、その問題の出発点を整理することを目的とする。

以下ではまず、人々が移住という行動に踏み切りにくい理由を明らかにする。次に、移住希望者が少ないという前提が、自治体の表現選択をどのように制約し、動画の同質化を生んでいるのかを検討する。そして最後に、PR 動画が“好感”を伝えることには成功しても、移住に必要な“理解”を十分に提供できていないという、媒体としての限界を示す。これらを通して、移住 PR 動画が行動変容につながりにくい構造的背景を明らかにする。

2 人は移住にメリットを感じていない

移住 PR 動画が行動変容につながりにくい背景には、そもそも人々が「移住」という選択肢に十分なメリットを見出していないという構造的な問題がある。多くの自治体が魅力発信に力を入れているにもかかわらず移住者数が伸びない現象は、この前提を踏まえると理解しやすい。

たとえば、ふるさと納税ガイド^(注47)によるとふるさと納税制度では2024年時点で約1079万人が利用しており、日本の人口に対する利用率は18.5%に達している。一方で、総務省「住民基本台帳人口移動報告」^(注48)によれば、2024年の市区町村間移動者数は520万7746人、都道府県間移動者数は252万3249人とどまり、地域への関心の高さと実際の居住移動の間には大きな差が見られる。

この“地域に興味はあるが、生活拠点は移さない”という乖離は、移住促進政策の限界を象徴していると言える。この差は単なる意識の問題ではなく、行動に伴う負担の大きさによって説明できる。ふるさと納税は、返礼品が受け取れる、税控除による節約効果がある、寄付先を選ぶ楽しさがあるなど、低リスクで明確なメリットを得られる行動である。実際に、株式会社 mitoriz が行った調査^(注49)によると、「返礼品の内容に満足した」(75.4%)が最多で、「寄付先を選ぶ楽しさ」(42.4%)、「税控除の節約効果を実感した」(38.8%)が続いている。

(参考文献)

注47 ふるさと納税ガイド ふるさと納税の都道府県別「利用者・利用率」「平均寄付金額」<https://furu-sato.com/magazine/42164/>

注48 総務省統計局 住民基本台帳人口移動報告 2024年(令和6年)
<https://www.stat.go.jp/data/idou/2024np/jissu/youyaku/index.html>

注49 株式会社 mitoriz 2024年12月12日 <https://www.mitoriz.co.jp/pressrelease/20241212-5159/>

一方、移住は 仕事・住まい・子育て環境・人間関係といった生活の基本構造を大きく変える必要があり、準備や判断に伴う負担が非常に大きい。移住支援制度が整備されても、生活基盤を移すこと自体が高いハードルであるため、多くの人にとって「関心はあっても実行には移しにくい」状態が続く。

そのため、移住 PR 動画がどれほど魅力的な地方像を描いても、多くの視聴者が実際の移住という行動には踏み出さない。動画が喚起する価値は、寄付や観光のような低リスクの行動にはつながりやすいものの、生活の根本を変える移住には結びつきにくい。ここに、移住 PR 動画が抱える構造的な限界がある。

以上のような構造的背景を踏まえ、本研究では補足的な検討として、移住を経験した4名を対象に、SNS (Instagram) 上でのダイレクトメッセージを通じた簡易的な聞き取り調査を行った。本調査は探索的・補足的な位置づけであり、一般化を目的とするものではない。その結果、移住を検討していた際に自治体の移住 PR 動画を見た」と回答した者は1名にとどまり、他の3名は「見ていない」「存在を知らなかった」と回答している。動画を視聴していなかった回答者は、もし動画があるとすれば「仕事や子育て支援などの具体的な生活情報」「地域の中心地の雰囲気」「休日の過ごし方」「日常の暮らしの様子」を知りたかったと述べており、これは前述した分析結果、すなわち情緒的表現に比して生活情報が十分に提示されていないという傾向と整合的である。

一方で、移住 PR 動画を視聴していた1名は、実際に移住した人のインタビューや具体的なエピソードを通じて生活のイメージが明確になったことが、移住への意欲を高める要因となったと回答している。この事例は、移住 PR 動画が単なる好感形成ではなく、具体的な生活理解を促す内容であった場合には、行動を後押しする可能性を持つことを示唆している。

以上の結果から、移住 PR 動画が移住につながりにくい要因は、動画の魅力不足というよりも、移住という行動自体のハードルの高さと、視聴者が求める具体的な生活情報との間に生じている乖離にあると考えられる。さらに、移住 PR 動画は移住検討者にとって必ずしも情報収集の起点として機能しておらず、その存在自体が十分に認知されていない可能性も示された。この点は、移住 PR 動画の効果を内容や表現の問題としてのみ捉えるのではなく、広報施策としての到達性や情報流通の在り方そのものを再検討する必要性を示唆している。

3 人口減少下における「人口の奪い合い」という構造

的問題

日本社会は長期的な人口減少局面にあり、総務省「人口推計」^(注50)によれば、2023年10月1日時点の総人口は1億2435万2000人と、前年より59万5000人(-0.48%)減少し、13年連続の減少となっている。また、日本人人口は1億2119万3000人で、前年より83万7000人(-0.69%)減少しており、減少幅は12年連続で拡大している。さらに、生産年齢人口(15~64歳)も1995年をピークとして継続的に縮小している。

こうした人口全体の持続的な減少と生産年齢人口の縮小のもとで、多くの自治体が掲げる移住・定住施策は、減少する人口をいかに確保するかをめぐって、各自治体が同時に類似した施策を展開せざるを得ない構造へと変質している。

本来であれば、広域連携や地域間の協働を通じて人口減少という共通課題に向き合う選択肢も考えられる。しかし、地方創生推進交付金の制度においては、自治体が計画を申請する際に「移住者数」や「相談件数」など具体的なKPIの設定が求められる^(注9)。この制度設計により、自治体は“自地域の成果”を示す必要性に直面し、結果として移住促進を強化せざるを得ない状況に置かれる。

こうした制度的圧力は、移住 PR 動画の表現内容にも直接的に反映されている。すなわち、視聴者に肯定的に受け止められやすい“理想化された暮らし”を提示すること、地域の課題や否定的側面をあえて示さないこと、他地域との差異よりも「広く好まれる表現」を優先すること、といった方向へ内容が収束しやすくなる。

これは制作側の自由な表現の結果ではなく、行政広報が「失敗しない情報発信」を求められる中で、政策的に無難な表象が選択されるという制度構造に由来するものによって生まれる傾向だといえる。

その一方で、国全体の人口が減少し続ける中で、個々の自治体が移住促進を繰り返す現在の構図には持続可能性の限界がある。人口そのものが縮小しているため、各地域が移住施策によって同時に成果を上げることは制度的にも構造的にも困難であり、現行の枠組みが内包する矛盾を示していると言える。

4 PR 動画は“理解”ではなく“好感”を生む装置になっている

前節までで述べたように、移住 PR 動画は制度的要請

(参考文献)

注50 総務省統計局 人口推移(2023年(令和5年)10月1日現在)
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2023np/index.html>

によって肯定的かつ画一的な表現へと収束しやすい。本節では、そのような映像が視聴者にどのような影響をもたらすのかを、広告メディアとしての性質から検討する。

映像メディアは、音楽・色彩・テンポ・表情といった感覚的要素を同時に提示できるため、視聴者に「心地よさ」「親しみ」といったポジティブな感情を生みやすい。「メディア選択と広告効果：1990-2009年の実証研究にみる理論・指標・属性の交差」^(注51)によると、こうした情緒的な印象は受け手の関与が高くなくても形成されやすく、比較的簡単に受け取られることが指摘されている。移住 PR 動画に多く見られる自然風景や笑顔の家族、落ち着いた暮らしの描写は、まさにこの性質を利用したものであり、地域に対する好意的なイメージ形成には一定の効果がある。

しかし、移住という行動には、仕事、住まい、教育、医療、生活コストなど、複数の要素を比較しながら判断するための情報が不可欠である。こうした内容は視聴者が能動的に理解・検討することを必要とするが、短い映像表現では十分に伝えきることが難しい。結果として、動画は「なんとなく良さそう」という感情的印象は提供できても、移住判断に必要な具体的理解にはつながりにくい。

つまり、移住 PR 動画は映像メディアとしての特性上、視聴者に好感を抱かせることには適しているものの、移住という高い負担を伴う意思決定を支える情報提供には向いていない。そのため、どれほど魅力的な映像であっても、多くの場合は「良い印象を持つ」にとどまり、「移住を検討する」という行動には結びつきにくいという限界を抱えている。

5 小結：移住 PR 動画が「届かない」のは構造的必然である

以上の検討から、移住 PR 動画が実際の移住行動に結びつきにくい理由は、個別の動画の質や制作技術の問題ではなく、複数の構造的要因が重なり合うことで生じていることが明らかになった。

第一に、移住という行動そのものが、仕事・住まい・教育・人間関係といった生活の基盤を大きく変える高負担の選択であるため、多くの人にとってメリットよりも負担感が先立ちやすい。そのため、関心は持ち得ても実際の行

動へ移るには大きな心理的ギャップが存在する。

第二に、人口減少下において国の交付金制度や KPI による成果指標が自治体の施策形成を強く規定し、各自治体は「自地域の成果を示す」ことを求められる。この制度的圧力は、移住促進施策の競争を加速させ、移住 PR 動画の内容が肯定的で画一的な表現へと集中しやすい環境を生んでいる。

第三に、映像メディアとしての特性から、PR 動画は好意的な情緒を喚起することには適しているものの、移住判断に不可欠な情報の比較・検討といった深い理解を促すには限界がある。結果として、動画は「地域への好感」までは形成できても、「移住という具体的な行動」へと視聴者を導く十分な材料を提供しにくい。

これら三つの要因、すなわち〈行動の負担〉〈制度構造〉〈メディア特性〉が互いに強化し合うことで、移住 PR 動画は本質的に「視聴者の好意」には働きかけられても、「移住行動」という成果には結びつきにくい。この意味で、移住 PR 動画が“届かない”状況は、偶発的な失敗ではなく、現行の移住促進政策と行政広報の枠組みによって構造的に生じやすいものとして理解できる。

第5章 移住 PR 動画の今後の可能性と課題

1 本章の目的

本研究ではこれまで、地方自治体が制作する移住 PR 動画を対象に、その映像表現の特徴と制度的背景を分析してきた。第4章では、移住 PR 動画が視聴者に十分に届かない理由が、単なる表現技法や制作姿勢の問題ではなく、地方創生政策における制度設計や成果主義的評価構造、さらには移住希望者数そのものの少なさといった、複合的かつ構造的な要因によって形成されていることを明らかにした。

これらの分析結果を踏まえると、移住 PR 動画の課題を「より魅力的な映像を制作すれば解決できる問題」として捉えることには限界があることが示唆される。むしろ、動画がどのような役割を担わされ、どのような期待のもとで制作・評価されてきたのかを再検討する必要がある。

そこで本章では、これまでの分析を総括した上で、移住 PR 動画が抱える根本的な限界を整理する。そのうえで、移住促進施策の中における動画の位置づけを再定義し、今後の移住広報が果たし得る役割と方向性について考察することを目的とする。

2 本研究の総括：移住 PR 動画が抱える根本的な限界

本研究の分析から、全国の移住 PR 動画には、自然環

(参考文献)

注 51 「メディア選択と広告効果：1990-2009年の実証研究にみる理論・指標・属性の交差」
file:///C:/Users/User/Downloads/02_%E5%95%86%E5%AD%A6%E9%9B%86%E5%BF%97%E7%AC%AC95%E5%B7%BB%E7%AC%AC2%E5%8F%B7_%E7%94%B0%E9%83%A8%E6%B8%93%E5%93%89.pdf

境、家族や子育て、人の温かさ、ゆとりのある生活といった要素が反復的に用いられていることが明らかになった。これらの表現は、視聴者に安心感や好意的な印象を与える点では一定の効果を持つ一方で、地域ごとの具体的な条件や生活の違いを十分に伝えるものにはなっていない。

こうした表現の同質化は、自治体や制作者の創意工夫の欠如によるものではなく、地方創生政策における制度設計や行政評価の在り方と深く結びついている。再生数や反応数といった数値化しやすい指標が成果として求められる状況下では、誰にでも受け入れられやすい「正解らしい表現」が合理的な選択として優先されやすい。その結果、移住 PR 動画は内容や語りが特定の型に集約され、地域固有の文脈や差異を描きにくい構造に置かれている。

また、移住 PR 動画は「地域に好感を持ってもらうこと」には成功しているものの、移住という大きな生活上の意思決定に直結する情報や理解を十分に提供しているとは言いがたい。移住には、住居、就労、教育、医療、人間関係など、長期的かつ現実的な検討が不可欠であり、映像による情緒的訴求だけで完結するものではない。したがって、動画表現を洗練させること自体が、移住者数の増加に直結するという発想には構造的な限界が存在する。

さらに、総人口が減少局面にある現在において、移住希望者の数自体に限られていることも見逃せない。自治体間で移住者を奪い合う競争構造のもとでは、各地域が同様の価値観や理想像を提示する状況が生まれやすく、結果として移住 PR 動画は差別化を失い、効果を希薄化させている。この点においても、「動画を改善すれば移住が増える」という単純な因果関係を前提とすることは困難である。

以上より、移住 PR 動画が抱える問題は、表現技法や制作手法の工夫によって解消されるものではなく、制度・評価・人口構造といった複数の要因が重なり合った結果として生じていると総括できる。

さらに、本研究の簡易的な聞き取り調査では、移住検討時に自治体の移住 PR 動画を視聴していた者は少数であり、動画の存在自体が十分に認知されていない可能性が示唆された。したがって、移住 PR 動画の課題は表現内容の問題にとどまらず、移住検討者に到達しているかという情報流通上の前提から再検討する必要がある。

3 移住 PR 動画は何を目指すべきか：役割の再整理

前節までの分析から、移住 PR 動画は視聴者に対して地域への好意的な印象や安心感を与える点では一定の効果を持つ一方で、移住という具体的な行動に直結する情

報や理解を十分に提供していないことが明らかになった。この乖離は、動画表現そのものの問題というよりも、移住 PR 動画が期待されてきた役割と、その実際の機能との間にズレが生じていることに起因すると考えられる。

地方創生政策の中で、移住 PR 動画は「移住促進施策」の一環として位置づけられ、再生数や反応数といった指標を通じて成果が評価されてきた。その結果、動画はあたかも移住者数の増加に直接寄与する手段であるかのように扱われてきた側面がある。しかし、本研究の分析が示すように、移住は住居、就労、教育、医療、地域コミュニティとの関係など、生活基盤全体の再構築を伴う選択であり、短時間の映像による情緒的訴求のみで判断が完結するものではない。

このような分析結果から、移住 PR 動画に対して「移住を決断させる」機能を期待すること自体が、動画というメディアの射程を超えた役割設定であった可能性がある。移住 PR 動画は、移住の最終判断を促すための決定打というよりも、地域の暮らしや価値観を知るための入口として機能してきたと捉える方が実態に近いと考えられる。移住 PR 動画を入口として位置づけるならば、少なくとも次の三点を満たす必要がある。第一に、移住後の生活を具体的に想像できる情報（住まい、就労、子育て支援、中心地の生活導線、休日の過ごし方等）を提示すること。第二に、地域の魅力を一方向的に理想化するのではなく、生活上の前提条件を含めて提示し、移住後のミスマッチを低減すること。第三に、動画視聴を相談・現地訪問・体験事業等の次の行動につなげる導線を整備し、動画単体で完結させないことである。

以上を踏まえると、移住 PR 動画の役割は、地域の魅力を一方向的に理想化することではなく、生活条件や前提を理解するための補助的な情報を提示する点にあると考えられる。生活リズムや働き方、地域との関わり方などを具体的に示すことで、視聴者が自らの生活との適合性を考えるための材料を提示することが、動画の現実的な機能であるといえる。

また、移住に至らない場合であっても、地域への理解や関心が深まることは、その後の継続的な関与や関係人口の形成につながる可能性を持つ。こうした効果は、移住者数という単一の指標では捉えにくいものの、地域と人との関係を長期的に築く観点からは重要である。

以上のように、移住 PR 動画の役割を整理し直すことは、動画表現の改善を求める議論ではなく、移住促進政策の中で動画に何を期待し、何を期待しすぎてきたのかを明確にする作業である。本研究の分析は、移住 PR 動画を、移住者数の増加を直接担う施策として評価するの

ではなく、移住を検討する人々が地域の暮らしや価値観を理解するための入口として位置づけ直す必要性を示している。

4 制度側の課題と改善方向

前節では、移住 PR 動画の役割を「移住を決断させるための手段」としてではなく、地域の生活条件や価値観を理解するための補助的な情報媒体として整理し直す必要性を示した。しかし、このような役割の再整理が実践されにくい背景には、動画制作を取り巻く制度的な制約が存在している。

地方創生政策のもとで、移住 PR 動画は交付金事業や施策メニューの一部として位置づけられ、成果の可視化が強く求められてきた。とりわけ、再生数、視聴回数、SNS 上での反応数といった数値指標は、事業成果として報告しやすく、行政評価との親和性が高い。その結果、動画は本来伝えるべき生活条件や地域の前提を丁寧に示すものというよりも、短期間で反応を得やすい表現を優先する方向へと導かれてきた。

このような評価構造のもとでは、「万人に分かりやすい」「好意的に受け取られやすい」映像表現が合理的な選択となる。自然の豊かさや人の温かさ、安心感といった要素が反復的に用いられる背景には、こうした制度的要請が存在している。つまり、移住 PR 動画の表現の同質化は、個々の自治体や制作者の判断によるものではなく、成果主義的な制度設計の帰結として理解することができる。

また、制度上の枠組みは、動画の内容構成にも影響を与えている。本研究で分析した移住 PR 動画の多くは、自然環境や人の温かさ、安心感といった要素を共通して取り入れており、特定の生活条件や状況に焦点を当てた表現は相対的に少なかった。この傾向は、不特定多数に受け入れられやすい表現が、成果を可視化しやすいという制度的条件と結びついている可能性を示唆している。

つまり、移住 PR 動画をめぐる課題は、個々の動画の出来や表現技法の問題として解決できるものではない。動画にどのような成果を期待し、何をもちて成功とみなすのかという制度側の前提が変わらない限り、移住 PR 動画の役割や内容が大きく変化することは難しい。本研究の分析は、移住 PR 動画の問題を「広報の工夫不足」として捉えるのではなく、政策評価のあり方そのものを問い直す必要性を示している。

5 結論：移住 PR 動画の限界と可能性

本研究は、地方自治体が制作する移住 PR 動画に内在する構造的問題を明らかにし、その分析を通じて、「誰の

ための、何のための移住施策なのか」という根本的な問いを提示することを目的としてきた。分析の結果、全国の移住 PR 動画には、自然環境や人の温かさ、安心感といった要素が共通して用いられ、地域ごとの差異や具体的な生活条件が十分に描かれていない傾向が確認された。

こうした表現の同質化は、自治体や制作者の工夫不足によるものではなく、地方創生政策の枠組みの中で、成果の可視化が強く求められてきた制度的背景と密接に関係している。再生数や反応数といった数値指標を重視する評価構造のもとでは、誰にでも受け入れられやすい表現が合理的に選択されやすく、その結果として移住 PR 動画は「好感を得る映像」として機能する一方で、移住という行動に必要な理解や具体的な想像へと接続しにくい構造を持つに至っている。

さらに本研究では、移住が多くの人にとって高いコストと不確実性を伴う行動であること、人口減少下において自治体同士が移住者を奪い合う競争構造に置かれていること、そして移住 PR 動画が移住検討者に必ずしも十分に浸透していないという到達性の問題が重なり合っている点を指摘した。これら三つの要因が同時に存在する状況において、移住 PR 動画が移住者数の増加に直接的に寄与する手段として機能することには、制度的に困難な状況に置かれていると言える。こうした限界が生じる背景として、移住 PR 動画の多くが「地域側の論理」を出発点として構成されている点も指摘できる。現在の移住 PR 動画は、人口減少への対応や人材確保といった国や自治体の政策的要請を背景に、「人を呼びたい」という目的が前面に出やすい構造にある。その結果、移住を判断する主体である都市生活者の視点や、意思決定の現実的なプロセスが十分に反映されていない傾向が見られる。移住は、住居や就労、収入、教育、医療、人間関係といった生活基盤全体の再構築を伴う、人生設計に深く関わる選択である。そのため、動画によって提示される情緒的な魅力や好意的なイメージのみを根拠として行動が決定されるとは考えにくい。このような特性を踏まえると、移住 PR 動画に移住促進の中心的な役割を期待することは、移住という行動の性質との間にずれを生じさせる可能性がある。したがって、移住 PR 動画が本来問われるべき点は、地域の魅力をどのように演出するかという点にとどまらず、都市生活者がどのような条件や制約、不安を抱えながら移住を検討しているのかという視点である。また、その視点が企画や表現の前提として十分に共有されているかどうかとも重要である。移住 PR 動画が抱える課題は、表現技法の問題というよりも、「誰の論理で、誰に向けて発信されているのか」という前提の

ズレに起因していると考えられる。

しかし同時に、移住 PR 動画が無意味であることを意味するものではない。移住 PR 動画は、移住という行動に直結する手段ではないものの、地域の暮らしや価値観を知るための入口として、視聴者が地域との関係を考える契機を提供してきた側面がある。その意義は、「移住を決断させること」ではなく、「生活を理解するための情報を補助的に提供すること」や、「地域との関わりを緩やかに形成すること」に見出すことができる。

ここで一つの反論として、移住しない生き方を否定的に描き、強い危機感や対立的な構図を提示する動画であれば、移住行動を促進できるのではないかという見方も考えられる。しかし、移住は住居、就労、教育、医療、人間関係といった生活基盤全体の再構築を伴う行動であり、短期的な不安喚起や価値判断の押し付けによって即断できる性質のものではない。また、行政広報として特定の生活様式を否定的に描くことは、公共性や中立性の観点からも慎重であるべきである。この点について、岩井 (2019)^(注 52) は、行政における Public Relations の担い手は、プロフェッショナルとして真実性・正確性・公平性を重視し、公共 (Public) に対する責任を持って専門的に活動する必要があると指摘している。さらに、同論文で紹介されている倫理綱領 (2016 年通常総会採択) においても、行政広報に携わる者は、正確な情報伝達とその評価を受け入れる姿勢を前提に、ステークホルダーとの関係において中立・公平な立場を保持し、自らを厳しく律することが求められている。これらの議論を踏まえると、行政広報が特定の生活様式を否定的に描き、価値判断を強く押し付ける表現を用いることは、公共性および中立性の原則と整合しない可能性が高いと考えられる。さらに、人口減少下において自治体間の競争構造が続く限り、刺激的な表現による移住促進は他地域にも模倣され、結果として表現の過激化や同質化を招く可能性が高い。したがって、移住 PR 動画において否定的なメッセージや対立構造を強めることは、移住促進の本質的な解決策とはなり得ない。むしろ移住 PR 動画に求められるのは、移住という大きな生活変化を即座に促すことではなく、視聴者が地域と自分自身との関係を段階的に結び付けていくための契機を提供することである。親しみを持って地域を認識し、訪れてみたい、何らかの形で関わってみたいと感じる過程を通じて、地域の名前や価値

観が記憶に残ること自体が、長期的な関係形成の出発点となり得る。

今後の移住広報において重要なのは、動画の表現を改善すること自体よりも、動画にどのような役割を期待し、何をもちて成果とみなすのかという制度側の前提を見直すことである。本研究が示したように、移住 PR 動画の問題は広報技術の問題ではなく、政策評価や制度設計の問題として捉え直す必要がある。

本研究は、移住 PR 動画の有効性を単純に評価することを目的とするものではなく、その制作と評価を支える制度的・構造的要因を可視化することを通じて、「誰のための、何のための移住施策なのか」という問いを提示してきた。移住 PR 動画を、移住者数の増加を直接担う施策としてではなく、人と地域との関係を段階的に形成するための一つの入口として捉え直すことは、今後の地方創生政策と広報の関係を考える上で重要な示唆を与えるものである。

(参考文献)

注 52 「行政における PublicRelation—専門職形成の必要性—」岩井義和
https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/political/political_56_3/each/18.pdf

呉正恭賞受賞

■卒業制作 (映像作品・構成台本)

三瀬稜史 - 音がない世界で夢を追う -

【字幕なし】

【字幕あり】

27A123-1 橋本 光騎



作品は上記の二次元コードから視聴可能です。

ナレーション：福田 亨

画	TIME	ナレーション
アバン		画見せ：三瀬 (顔アップと3ポイントシュート) T その男には、夢がある。 三瀬： 小さい時からずっと夢として持っていた「デフリンピックに出る事」
黒み&テロップ	0020	N 『デフリンピック』
デフリンピック過去画	0022	M ①～
	0023	N それは、4年に1度開かれる、 耳に障がいがあるアスリートによるスポーツの祭典。
	0031	N その中で、静かに燃える男がいる。 画見せ：プレー
	0047	N デフリンピックの舞台に立てるのはたった12人。
	0053	N 狭き道を突き進む原動力は… 三瀬： 夢を持つことってすごく大事だと思います。/ ロールモデルのような存在として子供たちに夢を与えられたらなと思います。
	0117	N 夢を与えるという、夢。 画見せ：ケアの様子→大阪ベンチの背中 三瀬： 諦めたら終わりますので、最後まで頑張りたいと思います。

画	TIME	ナレーション
	0142	N その“夢”の向こう側は…
	0147	～M①
タイトル		『三瀬稜史—音のない世界で夢を追う—』
三瀬稜史とは	0158	N 彼は、生まれつき耳が聞こえなかった。 三瀬： 僕は全く聴こえないです。例えば、足音、電話のベル、サイレンの音が全く聴こえない。 / 普段は水の中にいる感じ。
	0223	N ^{みつせたかし} 三瀬稜史、31歳。職業、デフバスケットボールプレイヤー。
	0233	N 三瀬の一日は朝9時のトレーニングから始まり、
	0238	N およそ7時間の練習を繰り返す日々を送る。
・ コーヒー持つ ・ 趣味ポスター	0247	N 練習の前、必ずコーヒーを飲むのが彼のルーティンだ。 スタッフ： コーヒー美味しいですか？ 三瀬： 美味しいよ。集中力を高める。
	0304	N そんな彼の武器は…
	0307	M ②～
T 3ポイントシュート		画見せ： 3ポイントシュート
	0321	N その精度にはチームメイトも舌を巻く。 中澤： 元々3Pが凄い上手で、僕も三瀬さんの様に3P打ちたいなと思いました。 上田： コートに立っている時の三瀬選手はとにかくゴールを決める事しか考えていないですね。
	0342	N 三瀬の試合中の3ポイントシュート決定率は35.7%
※ NBA アメリカ 男子プロバスケットボールリーグ	0349	N これはNBA、アメリカプロバスケットボールリーグ全体の平均成功率とほぼ同じ数字だ。
22-23 シーズン 36.1%	0400	N 耳が不自由な事は3ポイントシュートにおいてプラスに働く面があるという。
21-22 シーズン 35.4%	0409	N デフ日本代表のアシスタントコーチ、大戸一輝は…

画	TIME	ナレーション
T 日本代表アシスタントコーチ 大戸一輝	0436	大戸： 聞こえづらい分、周りの情報が入ってこないのももちろんあると思うんですけど、それが逆にシュートを打つ時にリングに集中できる。自分のリズムをしっかりと作りやすいというところもあるんじゃないかなと思うんで。
3 Por ゴール寄		N 三瀬の感覚は…
		三瀬： 難しくないですね。僕はずっと前からシュートの練習をしているので、難しくないと思います。
	0451	N その3ポイントを武器に挑む舞台。それが…
	0456	～ M ②
デフリンピック・デフスポーツとは	0458	N デフリンピック T デフリンピック [黒み 白 T]
T Deaf	0502	M ③～
T Olympic	0502	N 聴覚障がい者を示す「Deaf」と、
	0506	N スポーツの祭典を示す「Olympic」を掛け合わせた名称
	0511	N 4年に1度、耳が聞こえない・聞こえにくいアスリートが鎬を削る世界大会だ。
T 55dB → 健聴者の会話程度の音量	0519	N 2025年、初めて東京で開かれる。
	0525	N 参加資格は、補聴器などを外した状態で健聴者の日常会話程度である55dBが聞こえない事。
	0536	N 耳が聞こえない事は選手にどんな影響があるのか。
T 筑波技術大学 中島幸則 教授 研究分野：聴覚障害者 スポーツ	0542	N 聴覚障がい者スポーツを研究している筑波技術大学の中島先生は…
〈こけるシーン〉		中島： 大人になってもバランスが悪いっていうか、三半規管の機能が低下してま すよという事が分かりました。/ バランスの悪さっていうのは、身体の軸 がぶれた時、そこから聞こえる人なら「すっ」と戻せるけど、聞こえない 人は/ 「すーっうう」みたいなどころがあるんじゃないかなって。
	0617	N 三半規管の低下によってバランス能力が低くなるという。
	0624	N 三瀬たちはそんな過酷な世界で闘っているのだ。
表情乗り換え	0632	～ M ③

画	TIME	ナレーション
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">三瀬：代表への想い</div> T マイペース T 食いしん坊 T バスケットについて	0634	N 三瀬が日本代表に初めて選出されたのは、
	0638	N 2024年アジア太平洋ろう者バスケットボール選手権大会。
	0645	N 代表のチームメイトに三瀬の様子を聞くと…
		越前： 彼はマイペース。例えば、私はいつも試合会場に行く前にホテルの部屋でシャワーを浴びるんですけど、ゆっくりコーヒータイムをやっているんです。ゆっくり楽しんで。
		山田： あとはとにかく食べる。食べる事には波が無い。一定の高水準で食べる。
	0721	N 意外にも、マイペースで食いしん坊。
	0726	N ただ、バスケットについて尋ねてみると…
		越前： バスケットは勉強熱心ですね。NBAの試合をよく見て、試合について勉強していると思います。
		山田： チームのミーティングの時は発言をすごくするんですね。「どう？意見ある？」と聞くと。発言します。
		0758 N そんな三瀬にはデフリンピック出場に熱い想いがある。
ろう学校インサート	0803	M ④～
		三瀬： 小さい時から夢としてずっと持っていた「デフリンピックに出る事」。もう一つは、ろう学校の子供たちに夢を持つ頃の大切さを伝えたい。
	0831	N 三瀬は、自分の道を歩み続けていた。
		三瀬： 夢があるから、今まで頑張ってきたという感じですね。例えば、夢がないとか、気持ちがなくなって諦めてしまったりとかやる気がなくなってしまうという事は一度もなかったです。
	0853	～ M ④
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">健聴者との練習</div> T 2025年3月	0858	N この日、三瀬は健聴者達と練習に臨んでいた。
	0908	N 三瀬は今年で31歳。
	0911	N ケガの予防と疲労の軽減のために、身体のケアを大切にしている。
		三瀬： ラムネ。集中力が上がるし、体が燃える。

画	TIME	ナレーション
3P 決めて全体が盛り上がるシーン T スポーツの世界 T 互いの意図が通じ合う	0940	N 聞こえる人とプレーする事には苦労があると三瀬は語る。 三瀬： 聞こえる人とコミュニケーションの方法が違う。デフの人達だと手話でコミュニケーション取れるけど、聞こえる人たちは手話出来ないから、沢山僕だけ手話で言うと相手は分かんない。
	1014	N コミュニケーションの課題。
	1016	M ⑤～
	1017	N このシーンを見て頂こう。 画見せ：反応返ってこない三瀬
	1025	N マークにつく相手を仲間に伝えるが、反応が返ってこない。
	1032	N また、プレーしていない時のシーンでは… 画見せ：話し合いに入れない三瀬 三瀬： 彼らが口で言ってきても分からないから、僕はジェスチャーで返してOK って。
	1059	～ M ⑤
	1059	N それでも三瀬は、楽しんでいた。
	1103	M ⑤'～ 画見せ：三瀬 3P 決める
	1113	N コミュニケーションの壁は、バスケで超える。
	1120	N スポーツの世界では、一瞬の動きやパスから互いの意図が通じ合う事がある。
	1128	N 一緒にプレーする健聴者はどう感じているのだろうか… 健聴メンバー：三瀬さんは特にそれを感じますね。やっぱ言葉が喋れないんで、パスを求める声とかそういうのが出せないっていうのは分かっているんですけど、その分自分が空いてる時って、ちゃんと目を見てこっちに出せているのを伝えてきたりだとか、例えば、パス一つとっても、ここでお前が1対1しろとか、そういうメッセージがあるような気がしているので。まあその言葉がつかえないっていうところがハンデどころか、僕個人としては、良いプレイヤーだなとすごく思います。

画	TIME	ナレーション
	1207	N バスケットを通じた対話こそが、三瀬のスタイルだった。
	1216	～ M ⑤'
	1215	N しかし、こうしてデフアスリートを受け入れるクラブは少ないという。
		三瀬： メールで耳が聞こえない事を伝えて代表から OK もらったけど、通っているうちにダメになる事がある。
日本代表選考	1244	M ⑥～
	1244	N 11月に開催されるデフリンピックの登録メンバーは12人。
	1249	N 5月に候補選手の中から
	1253	N 12人の内定選手と
	1255	N 3人のリザーブ選手が選ばれ、
	1258	N その後、8月に登録メンバーが決定する。
	1302	～ M ⑥
聴者とうろう者の不和		外観
T 2025年5月17日	1308	N その、内定選手が決まる合宿がこの日から2日間にわたり行われる。
	1315	N 合宿初日。
T デフバスケットボール男子日本代表候補強化合宿	1319	N 参加人数は僅か6人。三瀬の姿もない。
	1326	N なぜこんなことが起きたのか。
	1330	N 原因はデフ日本代表が抱えるコミュニケーションの問題だ。
	1336	M ⑦～
表作成	1337	N 耳の聞こえ具合は大きく分けて3種類。
	1341	N 一般的なレベルで音が聞こえる人を健聴者。

画	TIME	ナレーション
	1346	N 補聴器などを付けてコミュニケーションを音声言語で行う人を難聴者。
	1352	N 耳がほぼ聞こえず、コミュニケーションを手話で行う人をろう者、と呼ぶ。
	1359	N この区別は、個人の認識による部分が多く、医学的には区別されていない。
	1406	N デフスポーツでは、難聴者とろう者が共にチームを築く。
	1413	N 口語と、手話。
	1418	N 合宿初日は声での指示が前提だったため、6人の参加者しかいなかったのだ。
	1428	~ M ⑦
<div data-bbox="146 781 317 815" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">三瀬の挑戦</div> <div data-bbox="146 819 317 853">T 合宿2日目</div>		<p data-bbox="568 781 1497 943">三瀬： もともと僕は2日間参加したい気持ちは強かったんですけども、/私としては個人的に手話を使って指導とか選手の間でのコミュニケーションを取りたいという気持ちが強かったので、/今日の2日目だけ参加することといたしました。</p> <p data-bbox="568 994 1497 1070">1455 N このコミュニケーションの課題を解決するために代表監督に就任したのが須田将広。</p> <p data-bbox="568 1122 1497 1160">1505 N 彼が重視するのは、“デフとしての自主性”だ。</p> <p data-bbox="568 1211 1497 1373">須田： 試合の中で（耳が）聞こえない場合、目だけで情報を取る。だけどベンチから言っていることが分からないと、自分の自主性よりも言っていることが分からない事に集中してしまう。/自分らしいバスケットが出来なくなってしまう可能性がある。</p> <p data-bbox="568 1424 1497 1462">1533 N そんな須田監督が打ち出す、新しい施策。</p> <p data-bbox="568 1514 1497 1552">1539 N それがサインバスケットだ。</p> <p data-bbox="568 1603 1497 1641">1546 M ⑧~</p> <p data-bbox="568 1693 1497 1731">N 実は、須田監督と三瀬は共にアメリカへ渡り、この考え方に触れたという。</p> <p data-bbox="568 1783 1497 1895">須田： サインが元々あったから、手話を使って、例えば子供たちは人工内耳とか喋れる子供もいるし、手話だけの子供もいる。だけどお互いサイン使ってコミュニケーション取ってました。</p> <p data-bbox="568 1946 1497 2022">1613 N ろう者も、難聴者も、健聴者も、共通のサインを使ってコミュニケーションを取れば、共にバスケットが楽しめるのではないかな。</p>

画	TIME	ナレーション
	1625	N それがサインバスケの考え方だ。
		三瀬： アメリカにあるサインバスケを学んで日本に広めて、日本のデフバスケをより強くできたらいいなという想いがあった。
	1641	N デフバスケの中でもまだ浸透していないサインバスケ。
	1648	N それが日本代表に根付けば、コミュニケーションの問題も解決できるかもしれない。
		須田： 新しいものに対しては否定的な所もいっぱいあるので、そういう人たちに丁寧に説明する事が一番大変。でもいつかは分かってくれればと信じて、活動は続けていきたいと思っています。
	1716	～ M ⑧
	1717	N 合宿2日目は、練習試合が行われる。
	1721	N 多くの選手達が強化合宿に集まった。
	1726	N 三瀬がアピールしたい事は…
	1729	三瀬： 今日二日目だけで時間が短い中で、練習試合とか練習中に自分のチームの仲間たちに積極的にコミュニケーションを取りたいと思っています。
T 東京成徳大学男子 バスケットボール部	1745	N 対戦相手は大学リーグ関東2部に所属するチームで、大学チームの中では強豪だ。
	1755	N 三瀬はベンチスタート。
〈試合開始映像〉		～消音～ T 音を消した状態にしています。
試合の様子		T 審判は視覚的な合図を送る
		T 試合中のコミュニケーションの多くは手話
	1833	M ⑨～
	1833	N 第1クォーター終盤、三瀬がコートに立つ。
	1840	N しかし、中々ボールが来ない。
	1845	N 得意の3ポイントをアピールする機会もなく、三瀬はコートを後にする。

画	TIME	ナレーション
	1853	N 迎えた第2クォーター。
	1856	N 29 - 17でリードしている場面で、三瀬はもう一度コートに立った。
	1902	N しかし、またも中々ボールが来ない。
	1908	N 三瀬は懸命にディフェンスに走り、
	1912	N 静かにボールを待つ。
	1917	～ M ⑨
	1917	N 三瀬には大切にしている想いがあった。
	1921	三瀬： 自分がいつも思っている事なのですが、スラムダンクっていう漫画に出てくる「諦めたらそこで試合終了だ」という言葉が強く頭の中に残っているんです。諦めてしまったらもう終わってしまうので、本当に諦めないで最後まで頑張っていきたいと思っています。
	1952	N そしてついに、三瀬がこの試合でボールに触れた最初のプレー 画見せ：3Pシュート
	2002	M ⑩～
	2009	N ファーストコンタクトで見事な3ポイントを決めてみせた。
	2018	N 初ゴールを決めて波に乗る三瀬は、
	2022	N 第4クォーターでもコートに立つ。 画見せ：三瀬3P外す
	2029	N 3ポイントシュートは外してしまったが、三瀬は確かな手ごたえを感じていた。 三瀬： 自分の目標は得意な3ポイントとかのアピールを成功させることで、それをイメージしていたんです。実際合宿に参加してみて、自分の得意なプレーというのはアピールする事が出来ました。
	2058	N 点差は縮まらないまま、試合終了。 デフバスケ日本代表が98 - 73で勝利した。
	2110	N 須田は練習試合後、選手達にコミュニケーションの工夫を訴えていた。

画	TIME	ナレーション
	2151	須田： 気持ちがないだけ。足りない。良いチーム作ってほしい。/手話覚えろじゃない。一人一人の工夫でコミュニケーション取ってください。お願いします。良いチーム作ってデフリンピック勝ち抜きましょう。
	2152	N チームが、一つになろうとしていた。
幼少期の写真	2155	M ⑩～
T 石隈先生	2156	N 1994年、三瀬稜史は佐賀県で生まれた
	2203	N 三瀬が高校生の頃に自主練習していたコートが残っていた。
	2232	N 三瀬： いつもそこに座ってました。そこがベンチでした。草が生い茂っています。リュックとかボールとかそこに置いてて。 今は誰も使っていないこのコートで、バスケットに熱中した三瀬
	2253	N 三瀬： 全くどういう人たちなのか知らないで、ここで会って本当にここだけのっという感じだったので、他の場所で会ったりすることは全然なかったです。
	2300	N 屋外のコートで見知らぬ人とバスケットをするだけの日々。 三瀬はそこで、健聴者との関わり方を学んだという。
	2328	N 三瀬： 聞こえる人とは手話ではコミュニケーションできないので、筆談とかジェスチャーとか、はっきりきちんと伝わるという事がなかなか難しいという面があって。でも聞こえないんだってという事で、筆談をしたり積極的にコミュニケーションをとるようにして、だから聞こえる人と積極的に話せるようになったきっかけの場所でもあるかなと思います。
	2336	N 三瀬がバスケットに会い、デフリンピックを目指した出発点で想いを新たに する。
黒み	2336	～ M ⑪ N だが…
リザーブ選出 T 日本デフバスケット協会 からのメール (下線)		画見せ：メール文章 三瀬： やっぱり悔しい気持ちがあります。内定貰えなかったことはまだ僕の実力が無かったことが分かって。

画	TIME	ナレーション
・森井選手に決められるシーン	2400	N 三瀬は、リザーブ選出だった。 M ⑫～
	2408	N 内定メンバーにけが人などが出た場合、交代で昇格する可能性がある。
	2415	N しかし、リザーブの選手が日本代表に繰り上がった例は指を数えるほど。
	2421	N 非常に険しい道。
	2425	N それでも、三瀬は諦めていなかった。 三瀬： デフリンピックまでの残りの合宿で強くアピールして頑張りたい。 / 諦めない気持ちと頑張る気持ちが大事です。
	2446	N 三瀬は自分がリザーブ選出になった原因をこう振り返る。 三瀬： ディフェンスで試合中、自分のマンツーマン相手が得点決めてしまった場面があったので。だから、今後の課題として合宿までディフェンスの強度を上げていきたいと思います。
	2514	～ M ⑫
三瀬のフィジカル	2513	N ディフェンスの強度。
バスケット部の頃の写真	2518	N それには下半身のトレーニングが必須。
	2523	N 三瀬の弱みについて、須田はこう話す。 須田： 弱いところは、もうちょっと体鍛えてほしいな。人体的な話になっちゃうんですけど、一歩が遅い。やっぱりバスケットを始めたのが遅いから、その分体のづくりがバスケット選手のものではなかった。最近がんばっているお陰でバスケット選手の身体に近づいてきた感覚もある。
	2558	N 三瀬がバスケット部に入ったのは高校1年生。
トレーニング中の映像 T 理学療法士 佐藤晶太	2602	N バスケを始めた時期は決して早くはない
	2610	N 現在、三瀬を担当しているトレーナーも、バスケット選手としては下半身の発達が遅れていたという。 佐藤： 反復横跳びみたいな横の動きが圧倒的に他のスポーツより多いスポーツになるので、特にお尻の筋肉ですね。 / そこを使って動けるような体を作っていくかなきゃいけないんですけど、それがちょっと不十分で、どうしても

画	TIME	ナレーション
		膝に頼るような。ここの太ももだったりとか、内側外側の筋肉に頼るような使い方をしてしまっていたので、/ そのこの部分の強化はちょっと不十分だったのかなと思います。最初は。
<div data-bbox="108 369 347 403" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">東レゾと三瀬の不調</div> <div data-bbox="108 409 279 443">T 2025年7月</div> <div data-bbox="108 495 207 528">三瀬の顔</div>	2701 2710 2716 2740 2811 2812 2824 2832 2840 2858	N この日、三瀬の姿はデフのクラブチーム、東京レゾネイターズにあった。 N 彼はここでチームの代表を務めている。 N その練習の場で、三瀬に異変が起きていた。 <div data-bbox="536 712 823 745" style="background-color: #e0e0e0;">画見せ：中々入らない3P</div> N 得意の3ポイントが入らない。 <div data-bbox="536 887 679 920" style="background-color: #e0e0e0;">三瀬：暑い</div> <div data-bbox="536 927 938 960" style="background-color: #e0e0e0;">上田：今日疲れてる。顔がやばい。</div> <div data-bbox="536 967 975 1001" style="background-color: #e0e0e0;">上田：シュートの感覚はどうですか？</div> <div data-bbox="536 1008 1334 1041" style="background-color: #e0e0e0;">三瀬：まだ身体が慣れていない。コンディションを整えているところ。</div> M ⑬～ N 三瀬は、8月のデフリンピック日本代表を決める合宿に向け、練習量を増やしていた。 N 課題となっている下半身のトレーニングにも時間を割く。 N しかし、3ポイントシュートの不調は続く。 N それを必死にカバーするよう、練習していた。 ～ M ⑬
<div data-bbox="108 1662 347 1695" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">T 2025年8月 大阪</div>	2903 2909 2913	外観 N 遂に日本代表を決める最後の合宿を迎えた。 N 三瀬は最も早くコートに到着。 N いち早く準備を始める。 <div data-bbox="536 2002 1452 2072" style="background-color: #e0e0e0;">三瀬：いつも通り早く入ってストレッチとか、アップで走ったりとか、怪我がないように気を付けて頑張った。/ 練習試合出れる時間が短いと思うけど、</div>

画	TIME	ナレーション
		短い間に3ポイント1本~2本決められるように頑張りたいと思います。
	2950	N 三瀬は練習に前向きに取り組んでいる様に見えた。 画見せ：3P決める三瀬
	3003	N しかし、突然練習を離脱してしまう。 画見せ：練習離脱する三瀬
	3037	N 三瀬の状態について、デフ日本代表に帯同している井筒トレーナーは… 井筒：そうですね、ちょっと今のところ今日は難しいかと。 スタッフ：明日は出来る可能性は？ 井筒：明日は練習が出来るかもしれないですけども。試合は多分出ないです。
	3100	M ⑮~
	3100	N 下半身の強化と3ポイントの精度アップ
	3103	N 練習量を増やしたが故の疲労が、身体にのしかかっていた。 井筒：三瀬選手はちょっと前回の合宿で熱中症っぽくなったんですよ。それで体に少しダメージを受けているんで、全体練習できつい練習も出来ないですし、ちょっと練習したら今ちょっとどこか痛くなったりとか、しやすい状況、そういう事です。
	3131	N 原因は、オーバーワークによる熱中症だった。 スタッフ：痛い？ 三瀬：気持ち悪い。
	3149	N この後、三瀬がプレーする事は無かった。 画見せ：練習を見つめる三瀬の後ろ姿
	3236	~ M ⑮ (黒み 白テロップ) T 三瀬 稜史 T 職業 デフバスケットボールプレイヤー T デフリンピック落選

画	TIME	ナレーション
	3219	<p>M ⑩～</p> <p>三瀬： 監督と話して僕は13番目。あと一人だった。</p>
	3231	<p>N デフリンピックまで、あと一歩だった。</p> <p>三瀬： デフリンピック、僕が選ばれてデフリンピック出たい気持ちは強かったけど、合宿に参加する度感じた事は、デフリンピックは特別な場所ではないと、、うーん。なんだろう。大事な場所ではないと思います。デフリンピックは特別な場所だと思います。</p>
	3325	<p>～ M ⑩</p>
<p>T 2025年11月</p>	<p>3327</p> <p>3342</p> <p>3348</p> <p>3400</p> <p>3403</p> <p>3407</p>	<p>外観</p> <p>N それでもデフリンピックのため、三瀬は佐賀にいた。</p> <p>三瀬： 佐賀バルナーズイベントで、地元の皆さんにデフリンピックの事を知ってもらおうきっかけになればいいなと思って帰ってきました。</p> <p>N 出発点である佐賀の地で、</p> <p>N デフリンピックのPRを行っていた。</p> <p>三瀬： 出来る範囲でサポートできたらと思っています。そういう気持ちがあります。</p> <p>N 集客のための動画を作り、</p> <p>N チラシを配り、</p> <p>N 選手に送る応援のサインを伝えた。</p>
<p>T 2025年11月16日</p>	<p>3417</p> <p>3420</p> <p>3425</p> <p>3431</p>	<p>M ⑪～</p> <p>N 迎えたデフリンピック本番。</p> <p>N 三瀬はスタンドから見守る。</p> <p>N 会場には大勢の人が集まった。</p> <p>三瀬： デフリンピックすごいね。</p>

画	TIME	ナレーション
T ウ 113 - 55 日	3443	N 日本の世界ランクは 21 チーム中 19 位。
	3450	N 初戦の相手は世界ランク 1 位、ウクライナ。 画見せ：ウクライナ アリウーブ
	3502	N 結果は、大敗だった。
	3515	～ M ⑰
		画見せ：試合を見つめる三瀬
	3523	N 翌日、2 回戦の相手は世界ランク 5 位、アルゼンチン。
	3528	N この日、日本には負けられない理由があった。 三瀬： 試合負けたらデフリンピック終わると思う。
	3542	N 4 チームで行う予選の上位 2 チームが勝ちあがる今大会。
	3550	N 2 敗すると予選敗退が決定するのだ。
	3554	M ⑱～
越前 3P	3558	N 日本は、3 ポイントを軸に善戦する。 画見せ：安藤 4 点プレー
	3611	N リードして第 2 クォーターを折り返す。
	41 - 47	3617
3628		N 第 3 クォーター、日本のシュートが中々入らない。
3639		N ここでアルゼンチンが追い付き、
3644		N 逆転される。
67 - 62	3648	N 5 点を追う展開
	3651	N 少しでも点差を詰めた場面。

画	TIME	ナレーション
	3657	N 日本のキャプテン、越前にフリースローのチャンスが来た。
	3705	～ M ⑱
	3705	N 1 本目 画見せ：外す
	3714	N 2 本目 三瀬： ああ、ダメダメ… 気持ち。(が大事)
	3733	N それでも、日本代表は諦めていなかった。
	3741	M ⑲～
	3741	N 試合終了間際、3 ポイントシュートで追いつく。
	3748	N 残り 37 秒
	3753	N 日本がボールを握る。 画見せ：ボール奪われる→アルゼンチンファウル
	3807	N アルゼンチンが5 個目のチームファウルで日本にフリースロー
	3814	N 試合終了 11 秒前。
	3818	N シューターは、キャプテン越前。 ～ M ⑲ 画見せ：決める
	3842	N 2 本目 画見せ：決める
	3904	N 日本 2 点リードで運命の 11 秒。 画見せ：TO 明けから終了まで 画見せ：三瀬 三瀬： すごい。すげえ。

画	TIME	ナレーション
	3929	M ㉔～
	3935	N 日本、鮮やかな逆転勝利。 三瀬： 行く。
	3948	N 三瀬が仲間の元へ向かう。 画見せ：スタンド越しにコミュニケーション取る三瀬
	4011	N 日本が起こしたジャイアントキリング。 画見せ：三瀬が見ている様子
	4026	N 選手達が引き上げた後も三瀬は… 三瀬： 多分、みんな応援分からないけど、聞こえたと思う。
	4041	N 会場外には、日本代表を送り出す沢山の人が 森井： ミツセ、ミツセ
	4052	N 三瀬も集まった人からサインを求められていた。
	4102	～ M ㉔
	4106	N しかし2日後
	4110	N 決勝トーナメント進出をかけた戦い
	4119	N 日本代表は敗退する。
エピローグ	4130	N その足で、三瀬は…
	4133	M ㉔～ 三瀬： ろう者と聴者と共に練習できる環境を作る。そして、ろう者達のレベルを上げるために、ゲーム経験を増やしたいと思っています。 T デフと健聴者が共にバスケできる環境を作る。 T サインバスケに挑戦し続けている T デフリンピックの熱狂から2週間後

画	TIME	ナレーション
三瀬がプレーしながら笑っている画		T 東京レゾネイターズはアマチュアプレーヤーの大会に出場。
		T 3位となった。
		T 東京デフリンピックを終えて 三瀬は歩み始めていた
		T 母校のろう学校
		T 小学1年生の時の担任 石隈先生
		石隈先生 ON 「わんぱくでしたね / デフリンピック出られなくて残念です」
		T バスケットに出会った体育館を訪れた
		三瀬 ON 「本当に懐かしいですね」
		T すると…
		T 現在通っているろう学校の生徒たちがやってきた
		画見せ：三瀬楽しむ様子
		T もう一つの夢
		三瀬回想 ON 「それからろう学校の生徒たちに夢を与える事」
		画見せ：3P
	N 取材中、こんなことも話していた。	
	三瀬： 僕は、聴者みんなに手話を覚えてほしいとは思わない。僕ら聴覚障がい者の事を知ってもらいたいと強く思う。手話じゃなくても他のコミュニケーションがあるし、ジェスチャーとか筆談とかスマホとか色々なコミュニケーション方法があるので、伝えたいことが通じる事が一番いいと思います。	
	4441 N 三瀬稜史。31歳。職業、デフバスケットボールプレイヤー。	
	4451 N 彼は今日も夢を追う。	
	4500 ~M②	

芸術学部奨励賞受賞

■卒業制作（映像作品・構成台本）

ミックスルーツ～はざままで生きる～

17A093-3 瀬瀬 栄美子

映 像	音 声	
	人	内 容
<p>●オープニング</p> <p>黒み インサート 私が考え事をす る様子</p> <p>写真【家族、0歳の私】</p> <p>写真【保育園児、小学生の私】</p> <p>写真【小学3年生の私】</p> <p>写真【集合写真】私にZI</p> <p>写真【家族、父】 小学生の私がロウソクを消 す</p> <p>ももこ 斜めにZI</p>	<p>NA</p>	<p>日本人になりたい。 一度も誰にも話したことのない、私の中に留めるしかなかった願望だ。</p> <p>#M1 CI BGM</p> <p>私は、日本出身の母と、ナイジェリア出身の父を持つ、ハーフ、ミック スルーツである。</p> <p>日本で育ち、日本の公立学校で教育を受けてきた。いわゆる日本人 と同じ環境で育った。</p> <p>私がミックスルーツに、初めて後ろめたさを感じたのは、小学3年 生の時だった。クラスメイトに「外国人」と言われたことが、きっ かけだ。 今でも自分のルーツを肯定的には思えない。</p> <p>純ナイジェリア人の父にも、純日本人の母や友達にも、この願望を 誰にも理解してもらえと思えず、話せなかった。</p> <p>そこで私は、日本社会で生きる血縁的なミックスルーツを持つ方々 に話を聞いた。 そしてこの願望を消化するために、経験や悩みを共有することにした。</p>

<p>●理不尽な出来事</p> <p>藤見よいこ BS</p> <p>藤見よいこ インタビュー</p> <p>藤見よいこ 足元からパンアップ</p> <p>インサート 学校</p> <p>インサート 私の髪の毛</p> <p>写真【編み込みをする私】</p> <p>まひる WS 写真【おさげ髪をしたまひる】</p> <p>まひる インタビュー</p> <p>ももこ 広めの画</p>	<p>NA</p> <p>藤見よいこ</p> <p>NA</p> <p>NA</p> <p>まひる</p> <p>NA</p>	<p>#M1 FO</p> <p>スペインと日本のミックスルーツで、日本国籍を持つ藤見さんは、日本の銀行で不当な対応を受けていた。</p> <p>【銀行での拒否】 銀行の窓口で口座を作りに行ったときに、結構執拗に国籍を確認されて。「本当に日本国籍なんですか？」みたいなこととか。私本名がカタカナが入ってる名前だから、それやっぱ書いた時点で、ちょっと空気が変わったなっていうのは。結局その担当の人が奥に引っ込んでいって、ちょっとゴソゴソって話してきて。帰ってきたら「ちょっとお客様は口座を作れません」みたいに言われたこととかがあって。「国際送金の詐欺とか、トラブルとかがあるから、ちょっと厳しくしてるんですよ」みたいに言われたんですけど。</p> <p>日本国籍を持ち、日本で育ってきたにも関わらず、名前や見た目だけで外国人の枠に入れられ、銀行で理不尽な対応をされていた。</p> <p>そしてミックスルーツに対する不当な扱いの多くは、幼い頃、学校で起こる。</p> <p>強いカールの髪を持つミックスルーツの方には、髪の毛に関する校則が付きまとう。 日本の学校の校則に、適応するため、まとまりやすく、絡まりやすい髪を、毎日時間をかけてまとめる方もいる。 学校に編み込みや、縮毛矯正を許してもらえるよう頼む方もいる。</p> <p>アフリカ系とのミックスルーツである、まひるさん。 校則で許可されているお下げ髪で登校したにも関わらず、問題となった。</p> <p>【校則、おさげの話】 おさげ、校則でOK なんですよ。だから行ったんですけど、そしてらみんなに、「何お前、特別な髪型してんだよ」みたいな。「ほどいてこい、ほどいてこい」って言われて。ほどいて、髪の毛ボサボサで家帰って。みんなみたいにならない。お下げしても、髪の毛にボリュームがある分。</p> <p>また、学生時代、同級生や先輩からのいじめを受けた方もいる。</p>
--	---	--

<p>ももこ インタビュー</p>	<p>ももこ</p>	<p>【「なんか臭くない？」】 先輩たちは私のことを見て、「なんか臭くない？」みたいに言うんですよ、私のところを通るときに。「臭い、あそこにうんこいるからだ」みたいな。で「ギャハハ」って笑うみたいな。それがすごい傷ついて、それだけすごい覚えてますね。</p>
<p>フィオナ インタビュー (Zoom の画面収録)</p>	<p>フィオナ</p>	<p>【いじめ】 他の女子から、無視されたり、ネチネチ嫌味言われたりとか、仲間外れにされたりとか、そういう感じのいじめでしたね。名字がカタカナで、容姿も肌が白い、髪が茶色いとか、本当もうそんな外見だけの上辺の理由でいじめられたんですね。 悲しいし、悔しかったし。何よりも大人が、先生たちがハーフっていう理由のいじめの対処の仕方が、全然わからなくて。もう何もしてくれなかったの。</p>
<p>●マイクロアグレッション</p>		
<p>ももこ アップ 涙ぐむ姿</p> <p>説明スーパー その後ろにインサート 人混み</p>	<p>NA</p>	<p>このような、明らかな嫌がらせや差別的な扱いを受けた経験だけが、私たちを苦しめるわけではない。</p> <p>マイクロアグレッションというものを知っているだろうか。自覚なき差別とも言う。無意識のうちに抱く偏見や先入観が、言葉や態度に表れ、相手を傷つけることである。</p>
<p>藤見よいこ インタビュー</p>	<p>藤見よいこ</p>	<p>【「ハロー」】 道ですれ違った人に急にハローって言われたりとか</p>
<p>ニーナ インタビュー</p>	<p>ニーナ</p>	<p>【大学、市役所】 大学の授業中とかに、回ってきた先生に「大丈夫？」みたいな「読める？」みたいな、言われたりとか。 市役所に住民票を取りに行ったら、「本当に住民票で合ってますか？」みたいな、「なんとか届けみたいなやつじゃなくて、本当に住民票ですか？」みたいなのを3回くらい確認されて。 悪気はないからこそ傷つくんだが。でも悪気がないからこそ、こっちが注意したら、なんかなあ、みたいな。</p>
<p>ニーナ FS</p>	<p>NA</p>	<p>言った本人に、悪意はなかったはずだ。親しみを持った挨拶と、親切な手助けのつもりだっただろう。</p>

<p>インサート 人混み</p>		<p>しかしそれはマイクロアグレッションになりかねない発言であった。純日本人っぽい見た目をしていれば、こんなことは言われなかったのであろう。悪気なく、当たり前かのように、外国人だと決めつけているのである。</p>
<p>インサート 5人の1S (アリシア、アーク、あい、 チェルシー、メリッサ)</p>		<p>また、見た目で見えるようなミックスルーツを持つ方々には絶対聞かれたことのある質問、「どことのハーフ？」も、マイクロアグレッションに当てはまることがある。</p>
<p>川端二寿凛 インタビュー</p>	<p>川端二寿凛</p>	<p>【親の職業聞くのと同じ】 私の「ハーフってどこの？」って聞かれるときの感覚が、初対面で、人の親の職業とか聞かないじゃないですか。「よろしく。ねえお父さん職業何？」って言わないじゃないですか。それと同じ感覚なんですよ、私からすると。「人の事情に土足で踏み込むタイプだ」ってすごい受け取るので。</p>
<p>川端二寿凛 WS レダ Zoom の画面収録</p>	<p>NA</p>	<p>この質問は、自身のルーツの開示を促されるものであり、不快に感じる方もいる。 そして、時にはこの質問が、心の傷をえぐるものにもなる。</p>
<p>写真 【幼少期のレダ】 レダ インタビュー (Zoom の画面収録)</p>	<p>レダ</p>	<p>【「お父さんどこの人？」】 年長さんぐらいで、両親がちょっと微妙な感じの時期が始まったんですけど、そのときに聞かれるとやっぱりデリケートだし。「お父さん何人なの？」の、その“お父さん”っていうワードが、そもそもすごいコンプレックスだったときがあって。つらかった記憶はあるかも。 多分ただの日本人だったら、まずそもそもそれを聞かれないから、そこに対しては、すごい嫌だって思ってた。</p>
<p>くみ FS</p>	<p>NA</p>	<p>褒め言葉も、マイクロアグレッションになることがある。</p>
<p>くみ インタビュー</p>	<p>くみ</p>	<p>【ブラックだからかっこいい】 かっこいいとか言われることもめっちゃ多かった。ボーイッシュだったわけじゃなかったから。ブラックルーツに対してかっこいいって言われてたのが、それもそれでちょっと「うーん」って思ってた時期はすごいあるかな。</p>
<p>あい インタビュー</p>	<p>あい</p>	<p>【「ハーフと付き合えて嬉しい」慣れというか、諦め】 「ハーフと付き合ったの、初めて。嬉しい」みたいなこと言われたこ</p>

<p>インサート 池袋駅西口</p>	<p>NA</p>	<p>とがあつて。「-halfじゃなかったら嬉しくないの?」って思つて。ちょっとした言葉で傷つくけど、そこをわかってくれてる人がいない。慣れたつていうか、もう……諦め?</p>
<p>街頭インタビュー</p>	<p>人1 人2 人3 人4</p>	<p>マイクロアグレッションは、そこらじゅうに溢れている。そこで街中でミックスルーツの印象を聞いてみた。</p> <p>英語とか喋るのすごいですねとかぐらいで</p> <p>文化の共存というか、それでいいものができるんだつたら別に歓迎であるので</p> <p>やっぱ普通の日本の方より積極的に話しかけてくれるとか。明るい印象が強いですね。</p> <p>日本人以上に日本のことを愛してくれてるので、それはすごい良いことだなと思つてます。</p>
<p>インサート 人混み</p>	<p>NA</p>	<p>褒め言葉に聞こえるものばかりだが、ミックスルーツである私たちのことを、日本人としては見ていないようだった。</p>
<p>写真【和服を着る私】 インサート 広場にいる私</p>		<p>しかし少なくとも私は、日本育ちで、日本的な文化しか身につけていないし、英語は全く得意ではないし、内向的だし、日本人並みに日本人として日本を愛している。</p>
<p>インサート 人混み</p>		<p>10組ほどに聞いて、半分ぐらいは、このような無意識なうちに抱く偏見や先入観が、インタビューに現れていた。</p>
<p>インサート 人混みに消える私</p>		<p>マイクロアグレッションは、悪意がないだけでなく、褒め言葉に聞こえるからこそ、身近な人に言われることがある。</p> <p>人間関係のことを考えると、注意するのはなかなか難しく、そうして、表に出てきづらい問題となっている。</p>
<p>インサート 人混み 首下</p>		<p>マイクロアグレッションをする方々を、「差別主義者だ」と責めたいのではない。</p>
<p>インサート 人混み 引き</p>		<p>ミックスルーツに対する理解が、足りないことが原因だからだ。日本ではまだ理解が広がりきっていないからだ。</p>

●アイデンティティ		
インタビュー中のくみと私	NA	<p>そうして、私たちはマイクロアグレッションを幾度となく、受けることとなる。</p> <p>言った側はたった1回のことかもしれない。</p> <p>しかし言われた側は何十回、何百回と聞いてきた言葉だ。</p>
<p>アーク ZI</p> <p>藤見よいこ BS</p>		
まひる ZI		この積み重ねは、自身のアイデンティティに大きく影響を及ぼす。
まひる インタビュー	まひる	<p>【「お箸上手だね」「日本語上手だね」】</p> <p>「お箸上手だね」とか、「日本語上手だね」って話しかけられたり。「自分、日本人からしたら、日本人じゃないんだ」って思ったり。寂しいですね。自分のカテゴリーがないというか。アイデンティティが揺らいでる感じで。</p>
まひる BS	NA	<p>ルーツのある国どちらにいても、その人として認められていないと感じる方もいる。</p>
<p>インサート 葉っぱ</p> <p>インサート 水面</p> <p>インサート 波内際</p>		<p>自分自身は日本人という意識が強く、日本人という輪っかの中においても、内側から、仲間から追い出されるような。どこにいても自分が認められないような感覚だ。日本人というアイデンティティを度々否定されるのである。</p>
写真【幼少期のニーナ】		<p>4歳から小学5年生までスリランカにいたニーナさん。その後日本でおばあちゃんと生活していた。</p>
ニーナ インタビュー	ニーナ	<p>【スリランカと日本の学校でのそれぞれの違い。アイデンティティクライシス】</p> <p>スリランカの学校だと、「日本人だからすごいよね」みたいな感じ。日本に来てから、それでいじめられるとかはなかったし、でもふざけた感じで「国帰れよ笑笑」みたいなのはありました。</p> <p>一線引かれてるっていうか、違う存在なんだなみたいな感じ。アイデンティティクライシスというか、「自分って何人なんだろう」みたいなのか、「どこに属して生きていけばいいんだろう」みたいなことを考えましたね、そのときは。</p>

●家族の理解		
写真【ニーナと祖母】	NA	一緒に暮らし、信頼していたおばあちゃんにも相談ができなくなったという。
ニーナ インタビュー	ニーナ	【相談できなかった。日本で育った人には理解できると思えなかった】 普通の日本人の家庭で育った人には、わかんないだろうなみたいな。
藤見よいこ ZI	NA	藤見さんは純スペイン人の父親にも、理解してもらうのは難しいと感じていた。
藤見よいこ インタビュー	藤見よいこ	【お父さんとは言語的に難しい。移民1世、2世の違い。】 父はやっぱ日本語はすごく上手い人だとは思うけど、繊細なニュアンスとかを日本語でわかってくれるかっていったら難しいから、そんなに深刻な話をしたことがないし。二世の子は日本語で育って、日本の文化的なルーツを持って育って、でもやっぱり外国人として日本に来た親とは、絶対なにかそこには衝突があるはず。
インサート 親子	NA	日本でのミックスルーツへの理解は、家族であろうと、歩み寄りがなくは難しいものである。
●人種ごとの違い		
インサート 人混み 色々な人種	NA	そして今回インタビューをしていく中で、「ミックスルーツ」と一括りにしていたが、どこの国、どの人種のルーツを持つかによって、それぞれ違う経験を持つことに気づいた。
あい インタビュー	あい	【白くなきゃいけない】 白人とのハーフっていうフレームワークを与えられているので、どちらかという、細くないといけないとか、綺麗じゃないといけないっていうのに、一時期、高校とかすごいとらわれてて。食べるものとかも、「これ食べたらやばいかな」とかっていう時期もちょっとあったりしたし。

くみ インタビュー	くみ	<p>【「ハーフが好き」それブラック入ってないよね】</p> <p>「ハーフの子が好き」みたいな。「そのハーフ、ブラック入ってないっしょ」みたいなのはめっちゃあったりするから。いちいち怒らないけど、「ハーフ（白くてかわいい）子が好きなのだけでしょ？」とか思ってたりとかはしますけど。</p>
カレン インタビュー (Zoom の画面収録)	カレン	<p>【「ビッチ」「遊んでる」「夜の仕事して……」】</p> <p>高校時代とかは、やっぱりそういうハーフだから、遊んでたり、ビッチみたいな感じで言われたりしたことも。スナックで大学生の頃バイトしてたときがあって、そのときにフィリピンのハーフって言ったら、「お母さん夜仕事して、お父さんはそれで出会って……」みたいな感じで言われたんですけど、全然そういう出会い方じゃなかったし、嫌っていうか……「そうじゃないのにな」って思って、そういう気持ちになったことがあります。</p>
丸木宇宙 インタビュー	丸木宇宙	<p>【悪口】</p> <p>学生卒業してから、陸上自衛隊に入ったんですよ、入隊して。入隊資格の条件が、日本国籍を有する者なんですね。自衛官はみんな日本人なので、やっぱその中で言う人がいたんですよ、「あの議員は日本人じゃないだろう」とか、日本人じゃないことが悪かのように言う人とかもいて。そういったときに、自分が悪って言われてるような気分になって、つらくて。</p>
カレン Zoom の画面収録 宇宙 FS	NA	<p>周りが思う“ハーフ像”に苦しむ方。 一見ミックスルーツに見えないからこそ、聞こえてくる声に苦しむ方。</p>
インサート 人混み、街並み		<p>ミックスルーツの共通した悩みや経験についての調査は進んでいるものの、それぞれのルーツや環境によつての違いに関する調査は、まだ足りていない部分が多い。そこから日本社会の理解の進まなさを感じることができる。</p>
●カウンセリング		
私 WS	NA	<p>そして私自身も、日本でのマイクロアグレッションや、理解の進まなさに苦しんでいた。</p>
セリーナ萌 WS		<p>心理カウンセラーのセリーナ萌さん。イギリスと日本のミックスルーツであり、ミックスルーツを専門にセラピーを行っている。</p>
セリーナ萌と私の 2S		<p>私は萌さんにお会いし、悩んでいたこと相談した。</p>
私 カウンセリング	私（瀬瀬）	<p>今コンビニで働いてるんですけど、名札を見られることがすごい多</p>

	<p>栄美子)</p>	<p>くて。レジの対応してるときとかに、「この子、どこの国の子なんだろう？」みたいな感じで、1日何十回何百回レベルで名札を見られて。それがすごい結構ストレスで。</p> <p>どういう風に見られるのかっていうのが、すごい気になっちゃって。人が多いところとか、人混みとかが苦手になっちゃって。</p>
<p>私 WS</p>	<p>NA</p>	<p>前は気になっていなかった周りからの視線。気になり始めたのには、理由があった。</p>
<p>私 カウンセリング</p>	<p>私</p>	<p>この卒業制作のために、いろんな方にインタビューしてきたんですけど、「これも人によっては嫌なのか」っていうのを知っていくうちに、どんどんそれに自分も苦しめられていくというか。</p> <p>卒業制作のために深く考えていくうちに、昔の嫌だったこととか、思い出しちゃって。それでどんどん減入っていくみたいな。</p>
<p>インタビューをしている最中の私</p>	<p>NA</p>	<p>今の日本社会の理解の進まなさに、私は、この卒業制作をきっかけに、苦しめられ始めていた。</p> <p>そして萌さんにも、同じような経験があるという。</p>
<p>セリーナ萌 カウンセリング</p>	<p>セリーナ萌</p>	<p>私もカウンセラーになろうと思って、そこで1回すごい向き合った時期が一番つらかったです。それまでは何かちょっと私の場合気にしてなかったというよりは、目を背けてて、ずっと。自分のミックスルーツっていうことに対してそう考えだしてから、めちゃくちゃつらくなって、1回ドーンってなって。自分の心の声、そうやって「こういうのが嫌だったんだな」とか、そういうのを考えるうちに、なんかちょっと癒されたじゃないですけど。</p> <p>どういう気持ちになる？そういうときって、悲しいのか、腹が立つのか。どういう気持ちですか？</p>
<p>私 カウンセリング</p>	<p>私</p>	<p>悲しいが一番強いですかね。まあ、東京だと、外国の観光客の方が増えてて、別に自分の見た目が珍しくなくなったんですけど。別に紛れたいんじゃないくて、日本人として見られたいみたいな気持ちが強くて。そういうふうに見られてないって思うと悲しいですかね。</p> <p>多分それが名札を見られるストレスにも繋がるんですけど。</p> <p>わかるんですよ。「どこの国の方ですか？」とか、名札見る方の気持ちが。多分単純な興味なんだろうなってわかるからこそ、怒れないし。その言葉をこう受け取ってしまう自分が駄目なのかなみたいな。</p>
<p>セリーナ萌 カウンセリング</p>	<p>セリーナ萌</p>	<p>それがハーフとか、ミックスルーツの人の悩みの、私一番難しい</p>

<p>私 カウンセリング</p>	<p>私</p>	<p>とこだと思ってて。思いつ切り差別とか、人種差別とかだったら怒れるのに、全てが、この悪気がないっていうのに集約されちゃって、怒れなくなってるっていう。そこが一番多分つらいんだと思うけど。「この人は何人なんだろう？」っていう疑問もなく、決めつけてるわけだから。「日本人に見えないから、日本人じゃないかも」みたいな。でもそれは間違いといえば、間違いなんですよ。</p> <p>だから別に本人に怒らなくてもいいけど、どっかでそういう自分のために怒ってあげるみたいな気持ちを持つのも、ありなのかなと。これも一つの形じゃないですかね。こうやって表現して作ることで、自分の気持ちを出してるわけだから。</p> <p>これが出来上がったときに、何か吹っ切れるかもしれないですね。いい機会を、自分と向き合う機会を、くれたのかもしれないですね、映像が。</p> <p>#M2 CI BGM</p>
<p>インサート 編集中の私</p>	<p>NA</p>	<p>ミックスルーツのマイナス面しか見れず、見るのが億劫になっていた撮影したインタビュー。</p> <p>自分と向き合い、世間に怒りをぶつけるために、見返してみることにした。</p> <p>そうすると、ミックスルーツの本質が見えてきたのだ。</p>
<p>●励まし</p> <p>丸木宇宙 インタビュー</p>	<p>丸木宇宙</p>	<p>【変わらない事実】</p> <p>どんなに自分が、自分とか周りが否定しようと、やっぱり日本と韓国が入ってるっていうのは、変わらないので。否定的にならずに、個性に誇り持っていけば悪いことばかりじゃないですし。</p>
<p>インタビュー中、 ニーナと私が携帯を一緒に 見る画</p> <p>インサート 3人の1S (宇宙、メリッサ、くみ)</p>	<p>NA</p>	<p>何人であるか、どこに属して生きていけばいいのか、アイデンティティが揺らいだ経験を持つニーナさん。</p> <p>東アジア、ヨーロッパ、アフリカ。様々なルーツを持つ方々に伝えたいことがあるという。</p>

<p>ニーナ インタビュー</p>	<p>ニーナ</p>	<p>【生きて争おう】 いやなんか、「生きていこうね」って言いたいですね。わかり合えないことはいっぱいあると思うけど、でもなんか、苦しんでることの根っこは同じだから。「一緒に生きて、それにあらがおうね。」みたいなことを言いたい。</p> <p>#M2 FO</p>
<p>●活動している方々</p>		
<p>藤見よいこ BS あい BS</p>	<p>NA</p>	<p>そして自分の悩みをきっかけに、同じように悩む人の力になりたい。自分と同じような思いをさせたくない。そう考え、活動する方たちがいる。</p>
<p>アリシア インタビュー</p>	<p>アリシア</p>	<p>【元気づけたい】 日本に住んで、同じような黒人ハーフの子たちを元気づけたい。</p>
<p>チェルシーからアリシアへのパン</p> <p>2人がSNSに投稿している動画 (YouTube から)</p>	<p>NA</p>	<p>そう話すのは、チェルシーさんと、アリシアさん。</p> <p>YouTube、TikTokを中心に、インフルエンサーとして活動している。黒人とのミックスルーツに向けた企画だけでなく、様々な企画を行っているが、それには理由があるという。</p>
<p>チェルシー インタビュー</p> <p>チェルシー、アリシアの2S インタビュー</p>	<p>チェルシー</p>	<p>【ハーフ向けチャンネルとしてではなく】 日本に住んでハーフの子を元気づけたい。本当の意味でそれを達成できるのって、ハーフの子向けの動画を出して、ハーフの子向けチャンネルとして君臨するんじゃなくて。本当にいろんな人に見てもらえる、黒人ハーフの子がやってる YouTube チャンネルになることが、それを本当に達成できることになるんじゃないかっていう。</p>
<p>チェルシー、アリシア 足元からのパンアップ</p> <p>藤見よいこ BS 画像【漫画「半分兄弟」の表紙】</p>	<p>NA</p>	<p>ミックスルーツが、特別枠として扱われない、ただ日本人として活躍する姿を届けるため、日々活動している。</p> <p>漫画家である藤見よいこさん。 ミックスルーツを題材とした漫画「半分兄弟」を執筆している。</p>

<p>藤見よいこ インタビュー</p>	<p>藤見よいこ</p>	<p>【きっかけ】 今までスポットが当たってなかった人たちのことを書こうっていう、大きい流れが世界的に来てるなって思って。日本だとやっぱ同性愛者だったりとか、トランスジェンダーの人の表象とかは、やっぱ漫画の世界でもすごい発展してて。でもやっぱりエスニシティ、人種とか民族のことは、漫画ではまだ全然書かれてないから、これは自分が書ける分野だになっていうふうに思った。</p>
<p>画像【漫画のコマ2つ】</p>	<p>NA</p>	<p>取材や実体験を含め、当事者の声を伝えることで、ミックスルーツの経験や考え方を広めようとしている。</p>
<p>藤見よいこ インタビュー</p>	<p>藤見よいこ</p>	<p>【子供のために】 今小学生くらいの移民二世の子とかに、絶対同じ思いをさせたくないっていうのは。ちゃんと私達世代で食い止めるからみたいなのは。この子たちが、そんな悩まなくていいことでは悩まなくて済むような社会にしたいなっていうのは思います。</p>
<p>画像【漫画のコマ1つ】</p>	<p>NA</p>	<p>この漫画に共感するのは、ミックスルーツの当事者だけではなく。他のマイノリティを持つ方々からも、「自身の経験と重なる部分がある」と、共感の声を呼んだ。</p>
<p>藤見よいこ インタビュー</p>	<p>藤見よいこ</p>	<p>【弾かれる人たちの見えてるもの】 普通みたいな概念が真ん中にあるとしたらその端っこにいる人たちがいて。弾かれた人たちの見えてるものっていうのは、やっぱ重なる部分があるのかな。</p>
<p>藤見よいこ WS あい WS 画像【Instagram のアカウント、活動のスローガン】 説明スーパー その後ろにインサート 人混み あい WS</p>	<p>NA</p>	<p>日本でマイノリティを意識して暮らしてきたからこそ、見えてくるものがある。 そして他のマイノリティを持つ方々のために活動する方もいる。 あいさんは、日本での共生、反差別に関する発信を SNS で行っている。 活動を始めたきっかけは、永住許可取り消し事由の拡大に関する法案が可決されたこと。この法案は当事者の声を聞くことなく、可決され、永住許可を持つ方々に対する風当たりが、一層強くなるものであった。 あいさん自身は、日本国籍を持ち、この法案の対象になることはな</p>

<p>あい インタビュー</p>	<p>あい</p>	<p>いが……</p> <p>【海外ルーツを差別】</p> <p>私も結局は自分には関係ないし。お父さんも、最悪取り消されることはないかなって思うんですよ、仕事もちゃんと安定してるし。これが通ってしまうことで、海外ルーツとか、外国籍に対して差別することを許されてしまう感じがして、それが嫌だった。</p>
<p>あい アップ</p>	<p>NA</p>	<p>ある思いから、この活動をしているという。</p> <p>#M3 FI BGM</p>
<p>あい インタビュー</p>	<p>あい</p>	<p>【ハーフコミュニティのため】</p> <p>自分がハーフで、すごい嫌だったときに、ハーフコミュニティがすごい手を差し伸べてくれたので。何か自分も、次できるかなみたいな。</p>
<p>●エンディング</p> <p>インタビュー中のくみと私</p>	<p>NA</p>	<p>このインタビューたちが私を苦しみから救い出してくれた。</p>
<p>編集中の私</p>		<p>日本社会での生きづらさや、日本人として認められない疎外感、認められたいと切に願う気持ちは、決して私だけが感じていたものではなかったと知った。</p>
<p>インサート 3人の1S (川端二寿凛、フィオナ、セリーナ萌、カレン、ニーナ)</p>		<p>この映像が、誰かにとって、苦しみから抜け出すための一筋の光となれば、嬉しい。</p> <p>また、ミックスルーツを、他人を思いやるきっかけになることを、願う。</p>
<p>インサート 人混み アップめ</p>		<p>私はこの映像で、世間へ怒り、自分と向き合ってきた。</p>
<p>インサート 東京の街並み</p>		<p>ついに「日本人になりたい」という願望を昇華できた気がする。</p> <p>#M3 FO</p>
<p>叫ぶ私</p>	<p>私</p>	<p>私が何人かなんて関係ないだろ。聞いてくんな。</p> <p>私は日本人だ。</p>

放送学科特別賞受賞

○卒業論文

二次的継承の時代のテレビの 戦争表象

—NHK 国内放送と NHK WORLD-
JAPAN との比較から—

27A049-3
大野 充輝

目次

第1章 はじめに

- 1-1 戦後 80 年と戦争記憶の承
- 1-2 「二次的継承」の時代
- 1-3 NHK 国内放送と国際放送

第2章 先行研究の整理と本研究の位置づけ

- 2-1 先行研究の整理
- 2-2 本研究の位置づけ

第3章 研究方法

第4章 2025 年放送八月ジャーナリズム番組の内容分析

- 4-1 戦争表象の構成
- 4-2 語りの視点の構成
- 4-3 戦地・主要舞台の構成
- 4-4 各番組が主に扱ったテーマや出来事
- 4-5 国内放送と国際放送の比較分析
- 4-6 本章の小括

第5章 戦争関連番組の歴史的変化と 2025 年の位置づけ

- 5-1 不変の軸としての原爆と、その比重の変動
- 5-2 「世界へのメッセージ」の出現と二重の機能
- 5-3 「継承」の歴史的変容と範囲の縮小
- 5-4 本章の小括

第6章 結語

第1章 はじめに

1-1 戦後80年と戦争記憶の継承

2025年、日本は戦後80年という大きな節目を迎えている。この間、日本は国際法上の戦争（国際間の全面的な武力衝突）や他国への侵略を行わず、日本国憲法第9条に基づく平和主義を国家の原則として維持してきた。加えて、唯一の被爆国として、日本政府は国連をはじめとする国際的な場で核兵器廃絶や軍縮の重要性を訴えてきた。同時に、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）などの被爆者団体は、被爆の実相を自らの経験として語ることで、核兵器の非人道性と平和の価値を国際社会に訴求してきた。しかし、世界情勢に目を向ければ、ウクライナ危機やパレスチナをめぐる紛争など、国際秩序の不安定化が顕著になっている。さらに、SIPRI 大量破壊兵器プログラムのアソシエイト・シニアフェローを務めるハンス・M・クリステンセンは「冷戦の終結以降続いてきた世界の核兵器数削減の時代は終わりつつある。その代わりに、核兵器庫の拡大、鋭さを増す核のレトリック、そして軍備管理協定の放棄という明確な傾向が見られる」と述べ、かつてないほどに核兵器の脅威が高まりつつあることを指摘している（SIPRI 2025、引用部は筆者訳）¹。このような国際状況の中で、石破首相（当時）は2025年の広島平和記念式典の式辞の中で次のように述べた。

「広島、長崎にもたらされた惨禍を決して繰り返してはなりません。非核三原則を堅持しながら、『核兵器のない世界』に向けた国際社会の取り組みを主導することは、唯一の戦争被爆国である我が国の使命であります」（石破 2025）

このように、日本政府自身が、唯一の戦争被爆国として「核兵器のない世界」の実現に向けて国際社会を先導することを自国の使命と位置づけているように、日本は改めて世界に対して反戦・反核を一層強く訴えていく必要があると考える。

一方で日本国内に目を向けると、戦争体験者の高齢化と減少が急速に進んでいる。1940年以前生まれの「戦争体験世代」は2020年時点で人口比9.2%、終戦時に20歳以上だった層に至っては2024年時点で0.3%以下となっている（舞田 2022・木ノ下、岡嶋 2024）。その中で、過

去の記憶や教訓を直接受け継ぐことは次第に難しくなっている。戦争の記憶は、いまやメディアなどを通じて学ばれるものへと重心を移しているのだ。

村上（2017）によると、中学生における第二次世界大戦の記憶の継承主体について、2006年の調査では「学校の教師」という回答が最も多かったのに対し、2016年調査では「テレビ」が最多であった。さらに、NHK放送文化研究所が実施した「戦後80年に関する意識調査」（2025）でも、「これまでに触れた先の戦争に関する情報のうち、どのようなところで触れた情報をよく覚えていますか（複数回答可）」という設問について、「SNSやインターネット」と回答した人が7.3%であったのに対し「テレビや映画」と回答した人が72.9%と大半を占めていた。こうした結果は、SNSやインターネットなどが普及し情報環境が多様化する中でも、テレビのような伝統的なマスメディアが、戦争体験者の語りにも代わる主要な戦争記憶の継承主体として、依然として大きな役割を果たし続けていることを表している。

しかしながら、吉本（2022）が山口県内の高校生112人を対象に実施した意識調査によると、75%が「日本の戦争の歴史に興味がある」と回答した一方で、終戦の年月日を正確に答えられたのはわずか46.4%にとどまった。この結果は、若い世代が戦争の歴史に関心を寄せているにもかかわらず、基礎的な歴史的事実さえ十分に共有されていない現状を示している。

それでは、そもそもなぜ戦争の記憶や平和の価値を継承し続ける必要があるのか。日本赤十字社が実施した「戦後80年に関する意識調査」（2025）では、戦争体験を将来に伝えることが「大切だと思う」と回答した人は全体の87.6%に達している。こうした結果は、体験者の減少にもかかわらず、戦争の惨禍や平和の意味を社会として継承すべきだという意識が広く共有されていることを示している。しかし、その一方で「戦争のない世界は実現しないと思う」と答えた人が68.6%、「将来的に日本が戦争の当事者となる可能性がある」と考える人が53.2%に上るなど、将来の平和に対する不安も強く表れている。

また、村上（2018）は、2016年に中学生を対象に実施した調査の中で「戦争をよく記憶している者が80歳以上と高齢化し、戦争体験を直接聞くことが難しくなりました。下の中から、あなたの気持ちに最も近いものを、一つだけ○をしてください」という設問を用いて、体験者減少への受け止め方を尋ねた。その結果、「戦争体験の継承は必要ない」が2.2%、「戦争体験が少なくなるのは仕方がない」と答えた生徒が12.6%にとどまる一方で、「難しいが戦争体験を継承した方がよい」が29.3%、「戦争

1 'The era of reductions in the number of nuclear weapons in the world, which had lasted since the end of the cold war, is coming to an end,' said Hans M. Kristensen, Associate Senior Fellow with SIPRI's Weapons of Mass Destruction Programme and Director of the Nuclear Information Project at the Federation of American Scientists (FAS). 'Instead, we see a clear trend of growing nuclear arsenals, sharpened nuclear rhetoric and the abandonment of arms control agreements.'

体験者がいなくなると、戦争がまた起こるのではと心配だ」が33.0%を占めていた。これらの値は、多くの人々が戦争体験者の不在を「戦争が再び起こるかもしれない」という不安と結びつけて認識していることを示している。それは、戦争の記憶を継承すること自体が、社会の平和意識を維持し戦争を抑止する機能を持つという理解があるからだと考えられる。したがって、体験者がいなくなった今こそ、その記憶をどのような形で社会に伝え続けるかが問われている。

このとき、戦争に対して放送がどのように関わるのかは決定的な意味を持っている。放送は、戦争の被害や加害、周縁化された人びとの経験を可視化し、多様な視点から「なぜ戦争をしてはならないのか」という理由を共有させる力を持つ。しかし同時に、特定の民族や国家を一方的な「敵」として描き、暴力や排除を正当化する言説を拡散してしまう危険もはらんでいる。この点を極端なかたちで示した例として、しばしば言及されるのがルワンダの事例である。

1994年のルワンダ虐殺が起こった際に、民間ラジオ局がツチ族を繰り返し敵として描き出す放送を流し続けた。ニュースやトーク番組の形式をとりながら、迫害や殺害を直接的に扇動したことが指摘されている(Des Forges 1999)。そしてその結果、推定100万人以上が死亡したとされている(United Nations 2003)。

本論で調査の対象とするNHKの戦争関連番組は、あくまで過去の戦争の記憶をどのように描き、現在に伝えているかという点でルワンダの事例とは異なった背景を持っている。しかし、どのような表象を描き、どのような語りを提示するかという点で視聴者の戦争観・平和観に影響を及ぼさうという意味では連続している。

1-2 「二次的継承」の時代

本論文では、こうした体験者の減少と記憶の断絶の進行を前提に、現在を「二次的継承の時代」と定義する。

「二次的継承の時代」とは、戦争体験者が急速に失われる中で、戦争記憶の担い手が「体験者の直接的な語り」から、「間接的な語り」による継承へと移行せざるを得ない時代を指す。こうした間接的な継承について、広島市では平成24年から被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを継承し、それを伝える被爆体験伝承者の育成事業が行われるなど、自治体による取り組みも進められている(広島市2025)。また、学校教育における平和学習や戦争関連番組の放送を通じたメディアによる継承は、この時代における戦争記憶の主要な担い手となっている。

成田(2020)は戦争の語りを4つの時代区分で整理し、

1990年代以降を、戦争が太平洋戦争を経験した実在の側からではなく「学校教育やメディアを通じて学習するもの」とし、「記憶」の時代として位置づけている。そのため、こうした議論に倣うなら、現在も同様に「記憶の時代」である。そのうえで本論文が現在を「二次的継承の時代」と呼ぶのは、この「記憶の時代」のなかでも、一次的な体験の語りからメディアや教育を通じた二次的継承へと重心が移りつつあるためである。こうした変化のなかで、「メディアが記憶をいかに受け継ぐのか」という課題そのものが強く意識され、戦争をめぐる語りの中心的なテーマとして前面化している。

ジャーナリストの斎藤貴男と映画監督の森達也の対談を書籍化した「日本人と戦争責任」(2007)では今から約20年前の時点であるにもかかわらず、「戦中派に話が聞ける最後のチャンス」という問題意識が提示されている。また、NHKもこの時期に「ヒバクシャからの手紙」(2008)、「ヒバクシャからの手紙～そしてヒバクシャへの手紙～」(2010)のような番組を放送し、体験者の声を記録として残すことに取り組んでいる。

このような背景のもとで、メディアにおける「継承」のテーマ化が顕著になってくる。米倉(2018)によると、2015年に放送された八月ジャーナリズム²の44番組のうち、実に半数が「継承」をテーマにしていた。この割合は、単に体験者の消滅が加速する中で、メディアが「継承」を戦争報道の中心的な課題として認識し始めたことを示唆しているだけではない。むしろそこには、受け継がなければ記憶は消えてしまうという差し迫った危機感のもとで、メディアが必然的に「継承」を前面に押し出さざるをえなくなった状況そのものが表れている。言い換えれば、「二次的継承の時代」とは、戦争体験者の喪失に直面した社会において、メディアが体験者に代わって戦争の語りと継承の役割を引き継ぐ時代である。そこでは、記憶の断絶を防ぐための「継承」が、量的にも質的にも強く要請されている。

村上(2018)では現在の平和教育について、戦争記憶を次世代へと伝え、戦争体験のない若者世代に当事者意識を身につけさせることが課題であると指摘している。また、藤原(2002)が述べるように、日本で語り継がれる戦争は「正しいも間違いもない」絶対反戦の立場に立つ語りであり、その記憶は日本社会全体で「風化させてはならない記憶」として共有されてきた。日本における絶対反戦の立場は、憲法9条の戦争放棄・戦力不保持・

2 日本において1950年代に形成され、8月の原爆忌から終戦の日の時期に、新聞・テレビで戦争関連特集が集中的に扱われる現象を指す用語である(米倉2019)

交戦権否認や、近年の政府声明における「力による一方的な現状変更」への一貫した反対姿勢にも表れている(岸田 2022・外務省、NATO 2025)。この根底には、第二次世界大戦における膨大な戦死者と広島・長崎の原爆被害を経験した日本社会が、戦争を人間の生命と尊厳を破壊する行為として認識し、二度と繰り返さないとの決意に至ったことがあると考えられる。日本国憲法前文も、国民が恒久平和を願い、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意」し、すべての人々が恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生きる権利を有すると規定している。こうした平和観に基づく戦争記憶の継承は、日本社会における戦後 80 年間にわたる平和主義や反戦意識を支える社会的基盤の 1 つとなってきたと理解できる。

1-3 NHK 国内放送と国際放送

この「二次的継承」において、NHK は 2 つの異なる方向性を持っている。1 つは、日本国内の視聴者を対象に「国民的記憶の再生産」を担う国内放送である。もう 1 つは、海外の視聴者に向けて「日本像の提示」や「国際理解の促進」を目的とする国際放送 (NHK WORLD-JAPAN) である。「外国人向けテレビ国際放送」の強化に関する諮問委員会 (2013) においても、海外への積極的な情報発信の重要性が指摘されており、NHK WORLD-JAPAN では国内番組の字幕・吹き替え版の再放送や独自番組を通じて日本の平和への取り組みを世界に発信している。

世界各地で武力紛争が続き、核兵器をめぐる緊張も高まるなかで、日本のメディアが国内外に向けてどのような戦争観・平和観を発信しているのかを分析することは重要である。そこから、日本がかつての戦争をどう捉え、どのような教訓を導き出し、世界にどのような役割を果たそうとしているのか、さらにその過程でメディアがどのような使命と立場を担っているのかを検討できるからである。

そこで本研究ではこのような問題意識から、戦争体験者の減少と二次的継承の進行を背景に、NHK の国内放送および NHK WORLD-JAPAN (以下、国際放送) の戦争関連番組を対象とする内容分析を行うこととした。

第 2 章 先行研究の整理と本研究の位置づけ

2-1 先行研究の整理

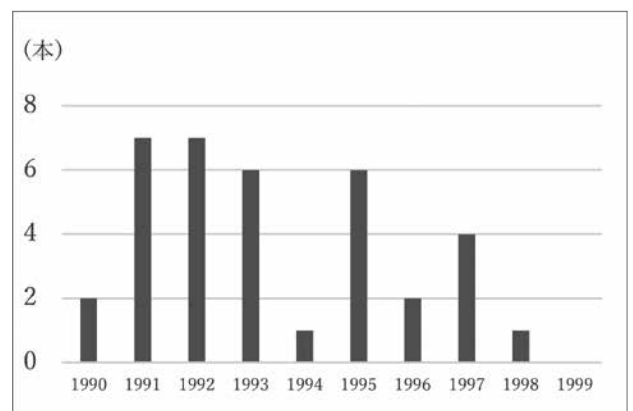
今日まで、戦争関連番組に関する研究は八月ジャーナリズムの分析を中心に行われてきた。米倉 (2019) によれば、八月ジャーナリズムは戦争を「受難」の経験とし

て捉え、その記憶を語り継ぐ「受難の語り」という特徴を持つ。

特に日本の戦争関連番組の中でも主要なテーマである、広島・長崎への原子爆弾 (以下、原爆) の投下においてはその特徴が顕著に表れている。米倉 (2021) は「原爆による未曾有の被害の経験を広く共有するとともに、その記憶を世代を超えて継承してきた」と述べているように、八月ジャーナリズムの多くが広島・長崎での原爆被害を中心に、東京大空襲や沖縄地上戦など、戦時下の日本国内における受難の姿を描いてきた。そしてその多くは、戦争を「させられた」という被害者の視点であり、戦争の被体験者からの語りであった。

しかし、1970 年以降、八月ジャーナリズムは「受難の語り」だけではない、より幅広い形へと変化を遂げていく。伊藤 (2002) は、『戦争体験・記憶』の継承の側面には常に選択や排除のプロセスが存在し、その背後には政治社会学的な力学が作用していると論じている。こうした記憶の選択性は、中国での日本軍による戦争加害の描写が、1972 年の日中国交回復に向かう政治的文脈のなかでようやく取り上げられるようになったことにも端的に表れている (米倉 2021)。また、1990 年代、慰安婦問題など過去への向き合い方が議論になり「ドイツ見習え論」³が広まった (庄司 2024)。さらにアジア全体で日本の戦後補償や戦争責任を問い直す動きが相次いだ。こうした社会的背景のもとで、日本のアジア諸国への加害行為を取り上げる番組が増えた (米倉 2018)。事実、図表 1 に示されているように、1990 年代前半には日本の戦争加害を扱った番組が多く放送されていることが分かる。

図表 1 加害を取り上げたドキュメンタリー番組の本数 (米倉 2021 をもとに作成)



3 1980 年以降、歴史認識が問題化されるにともない、日本は十分に「過去」に向き合っておらずドイツの例を規範にすべきとの論調 (庄司 2024)

その具体例として、「NHK スペシャル 調査報告・朝鮮人強制連行 初公開・6万7千人の名簿から」(NHK 1993) や「初めて戦争を知った〔3〕夫たちが連れて行かれた 神戸・華僑たちと日中戦争」(NHK 1993) のような強制連行や華僑の迫害を取り上げた番組が90年代前半に多く放送された。

しかし、こうした加害主題の登場は限定的であり、実際に番組の主題や紹介される加害事例はごく一部のエピソードに偏っているという指摘もある。コルドバアロジョ(2019)によると、加害が取り上げられる国や事象は限定されており、その多くが中国に対するものである。また、外国人被害者が描かれる場合には、多くはナレーションによる説明にとどまり、映像として表現されることは少ないことが示されている。さらに、米倉(2021)で90年代以降の日本社会の保守化や右傾化によって加害を明示的に扱う番組は排除・縮小される傾向があることが述べられているように、2000年以降は日本の加害行為が描かれることは再び少なくなった。

特にこうした主題としての加害は地上波などの放送のメインストリームではほとんど放送されず、深夜放送やBS・CS放送といった限定枠に追いやられる傾向も明らかとなっている(杉山、森田、古賀 2010)。さらに先述のコルドバアロジョ(2019)は非日本人被害者のうち84%がNHKで放送されていることもあり、それらの過小表現には商業的拘束にかなりの原因がある可能性についても言及している。このような商業的拘束力や政治社会的な力学の影響により、現在では日本のアジアに対する加害はメディア上では表現されることはほとんどなく、排除されている戦争記憶となっているのが実情である。

一方で、「継承」というテーマの登場は、戦争関連番組に異なる側面をもたらした。戦後80年という時間の経過の中で、戦争体験者は高齢化により減少し、戦争記憶が遠い過去のものとなる中、特に戦争体験第4世代を中心とする若年層への「継承」が近年の大きな課題となっている。村上(2018)によると、戦争体験第4世代とは2006年以降に生まれた子どもたちであり、「日常接することのできる祖父母のほとんどは戦後生まれであり、戦争について親族間で直接的に話を聞くことはほぼ不可能」という特徴を持っている。

そのため、「私たちに戦争を教えてください」(フジテレビ 2015)のように人気の俳優やタレントを起用した戦争関連番組や、「ロッパグラム 転生したら戦時中の喜劇王だった件」(NHK 2021)、「セイコグラム 転生したら戦時中の女学生だった件」(NHK 2022)のように戦時中にもSNSがあったらという、若者の興味を引くような

作品が増加している。とりわけ後者2番組はInstagramでも配信されるなど、クロスメディア展開を行うことで、テレビ離れが進んでいる若年層の興味を惹き、戦争関連番組の心理的ハードルを下げる工夫がなされている。

さらに、SNSを活用した取り組みの中には、視聴者がコンテンツの受け手にとどまらず、記憶の担い手として参加するタイプの企画も見られる。視聴者から戦時中の日常生活の証言や写真を募り、それらを番組やウェブ記事で紹介する「#あちこちのすずさん ~教えて下さい あなたの戦争~」(2019年開始のシリーズ企画)は、市民の体験を集約する参加型アーカイブ・証言ドキュメンタリーとして、戦争を人々の暮らしの連続として可視化しようとする試みである(NHK n. d.)。また、被爆者の記録や日記などを参照し、現代の高校生らが当時の状況を想像して文章を作成し、それを架空の市民アカウントから投稿する形で戦時下の広島の時空間を再現した「1945 ひろしまタイムライン もし75年前にSNSがあったら」(NHK 2020)のように、SNS上での追体験を通じて戦争の記憶を現在進行形の出来事として想像させようとする企画も実施された。後者については、差別的な表現を含む投稿が問題視されたり、元の日記との相違が明示されていない点が歴史的資料の扱いとして不適切だとされるなど、戦争の記憶をSNS上で演出することの倫理や表象のあり方が問われる結果ともなった(谷 2020)。

2-2 本研究の位置づけ

これまでのテレビにおける戦争関連番組研究は、主に国内放送を対象としており、送り手も受け手も日本人であることを前提としてきた。一方で、日本においてはNHKによる国際放送が実施されており、その形態はテレビやラジオなどだけでなく、インターネット配信にまで及ぶ。特にNHK WORLD-JAPANでは、単に翻訳放送だけではなく、外国人向けに日本国内では放送されない独自番組の放送も行っており、日本の伝統や文化を世界に幅広く伝える役割を果たしている(NHK WORLD-JAPAN 公式サイト)。

また、「外国人向けテレビ国際放送」の強化に関する諮問委員会(2013)は、グローバル化の進展にともない、海外への積極的な情報発信を通じて日本への理解促進を図ることの重要性が高まっていると指摘している。とりわけ、ウクライナ侵攻やパレスチナ紛争など分断と不安定化が深刻化する現在の世界情勢のもとで、戦後一貫して「平和国家」としての姿勢を掲げてきた日本の理念を広く世界に訴えることは、いっそう重要になっている。メディアによる国際情報発信の役割はきわめて大きいと

言える。

NHK WORLD-JAPAN 公式サイトでは、「The Pursuit of PEACE : Searching for Answers」という特集が組まれており、第二次世界大戦から現在のウクライナ等を扱ったものまで多くの戦争と平和に関する番組が配信されている。ここで配信されている番組を分析することは、日本が国際社会に対して第二次世界大戦をどのように位置づけているのか、また現在の世界に対してどのようなメッセージを発しているのかを検討する上で重要である。

既存研究の多くは国内放送における「国民的記憶の再生産」に注目してきたのに対し、国際放送における戦争関連番組を扱った分析はほとんど見られない。国内放送が日本国内の視聴者に向けて戦争経験を共有し直す装置であるとすれば、国際放送は海外の視聴者に向けて「日本像の提示」や「国際理解の促進」を目的としている。そのため、同一の放送機関による戦争関連番組であっても、発信対象や言語、伝達目的の違いによって構築される戦争表象やメッセージには差異が生じる可能性が高い。

また、杉山ら（2010）は、加害の視点が放送編成上の主流から排除されている実態を示している。この点を踏まえると、放送内容が想定する受け手や発信の目的によって、伝えられる戦争表象やメッセージは異なる可能性がある。それを明らかにすることで、メディアが社会記憶や歴史認識の形成に果たす役割を再検証することができる。すなわち、「何を強調し、何を省き、どの記憶を標準化するか」という選択の構造を問い直すことができる。

したがって本研究では、2025年に放送されたNHKの国内放送と国際放送の八月ジャーナリズム番組を対象に、番組内で語られる表象、語りの主体、主な舞台、取り上げられた出来事について、どのようなことが描かれているのかを内容分析によって明らかにする。そのうえで、国内放送と国際放送との間で、どのような戦争観・平和観が強調され、どのようなテーマや視点が相対的に周縁化されているのかを比較検討する。

また、過去にNHKで放送された八月ジャーナリズム番組との比較も行い、2025年の番組で語られていたテーマや表象、およびほとんど語られていなかったテーマや表象が、1970年代以降の番組の中でどのように位置づけられてきたのかを整理する。こうした時系列的な検討を通じて、現在描かれている表象が過去から継続してきたものなのか、それとも新たに浮上してきたものであるのか、また現在ほとんど描かれていない表象が、かつては取り上げられていたが後退したものであるのか、一貫して周縁化されてきたものなのかを明らかにし、その上で「二次的継承の時代」における戦争記憶継承の特徴と課題を

考察していく。

本研究が特に重要であるのは、まさに今、戦後80年の中で、戦争体験の継承が危機に瀕しているという現代的な課題に対応するものだからである。実体験世代の急減とともに、学校やメディアを通じた記憶の再生産が主要な戦争を学ぶ手段となる中、その戦争記憶がパターン化し、形骸化されてしまう危険性、すなわち継承自体の驕りがこれまでの研究から指摘されている。加えて、世界情勢の不安定化によってかつてないほど戦争の惨禍や核の脅威が現実味を帯びる中、「日本が唯一の被爆国として世界に発信すべき記憶」「公共放送が果たす語りの責任」はますます大きくなっている。

本研究の目的は、戦争体験者の一次的な証言が急速に失われ、「継承」が強く求められる「二次的継承の時代」において、NHKの戦争関連番組がどのような戦争記憶を選び取り、どのような記憶を周縁化しているのかを明らかにすることである。とりわけ、被爆体験を中心とした被害表象と、日本の加害行為やマイノリティの経験などの表象との間に生じているバランスの偏りや、描かれる視点や事象の偏りに注目し、さらに「継承」や「世界へのメッセージ」といった現代の社会を反映した語りが、どのような文脈で語られるのかについて明らかにする。

本研究は国内放送と国際放送の比較を通じて、戦争記憶が国内向けと国際社会向けにいかなるかたちで語り分けられているのかを明らかにするとともに、戦争体験者の一次的証言が減少する二次的継承の時代に、公共放送がどのような選択と偏りのもとで「継承」の実践を行っているのかを具体的に示す点に特徴と意義を有する。このような検討を通じて、日本社会が国内外に提示している戦争観・平和観の輪郭と偏り、継承される事象の偏りを可視化し、今後のメディアによる戦争記憶の継承のあり方を検討するための基礎的知見と視座を提供したい。

第3章 研究方法

本研究では、2025年のNHK（総合・Eテレ・BS）で放送された八月ジャーナリズムの戦争特集番組と国際放送で配信された第二次世界大戦を主題とする戦争関連番組を、主な分析対象とした。

NHKの国内放送についてはNHKスペシャル、ETV特集、BSスペシャルの3番組を中心とし、NHKプラスを利用して繰り返し視聴する方法で分析を行った。国際放送については、特設ページ「The Pursuit of PEACE : Searching for Answers」でまとめられている戦争関連番組のうち、8月に配信されたものを対象とした。この特設サイトではウクライナやパレスチナに関する番組も複

数配信されているが、本研究で分析するのは「日本が継承する戦争」に限るため、そうした番組は対象外とした。

さらに、国際放送で配信されている番組の多くが、もともと NHK の国内放送で放送された番組の再放送であることが本研究の番組収集と分析の過程で明らかになった。この点だけを見れば、独自の国際発信コンテンツではないため、外国人向けの放送番組として番組内容の分析を行うことに対して疑問が生じる。しかし、本研究で国際放送の番組を分析する目的はあくまで「世界の視聴者に対してどのような戦争・被爆のイメージやメッセージを提示しているのか」を明らかにすることであり、その意味では番組が国内向けとの共用か独自制作かどうかは本質的な問題ではないと考えた。

むしろ、NHK が既存の国内向け番組を選別し、翻訳や編集を施したうえで世界に向けて発信していること自体から、国際社会に対してどのような歴史認識や価値観を提示しようとしているのかという意図を読み取ることができる。そのため本研究では、対象番組の多くが過去に日本国内で放送された再放送であるという事実を踏まえつつも、国際放送が現にそれらを世界の視聴者に向けて配信している点に分析の重心を置いた。

本研究ではまず対象番組ごとに、「被害者視点」「加害者視点」「世界へのメッセージ」「反省」「批判」「継承」という6つの表象のカテゴリーを設定し、それぞれが各番組で描かれているかどうかを記録した。

これらの6つの表象について、それぞれを以下のように定義する。

まず、「被害」とは、日本人が受けた損害や苦痛として描かれているものを指す。具体的には、

- (1) 日本人が外国から受けた被害（例：空襲、原爆、シベリア抑留）
- (2) 日本人が日本軍・国家による統制や動員政策の結果として被った不利益や苦痛（例：徴兵・学徒動員、思想統制、生活上の困窮）を含む。ただし、徴兵や出征が本人の名誉や喜びとして肯定的に描かれる場合には、必ずしも「被害」とはみなさず、戦争協力的あるいは中立的な表象として整理する。

続いて、「加害」とは、日本軍・日本人が他者に与えた損害や苦痛として描かれるものである。主には、日本軍・日本人が外国人に与えた加害（例：殺害行為や強制連行、慰安婦問題などの身体的な加害、および思想・言論の統制といった精神的・文化的な加害）を指す。ただし、アジア各国への占領統治や進駐は、構造的な加害であるものの番組上では単に戦局や舞台設定の前提として説明されるにとどまり、具体的な加害の場面としては描かれな

いことも多い。本研究では歴史評価を行うわけではなく、あくまでテレビ番組における戦争表象の分析を目的とするため、このような構造的な加害については心身への加害行為が直接的に表象されていないかぎり、加害表象としてはカウントしない。また、被害者と加害者が同時かつ明示的に描かれている場合には、被害・加害の双方にまたがる表象として記録を行う。

「継承」とは、番組の企画趣旨やナレーション、テロップ等において「繋ぐ」「受け継ぐ」のように継承を想起させる語などが用いられている描写を指す。また、語り部活動や証言のアーカイブ化といった記憶の継承実践そのものを取り上げた場面、さらには出演者が戦争記憶の継承の必要性を訴える発言をしている場面についても「継承」表象としてカウントする。

「反省」とは、当時の戦争や自らの行為について、その判断や行動を問題として捉え直し反省や後悔をする表現を指す。具体的には、戦争指導や加害行為、戦時協力に対して「誤りであった」「あのようにしてはならなかった」といった省みる描写が提示されている場合を、反省表象とみなす。

「批判」とは、当時の戦争遂行や政策、原爆投下を含む他国の軍事行為などに対して、問題点を指摘し否定的に評価する言説を指す。番組内で、日本の戦争指導部や軍部、あるいはアメリカによる原爆投下や無差別爆撃などについて、「不当であった」「許されない」「誤った判断であった」といった評価が示されている場合を、批判表象として記録する。ただし、単に事実を列挙するにとどまる説明的記述は含めず、明確な価値判断や評価が示されている場合に限定する。

最後に、「世界へのメッセージ」とは、戦争体験や記憶を現在の国際状況や世界の課題と関連づける表現を指す。具体的には、現代の戦争・紛争、核兵器をめぐる国際政治など、現在の世界情勢に言及する場面や、「世界に向けて平和を訴える」といった国際的メッセージ性を持つ語りを含む場合に、「世界へのメッセージ」に関わる表象として記録する。ここでは、過去の出来事の紹介にとどまらず、「今」と「世界」への接続が意識的に図られているかどうかを基準とする。

さらに、番組ごとに「語りの主体」「主な舞台」「扱われた戦争関連のテーマや出来事」についても分析を行った。なお本研究では、主題として強調される表象だけでなく、ごく少量の描写であっても記録することを重視した。これは、番組中で比重が小さくとも「排除されていない」事象は戦争記憶の継承において一定の意義や可能性を持つとみなせると考えるからである。例えば、加

害の経験や海外戦地、マイノリティの視点が番組の主要なテーマでなくとも一部言及されている場合、これも「継承される記憶」の一端とみなして集計に加えた。このような分析により、主題以外にも様々な視点・舞台・立場・出来事がどれだけテレビ上で語られているかを把握できると考える。

最終的には各番組の分析内容を体系的に整理し、語られる記憶の内容・傾向、語られない記憶や排除されているテーマを析出することで、戦争記憶継承の現状と課題を明らかにした。

なお、本研究で分析対象となった国内放送番組は、NHK プラスで見逃し配信された作品に限定されている。配信対象外の番組は分析に含まれていないため、本論の結果は NHK で放送されたすべての戦争関連番組を網羅するものではない。

さらに、過去の戦争関連番組については、放送ライブラリー特設サイト「戦後 80 年企画 テレビとラジオが伝えてきた戦争と平和」(2025) を参照して NHK の八月ジャーナリズム番組を抽出し、同ライブラリーにおいて視聴・分析を行った。分析方法としては、各番組のタイトル、放送日、舞台となった地域、番組概要の説明文、および視聴可能な範囲での映像内容から、その番組が主に何を描き、主題としているかを判定した。ただし、時間的制約から全作品の全編視聴による詳細分析は実施できなかった。したがって 2025 年の番組分析で実施した詳細な演出やナレーション、表象の分析は、過去の番組には適用していないため、あくまで過去の番組分析は、主にテーマの時系列的变化を把握するための補助的な分析にとどまっている。

第 4 章 2025 年放送八月ジャーナリズム番組の内容分析

以上の前提に立ち、本論では NHK 国内放送で放送された戦争関連番組のうち、2025 年 8 月 6 日から 8 月 30 日の期間に放送された 11 作品（9 本のドキュメンタリーと 2 本のドラマ）と国際放送で配信された戦争・被爆関連番組のうち、8 月に配信された 22 作品（うち 1 作品は前後編構成のため一体として扱った）を分析対象とした。

分析を行った番組の一覧を図表—2 および図表—3 に示す。

図表—2 本研究で対象とした NHK 国内放送番組一覧

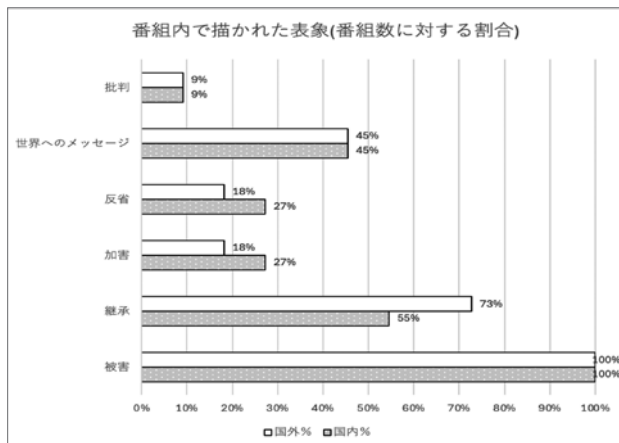
番組名 (国内放送)	放送日
NHK スペシャル 広島グラウンドゼロ 爆心地500m 生存者たちの“原爆”	20250806
BS スペシャル 原爆裁判 ～被爆者と弁護士たちの闘い～	20250808
NHK スペシャル 原子雲の下を生き抜いて 長崎・被爆児童の 80 年	20250809
【戦後80年ドラマ】八月の声を運ぶ男	20250813
NHK スペシャル 新・ドキュメント太平洋戦争1945 終戦	20250815
NHK スペシャル 新・ドキュメント太平洋戦争 最終回 忘れられた悲しみ	20250815
BS スペシャル フィリピン 忘れられた日本人 戦後80年に託す願い	20250815
ETV 特集 昭和天皇 終戦への道～外相手紙が語る国際情報戦～	20250816
ETV 特集 ヒロシマからの手紙～“原爆”を綴（つづ）ったアメリカ人たち～	20250823
BS スペシャル 軍神と記者	20250829
ETV 特集 “戦争未亡人”と呼ばれて 百歳を超えた妻たちの戦後	20250830

図表—3 本研究で対象とした NHK WORLD-JAPAN 配信番組一覧

番組名(NHK WORLD-JAPAN)	放送日
Animation Documentary Iwata's Grandma	20250801
Hiroshima's Streetcars of Peace	20250802
Message to the Future, Connecting Through the Power of Song	20250802
NO MORE HIBAKUSHA, NO MORE NAGASAKI	20250802
Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam	20250802
Nagasaki: 188 Memories of the Bomb	20250803
Holding on to Peace: Atomic-bomb Survivor's Message	20250804
Budding Hope	20250806
A Final Lesson: Atomic Bomb Survivor Kajiya Fumiaki	20250807
Rapper Urges Nuclear-Free World	20250807
The Three Crows of Nagasaki: Honoring the Memories of Friends	20250808
Through a Hibakusha's Eyes	20250808
Hiroshima: Who do you think "we" are?	20250809
WWII and the Reconstruction of Nagasaki	20250809
KAMIKAZE: An untold History	20250809-10
Hiroshima's A-Bomb Survivor Trees through the Seasons	20250810
Nagasaki's Long-Forgotten Choir	20250814
My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia	20250816
Save and Be Saved: The Battle of Atomic Bomb Victims	20250816
Hometown Stories The Future of an A-bombed Shrine	20250818
The Atomic Bomb On Trial	20250830
Hiroshima Ground Zero: Eyewitness Accounts of 78 A-Bomb Survivors	20250831

4-1 各番組で描かれた表象

図表—4 番組内で描かれた表象



(1) 国内放送で描かれた表象

図表—4 に示したように、対象とした NHK の八月ジャーナリズム関連番組 11 本では、すべての作品で日本人の被害描写が見られた。一方、加害行為については 3 本 (27%) のみで言及があり、その内訳はフィリピンでの加害が 2 本、中国での加害が 1 本であった。

フィリピンの加害表象は「新・ドキュメント太平洋戦争 1945 終戦」、「フィリピン 忘れられた日本人 戦後 80 年に託す願い」の中で描かれた。現地市民に対する「近くに寄ってきたものは敵とみなして撃て」「民間人の犠牲はやむなし」といった日本軍の発言や、大東亜共栄圏の名のもとでマニラ市民約 10 万人が犠牲となった現実がインタビューやナレーションを通じて描写された。また、性暴力や捕虜殺害に関する証言、残留日本人が「加害者の子」として生きてきた人生なども描かれていた。ただし、いずれも証言・ナレーション中心で、映像による再現や詳細な現場描写は限定的であった。

中国への加害については、兵士の遺品に残された記録の紹介の中で「肅清」という語が示される形で触れられていた。一方で、「銃を向けざるを得なかった」といった証言も併記され、加害者でありつつ軍国主義に強いられた被害者としての兵士像が強調されていた (ETV 特集「戦争未亡人」と呼ばれて 百歳を超えた妻たちの戦後)。いずれの番組でも、加害は主題ではなく短い挿入にとどまっている。

反省表象は 3 番組で確認された。具体的には、東郷茂徳外相がソ連参戦を「甚だ迂闊であった」と手記に記した終戦過程の内省 (ETV 特集「昭和天皇 終戦への道～外相手帳が語る国際情報戦～」、アメリカのトルーマン元大統領や原爆開発技術者による原爆投下への後悔と核

開発競争への葛藤 (ETV 特集「ヒロシマからの手紙～“原爆”を綴ったアメリカ人たち～)、特攻報道で特攻隊員の本音を書かず美辞麗句を並べた記事を書いた新聞記者の後悔と自省 (BS スペシャル「軍神と記者」) である。これらは政府高官、外国の指導者・技術者、報道人という異なる立場から、戦争をめぐる内省が表現されていることを示している。

一方、批判表象は 1 番組で取り上げられ、主にアメリカの原爆投下の正当性について日米の研究者が問題視する内容が示されていた (ETV 特集「昭和天皇 終戦への道～外相手帳が語る国際情報戦～」)。

継承表象は 6 番組で描かれ、被爆者・戦争体験者の減少や記憶の「途切れ」への危機感が強調されていた (NHK スペシャル「広島グラウンドゼロ 爆心地 500m 生存者たちの“原爆”」。また、「語り継がなければ再び戦争が進んでしまうのではないか」といった戦争経験世代の不安が明示され、体験を次世代へ手渡す必要性が繰り返し訴えられている (NHK スペシャル「原子雲の下を生き抜いて 長崎・被爆児童の 80 年」)。このような表象は継承の実践として番組の主要なテーマとして描かれたり、エンディングへと向かう中でも強調されるなど、番組全体の中心的なメッセージとなっていた。

世界へのメッセージ表象は 11 本中 5 本で確認され、ウクライナや中東など現在の紛争や核兵器の脅威への言及を通じて、戦争・核の危機がまだまだ現在進行形であることへの強い警鐘が示されていた。特に「核兵器の脅威が高まる世界」「核のタブーが危機に瀕している」といった表現は、核使用のハードルが下がりつつあるとの危機感を明確にし、「継承」表象と同様に番組冒頭や終盤の印象的な場面に配置されていた (NHK スペシャル「広島グラウンドゼロ 爆心地 500m 生存者たちの“原爆”」・ETV 特集「ヒロシマからの手紙～“原爆”を綴ったアメリカ人たち～」)。

(2) 国際放送で描かれた表象

国際放送で描かれた表象についても図表—4 に示した通りである。

国際放送の戦争関連番組 22 本でも、日本人の被害は全番組を通じて一貫して描写されていた。

その一方で、加害表象は 4 本 (18%) にとどまり、いずれも短い挿話として扱われていた。真珠湾攻撃 (KAMIKAZE: An untold History)、フィリピンでの性暴力 (Nagasaki: 188 Memories of the Bomb)、インドネシア統治下での重労働や残虐な拷問・殺害 (My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia)

など、日本軍の行為が断片的に紹介されるものの、番組の主題となることはなかった。

反省表象は4番組(18%)で見られた。日系アメリカ人が第二次世界大戦では被害者でありながら、ベトナム戦争では加害者となった自身の立場を振り返る語り(Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam)、インドネシア独立戦争に関わった元日本兵が戦時行為を悔いる姿(My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia)、被爆者が「軍国少女」としての自分を反省的に語る場面(Holding on to Peace: Atomic-bomb Survivor's Message)などである。

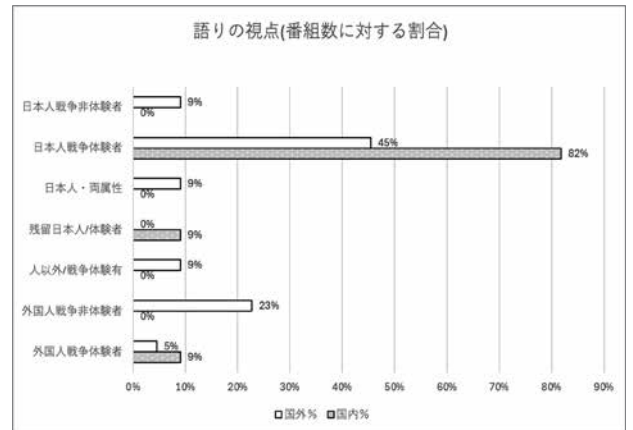
これに対して、批判表象は2本(9%)で扱われた。日本政府が原爆投下を十分に非難していないことや、被爆者・遺族への補償の不十分さに対する怒りが、被爆者自身の言葉として表現されていた(NO MORE HIBAKUSHA, NO MORE NAGASAKI・Save and Be Saved: The Battle of Atomic Bomb Victims)。また、「The Atomic Bomb On Trial」においても原爆裁判や不拡散条約についての問題点が指摘されていたが、これは事実紹介にとどまり、明確な価値判断としての批判までには踏み込んでいない。

継承表象は22本中16本(73%)で見られ、CGによる被爆体験の再現(Through a Hibakusha's Eyes)、被爆樹の種の保存(Hiroshima's A-Bomb Survivor Trees through the Seasons)、語り部による授業(A Final Lesson: Atomic Bomb Survivor Kajiya Fumiaki)、歌や音楽を通じた継承(Message to the Future, Connecting Through the Power of Song)など、多様な継承の実践が詳細に紹介されていた。このように、番組後半の重要なメッセージとしての役割だけでなく、「継承」の実践として番組全体の中で主要なテーマとして描かれていることも多かった。

世界へのメッセージ表象は10本(45%)の番組で確認され、ウクライナ情勢など現在の国際的危機への言及や、核兵器の脅威に対する警鐘がナレーションやテロップ、映像と組み合わせて提示する番組などが見られた(Hiroshima: Who do you think "we" are?・NO MORE HIBAKUSHA, NO MORE NAGASAKI)。これらの訴えは番組冒頭やエンディングに配置され、番組全体の主題を方向づける役割を果たしている。

4-2 語りの視点の構成

図表—5 語りの視点(番組数に対する割合)



(1) 国内放送における語りの視点

NHK 国内放送における語りの視点の構成では、顕著な特徴が見られた。図表—5に示したように、11番組中9本(82%)が日本人の戦争体験者による語りであり、国内放送においてはほとんどの番組が戦争を直接経験した日本人の視点から描かれることが分かった。残る2本は、それぞれ異なる背景を持つ語り手によって構成されている。一つは外国人戦争体験者の視点から語られた番組であり(ヒロシマからの手紙〜“原爆”を綴ったアメリカ人たち〜)、もう一つは残留日本人(無国籍)戦争体験者を語り手とする番組であった(フィリピン 忘れられた日本人 戦後80年に託す願い)。このように、圧倒的多数が日本人体験者の語りで構成されながらも、わずかではあるが異なる立場の語り手も包含されている点を確認できる。

(2) 国際放送における語りの視点

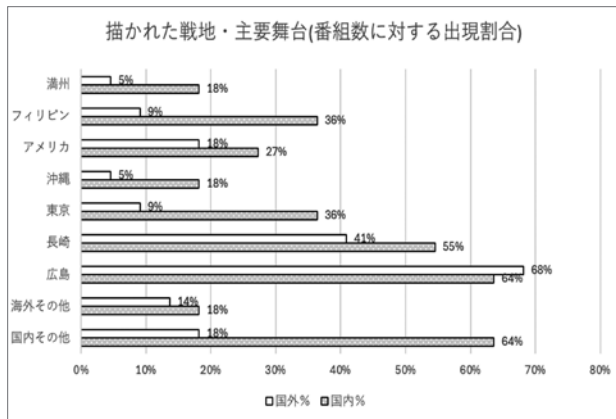
国際放送における語りの視点は、多層的で複雑な構成を示していた。

図表—5に示した通り、22番組のうち日本人戦争体験者の視点から語られる番組が10本(45%)と最も多かった。これに次いで、外国人戦争非体験者の視点による番組が5本(23%)と比較的大きな割合を占めており、日本人戦争非体験者の視点が2本(9%)、外国人戦争体験者の視点が1本(5%)であった。

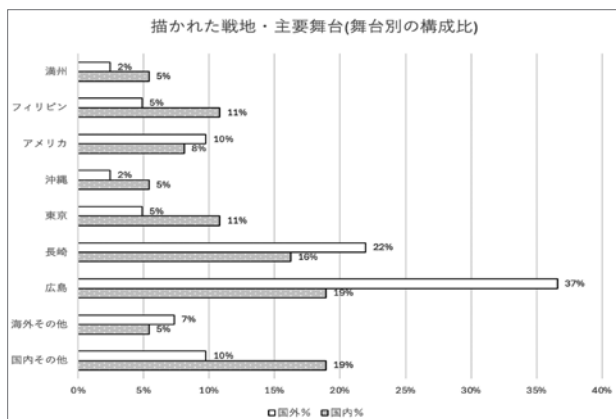
さらに、被爆樹を語り手として位置づける番組も見られた。「Budding Hope」と「Hiroshima's A-Bomb Survivor Trees through the Seasons」では、被爆樹という非人間的な存在が語りの中心に置かれ、物質的な「継承の象徴」として表現されていた。また、戦争体験者と非体

験者の視点が交錯する番組として、「Hometown Stories The Future of an A-bombed Shrine」と「The Atomic Bomb On Trial」の2本が確認された。これらの番組では、複数の立場や時間軸が重ねられながら語られており、単一の視点に統一されない構造となっていた。

図表—6 描かれた戦地・主要舞台(番組数に対する出現割合)



図表—7 描かれた戦地・主要舞台(舞台別の構成比)



(1) 国内放送における戦地・主要舞台

国内放送において主な戦地や主要地として登場した舞台とその構成比について図表—6、図表—7に示す。登場回数が最も多かったのは広島（7回、番組比64%、構成比19%）であり、次いで長崎（6回、同55%・同16%）が続いた。東京とフィリピンが各4回、アメリカが3回、沖縄および満州が各2回であった。国内のその他の地域においては、群馬県、愛知県、大阪府など、アメリカ軍の空襲を受けた都市などが1度ずつ取り上げられている。国外のその他では、核兵器の使用の合法性に関する勧告的意見に関連する事例として国際司法裁判所(ICJ)の所在地であるオランダが主要な舞台となり、中国では日本軍による加害の描写が示されていた。

各舞台の内容の扱い方には多様性が見られた。広島・長崎の描写は原爆の投下やその被害に限定された内容と

なっていたが、東京は原爆訴訟（原爆裁判～被爆者と弁護士たちの闘い～）、御前会議（昭和天皇 終戦への道～外相手帳が語る国際情報戦）、空襲（新・ドキュメント太平洋戦争 1945 終戦）など多くの事象が複合的に扱われていた。フィリピンの描写は、「BS スペシャル フィリピン 忘れられた日本人 戦後80年に託す願い」で現代まで続く残留日本人の問題や日本軍による加害が取り上げられていたほか、「BS スペシャル 軍神と記者」ではレイテ沖海戦や特攻の舞台として描かれるなど、番組ごとに異なる視点から扱われていた。

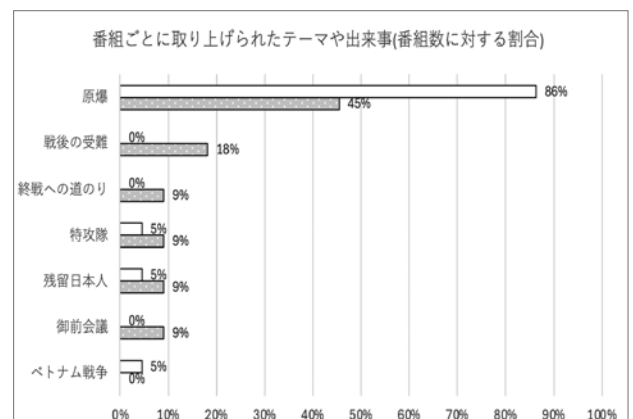
(2) 国際放送における主要舞台

図表—6、図表—7に示した通り、国際放送においては、22番組全体で41ヶ所の舞台が登場した。

最も登場回数が多いのは広島（15回、番組比68%、構成比37%）であり、次いで長崎（9回、同41%・同22%）、アメリカ（4回、同18%・同9%）、東京・フィリピン（各2回、同9%・同5%）であった。広島と長崎はどちらも原爆の投下とその被害に限定された内容であった。アメリカは、日系人収容（Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam）やマリアナ諸島での戦争に関する描写の舞台（KAMIKAZE: An untold History）として位置づけられていた。国内のその他の地域では、アメリカ軍の大規模空襲の被害を受けた大阪、愛知、兵庫などが描写されており（KAMIKAZE: An untold History）、国外のその他ではベトナム戦争（Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam）や日本統治下のインドネシアを主題とした番組（My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia）が確認された。

4-4 各番組が主に扱ったテーマや出来事

図表—8 番組ごとに取り上げられたテーマや出来事(番組数に対する割合)



(1) 国内放送で取り上げられたテーマや出来事

図表一8に示すように国内放送では、全11番組の中で、原爆をテーマとして取り上げた番組が5本(45%)と最も高い比重を占めていた。これらの中には多様な視点と論題を持つものがあった。例えば、被爆体験の世代間継承を論題とし戦争記憶がいかに後世に伝えられるべきかを問い直す作品(【戦後80年ドラマ】八月の声を運ぶ男)や、原爆開発・投下の歴史的過程をアメリカ側の視点から描いた作品(ETV特集 ヒロシマからの手紙〜“原爆”を綴(つづ)ったアメリカ人たち〜)が放送された。特に後者は、日本側の被害者証言だけに依拠するのではなく、歴史事象の複数的な解釈の可能性を提示する編成戦略であったといえる。

原爆以外を中心的なテーマとして取り上げた放送では、戦後の受難を描いた作品が2本制作されており(ETV特集 戦争未亡人と呼ばれて・NHKスペシャル 新・ドキュメント太平洋戦争 最終回 忘れられた悲しみ)、戦争そのものの経過だけでなく、その終結後における日本社会の困難な状況をも重要な歴史的テーマとして位置づけていたことがうかがえる。加えて、御前会議、残留日本人問題、特攻隊、終戦への道のりといった戦争史上の重要な局面や問題圏がそれぞれ1本ずつ放送されていた。

このことから、八月ジャーナリズムは原爆を中心に構成されているものの、比較的多様な戦争記憶を語り継ぐ意図も見られる。

(2) 国際放送で取り上げられたテーマや出来事

図表一8に示すように、国際放送の番組編成においては、原爆に関連するテーマが22本中19本に及び、全体の約86%という極めて高い割合を占めていた。この数値は、国際放送における番組構成上の特定テーマへの著しい集中を意味している。すなわち、広島、そして長崎への原爆投下という歴史事象が、国際放送において圧倒的に優先されていたことを示している。

原爆以外では、ベトナム戦争(Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam)や残留日本人問題(My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia)、特攻隊(KAMIKAZE: An untold History)という個別の戦争事象が、それぞれ1本ずつ取り上げられるにとどまっていた。こうした番組構成からは、海外向けの発信において日本の戦争経験を語る際、被爆という特定の集約的な経験が、他の出来事よりも優先される中心的な物語として位置づけられていることが分かる。

4-5 国内放送と国際放送の比較分析

(1) 表象構成の比較

まず、「被害」の表象は国内放送・国際放送の全番組で確認され、NHKの戦争番組において被害の可視化が最も基礎的かつ不可欠な要素として位置づけられていることが明らかである。

また、「世界へのメッセージ」も双方で45%と同一の出現率を示し、どちらの系列においても戦争の教訓や反核・平和への訴えを国際社会に向けて発信する役割が一定程度共有されているといえる。

一方、「継承」表象では、国際放送が国内放送よりも約20%高く描かれた。

国際放送でこのような傾向が強い背景には、以下のようなメカニズムが働いていると考えられる。

国際放送は、日本の戦争経験や平和の教訓を国際社会に発信することを主たる目的としている。しかし、国外の視聴者の多くは、日本の戦争史や原爆被害についての詳細な背景知識を持たないことが考えられる。そのため、国外に日本の戦争体験を伝える際には、ただ事実を列挙するだけでなく、「なぜ日本が原爆について語り、核廃絶を訴求するのか」を明示することで、継承を通じた教訓の形成を行う必要がある。このような要因の結果として、国際放送での継承表象の描写が73%と高くなっていることが考えられる。

さらに分析の結果、国内放送・国際放送の双方で「世界へのメッセージ」が描かれる際には、高い確率で「継承」表象が併置される傾向が確認された(国内:100%、国際:70%)。この傾向は、番組が世界の視聴者に平和を訴えるときに多くの場合で「過去の戦争体験をどう受け継ぐか」という語りをセットで用いていることを意味している。言い換えれば、「継承」は単なる過去の記憶の保存ではなく、戦争の体験を現在の世界的な課題と結びつける橋渡し役として機能しているのである。

なお、「加害」や「反省」などの表現は、国外向け番組のほうがやや高い傾向がみられるものの、全体の出現割合は両者ともに低水準にとどまっており、大きな差異とは言い難い。同様に「批判」についても両系列とも9%と最低比率ではほぼ同水準であり、国内外のいずれにおいても積極的に強調されている要素ではないことが確認された。これらの結果は、先行研究で指摘されてきたように、受難以外の語りが排除されるという傾向が、2025年においても引き続き顕著であることを意味している。

(2) 語りの視点の比較

語りの視点においては、明確な役割分担が見られた。

国内放送では「日本人戦争体験者」の視点が82%と圧倒的に主流を占めている。これに対し、国際放送では同視点が45%と約半数にとどまり、「外国人戦争非体験者」(23%)の視点が大きな割合を占めるほか、「日本人戦争非体験者」(9%)や「外国人戦争体験者」(5%)など、多様な語り手が起用されている。

この結果は、両系列の志向性の違いを反映していると考えられる。国内放送は、視聴者の経験や記憶に直接響く「日本人戦争体験者」の語りを通じて、共感の醸成や国民的な社会的記憶の共有を志向している。一方、国際放送では、日本人以外の視点や戦争非体験者の語りが積極的に取り入れられており、そのことによって、「体験の一次性」に依存せず、より広範な国際視聴者に共有しうる普遍的な戦争認識やメッセージを提示しようとする意図がうかがえる。これは、国際放送が日本の戦争体験を他国の視点や現代的視点と交差させつつ、国際的な理解や対話を促進する役割を担っていることに起因すると考えられる。

(3) 主要舞台の比較

国内放送と国際放送の主要な舞台を比較すると、いずれの系列でも「広島」「長崎」「東京」が中心的な舞台として頻出している点は共通している。図表—6にあるように、番組別の登場割合を見ると、「広島」は国内・国際放送の双方でおおむね同水準で取り上げられており、「長崎」も国内の方がやや高い値を示しているものの、双方で多く取り上げられている。しかし、図表—7に示した通り、舞台別の構成比に着目すると様相が変わる。「広島」は国際放送での構成比が国内放送のおよそ倍に達し、長崎も番組比では国内より約14%低いにもかかわらず、構成比では国際放送の方が6%高くなっていることが確認できる。

この乖離は、両系列における原爆の描き方の根本的な違いに起因している。国内放送では、広島・長崎のみを主要な舞台として据えた番組はそれぞれ1本ずつにとどまり、多くの番組が他地域や別の戦地と組み合わせで描写している。言い換えれば、国内放送も原爆を扱う番組が多い点は同様だが、その際に複合的な舞台構成をとることで、比較的多様なアプローチから原爆を取り上げている。対照的に、国際放送では、広島単体を主舞台とする番組が10本、長崎単体が4本と、全22本のうち14本が原爆被害都市のみを単一で前面化した構成となっていた。すなわち、国際放送では広島・長崎を反復的かつ集中的に描く番組が多く、結果として舞台別の構成比が国内よりも大きく押し上げられているのである。

この傾向は、世界に向けて発信される記憶の中心が原爆体験であるという国際放送の編成方針を象徴していると考えられる。日本の戦争体験の中でも、広島・長崎は「唯一の被爆国」という国際的イメージと直結しており、被害の象徴として視覚的・物語的な訴求力が際立つ。そのため国際放送では、広島・長崎を単独の舞台として反復的に取り上げることで、原爆の記憶をグローバルな課題として強調し、核兵器廃絶をめぐるメッセージを、国境を越えて共有しようとする戦略的意図を読み取ることができる。

(4) 戦争関連事象の比較

扱われた戦争関連事象を比較すると、国内放送と国際放送の編成戦略における顕著な相違が明らかになる。

国内放送では、原爆を中心的な主題とする番組が全体の約半数を占めており、その比重は決して小さくない。他方で、残りの番組では終戦への過程や戦後の受難など、異なる主題が分散して取り上げられており、テーマ構成は相対的に多様である。このような構成には、日本国内の視聴者が抱える多様な記憶や歴史意識、地域ごとの体験や語りを公共放送として共有しようとする志向が反映されており、国内放送においては戦争体験の複層性が一定程度可視化されていると考えられる。ただし、原爆が中心的位置を占める構造に変わりはない。

これに対して、国際放送では原爆・被爆体験に関するテーマの比重が86%と圧倒的に高い点の特徴的である。原爆を主要テーマとしない「Raised in Hiroshima, Fought in Vietnam」(2025) や「KAMIKAZE: An Untold History」(2025)のような番組であっても、作中で原爆への言及や映像が挿入されており、主題とは別の文脈においても原爆が繰り返し参照されている。調査対象のなかで原爆に一切触れない番組は、「My Grandfather's Story: A Japanese Holdout in Indonesia」(2025)の1本のみであり、国際放送全体において原爆が事実上「必須の枠組み」として機能していることが明らかである。

このような傾向の背景には、国際放送が国際社会への発信に特化したメディアであるという制度的性格が考えられる。すなわち、国際放送では原爆や被爆体験を通じて日本発の反核メッセージや平和主義を鮮明に打ち出すことに重点が置かれており、そのため戦争体験のなかでもこのようなテーマが選択的に前景化されているのである。原爆は「唯一の被爆国」という歴史的位置づけと結びつき、グローバルな視聴者にとって象徴性が高く、国際的関心を集めやすい。こうした象徴性の高さから、国

際放送では原爆を軸に据える放送を実施することで、日本の戦争認識と核兵器廃絶への志向を世界に向けて強く印象づけようとする意図が読み取れる。

4-6 本章の小括

本章の分析からは、NHK 国内放送と国際放送の戦争番組が、異なる「記憶の装置」として機能していることが明らかになった。

国内放送は、原爆被害に強く依拠しつつも、原爆以外の空襲や地上戦、戦後の受難など比較的多様なトピックも扱い、その多くを日本人戦争体験者の証言や地域に根ざした語りによって構成していた。そこでは、視聴者の個人的記憶や地域社会の歴史と接続しながら、戦争経験の複層性を国内社会の内部で共有・継承していくことが重視されていると言える。しかしながら、注意すべきなのは、この「多様なトピック」があくまで被害側の記憶の多様性にとどまり、加害についての言及や視点の多様化には必ずしも結びついていないという点である。比較的多くの戦争経験が取り上げられているとしても、それが加害責任や国際的視点の拡大を意味するわけではなく、その点については慎重に解釈する必要がある。

これに対して国際放送は、広島・長崎をはじめとする象徴的な舞台と原爆・被爆体験のテーマに重心を置き、番組の主題・副題を問わず原爆への言及がほぼ例外なく配置されていた。国際放送では、外国人や非体験者の視点を取り込むことで語りの幅を広げつつも、加害や戦争責任に踏み込む表象は限定的であり、全体としては原爆被害と日本人の苦難を軸に、日本の平和主義的イメージを国際社会へ印象付ける構図が優勢であった。これは、国際社会に向けて日本を語る際、「唯一の被爆国」という位置づけを前景化し、反核・平和メッセージを集中的に発信する役割を担っていることを示している。

こうした相違は、NHK の国内放送と国際放送が、それぞれ異なる公共的責務を担っていることに起因すると考えられる。国内向け番組は、原爆の記憶を継承・再生産することに重点を置きつつも、国際放送と比較すれば終戦や戦後社会の諸相にも光を当てており、戦争経験を完全に単一の「原爆記憶」に還元するには至っていない。このように、より多面的な「戦争の記憶」として構成し直そうとする志向の一端が見られると考えられる。一方、国際放送は「対外的なナショナル・イメージを構築し発信するメディア」として、日本の戦争経験のうち国際的に共有されやすい断面、とりわけ原爆体験を選択的に抽出し、国境を越えて理解や共感を得やすい枠組みとして再構成しているのである。

こうした相違が見られる一方で、両系列に共通する課題として、加害・反省・批判の表象や、アジア各地・国内他地域の戦争経験が、依然として周縁化されがちであることが指摘できる。これにより、日本の戦争経験における加害と被害の両面性や多層性が十分に伝えられているとは言い難い。この点は、今後、国内外の視聴者に向けてより多面的で批判的な戦争表象を構築していくうえでの重要な課題として残されている。

第5章 戦争番組の歴史的变化と2025年の位置づけ

本章では、第4章で明らかにした2025年の戦争関連番組の特徴を、NHKの戦争関連番組の歴史的变化（1971～2017年）に位置づけ直すことで、「二次的継承の時代」におけるメディアの戦争記憶継承の現状と課題を考察する。

とりわけ、原爆表象の比重、加害やマイノリティの経験の扱われ方、「継承」や「世界へのメッセージ」といった語りの枠組みが、番組史の中でどのように出現し、拡大し、あるいは後退してきたのかに着目する。そのうえで、こうした歴史的变化を踏まえつつ、「二次的継承の時代」におけるメディアの戦争記憶継承の現状と、その選択と偏りがはらむ課題を考察することを本章の目的とする。

分析対象となった番組については、図表—9に示した通りである。

図表一 分析対象とした過去の NHK 八月ジャーナリズム番組一覧 (放送番組センター「放送ライブラリーで公開中の戦争・平和関連テレビ番組リスト」をもとに作成)

番組名	放送日						
特集 被害者ユソフ プルネイ王国首相の証言	19710806	戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ (4) お母さん水を… 広島・爆心地の子どもたち	19870806	初めて戦争を知った・若者たちの旅 (3) 三線に「平和への祈り」をさく 沖縄・原爆収容所	19900803	NHKスペシャル 調査報告・地球核汚染 ヒロシマからの警告	19950806
ドキュメンタリー 市民の手で原爆の絵を	19750806	戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ (5) 最終列車は燃えた 満州・通遼行の果てに	19870807	NHKスペシャル 世界はヒロシマを覚えてるか 大江健三郎・対話と思索の旅	19900803	八月十五日・花の記憶	19950811
終戦記念日特集 女たちの旅路	19750815	テレビシンポジウム 核・平和・世論 世界のジャーナリスト広島で語る	19870808	NHKスペシャル ドキュメンタリードラマ マミーの顔がぼくは好きだ ~母と子のヒロシマ~	19900806	NHKスペシャル 死者たちの声 大岡昇平「レイテ戦記」	19950814
空白のキャンパス 戦没画学生の記録	19770815	土曜倶楽部 戦争なんて知らないけれど	19870815	NHKスペシャル ドキュメンタリードラマ マミーの顔がぼくは好きだ ~母と子のヒロシマ~	19900806	NHKスペシャル 爆心地の連合軍捕虜 オランダ兵士たちの戦後史	19980811
私の太平洋戦争 ~昭和萬葉集から~	19790815	わが心のヒロシマ あるマレーシア人被害者の青春	19880806	NHKスペシャル 国境の向こうの歳月 シベリア・未帰還者の手紙	19900815	静かに時は流れて ~長崎の少女と写真家の歳月~	19990808
ドラマ 夏の光に	19800817	NHK特集 夏の少女たち ~ヒロシマ・昭和20年8月6日~	19880807	NHKスペシャル 御前会議 太平洋戦争開戦はこうして決められた	19910815	NHKスペシャル 核兵器は本当になくなるか ~非核保有国が挑んだ4週間~	20000805
マリコ1	19810815	長い旅路 戦争をこえた家族の記録	19880813	NHKスペシャル シリーズアジアと太平洋戦争 (1) 日米戦は重慶で始まった	19920810	NHKスペシャル オノヒ オノ知ラセサイ ~ヒロシマ・あの日の伝言~	20000806
マリコ2	19810815	NHK特集 通らざる兵士たち	19880815	NHKスペシャル シリーズアジアと太平洋戦争 (2) 埋もれた延安報告	19920811	BS特集 正義の戦争はあるのか 小田実対論の旅	20000814
おはよう広場特集 女が語る・戦争を生きた女たち (1) 国民学校教師の記録	19820802	ほっかいどうスペシャル アリュートの少年 玉砕の島アツク・もうひとつの戦争	19880825	NHKスペシャル 調査報告 アジアからの新え 問われる日本の戦後処理	19920814	ETV2000 井上ひさし 原爆を語るということ (1) なぜ私だけが生き残ったか ~庶民の原爆手記を讀む~	20000814
おはよう広場特集 女が語る・戦争を生きた女たち (2) 望月の浜・機室	19820803	ETV8 映像のなかの「大東亜共栄圏」 幻の国策映画発掘	19880922	NHKスペシャル 北方四島・ソ連の占領はこうして決められた	19920823	ETV2000 井上ひさし 原爆を語るということ (2) わしの分まで生きて下さい ~生者と死者の対話~	20000815
おはよう広場特集 女が語る・戦争を生きた女たち (3) ルソに失った青春	19820804	戦争を知っていますか・子供たちへのメッセージ (1) 日本への道は遠かった 大陸に落ちた女たち	19890801	土曜ドラマ 流れてやまず ~長流不息~ (1) 上海・愛の伝説	19921107	NHKスペシャル 戦争を知らない君たちへドラマ 碧空のタンゴ ~東京下町、ある職人一家の終戦~	20010812
おはよう広場特集 女が語る・戦争を生きた女たち (4) 戦争未亡人の37年	19820805	戦争を知っていますか・子供たちへのメッセージ (2) 子供たちは遺骨を抱いて帰ってきた 引き揚げ孤児をみつめて	19890802	土曜ドラマ 流れてやまず ~長流不息~ (2) 通かなる黄河	19921114	NHKスペシャル 新しい朝が来た ~8月15日のラジオ体操~	20030810
NHK特集 きみはヒロシマを見たか ~広島原爆資料館~	19820806	戦争を知っていますか・子供たちへのメッセージ (3) 幸福守 (シンボクス) 私も被害者です	19890803	NHKスペシャル 調査報告・朝鮮人強制連行 初公開・6万7千人の名簿から	19930801	ETV特集 第1部 最後の慰霊の旅 ~ガダルカナル島 遺骨収集の60年~、第2部 俳句が録んだ太平洋戦争	20050806
NHKとくしゅう 「そしてトンキーもしんだ」 子が父からきくそうどう話	19820813	戦争を知っていますか・子供たちへのメッセージ (4) 父はトラックで連れて行かれた シンガポール・集団検閲の日	19890804	初めて戦争を知った (1) 生きて帰国の毒めを受けず オーストラリア・カウラ事件	19930802	ハイビジョン特集 ぼくはヒロシマを知らなかった ~平和記念公園物語~	20060805
NHK特集 農民兵士の声きこえる ~7000通の軍事郵便から~	19820927	NHKスペシャル ドラマ 失われし詩を求めて ヒロシマの夢	19890806	初めて戦争を知った (2) 幻の歌「サヨンの鐘」が聞こえる 台湾「高砂族」と太平洋戦争	19930803	ハイビジョン特集 爆心地復元	20060806
ドキュメント 東条内閣機密記録 一密室の太平洋戦争一	19850810	NHKスペシャル 世界は原爆をどう知ったか	19890807	初めて戦争を知った (3) 夫たちが連れて行かれた 神戸・華僑たちと日中戦争	19930804	NHKスペシャル 鬼太郎が見た玉碎 ~水木しげるの戦争~	20070812
NHK特集 よみがえる被爆データ ~ヒロシマとチェルノブイリ~	19860804	NHKスペシャル 44年目の手記 原爆の子たちの歳月	19890809	NHKスペシャル ヒロシマに一番電車が走った 300通の被爆体験手記から	19930806	ヒバクシャからの手紙	20080806
ドラマ ふたたびの街	19860806	NHKスペシャル 発掘・幻の国策映画 日本軍占領下のジャワ	19890814	NHKスペシャル ドキュメント太平洋戦争 (5) 踏みにじられた南の島 ~レイテ・フィリピン~	19930808	NHKスペシャル 気骨の判決	20090816
ドキュメンタリー ひろしま 家族の肖像	19860814	NHKスペシャル 遭された声 アジアのリーダーと「太平洋戦争」	19890817	NHKスペシャル あの炎を忘れない 被爆少女の手記とGHQ検閲	19930809	ヒバクシャからの手紙 ~そして ヒバクシャへの手紙~	20100808
NHK特集 ミズリー号への道 ~外相重光葵・33冊の手記~	19860815	NHKスペシャル 忘れられた女たち 中国残留婦人の昭和	19890903	NHKスペシャル 長い航路 50年目のわたつみのこえ	19930813	ETV特集 敗戦とラジオ 放送はどう変わったのか	20100815
NHK特集 救援 ヒロシマ・残留放射能の42年	19870803	ドラマスペシャル 七色村	19891118	ドキュメントにっぽん列島 原爆乙女たちの戦後 復帰40年・鹿児島奄美大島	19930818	にっぽん紀行 草刈りにさげた人生 ~福井・鯖江 兵士の墓にて~	20150815
戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ (1) 生と死の病院船 従軍看護婦の見た兵士たち	19870803	初めて戦争を知った・若者たちの旅 (1) いつも遠くから見ていた広島 東京・都会に暮らす被害者たち	19900801	ETV特集 インタビュー「ヒカは人が落とさなきゃ落ちてこん」	19940822	土曜ドラマスペシャル 1942年のプレイボール	20170812
戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ (2) 戦闘機に捧げた青春 軍需工場での奇想な日々	19870804	ドキュメンタリー'90 原爆は聞こえなかった	19900801	ETV特集 日中の道・天命なり 日本語教師・松本竜太郎	19940823		
戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ (3) 手も足も奪われて 明石空襲・炎の記憶	19870805	初めて戦争を知った・若者たちの旅 (2) 少女たちも戦闘機を作った 名古屋・女子学徒船員	19900802	世界わが心の旅 マリアナ諸島 菜園の亡霊たち	19950805		
ドキュメンタリー ひろしま 老いゆく日々	19870806	NHKスペシャル なぜ助けられなかったのか 広島・長崎7000人の手記	19900802	土曜ドラマ されど、わが愛	19950805		

5-1 不変の軸としての原爆と、その比重の変動

過去に放送された NHK 八月ジャーナリズム番組について、原爆を主題とする番組の比率を年代別に集計すると、1970年代 40%（5本中2本）、1980年代 29%（34本中10本）、1990年代 39%（33本中13本）、2000年代以降 57%（14本中8本）となる。原爆が NHK の戦争番組において一貫して重要なテーマであり続けてきたことは明らかである。ただし、その比重は時代に応じて揺れ動いている。

特に 1980年代から 1990年代初頭にかけて比率が一時的に低下している点は注目に値する。この時期は米倉（2021）にも指摘されているように加害描写が前景化した時代であり、慰安婦問題や朝鮮半島出身者強制連行や被爆体験、華僑が受けた迫害など、日本人以外の被害や戦後補償に関わる番組が数多く制作されていた。つまりこの時期、戦争番組の焦点は「原爆＝日本人被害」という単一の物語から離れ、日本の加害責任や戦後処理をめぐるより広い歴史の文脈へと開かれていた。

しかし 2000年代以降になると、原爆テーマの比率は再び上昇し、戦争番組の過半を占めるようになる。この再上昇は、1980～90年代に一度開かれた「多様な視点からの戦争表象」が再び閉じられ、原爆を中心とする記憶へと収斂していったプロセスを示している。こうした変化の背景には、複数の要因が考えられる。一つは社会の右傾化である。先行研究では、加害描写が批判の対象となりやすくなったことや、戦争行為の正当化が行われやすくなったことのような社会の右傾化が影響している可能性が指摘されてきた（米倉 2021・杉山、森田、古賀 2010）。また、原爆記憶の風化に関する危機感の高まりも要因の一つであると考えられる。戦後 60 年を迎える中で「広島に原爆が投下された日」を正確に答えられた日本人は四割に満たず、被爆地・広島において「被爆体験の継承が重要だ」と考える住民の割合が 2000 年の 67% から 2005 年には 83% へと急増していた（小林 2005）。このように原爆記憶の風化への危機感と、戦争加害をめぐる描写や議論を回避しようとする社会状況が重なり合う中で戦争関連番組の焦点は多様な加害・被害経験を並列的に描くことではなく、「継承」すべき象徴的経験としての原爆を再び多く描くようになったと考えられる。

5-2 「世界へのメッセージ」の出現と二重の機能

本研究の過程で明らかになったのは、「世界へのメッセージ」という表象が、実は近年になって語られるようになったものであり、それ以前の八月ジャーナリズム特集には、ほとんど存在していなかったということである。

例えば、1990年の湾岸戦争や 1991年の冷戦終結といった国際的な重要な危機の時期においても、NHK 国内放送の八月ジャーナリズム内では、国際情勢に言及したり、日本から世界へのメッセージを発信する番組はほとんど見当たらない。同様に、1980年代の東西冷戦の緊張期や、核軍拡をめぐる国際的な不安が高まった時期においても、NHK の八月ジャーナリズムが積極的に現在の国際課題に言及し、日本の立場から世界に訴えかけるというアプローチは、一般的ではなかったのである。「NHK スペシャル 世界はヒロシマを覚えているか 大江健三郎・対話と思索の旅」（1990）は、この時期としては数少ない世界への言及を含む番組であるが、そこで描かれているのは日本から世界への一方的な発信ではなく、むしろ逆方向のメッセージである。番組では、海外の研究者から「核問題について日本だけが持っている倫理的な立場からの発言権を使うべき」「日本は核軍縮議論に対して他の国の言いなりである」といった批判的な発言が紹介されており、日本の核政策や核軍縮における姿勢を相対化し、その消極性や課題を再考させる役割を果たす番組が確認された。

2000年代に入ると、構図が転換する。「NHK スペシャル 核兵器は本当になくせるか～非核保有国が挑んだ4週間～」(2000)では、ヒロシマ・ナガサキの体験を通じて「これから先の世界で核廃絶は成せるのか」という未来志向の問いが投げかけられた。また、「BS 特集 正義の戦争はあるのか 小田実 対論の旅」（2000年）では、湾岸戦争やコソボ空爆といった国際紛争に言及し、人道的武力介入によって一般市民が犠牲になることを指摘しつつ、「戦争そのものが悪」という普遍的なメッセージを打ち出しており、この時期から日本のテレビが世界に対して平和主義的立場から発信するという姿勢が明確化したことが分かる。

ただし、国内放送は当然ながら国内の視聴者、すなわち日本人を主な視聴者として考えており、「世界へのメッセージ」が広く直接的に世界の視聴者に届くことは少ない。それにもかかわらず、なぜ国内向け番組で「世界へのメッセージ」が強調されるのか。この点について考えると、その機能は国内視聴者に向けた国民的記憶の醸成と強化にあると解釈できる。すなわち、「日本は唯一の被爆国として、世界に対して平和を訴える立場にある」という認識を、国内社会で共有・再確認し、日本人に対して世界の中の日本を語りかけるという自己像を形成する装置として「世界へのメッセージ」が機能していると考えられる。

一方、国際放送で語られる「世界へのメッセージ」は、実際に国際的な視聴者に直接的に届く。国内放送が、世

界に果たすべき日本の役割という「ナショナル・アイデンティティ強化」を担うのに対し、国際放送は「対外的なイメージ構築」という異なる役割があることが考えられる。国際放送が約半数の番組で「世界へのメッセージ」を前面に打ち出しているのは、国際情勢の変化への直接的な応答という側面もあるが、それ以上に日本の国際的地位である「唯一の被爆国」「平和主義国家」を戦略的かつ反復的に発信する装置として機能している。

ただし、それ以上に、「世界へのメッセージ」というフレーミングの最も根底にあるのは、当事者意識を醸成する役割であるとする。村上(2018)は、特に子どもにとって「テレビ画面の向こう側で起こったことはよそ事として受け止められやすく、そのため、戦争体験の継承活動は他人事になりやすく、当事者意識が高まらない傾向が予想できる」と指摘し、現在の平和教育においては当事者意識を高めることが必要であるにもかかわらず、それがうまく機能していないと述べていた。

実際、「あちこちのすずさん」に代表されるような、各地の多様な戦争体験を掘り起こし、日常の中の戦争を描くことで視聴者の共感を通じて当事者意識を醸成しようとする試みも存在する。こうしたアプローチは、衣食住や家族関係といった具体的な生活の場面として戦時を描き出したり、より具体的な一人一人の個別の戦争体験に触れたりする点で、戦争は生活と地続きの出来事だったと感じさせることで当事者意識の情勢を促すものであった(NHK n. d.・前川 2020)。

しかし、吉本(2022)で示された若年層の戦争知識の不足という状況を踏まえると、個別の体験の語りによって視聴者に戦争を「自分ごと」として実感させることは困難であると考えられる。というのも、体験者に直接出会う機会や、学校教育や家庭で蓄積される歴史的な前提知識が限られるなかでは、聞き手が語りを自分の生活や現在の社会状況と結びつけて受け止めるための足場が弱くなっているからである。特に、2006年以降に生まれた戦争体験第四世代にあたる現在の中高生は、多くの場合、身近な家族の中にも直接の戦争体験者を持たない。そのため、このような番組は戦争への関心を喚起する入口として一定の意義を持つ一方で、当事者意識の醸成という点では、世代的距離や知識の不足に起因する限界も抱えていると考えられる。

これに対し、NHKの戦争番組において現在の国際情勢を日本の経験した戦争と結びつけるアプローチは、この「当事者意識の欠落」に対する一つの対抗策として機能していると言える。ウクライナや中東の「今、起こっている危機」や現在の核の脅威と日本の戦争体験や唯一

の被爆国としての姿とを直接結びつけることで、視聴者自身が現在直面している国際情勢と戦争の問題性を重ね合わせやすくしているからである。その結果、日本が経験した戦争は、遠い過去の出来事ではなく現在の自分たちの問題として感じられるようになる。つまり、「世界へのメッセージ」という表象は、こうした現在の国際情勢と過去の戦争経験の接続を通じて、よりダイレクトな形で当事者意識を喚起する装置として機能している。

これらについて考えると、これまで世界が核兵器や大規模な紛争の危機に瀕した際には戦争関連番組の中でほとんど「世界へのメッセージ」表象を確認することができなかったのにもかかわらず、近年この表象が多く見られるのには単に現在世界が核や大規模紛争の危機に晒されているからだけではない。現在の平和教育の課題が「当事者意識の醸成」だからこそ、視聴者に戦争を現在進行形の問題として考えさせる役割を果たす「世界へのメッセージ」表象が前景化しているのである。

5-3 「継承」の歴史の変容と範囲の縮小

近年の戦争関連番組においては継承が重要視され、強くそのメッセージが発信されているが、本研究の過程で「継承」というテーマそのものは、近年になって初めて登場したものではないことも明らかになった。1987年、1989年に放送された「戦争を知っていますか」シリーズや1990年放送の「初めて戦争を知った・若者たちの旅」シリーズといった番組では、若者世代に戦争を伝えるという趣旨のもとすでにテーマとされていた。

重要なのは、この時期に「継承」の対象とされたテーマは極めて多様だったということである。在日韓国人差別(「戦争を知っていますか・子供たちへのメッセージ」〔3〕幸福守 私も被爆者です」1989年)、華僑が受けた迫害(「初めて戦争を知った」〔3〕夫たちが連れて行かれた神戸・華僑たちと日中戦争」1993年)、台湾への植民地政策(「初めて戦争を知った」〔2〕幻の歌『サヨンの鐘』が聞こえる 台湾『高砂族』と太平洋戦争」1993年)といった番組が制作されており、日本人の体験のみにとどまらず、アジア各地における被害や差別まで、多様な事象が対象とされていた。

これに対して、2025年の編成では、「継承」という言葉は戦後80年という節目とともに頻繁に用いられるようになってきているが、扱われる内容は著しく限定されている。原爆と被爆体験が「継承すべき記憶」の圧倒的な中心を占めており、「継承」表象が描かれていた国内放送番組6本のうち5本で原爆をテーマとして扱い、国際放送でも16本中14本が原爆をテーマとしていた。一方、かつて

その対象とされていた在日韓国人被害や華僑差別といった外国人被害者の立場、あるいは日本による侵略といったテーマは、2000年代以降ほとんど姿を消しており、中心的に取り上げられることは少ない。わずかではあるが、2000年以降にも「哀哭 朝鮮女子勤労挺身隊 日韓のはざままで」(チューリップテレビ 2020)、「和解～広島・中国人強制連行問題の軌跡～」(RCC 2014)、「日本人だった～在韓被爆者のいま～」(テレビ長崎 2003)などの、朝鮮半島出身者や中国人の被害を主題にした番組も放送されているが、その多くは地方放送局の制作であり、全国規模で共有されることは少ない。

ただし、これらの傾向については、本研究が放送ライブラリーにて視聴可能な番組のみを対象とした分析であり、全放送番組を網羅していないという限界がある。

5-4 本章の小括

本章では、2025年の戦争番組編成を歴史的文脈の中に位置づけるため、NHK 八月ジャーナリズムの変遷を検討してきた。

以上から明らかになったのは、2025年のNHK戦争番組が「原爆の記憶」と「世界へのメッセージ」そして「継承」を軸に編成されているという現状は、決して偶然ではないということである。それは、少なくとも過去30年にわたる選択と排除のプロセスの帰結なのである。

NHKは「継承」を標榜しながらも、実際にはその対象を絞り込み続けてきた。そして、その選別された記憶として原爆体験を中心とする戦争記憶によって「日本人が多大な被害を受けた」というイメージを、国内外に向けて反復的に発信する装置として機能してきたのである。そして、原爆の記憶ばかりに集約される現在の番組編成では、扱われる事象は限定され、かつては語られていた加害、被害、そしてそれぞれが経験した第二次世界大戦といった多くの戦争経験が忘却へと向かってしまっているのである。

第6章 結語

本研究では、現在を「二次的継承の時代」と位置づけ、戦後80年を迎えて戦争体験者が急速に減少するなか、NHKが戦争記憶をいかに継承し発信しているのかを、国内放送と国際放送の比較、および歴史的変遷の分析を通じて明らかにした。

本研究の分析から、「継承」が八月ジャーナリズムの中心的テーマとなっていることが確認された。これは、米倉(2018)が2015年について指摘した傾向が、10年後の2025年にも継続していることを意味する。しかし同時

に、この「継承」の拡大には大きな課題も抱えられていることが明らかになった。

過去番組の分析で語られた、日本の加害性や多様な視点からの戦争体験はほぼ姿を消し、「継承」表象が描かれている番組の大半が原爆体験のみを主題としている。つまり、「二次的継承の時代」とは、「継承」そのものが量的に拡大しながらも、その対象が「被爆国・日本」という特定の記憶へと集約されていく時代である。

このような状況の中で、改めて問い直すべき課題は次の点である。戦後80年経ついま、メディアは「継承する」という決定と同じ重みで、「継承しない」という決定についても責任を負わなければならない。

確かに、戦争記憶を伝える際に、すべての経験を等しく取り上げることは不可能である。ただし、テレビが戦争記憶を伝える主要なメディアである以上、何が継承され、何がされないのかという選別の根拠について、メディア自身が説明責任を負わなければならない。

もっとも、テレビで継承されなかったすべての戦争体験について、「なぜ継承しなかったのか」という理由を1つずつ示すよう求めるのは現実的ではない。そこで、少なくとも番組として取り上げることを選択した戦争体験については、どのような基準と問題意識に基づいてその記憶を継承しようとしているのかを、番組内で可能なかぎり提示することが求められる。

本研究で分析した番組を見ると、原爆を取り上げた作品では、「核兵器の脅威が高まる国際状況のなかで」といった表現を用いることで、「なぜこの戦争体験を番組で扱うのか」という選択理由が一定程度言語化されているものもあった。一方で、残留孤児やアジア各地での戦争体験などを取り上げた番組では、その出来事をなぜ今取り上げるのか、どのような問題意識があるのかが番組内で十分に説明されないまま提示される傾向が目立つ。このような原爆以外のテーマについても、番組制作者側がどのような意図を持って行っているかを明示すべきであると考える。

もちろん、被爆体験が日本の戦争経験の中核的な意味を持つことは否定しない。これまで日本のテレビでは原爆被害を中心とした被害を主に描くことで「これほどの惨禍をもたらす戦争は避けるべきだ」というメッセージを提示し、「戦争そのものが悪である」という戦争観を体現してきた。その結果、「戦後80年に関する意識調査」(NHK放送文化研究所 2025)では日本が核兵器を「持つべきではない」「どちらかといえば持つべきではない」と答える人が全国で8割前後に達し、先の戦争や平和に「非常に関心がある」「ある程度関心がある」と答える人も

7割を超えていることが示されている。これらの数値は、反戦・反核志向が日本社会に広く共有されていることを示している。そして戦争の継承主体としてテレビが大きな影響を持つ以上、その形成にテレビの被爆体験を中心とした受難の語りによる戦争表象が一定の役割を担ってきたと考えられるだろう。しかし、その重さを認めたいえでも、私たちは決して「被爆八十年」だけではなく「戦後八十年」を生きているのだという事実を忘れてはならない。原爆被害に焦点を当てあまり、他の戦争被害や日本の加害の経験が戦争記憶として語られないとするなら、それは被爆体験の唯一性を尊重することとは異なり、単なる記憶の偏在、欠落でしかない。

同時に本研究が明らかにしたように、本年の戦争番組では「世界へのメッセージ」が前面に表れている。日本が唯一の戦争被爆国として、核兵器の非人道性や平和の必要性を世界に訴え続けることには、他国には代替し得ない固有の意義がある。その意味で、「被爆国・日本」としての声を国際社会に届けることは、今後も継続されるべき重要な役割であることもまた事実である。

ただ、原爆について国内外に向けて語ることの重要性を認めるのであれば、なおさらその手前で繰り返されたい戦争の全体像をどこまで共有できるかが問われるべきなのではないだろうか。原爆投下という結果だけを切り出して提示するのではなく、そこに至るまでの日本社会とアジア諸国との関係、戦争遂行の過程、他地域での被害と加害の経験を含めて立体的に示すことで、原爆体験は単なる「悲惨な出来事」ではなく、歴史の中で位置づけられた出来事として理解されうる。そのとき初めて、原爆についてのメッセージにも、感情的共感を越えた重みと説得力が備わると考える。また、テレビが「戦争そのものが悪」という戦争観を表現しようとするなら、被害表象のみに依存することはできない。むしろ、被害に至るまでの経緯や加害などを多様に表現し、視聴者に戦争そのものの本質を問い直すことでこそ、初めてその認識は、特定の事象への同情だけではなく普遍的な反戦価値になり得る。しかし現在、体験者の減少とともに、戦争記憶から加害の側面が周縁化されている傾向が長らく続いている。これは「戦争そのものが悪」というメッセージの根拠を自らそぎ落としてしまっていると考えられる。

こうした問題意識を踏まえて、本研究を行う過程で演出家の小見山佳典氏にお話を伺った。このインタビューは、送り手として現在の戦争関連番組の役割や表現上の課題をどのように捉えているのかを捕捉的に確認することを目的として行った。小見山氏は戦争を描く際には現在のような日本人被害が中心の語りだけではなく、「責任

や過ち」といった視点からも描いていく必要があることを強調していた。また、戦場の現実において被害と加害はきれいに分かれた別個の出来事ではなく、同じ文脈の中で連続し、ときに同じ人びとが被害者でもあり加害者でもあるという「両面的」な状態について描くことの重要性についても話してくれた。

被爆の惨禍を伝えることと、他の戦争被害や日本の加害の歴史を描くことは、互いに相反する課題ではない。むしろ、小見山氏が述べるような「自分たちの間違い」から語り始める視点を導入し、被害と加害を切り離された二項対立としてではなく、連続し合う両面として描くことで、結果としての惨禍だけでなく、そこに至る過程や選択の積み重ねをあわせて見通すことが可能になる。そうした連続性の中で戦争を捉え直すことこそが、「悲惨だった」「二度と繰り返してはならない」という感情的な共有だけでなく、戦争をなぜ、どのように防ぐのかを思考するための手がかりとなるのではないだろうか。

近年前景化した「世界へのメッセージ」表象は、日本が被爆国として果たしうる独自の役割を国際社会に示す営みであると同時に、そのメッセージの中にどこまで複雑な歴史認識を織り込むことができるのかという問いをも突きつける。今後ますます戦争体験者が減り続けるなか、日本にとっての第二次世界大戦が決して「原爆が落とされた戦争」だけとして記憶されてしまわないように、被害だけでなく加害やマイノリティの経験を含む多様な戦争記憶を扱い、「二次的継承の時代」に戦争の記憶を取りこぼさない放送実践を一層追求していく必要がある。

最後に強調しておきたいのは、戦争記憶の継承において被爆体験だけを特別扱いし、日本の加害やその他の被害の側面には目をつぶり続けることはもはや許されないという点である。原爆、空襲、地上戦や強制労働、慰安婦、植民地支配の際に行った加害行為などはいずれも戦争体験という一点において本来は平等であり、その間に序列を設ける必然的な理由はどこにもないはずである。もちろん、核兵器の非人道性を訴える場面において原爆体験を前面に据えることには固有の意味がある。しかし、第二次世界大戦そのものを扱おうとするなら、特定の経験だけを象徴化するのではなく、可能な限り多様な戦争体験を平等に位置づけ、その上で目的に応じてどの記憶をどのような文脈で継承するのかを選び取る姿勢が求められる。それにもかかわらず、原爆だけを突出した象徴として語り、他の戦争体験を周縁に押しやる状態が続くなら、戦争の全体像を社会に共有することは著しく困難になる。戦争がどのような構造のなかで始まり、どのような選択の連鎖の果てに原爆投下という帰結に至ったの

かを見通す視点が、失われてしまうからである。

原爆の記憶を真に生かすことができるかどうかは、日本自身の加害を含む多様な戦争体験に正面から向き合い、「原爆が落とされるに至った第二次世界大戦」という歴史過程そのものを引き受けようとするかどうかにかかっている。

その役割を、いま最も強く担っているのが、戦争を語り継ぐメディアの存在なのである。

引用文献・資料

石破茂 (2025) 「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈式挨拶」首相官邸ホームページ 2025年8月6日 <https://www.kantei.go.jp/jp/103/statement/2025/0806hiroshima.html> (2025年12月31日取得)

伊藤守 (2002) 『メディア文化の権力作用』せりか書房

「外国人向けテレビ国際放送」の強化に関する諮問委員会 (2013) 『これからの外国人向けテレビ国際放送の在り方について』NHK経営委員会 <https://www.nhk.or.jp/keiei-iinkai/shimon/giji/pdf/toshin01.pdf> (2026年1月10日取得)

外務省・NATO (2025) 「Joint Statement H. E. Mr. Ishiba Shigeru, Prime Minister of Japan and H. E. Mr. Mark Rutte, NATO Secretary General」外務省ウェブサイト (2025年4月9日) <https://www.mofa.go.jp/files/100827718.pdf> (2026年1月9日取得)

岸田文雄 (2022) 「首相記者会見」首相官邸ウェブサイト 2022年2月25日掲載 https://japan.kantei.go.jp/101_kishida/statement/202202/_00013.html (2026年1月9日取得)

木ノ下めぐみ・岡嶋大城 (2024) 「絶えゆく戦争の口頭継承 終戦時20代は総人口の0.3%未満…戦後世代も語り部に」『産経ニュース』8月14日配信記事 <https://www.sankei.com/article/20240814-W70GZRYSRNNH5CBLZURZTSG3JY/> (2026年1月10日取得)

小林利行 (2005) 「薄れる被曝の記憶・高まる核戦争への不安～『広島・日本・アメリカ原爆意識』に関する調査

から～」『放送調査と研究』2005年12月号、pp. 18-32 https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2005_12/051202.pdf (2026年1月10日取得)

コルドバアロジョ・エステバン (2019) 「日本のテレビにおける『第二次世界大戦』の記憶の再構築：2017年の調査で確認された『他者』の『過少表出』をめぐって」『社会情報学』第8巻2号、pp. 95-110 https://www.jstage.jst.go.jp/article/ssi/8/2/8_95/_pdf/-char/ja (2026年1月10日取得)

斎藤貴男・森達也 (2007) 『日本人と戦争責任：元戦艦武蔵乗組員の「遺書」を読んで考える』高文研

庄司潤一郎 (2024) 「ドイツの『過去』の克服と日本—『ドイツ見習え論』のその後」『NIDS コメンタリー』第303号 <https://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary303.pdf> (2026年1月10日取得)

杉山あかし・森田均・古賀琢磨 (2010) 『戦争と原爆の記憶に関するテレビ・メディア環境の多面的内容分析研究』九州大学大学院比較社会文化研究院 https://api.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1935731/%E6%88%A6%E4%BA%89%E3%81%A8%E5%8E%9F%E7%88%86%E3%81%AE%E8%A8%98%E6%86%B6_%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8ver2.pdf (2026年1月10日取得)

谷卓生 (2020) 「NHK 広島の企画『ひろしまタイムライン』、“差別を助長”との批判を受け、謝罪」『放送研究と調査』2020年10月号 <https://www.nhk.or.jp/bunken/d/research/focus/BUNA0000010700100206/> (2026年1月9日取得)

中国放送 (2014) 『和解～広島・中国人強制連行問題の軌跡～』2014年3月30日放送

チューリップテレビ (2020) 『哀哭 朝鮮女子勤労挺身隊 日韓のはざままで』2020年9月27日放送

テレビ長崎 (2003) 『日本人だった～在韓被爆者のいま～』2003年5月27日放送

成田龍一 (2020) 『増補「戦争経験」の戦後史』岩波書店

日本赤十字社 (2025)『戦後 80 年に関する意識調査(2025 年)』 https://www.jrc.or.jp/press/2025/0729_048166.html (2025 年 12 月 31 日取得)

広島市 (2025)「被爆体験伝承者養成事業」広島市公式ウェブサイト <https://www.city.hiroshima.lg.jp/atomicbomb-peace/fukko/1021099/1015041.html> (2025 年 12 月 31 日取得)

フジテレビジョン (2015)『私たちに戦争を教えてください』2015 年 8 月 15 日放送

藤原帰一 (2002)「戦争はどう記憶されてきたか」『東洋学術研究』第 41 巻第 1 号、pp. 152-175 https://www.totetu.org/assets/media/paper/t148_152.pdf (2026 年 1 月 10 日取得)

放送番組センター (2025)「放送ライブラリーで公開中の戦争・平和関連テレビ番組リスト」放送ライブラリー https://www.bpcj.or.jp/peace/programlist_tv.pdf (2026 年 1 月 10 日取得)

舞田敏彦 (2022)「戦争体験者はあと数年でいなくなる—悲惨さを語り継ぐことの重要性」『Newsweek 日本版』2022 年 8 月 24 日配信記事 https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/08/post-99442_1.php#goog_rewarded (2026 年 1 月 10 日取得)

前川茂之 (2020)「開放的な神戸、開戦で一変 思い出すのは食事の記憶ばかり # あちこちのすずさん」『神戸新聞 NEXT』2020 年 9 月 6 日配信記事 <https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/suzusan/202009/0013669209.shtml> (2026 年 1 月 12 日取得)

村上登司文 (2018)「戦争体験継承に対する当事者意識を育てる教育の考察」『京都教育大学教育実践研究紀要』第 18 号、pp. 173-182 <https://www.kyokyo-u.ac.jp/Cece/18-18.pdf> (2026 年 1 月 10 日取得)

村上登司文 (2017)「戦争体験継承が平和意識の形成に及ぼす影響—中学生に対する平和意識調査の時系列的分析」『広島平和科学』38 巻、pp. 15-39

吉本絢 (2022)「【山口県周南地域】[高校生 100 人に聞く] 終戦の日知らない高校生が約 5 割 『戦争経験者の話聞き

たい』の声も」『日刊新周南電子版』8 月 12 日掲載記事 <https://www.shinshunan.co.jp/news/report/other/202208/016467.html> (2026 年 1 月 10 日取得)

米倉律 (2018)「『戦争体験・記憶』の継承をめぐるポリテクス—“戦後七〇年”関連テレビ番組の内容分析を中心に」『政経研究』第 54 巻第 4 号、pp. 51-79 https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/political/political_54_4/each/05.pdf (2026 年 1 月 10 日取得)

米倉律 (2019)「『戦争加害』という主題の形成—1970 年代におけるテレビの『八月ジャーナリズム』を中心に」『ジャーナリズム & メディア』第 13 号、pp. 209-225 https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/journalism/journalism_13/each/17.pdf (2026 年 1 月 10 日取得)

米倉律 (2021)「『八月ジャーナリズム』と戦後日本：戦争の記憶はどう作られてきたのか」花伝社

Des Forges, Alison (1999) Leave None to Tell the Story: Genocide in Rwanda, Human Rights Watch. Chapter 3 “The Media” <https://www.hrw.org/reports/1999/rwanda/Geno1-3-10.htm> (2025 年 12 月 22 日取得)

NHK (2025) “The Pursuit of PEACE : Searching for Answers” NHK WORLD-JAPAN <https://www3.NHK.or.jp/NHKworld/en/thepursuitofpeace/> (2025 年 12 月 17 日取得)

NHK (n. d.)『NHK WORLD-JAPAN 公式サイト』 <https://www3.NHK.or.jp/NHKworld/ja/> (2025 年 12 月 17 日取得)

NHK (n. d.)「あちこちのすずさん (戦争中の人々の日常)」NHK アーカイブス特集記事 <https://www2.NHK.or.jp/archives/articles/?id=C0060960> (2026 年 1 月 10 日取得)

NHK 放送文化研究所・世論調査部 (2025)『戦後 80 年に関する意識調査』NHK 放送文化研究所 https://www.NHK.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20250828_1.pdf (2026 年 1 月 10 日取得)

NHK (2021)『ロッパグラム 転生したら戦時中の喜劇王

だった件』2021年12月28日放送

NHK (2022) 『セイコグラム～転生したら戦時中の女学生
だった件～』2022年8月15日放送

Stockholm International Peace Research Institute
(2025) “Nuclear risks grow as new arms race looms—
new SIPRI Yearbook out now” SIPRI Media Press
Release, 16 June 2025 [https://www.sipri.org/media/
press-release/2025/nuclear-risks-grow-new-arms-race-
looms-new-sipri-yearbook-out-now](https://www.sipri.org/media/press-release/2025/nuclear-risks-grow-new-arms-race-looms-new-sipri-yearbook-out-now) (2026年1月10日取
得)

United Nations, (2003) “UN tribunal convicts 3
Rwandan media executives for their role in 1994
genocide,” <https://news.un.org/en/story/2003/12/87282>
(2025年12月22日取得)

か」

多田、コーヒーを飲んで、

多田「いや、恒さん。これは大成功ですよ」

円と文、笑って頷く。

多田「まあ、ゆっくり見守ってやればいいんじゃないですか」

恒三「……ええ、あまり心配はしてません」

文「すごいなあ」

恒三「文ちゃんだってこれから何でもやれるよ」

多田「そうだ。若いつてことはな、どこに行っても何をやっても許されることだからな。それで感謝して、いっぱい失敗しろ」

笑う円と文。

円「なんか腹減ってきました」

多田「お、じゃあ寿司でもとるか！ 確かさつき……」

多田、机の上のチラシを漁る。

文「えーやったー！ ラッキー！」

円「マジっすか！ 禅いないのに……」

恒三「今頃美味しいもの食べてるよ」

寿司のチラシに夢中になる四人。

多田、すでに電話をかけている。

多田「この『極』にしよう『極』！……あ、もしもし。

この『極』お願いします。ええ、市民プールまで！」

円「一番いいやつじゃないっすか」

多田「馬鹿ヤロー、お祝いだからいいんだよ！」

多田、コーヒーの入ったマグカップを床に落とす。

一斉に騒ぎ出す四人。

椅子に置かれた円のスマホに通知がきている。

スマホ画面「そういえば、合格おめでとう」
続けて、

スマホ画面「今年は泳ぐぞ！」

という禅からのメッセージ。

〈了〉

禪「今年雪多いなー」

電車で西陽が差し始める。

○市民プール・外観

T「二月」

雪が降っている。

冬季営業がないため、しんと静まり返っている。

○同・受付事務室

油タンクを抱えた多田、部屋の電気をつける。

石油ストーブを点火する。

多田「うう、さぶ……」

と、体を震わせる。

× × ×

多田、老眼鏡をかけ、資料を読みながら仕事をしている。

受付の窓をコンコンと叩く音がする。

見ると、円と文だった。

文「(手を振って) 研さーん」

多田、嬉しそうに受付の窓を開ける。

多田「おー円、文！(円の頭を軽く叩いて) お前こ

の野郎、久しぶりじゃねえか！」

円「すみません、ずっと来られなくて」

多田「まあ上がれ上がれ」

多田、本当に嬉しそう。

× × ×

石油ストーブを囲んで座っている円、文、多田の三人。壁掛けカレンダーは二月。

多田「こんなものしかねえけど」

と、コーヒーとお茶菓子を出す多田。

円「そんな、いいのに研さん」

文「なんかおもてなしされちゃって……」

多田「気い使うな、馬鹿。大人みたいなことしやがってよー」

三人ともまだ少し照れくさそうな様子。

多田、コーヒーを飲んで、

多田「で、おおよそは禪から聞いてたけど、お前その後どうなったんだ？ もう受験は終わっただろ？」

円「あ、はい。無事に受かりました」

多田「……川大の医学部か！？」

円「はい」

多田「よかったなあ、本当によかった。おめでとー」

頑張ったなあ

円、急に泣けてくる。

文「ええ〜!?!」

多田「おまつ、何泣いてんだよ」

と言いながら多田も泣けてくる。

円「受かったはいいけど、怖くて……」

文は二人を見て笑う。

多田「(泣きながら) 笑うなお前、真剣な悩みだろ。

俺だって心配してたんだよ……。ぶ、文は、今も水

泳やっただけだっけ？」

文「いやいや、美術部なので」

多田「そうか、そうだった。楽しいか？」

文「はい、すごく」

多田「そうかそうか……」

多田、ちーんと鼻をかむ。

多田「……で、禪は来ないのか？」

円「いやそれが、一緒に来るつもりだったんすけど連絡取れなくて」

多田「なんだあいつは。雪にでも埋まってんじゃねえのか？」

その時、受付の窓をトントンと叩く音が聞こえる。

見ると、恒三だった。

スマホの画面を三人に向けて慌てている様子。

× × ×

四人並んでスマホを見ている。

画面には吹雪の中で喚いている禪。

画面の禪「なんか！ 森林学の研究プログラムがあるっていうから話聞きにきたのに門前払いされたんだよ！」

円「え？ なに？」

画面の禪「森林学！ 森林！ 森！」

恒三「禪、まずどこにいるの？」

画面の禪「え!? 聞こえない！」

多田「どこにいるって！」

画面の禪「ああ、デンマーク！」

円・文・多田・恒三「デンマーク!?!」

画面の禪「そう！ コペンハーゲンってどこ！ マジでムカつくわ！ 何が世界中から研究者を求めてますだよ！」

円「そういうのって普通は大学院からじゃねえの？」

画面の禪「そんなの知らねえんだけど!?! ……あ

あ！ 寒い！ 雪だるまになっちゃうううう！」

文「あ、楽しそう」

画面の禪「せっかく来たし美味しいもん食って帰るわ！

じゃあね！ 切るよ！」

禪、一方的にテレビ電話を切る。

円、文、恒三、多田の四人、静かに顔を見合わせる。

恒三「……僕はこの子の育て方を間違ったんでしょ

う

う

う

う

林「馬鹿、違う！」

林の大きな声が響く。静まり返る講堂内。円、客席の方を見て筆を落とす。

冷静を装い、マイクを通して話す林。

林「……えー、緊急事態発生です。逆の目を入れてしまいました」

少し笑いが起きる。

林「門松も疲れてるんです。生徒会長だって間違える時はあります、な」

立ち尽くしている円。

円の目に映っているのは、呆れ顔で笑っている学生たちの姿。

校長や学年主任は頭を抱えている。

林「門松、戻っていいぞ」

しかし円、動けずにいる。

林「門松？」

講堂中がまたザワザワし始める。

文、口元を押さえて見ている。

林、円の元へ行き、

林「門松、どうした。大丈夫か」

と肩を揺する。

林「保健室に行こう、な」

しかしピクリとも動けない円。

そこへ突然、禪がステージに上がってくる。

だるまの前に立ち、白の絵の具を手に出し、円が描いた目の上から塗って消す。

林「お前何を……！」

講堂が騒がしくなる。

学生たち「夏目禪？」「あれがああの夏目禪なの？」「前に警察沙汰になってた？」

文、席を立てて二人を見る。

禪、円と目を合わせにいく。

禪「はい消したぞ。円、もう一回描け」

禪、床に落ちた筆を拾って墨をつけ、円に握らせ

る。

禪「早く、ほら」

円、禪に言われるがまま左目（向かって右目）に目を入れる。

禪「よし」

禪、林が持つマイクを奪い取って話す。

禪「はい完成しました、終わりです」

所々に拍手をする学生がいる。

すると禪、だるまを持ち上げ、客席の方へぶん投げる。

禪「何が伝統だよ、ふざけんな……！」

だるまは客席へ落ちる。

パニックになる学生たち。

林「夏目、お前、何てことを……！」

学年主任を始め、教師たちがステージの方に集まってくる。

講堂の騒がしさがピークになる。

文「(喧騒に紛れて) 行け行け〜！」

禪、円の手を引いてステージ横から講堂を抜け出す。

○同・廊下

廊下を走る禪と円。

後ろからは講堂の騒音が聞こえてくる。

何人かの教師が二人を追いかけてくる。

教師たち「夏目禪、待ちなさい！」「待て！」「門松！」

「おい！」

円、逃げながら次第に笑い出す。

円「は、はは、ははははは……何だよこれ……話になんねえ……」

禪「……お前、もつと早く走れ！」

禪も笑い出す。

○通学路・外

道には雪が積もっている。

しかし空は嘘のように青い。

雪の上を全速力で走っている禪と円。

禪M「次の日、家に担任と学年主任がやってきて、俺は案の定死ぬほど叱られた。大きい声では言えないが軽く殴られたりもした。恒三は泣いていた。でもなぜか俺は、終始清々しい気持ちでいた」

禪と円、笑いながら雪の上を走る。

○電車・中

ガラガラの車内。

禪と円、並んで座っている。

円「森林学？」

禪「ああ、ほら俺、森とか山とか好きじゃん？」

円「禪のじいちゃんって、ブナの森のガイドしてなかったっけ」

禪「今もしてるよ」

円「それでか」

禪「やめろよ、そんなんじゃねえよ。……お前も医学部、諦めてないんだろ？」

円「まあね。これからこれから」

禪と円、まっすぐ前を見て電車に揺られる。

禪、駐車場の方を指して言う。

○恒三の車内（夜）

恒三が運転し、助手席に禪、その後ろに文が座っている。

恒三「文化祭で文ちゃんの描いた絵見たよ。本当にすごかった」

文「え、ありがとうございます」

恒三「ああいうのってさあ、何を題材にしてるの？」

文「え、題材、モチーフってことですかね。何だろう、うーん……」

禪「（恒三に）難しいこと聞くなよ」

赤信号で止まろうとするが、雪のせいでタイヤが滑る。

恒三「お、滑る！ あ、ごめん。受験生の前で」

禪「だからそれいいって」

文「禪先輩って結局受験するんですか？」

禪「まあ受けるは受けるけど、やっぱり仕組みがよく分かんねえんだよな」

青信号が変わって発進する車。

恒三「でもさあ、やっぱり円君がいなきヤダメだね。」

禪は

禪「は？」

恒三「だって今の高校に入れたのも円君を追っかけたからでしょ？ 水泳だってそう」

禪「やめて。マジで」

少しの沈黙が流れる車内。

文「……円先輩元気ですか？ 文化祭から会ってないんですよ」

禪「嘘つきたくないから言うけど、元気ではないと思

う」

文「……え、悲しい、もうすぐクリスマスなのに」

文、わざと明るく反応する。

○禪の家・外（夜）

車から降りる禪と恒三。

恒三「なんか文ちゃんに申し訳ないことしちゃったね」

禪「恒三が円の話なんかするからだよ」

禪がふと後部座席を見ると、文が座っていた足元に白の絵の具が落ちている。

禪、それを拾う。

恒三「忘れてっちゃったかな」

禪「明日渡すよ」

禪と恒三、玄関へ向かう。

○第二高校・講堂

防寒着を着た全校生徒がぞろぞろと講堂へ集まってきた。

一人で歩いている禪の横を、禪がトイレトベーパーを投げつけた男子学生1と2が通っていく。

男子学生1「マジでラッキー。門松、推薦受けなかったよ」

禪、自分の席に座る。

禪の斜め前には円がいる。

いくら痩せている様子で、隣の学生と話している。

禪、ズボンのポケットに違和感を感じて取り出す。

文の白の絵の具だった。

× × ×

講堂には全校生徒が集まっている。

校長先生が話している。

校長「では皆さん、健康第一で、そして二高生としての心構えで勉強なり部活なり、雪も解かす熱量で取り組んでください」

つまらなそうにしている禪。

校長「ではここで」

ステージ脇から大きなだるまが運ばれてくる。

校長「三年生は冬休みが明けるとすぐに大学入学共通テストがありますね。そして、その後も受験は続きます」

だるまはステージに置かれる。

校長「今日は我が校の伝統である、だるまの目入れをして、全員で三年生にエールを送りたいと思います」

禪「（独り言）なんだそれ」

講堂中がザワザワし始める。

校長、林にマイクを渡す。

林「では寒いので早速やりましょう。門松」

円、席を立ててステージに上がる。禪、驚いて見ている。

文も後ろの方から注目して見ている。

林「生徒会長として最後の大事な事と言っても過言ではない目入れですよ、皆さん」

円、渡された筆に墨をつけ、だるまの前に立つ。

表情は暗い。

林はマイクを通さず円に声をかける。

林「門松、左目な」

円、恐る恐る筆を近づける。

林「おい、大丈夫か。向かって右だぞ」

円、間違えてだるまの右目（向かって左目）目を入れる。

て成績良くないよ多分。優秀者一覧に載ってるのも見たことないじゃん」

男子学生2「確かに」

男子学生1「あと授業中も寝てばっからしい」

男子学生2「マジ？ それで推薦は……」

男子学生1「どうせ生徒会長やってるのも内申点のためだろ。何か仕事してんの？」

と、馬鹿にするように円のことを話す男子学生1と2。

一方の禪、ズボンを上げている。

男子学生1と2、トイレを出ようとす。

男子学生1「まあ今のままいけば大丈夫だけどさ。蹴落とせるやつは早めに蹴落として安心したいじゃん？」

禪、個室トイレから勢いよく出てくる。

禪「おい」

男子学生1「夏目……？」

円、顔を上げて外の様子を伺う。

禪、男子学生1と2の顔に向けて使用済みと思われるトイレトーパーを投げつける。

禪、怒りを露わにして、

禪「それ俺のうんこついてっから」

男子学生1「は！？」

禪「(1と2を交互に見て) お前な、お前か、どっちでもいいけど、俺が患者だったらお前らみたいな医者に診てもらいたくねえ」

男子学生1・2「……」

禪「あいつは、円は、まあ……最近はなんか全然パツとしないけど、本当は明るくて何でもできて、なのに俺みたいなクズでも見捨てなかつた優しいやつなんだよ」

男子学生1「なに急に。思い出話かよ」

禪「仕方ねえだろ、昨日昔の動画見ちゃったんだよ！」

男子学生2「……知らねえよ、汚ねえな」

禪「あ、おい！」

男子学生1と2、禪から逃げるようにトイレを出る。

禪、床に落ちたトイレトーパーを拾い、トイレに流す。

その時、隣の個室からもトイレの水を流す音が聞こえる。

禪、驚いて隣を見る。

円、トイレから出てくる。

禪「……は？」

円、手を洗う。

禪「いや今のは、その、まあ、別に……」

円、ゆっくり禪の方を見る。

円「(声を震わせながら) お前、俺のこと分かった気になってんじゃねえぞ」

円、トイレから出ていく。

禪は言葉を守っている。

○イオンモール・ゲームセンター(夜)

クリスマス装飾がされている店内。

T「十二月」

文、友人三人がプリクラに落書きをするのを後ろから退屈そうに見ている。

全員カチューシャをつけている。

× × ×

ゲームセンターから出てくる四人。

大きなぬいぐるみを持っている文、友人たちに写

真を撮られる。

友人たち「文可愛い」

文「……メリークリスマス！」

文、大袈裟に笑顔を向ける。

○同・本屋(夜)

文の友人たちはアイドルが表紙の雑誌に駆け寄る。

友人たち「見てこれ可愛くない？」

文、ぬいぐるみとカチューシャを近くの椅子に置いて店の奥の方へ行く。

× × ×

本屋の美術・絵画のコーナー。

文、西洋の画家の画集を見ている。

文の友人1、文を探しにやってくる。

文の友人1「(画集を覗き込み) 文ってさ、こういう個性的なの好きだよ。みんな待ってるから行こ」

文「あ、うん」

文、画集を元あった場所へ戻す。

○禪、円、文の最寄り駅・外(夜)

雪が降っている。

迎えの車でごった返している駅前。

文、駅から出てきてベンチに座る。

大きなくしゃみが聞こえた方を見ると禪がいる。

禪は鼻を吸っている。

禪と文、目が合う。

禪・文「あ」

禪「文、乗ってけ！」

禅「うーわ」

恒三「ま、食べられるよね」

禅「食べるけどさあ、ちゃんと見てから茹で……まあいいや」

禅、二階に上ろうとする。

恒三「あ！ ちょっと待って禅」

恒三、部屋からビデオカメラを箱ごと持ってくる。

禅「それ昔使ってたやつじゃん」

恒三「そう、さっき見つけたの。使えるか見てくれな
い？」

恒三「ん」

禅、ビデオカメラを受け取る。

○同・禅の部屋（夜）

禅、ビデオカメラを充電しながらいじくっている。

電源が入り、動画が流れる。

それは中学校の卒業式の後に撮ったもので、撮影者の恒三に禅と円がピースサインを向けている。

画面の禅・円「イエーイ」

画面の恒三の声「おめでどう〜」

禅、その動画を見て、どこか寂しそうに笑う。

恒三の声「もうご飯だよー」

と一階から呼ぶ声。

禅、動画を見続ける。

○同・外観（夜）

雨は降っていない。

禅の家の灯り。

禅の自転車を雨水が伝う。

○第二高校・3-3教室

クラス全員が席に座っており、机の上にはテスト

用紙と鉛筆、消しゴム、腕時計だけがある。

とても静かな教室。

黒板には模試の時間割が書かれている。

林、腕時計を確認し、

林「はい、始め」

クラス全員、一斉に問題を解き始める。

禅も円も真剣な顔で解いている。

× × ×

腕時計を見ている林。

林「はい、やめ」

全員が一斉に鉛筆を離す。

○同・3-3教室前・廊下

禅、教室から出てくる。

円がロッカーから教材を出しているところだった。

禅と円の目が合う。

禅「よっ」

円、禅から目を逸らす。

○同・3-3教室

続けて模試の最中。

英語のリスニング音源の再生が終了する。

問題を解き続ける学生たち。

丸を塗りつぶす音が響く。

円、お腹を抑え、顔を歪めている。

× × ×

林、教卓から学生を眺めている。

林「やめ。はいお疲れー」

と、テスト用紙の回収を始める。

お腹を抑え、少し息切れしている円。

○同・男子トイレ

円、個室に駆け込む。

○同・廊下

禅、同級生たちを観察しながら廊下を歩く。

すでに頭を抱えて問題を解き直している学生や、自慢げに一方的に教えている学生、隠れて少し泣いている学生もいる。

○同・男子トイレ

禅、円の隣の個室トイレに入る。

同級生の男子学生1と2、話しながらトイレに入ってくる。

男子学生2「それじゃ一人多くね？ 川大の医学部だろ？」

用を足し始める同級生1と2。

男子学生1「そう。だからあいつが諦めればいいのって話」

男子学生2「あ、それで門松か」

個室で話を聞いている禅。

男子学生1「まあ大丈夫だと思うけどね。あいつ大し

謝してるんすよ、マジで」

多田、缶コーヒを飲む。

多田「お前馬鹿だなあ。それを言えはいいのによ……」

雨がどんどん強くなり、空も暗くなっていく。

○禅、円、文の最寄り駅・外（夕暮れ）

たくさん学生たちがいる。

迎えの車に乗り込んだり、誰かに電話をかけていたり、無理して自転車で帰ったり。

円、駅から出て傘を差して歩く。

二人の男子高校生が、傘も差さずワーワー笑いながら円の横を走っていく。

円、その高校生たちを眺める。

○スーパーマーケット・入り口（夕暮れ）傘を袋に入れて店内に入る円。

○同・軽食いなほ（夕暮れ）

円、缶ジュースを持って窓際の席に座り、窓外の駐車場をぼーっと眺める。

まだまだ土砂降り。

一人の女子高校生が大盛りのラーメンを持って円の隣の席に座る。

文だった。

円と文、目が合う。

円・文「あ」

円、文の大盛りラーメンを見る。

文、気まずい顔。

× × ×

文の前には食べ終えたラーメンの器がある。雷が鳴る。

文「止まないですね」

円「うん」

文「明日電車止まんないかなー」

円「……止まれー」

文「模試なのにいいんですか？」

円「……あ、ダメだね」

表情や声に喜怒哀楽がなく、ずっと気が抜けているような円。

文「禅先輩が市民プールでバイトしてるの知ってますか？」

円「まあ、なんとなくは」

文「（笑いながら）なんか、中学の時に禅先輩に車を壊された人が来て、苦情つけたらしいですよ」

円「ああ……あのおっさんかな」

文「あ、知ってます？ それで今、タオルで顔をぐるぐる巻きにして監視員してるんですって。面白いですよね」

円「（軽く笑う）……」

会話がなかなか続かない二人。文、痺れを切らす。

文「円先輩、体調悪いですか？」

円、はっとして文の方を見る。

円「え？ 全然」

文「ならいいんですけど」

円「あ、ごめん。反応悪いよな」

文、円に謝られてはっとする。

文「あ、いや……ごめんなさい、受験勉強で大変なのに」

円「全然。俺がダメなんだよ。……禅からも逃げてるしさ」

しざ

その時、スマホに通知がきて確認する円。

文「お迎えだ」

円「うん。でも……」

円、レジの上のメニューを見上げる。

円「俺もラーメン食おうかな」

文「え、本当に？」

円「うん。食いたくなった」

円、ラーメンを注文しに行く。

○禅の家・外観（夜）

築50年くらいの一軒家。

雨は止んでおり。家の周辺にも街灯はほとんどない。

禅の声「ただいまー」

ガラガラと玄関の扉の音が響く。

○同・台所（夜）

帰宅した禅、台所を覗く。

禅「ただいま」

禅の祖父・夏目恒三（77）、ざるにあげた蕎麦を手で摘んで見ている。

まな板にはみじん切り途中の長ネギ。

恒三「おかえり。雨は大丈夫だった？」

禅「うん。プールで乾かしてきた」

恒三「……プールで何を乾かすの？」

禅「服と髪と教科書」

恒三「あそう。ねえ見てこれ。茹で時間さ、8分だと思つたら3分だった」

禅も、ざるから蕎麦を摘んで引き上げる。

しざ

○(回想) コンビニ(夜)

真冬。

雪が降っている。

禪、不良仲間たちと店の前でたむろして騒いでいる。

車が一台やってきて助手席から円が降りる。

運転しているのは円の母親。

禪と円の目が合う。

円、店内へ入る。

不良仲間「今俺たちのこと見てたよな」

禪「(不良仲間) ちょっと悪い」

禪、円を追いかけて店に入る。

禪「なーに買いにきたの」

円「んー。塾終わりで腹減ったから」

禪、円の後を追いつつ話しかけ続ける。

円は禪をあしらっている様子。

禪「学校で勉強してんのに塾も行ってんの？ さすが

医者の子」

円「……」

禪「すぐ怒るなよ」

円「……そっちは部活って結局どうすんの。入るの？」

禪「お前まだ覚えてたの？ あんなの本気なわけねえじゃん」

円「あつそ。ダサすぎて話にならねえわ」

禪、立ち止まる。

禪「ダサい？ 何が？」

円、禪の方へ振り向く。

円「お前全部ダサーから。今まで何も本気でやったことないだろ」

禪、商品棚のメロンパンを投げて円にぶつける。

円「お前」

若い店員が様子を見に裏から出てくる。

円、床に落ちたメロンパンをレジに持っていく。

円「これと肉まんください」

店員「265円です」

禪、肉まんを待つ円の後ろから、

禪「……おい。水泳部、入ってやるよ」

円、禪の方に振り向く。

円「あつそ。いつから？」

禪「夏だろ」

店員「あー」

円「(振り向いて) あ、すみません」

肉まんとメロンパンを受け取る円。

店員「ありがとうございます」

円、また禪の方を見て、

円「お前、夏しか部活ないと思ってるの？」

と言いつつ、禪にメロンパンを投げて渡す。

円「お前がやったんだからお前が食え」

禪、呆然としながら、店を出ていく円の後ろ姿を眺める。

○市民プール・受付事務室

禪と多田、扇風機の風に当たって二人で話している。

多田、のけぞって、

多田「かーっちょいいいー円ー」

びしょ濡れでタオルを巻いている禪。

禪「マジであいつは漢つす」

多田「漢だねえ。それに比べてお前はまったく、情け

ねえなあ」

禪「そういう時期だったんすよ」

多田「あるある。クサることはあるよ」

多田、缶コーヒを飲む。外は大雨。

屋外プールには誰もいない。

禪の濡れた教科書やノートを扇風機の風で乾かしている。

多田「でもそうかあ。今は円の方がクサっちゃってんのかもなあ」

禪「マジ嫌われたかも」

多田、ハハッと笑う。

多田「それはないな」

禪「なんで言い切れるんすか？」

多田「だって中学の時のお前ら、酷かったぞ？ 男二人でベタバタバタバタ……。今の方が健全だろ」

禪、分かりやすいため息をつく。

禪「大袈裟だからなー、研さんは」

多田「何がよ」

禪「だって用務員のくせに他の教師より目立ちに行ってたし」

多田「出たよ、職業差別だよ」

禪「してないっすよ！ てか、おあいこです」

多田「ったく舐めやがってよ。お前は勉強はできるく

せに人間ができてないんだ」

禪「人間は……そうっすね。俺には人間になる過程がなかったもん」

多田「カッコつけんなよ」

禪「でも確かに、あいつがいなかったら部活もやってねえし、今の高校にも入れるわけがねえし」

多田「な。お前が二高に入ったの嘘だと思ってたもん」

禪「誰も信じらんないっすよね。でも、だから……感

禅「……円」

円「大学にも行かない人間に、俺が今、今にどれだけ人生かかっているかなんて分かるわけねえだろうけど、頼むから本当に、マジでさ、邪魔すんなって……」

声がだんだんと小さくなる円。

禅「円、俺、話とか聞く……」

円「は？ うるせえ。お前に話して何になるんだよ」

禅「だって今までだって」

円「は？」

禅「今まで色々話してきたじゃんか」

円、鼻で笑う。

円「危機感がないから、そういう昔の話ばかりするんだろ。くだらない」

禅の目の色が変わる。

禅「……ああ、危機感なんてないね。だってよく分かんないまま焦って決める方が怖えもん」

円、呆れてため息をつく。

円「……話にならねえわ」

禅「じゃあ聞くけど、お前がちゃんと話せるやついるんだな？」

円「……」

禅「お前と同じくらい向上心があるやつなんて、いっぱいいるだろ」

円、口籠る。

禅、倒れた自転車を起こし始める。

禅「ムカつくかもしれないけど……今までがゆっくり過ぎたのかもしれないけど、俺は今のスピードに着いていけない。まだ何も決めたくねえんだよ」

円、無言で自転車を引いて帰っていく。

そんな円を目で追う禅。

○禅の通学路・農道（夕）

四両編成の列車が田んぼの中を走る。

禅、列車と同じ方向にママチャリで走っている。

息を切らして立ち漕ぎしている。

○（回想）下山中学校・プール

真夏。

水泳部の部活中。

T「5年前」

一斉に泳ぎ込みをする部員たち。

○（回想）同・校舎裏

プールの水しぶきやホイッスルの音が聞こえてくる場所。

顔を怪我し、かなり汚れた服を着ている禅（14）。

地面に座っておにぎりを食べている。

躊躇せず、服で額の汗を拭く。

近くの日陰で猫が休んでいる。

禅「（猫におにぎりを見せて）見てこれ。また盗んじやっ
た」

猫、どこかへ行く。

禅「おーい」

禅、ふと立ち上がって水泳部の音のする方へ歩いていく。

○（回想）同・プール脇

禅、おにぎりの袋を捨て、フェンス越しに水泳部

の様子を覗き見る。

水がキラキラ光っている。

禅はそれを夢中になって眺める。

しばらくして振り返ると、体操着姿の円（14）が立っている。

円「……興味あるの？」

禅「……」

円「水泳。見てただろ？」

顧問、プールサイドから、

顧問「円！ 遅刻だぞ遅刻！」

円「はい今行きます！（禅に）多分二年からでも入れるよ、違ったらごめん！」

円、急いで部活に向かおうとする。

禅「あ、あのさ」

円「（振り返って）ん？」

禅「本当に今からでもいいけんの？」

円「（プールを指差して）聞いてこようか？」

禅、何も言わずに俯く。

円「……分かった。じゃあやりたくなったら言つてよ。な」

円、禅に笑いかける。

○電車・中（夕暮れ）

円、古文の単語帳を読みながら電車で揺られている。

頭に入らないようで、それを閉じる。

窓の外を見ると雨が降り出している。

○禅の通学路・農道（夕暮れ）その頃の禅、雨が降る中でも自転車で走り続けている。

学生②「いとにほひやかにうつくしげなる人の、いた

う面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でも聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどもとたゆげにて、いとどなよなよと、我かの気色にて臥したれば、いかさまにと思し召しまどはる」

古文の教師「かつて美しかった人が、今では消え入り

そうに衰弱している、という描写ですね。はい……

続けてください」

教室が静まり返る。

古文の教師「門松君」

禪、円の方を見る。

円、目を覚ます。

古文の教師「大丈夫ですか」

円「あつ、すみません、えつと……」

円、焦って教科書のページを捲る。

そんな円を見ている禪。

○同・職員室

清掃時間。円がデスクの下の床を雑巾掛けしていると、林と学年主任の立ち話が聞こえてくる。

コピー機の横で話をする林と学年主任。

林「うちのクラスの夏目分かりますか？ 夏目禪」

学年主任「ああはい、昔色々あったあの」

林「そうです。その夏目なんですけど、志望校がない

と言いつつ張ってまして」

円、耳を澄ませて聞いている。

○同・男子トイレ

その頃の禪、箒を持ったまま窓の外を見てあくびをするだけ。

○同・職員室

林と学年主任の会話の続き。

学年主任「志望校がない？」

林「はい」

学年主任「あんなに成績がいいのにですか？」

林「はい、やりたいことがない」と

学年主任「(乾いた笑い)なんだそれは」

林「本当に。うちらも報われませんよ」

学年主任「いやあ、進路実績に貢献してもらわなきゃ

仕事の意味がねえ……」

林と学年主任、笑いながら円の横を通り過ぎていく。

円、デスクの下から出て、林の書類をコンコンと

漁る。

禪のくしゃくしゃの進路希望調査書を見つける。

志望校の記入欄が空欄になっている。

円、それを確認してファイルに戻す。

○同・昇降口(夕)

円、駐輪場へ向かって歩いている。

半袖短パン姿の禪が追いかけてきて円と並んで歩

く。

禪「円、プール行かね？」

円「……行かない。明日テストだろ」

禪「分かるけど。てかお前大丈夫？」

円「何が？」

禪「だってお前、最近変じゃん」

円「……」

禪「ずっと寝てるだろ。気付いてるからな。あ、プール

行かね？」

円「行かない。着いてくんない」

円、禪から逃げるように歩く。

○同・駐輪場(夕)

自転車を出そうとしている円。

禪「なあ、一回泳いでスッキリした方が勉強も捗るっ

て」

円「お前しつこい」

禪「俺なんてな、監視員しながら数学やって成績上がった

んだぞ？」

円「は？ バイト禁止だろ？」

禪「別にいいだろ、ちよつとくらい」

円、禪に冷たい視線を送る。

無理矢理自転車を出そうとする円。

しかし禪、邪魔をする。

円「どけって」

禪「どかねえ」

円「どけ！」

禪「いやだ！」

円、いきなり自分の自転車を押し倒す。

たぐさんの自転車がドミノ倒しになる。

周りの学生たちが驚いて見ている。

禪「お前……」

円「もう……関わってくんない……！」

○市民プール・屋外プール

プールには十人ほどしかない。

禪は帽子を被り、サングラスをかけ、鼻から下をタオルで巻いた状態で監視台に座っている。

禪のスマホに通知がくる。

スマホ画面「行きません。頼むから本当に邪魔するな。

何も送ってくるな」

という円からのメッセージ。

禪「はーあ、つまねえな」

小学生や中学生は騒ぎ、お年寄りはずっくり静かにクロールをしたり、プールの中を歩いたりしている。

禪、天を仰ぐ。

× × ×

日が落ちて西日も弱まる時間帯。

プールではもう誰も泳いでいない。

禪、変わらず監視台にいるが、体勢は乱れ、タオルとサングラスを外している。

数学の課題プリントを解いている。

複雑な数式をどんどん書き進めている禪。

多田、禪の元へやって来る。

多田「もう閉めようか」

禪には聞こえていない様子。

多田「禪！ 閉めるぞ！」

禪、プリントから顔を上げて、

禪「あ、そうっすね。誰も来なそうだし」

禪、監視台を降りる。

多田「また数学か？」

禪「はい、ここでやるのが一番捗るんで」

多田「お前、頑張ってるのは感心するけど責任持って

働けよ。人の命預かってんだ」

禪「いやもうそれは責任しかねえですよ」

多田「真面目に言ってるぞ、俺は」

禪「……すんません気がつけます」

気まずい空気が流れる。

禪「……泳いでも……いいっすか……？」

多田「（ため息をつく）ああ、でもまず」

禪「イヤッホー！」

禪、多田の話を見無視し、上着を脱いですぐにプールに飛び込む。

多田「おい、たまにはお前が閉める！」

禪「研さんお願いしまーす」

多田「舐めやがってよ……」

ブツブツ言いながら事務室へ向かう多田。禪、気持ちよさそうに泳ぐ。

○円の塾・聴進館・学習室（夕）

映像授業を受けている円。

学習室には円のような学生が何人もいる。

円のスマホに通知がくる。

見ると禪からで、プールで泳ぐ多田とのツーショット写真。

スマホ画面「You must be studying hard now. As

for me. I'm swimming now. hahaha」

というメッセージも。

多田が泳いでいる写真とメッセージがまた送られてくる。

スマホ画面「研さん最近バタフライにハマってるらしい。hahaha」

円、何も返信せずにスマホを閉じる。

イライラした様子で小さく舌打ちし、髪をくしゃくしゃにする。

○第二高校・外観

T「九月」

天気は晴れている。

人の気配がしない校舎。

○同・生物室

授業中。

とても静か。

円、居眠りをしている。体がガクンとなり、机から教材がバサバサと落ちる。

禪、円の方を見る。

落ちたものを慌てて拾っている円。

○同・3-3教室

古文の授業中。

学生が順番に『源氏物語（母御息所の死去）』を音読している。

学生①「……限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかさを、言ふ方なく思ほさる」

古文の教師「はい」

小さな音読の声も響く静かな教室。

禪、窓の外を眺めている。

円、居眠りをしている。

○第二高校・講堂

その頃、高校では三年次集会。

禪が座るはずの席が一つ空いている。

学年主任が壇上で話している。

円、英単語帳を読んでいる。

学年主任「模試の返却があったと思いますが、これらが本当のテストラッシュです。怒涛ですからね。

九月に記述模試と共テ模試があって、文化祭を挟ん

だ十月にも記述模試とオープン模試。十一月にも二

つ模試があります……」

円、学年主任が話している間もずっと英単語帳を

読んでいる。

○市民プール・受付事務室

禪、バイトに出勤する。

禪「お疲れ様です」

管理人の多田研（65）、受付事務室へやって来る。

多田「禪、お前今日からそれ付けて働くんだ」

と、机の上のサンングラスとタオルを指差す。

禪、サンングラスを手取る。

禪「え？ なんでですか？」

サンングラスをかける禪。

多田「タオルも」

禪「タオルも？」

多田「顔に巻くんだよ」

禪「そんなことしたら何も見えないっすよ」

多田、ため息をつく。

多田「この間な、お前に苦情がきたの。お前が監視してるプールでなんか泳げないって」

禪「は？ 俺なんもしてねえっすよ」

多田「分かってる。ただほら、お前昔あれだっただ

ろ？ それで、あれだよ」

禪「ああ……なるほど。じゃあもうクビっすか」

多田、手をふらふらと横に振る。

多田「職員に頼んでやったんだよ、俺が。だから今日

から、これで顔隠して働けて話」

禪「研さん……あざっす……」

禪、目を輝かせる。

多田「お前もつと感謝しろよ？」

禪「はい、過去は変えらんないけども、マジで研さん

とは中学の時に出会って良かったっす」

多田「なんか浅いんだよなあ、お前。もつとちゃんと

反省しろ」

禪「うっす！ いつもありがとうございます！ 今日

もお願いします！」

直角にお辞儀をする禪。

ホイッスルを首に下げて禪は屋外、多田は屋内

プールへ向かう。

○第二高校・職員室

円、模試の成績表を持って、林と一対一で話している。

林「んー……厳しいこと言うぞ？」

円「はい」

林「門松の他にも川大の医学部に推薦で行こうとして

るのが二人いるんだよ」

円「はい」

林「つまり今の成績では厳しいと思う」

円「……なるほど」

林「いや、生徒会長もやってるし、部活も……水泳だっ

け？ 引退までやったし、成績も悪くない。今のま

まだとつていう話だから」

円「……分かりました」

円、立ち上がる。

林「一般受験も視野に入れて、な」

円「はい。ありがとうございます」

円、林の元を離れる。

○円の塾・聡進館

駅前なので人通りはそれなりにある。円、塾の前に自転車を停めて中へ入っていく。

○同・同・学習室

個人の学習スペースが仕切られていくつもあるよ
うな教室。

円、パソコンの起動中にスマホを見る。

スマホ画面「何時に迎えに行けばいい？」

という母親からのメッセージと、応援の意味の大

きなスタンプ。

スマホ画面「今日も遅くなる。時間は分かたら連絡

する」

と返信する円。そこへ、

スマホ画面「今からでも泳ぎに来ないかい」

というメッセージが禪から届く。

スマホ画面「行きません」

と文字を打つ円。スマホをリュックサックにしま
う。

半袖短パンに着替えている。

林「……片桐……門松」

門松円(17)、林の元へ行き、模試の結果を受け取る。

席に戻って結果を開くとC判定。

隅から隅まで結果表を読み込む。

× × ×

林、黒板にプリントを貼っている。

林「科目ごとの成績優秀者一覧はここに貼っておきます。あと学年集会に遅れないように。じゃあ解散」

何人かの学生がすぐに成績優秀者一覧を確認しに行く。

林「あ、あと進路希望出していない人は早く出せよ」

禅、思い出したようにファイルからくしゃくしゃのプリントを出して伸ばす。

ペンを持って少し考えるが、何も書かないまま、リュックサックを背負い、教材を抱え、林の元へプリントを提出しに行く。

禅「お願ひしまーす」

林、プリントを見て、立ち去ろうとする禅を呼び止める。

林「おい、何だこれ。何も書いてないじゃないか」

禅「あ、はい、すみません、そういうことなんで」

禅、廊下へ出る。

○同・3-3教室前・廊下

禅、ぐちゃぐちゃのロッカーに教材を放り込む。

同じくロッカーに荷物をしまっている円に話しかける。

禅「円、集会なんて行かないでさ、うちで一緒にスイ

カ食わねえ？ でっかいのあるんだ」

円「……」

禅「スイカだぜスイカ！ でっかいスイカ！」

円「うるさい。俺暇じゃないから」

禅「え、早く帰れる日くらいいいじゃん」

円、バン！ と音を立ててロッカーを閉める。

禅「ですよー……」

さっさと教室へ戻る円の後ろから、

禅「たまには泳ぎに来いよ」

と言つて、禅、帰っていく。

○同・3-3教室

円、成績優秀者一覧を確認する。

プリントには普通科理系クラスと書かれている。

数学と理科の上位層に『夏目禅』の名前がある。

数学には『門松円』の名前があるが、禅よりもずっと下。

円、俯いてその場を離れる。

○同・昇降口

靴を履き替える禅を、一つ後輩の大貫文(16)が

呼び止める。

文「禅先輩！」

禅「(振り向いて) おー、文ちゃん」

文、女子の友人三人と一緒にいる。

全員スカートを折って短くしている。

文「最近全然いなほ行ってないでしょ」

禅「行ってない。忙しくてさー」

文「ですよ。受験生ですもんね」

禅「ああ、まあね」

文の友人たちは少し離れたところで違う会話を始めている。

文「円先輩は相変わらずですか？」

禅「円はまあ、相変わらずといえはそうなのか」

文「え？」

禅「なんか最近すっぱー冷たいんだよ」

文「禅先輩に？」

禅「うん。お前みたいに暇じゃないから話しかけんなとか、(円の真似をして) 話にならない、とかしか

言われてないね」

文「似てます似てます」

禅「でしょ？ まあ、色々あるんじゃない？ 今度話

聞いてやってよ。じゃあお疲れ！」

禅、駆け足で学校を出る。

文に友人たちが駆け寄ってくる。

文の友人1「なんで夏目先輩と話せるの？」

文「中学で部活一緒だったから」

文の友人1「え、そうなんだ！」

文の友人2「水泳だったか」

文「そうそう」

文の友人3「夏目先輩って部活やってたんだね。ただ

のヤンキーかと思ってた」

キャハハ、クスクスと笑う友人たち。

○禅の通学路・農道

線路と並行に伸びる農道を、自転車(ママチャリ)

で走っている禅。

夏の日差しが強く、汗が止まらない。

芸術学部長賞受賞

■卒業制作（脚本）

in the 盆地 town

《登場人物》

夏目 禅（17）（14）

高校3年生。物怖じしない性格で執着心がない。進学校では珍しい問題児タイプ。中学時代は地元で有名な荒くれ者だった。

《あらすじ》

県内トップの進学校に通う高校三年生の夏目禅（17）は、中学からの親友である門松円（17）に拒絶される日々を送る。医学部合格を目指しながらも成績が伸び悩む円と、大学受験をするかさえ決めずにいる禅の間での摩擦だった。

禅の周りには、過去というフィルターを通さずに接してくれる人がおり、孤独ではない。だからこそ、そんな過去に自分を救ってくれた円の理解者になりたいと思っっているのに、何度も失敗してしまう。二人の距離は離れたまま、夏から冬になる。

推薦合格の道は絶たれ、共通テストと一般受験の直前期で精神状態が限界の円は、全校生徒の前である失敗をする。しかし、そんなときに円を救ったのは禅だった。二人の友情が蘇る。

その後、円は無事に医学部に合格する。一方の禅も、他人には到底真似できないような道への新たな一歩を踏み出すのだった。

○第二高校・3-3教室

数学の授業終わりの風景。

T「八月」

教卓にいる担任の林元彦（43）、ファイルを開く。

林「えーでは予告通り、夏休み明けの模試を返します」

次第に騒がしくなる教室内。

林「はい、秋葉……綾瀬……遠藤……」

五十音順に学生たちが模試の結果表を受け取りに行く。

夏目禅（17）、自分の席に座ったまま、制服から

27A11817 安孫子 知世

大貫 文（16）

高校2年生。美術部。禅と円の中学からの後輩。空気を読んでムードメイカーになりがち。

多田 研（65）

市民プールの管理人。禅の中学校で用務員をしていた。ガサツだが人情があり、禅のアニキ的存在。

夏目 恒三（77）

禅の祖父で、禅の唯一の家族。おっとりした性格で母親のような包容力もある。

林 元彦（43）

禅と円のクラスの担任。担当は数学。実年齢よりも老けて見える。

男子学生 1

男子学生 2

文の友人 1

文の友人 2

文の友人 3

校長

学年主任

古文の教師

生物の教師

コンビニ店員

放送と表現 第29号

令和8年3月10日 印刷

令和8年3月19日 発行

発行人／安部 裕

東京都練馬区旭丘2-42-1

日本大学芸術学部放送学科

電話 03(5995)8270

編集委員／小林 偉 森中慎也 金 龍郎

星野 裕 中町綾子 茅原良平

石毛みさこ 澤田顕一

鈴木康平 唐牛彩帆 森岡 颯

櫻井美玖 小林璃子 松尾海遊

印刷所／株式会社 ブレイズ・ネットワーク